

## ナツツバキ

*Stewartia pseudocamellia*

ツバキ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

■選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。個体数も少ない。植栽もあるが、自然分布は限定されている。

■分布の概要 宮城県・新潟県以西の本州・四国・九州に分布している。朝鮮(済州島)にも分布する。

■県内の生育状況 三陸の北上山地の丘陵地の限られた場所に生育している。森林伐採により減少が懸念される。

■生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、園芸採取など

■主要文献番号 197

(執筆:植物分科会)



(撮影:石隈 健斗[撮影地:石川県])

## イワウメ

*Diapensia lapponica* subsp. *obovata*

イワウメ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
-

■選定理由 生育地は数ヶ所で局限されており、個体数も少ない。

■分布の概要 北海道から本州中部にかけての高山帯に分布している。

■県内の生育状況 蔵王連峰、船形山、栗駒山の岩礫地や岩壁に張り付くように生育する。

■生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆:植物分科会)



(撮影:葛西 英明)

## オオイワカガミ

*Schizocodon soldanelloides* var. *magnus*

イワウメ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

■選定理由 生育地は国定・県立公園を含む数ヶ所で局限されている。

■分布の概要 本州の青森県から山口県までの日本海側に分布する。日本固有種。

■県内の生育状況 奥羽山地の山地帯のブナ林下に生育地は局限されている。個体数の減少が懸念される。

■生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、園芸採取など

(執筆:植物分科会)



(撮影:市ノ渡 彰[撮影地:山形県])

## ヒメシャクナゲ

*Andromeda polifolia*

ツツジ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
-

■選定理由 生育地は国定公園内の1ヶ所で局限されている。

■分布の概要 本州中部以北・北海道の高山に分布している。北半球の寒帯に広く分布する。

■県内の生育状況 蔵王連峰の高山の湿地で生育が確認されている。

■生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆:植物分科会)



(撮影:根本 秀一[撮影地:長野県])

## イワヒゲ

*Cassiope lycopodioides*

ツツジ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

■選定理由 生育地は1ヶ所で局限されている。

■分布の概要 本州中部以北~北海道に分布している。千島・カムチャツカ・アラスカに分布する。

■県内の生育状況 栗駒山の高山の岩場などの隙間に根を張って生育している。生育地、個体数は少ない。

■生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆:植物分科会)



(撮影:市ノ渡 彰)

## ヒメハナヒリノキ

*Eubotryoides grayana* var. *parvifolia*

ツツジ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
- 環境省  
-

■選定理由 ハナヒリノキの変種、生育地は国定公園内の1ヶ所である。

■分布の概要 本州の中部地方の高山の岩場に分布している。日本固有種。

■県内の生育状況 蔵王連峰の高山の岩場に生育が局限されている。

■生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など

(執筆:植物分科会)



(撮影:植物分科会調査員[東北大学植物園記念館所蔵])

## ウスユキハナヒリノキ

*Eubotryoides grayana* var. *pruinosa*

ツツジ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 環境省

- 選定理由 生育地は国立公園内の1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の近畿地方から北海道に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 石巻市金華山島で生育が確認されている。
- 近似種との区別 ハナヒリノキとウラジロハナヒリノキとの中間形という。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：植物分科会調査員[東北大学植物園記念館所蔵])

## イソツツジ

*Ledum palustre* subsp. *diversipilosum* var. *nipponicum*

ツツジ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 環境省

- 選定理由 生育地は国立公園内の数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の東北地方から北海道南部に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰の高山の湿原などで生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## ツガザクラ

*Phyllodoce nipponica*

ツツジ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 環境省

- 選定理由 生育地は国立公園内の2ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の東北地方中部から中国地方の大山まで、四国に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰と栗駒山の高山の岩場で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 226

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## コバノイチヤクソウ

*Pyrola alpina*

ツツジ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 環境省

- 選定理由 生育地は国立公園内の数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州中部以北・北海道の高山に分布している。千島にも分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰と船形連峰の高山の林床で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：藤田 玲 [撮影地：北海道])

## カラフトイチヤクソウ

*Pyrola faurieana*

ツツジ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU 環境省 VU

- 選定理由 生育地は国立公園内の10ヶ所近くで局限されている。
- 分布の概要 本州東北地方から北海道に分布している。南千島・樺太に分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰の亜高山帯の草原、砂礫地に生育し、個体数は少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 220、226

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## ツルコケモモ

*Vaccinium oxycoccos*

ツツジ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 環境省

- 選定理由 生育地は2ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 北海道、本州の中部地方以北に分布している。北ヨーロッパ、北アジア、北アメリカ北部など、北半球の亜寒帯に広く分布する。
- 県内の生育状況 加美町の湿原2ヶ所にミズゴケ類の中に自生している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湿地開発、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規 [撮影地：秋田県])

## マルバウスゴ

*Vaccinium shikokianum*

ツツジ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
環境省

- 選定理由 生育地は国定公園内の1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の岩手県から富山県に至る日本海側の高山に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 栗駒山の高山の雪田わきなどで生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 菅野 壽代)

## クロマメノキ

*Vaccinium uliginosum* var. *japonicum*

ツツジ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
環境省

- 選定理由 生育地は国定公園内の2ヶ所である。
- 分布の概要 本州中北部から北海道に分布している。千島・樺太・朝鮮から北半球の寒帯に広く分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰の高山の岩場や湿地に生育地は限定されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 三島木 進)

## ヒメウスノキ

*Vaccinium yatabei*

ツツジ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
環境省

- 選定理由 生育地は2ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州の中部地方以北に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王山と白石市の風穴で標本が採集されている。亜高山帯の針葉樹林林床、林縁に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 葛西 英明 [撮影地: 山形県])

## ハナムグラ

*Galium tokyoense*

アカネ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
環境省  
CR+EN  
VU

- 選定理由 生育地は数ヶ所で限られている。
- 分布の概要 東北・中部・関東地方の本州に分布している。朝鮮・中国東北部に分布する。
- 県内の生育状況 生育地は県南、県北の河川敷の低湿地で、個体数も少ない。東日本大震災の津波により、一部生育地は壊滅した。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 河川開発、自然遷移など
- 主要文献番号 73、76、144、194、248

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 上野 雄規)

## オオキヌタソウ

*Rubia chinensis* f. *mitis*

アカネ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
環境省  
NT  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所程度であり、局所的で個体数も少ない。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国東北部に分布する。
- 県内の生育状況 二口山塊から栗駒山までの奥羽山地の山地帯の樹林下に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 国京 潤一)

## アカネムグラ

*Rubia jesoensis*

アカネ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
環境省  
CR+EN  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で限られている。
- 分布の概要 北陸・東北地方の本州・北海道に分布している。千島・樺太・ウスリーに分布する。
- 県内の生育状況 東松島市から石巻市雄勝の海岸付近の湿った草原に生育する。東日本大震災の津波後確認されていない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 海岸開発、自然遷移など
- 主要文献番号 100、246

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 杉山 多喜子)

## コケリンドウ

*Gentiana squarrosa*

リンドウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
CR+EN環境省  
-

- 選定理由 生育地が10ヶ所以上と少し多いのでランクを下げた。近年生育地が減少している。
- 分布の概要 本州～沖縄に分布している。朝鮮・中国・台湾・インド北部・シベリアに分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の日当たりの良い草地に点生している。土地開発により絶滅の恐れがある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、植林植樹など
- 主要文献番号 17、142、143、167、248、253

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## ハナイカリ

*Halenia corniculata*

リンドウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は国定・県立公園内の2ヶ所と局限されている。
- 分布の概要 北海道から九州に分布している。南千島・朝鮮・中国・千島・樺太・シベリア・カムチャツカ・ヨーロッパ東部に分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰、船形連峰の高山の日当たりのよい草地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 99、226

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## ホソバナツルリンドウ

*Pterygocalyx volubilis*

リンドウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
VU環境省  
VU

- 選定理由 全国的にもやや稀な植物である。生育地は数ヶ所で限られており、個体数も少ないので、ランクを上げた。
- 分布の概要 北海道・本州・四国に分布している。朝鮮・中国東北部・台湾・ウスリーに分布する。
- 県内の生育状況 確認された生育地は奥羽山地の低山の船形連峰の山麓、蔵王連峰、二口山塊などの山地帯に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、園芸採取など
- 主要文献番号 99、150

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## イヌセンブリ

*Swertia tosaensis*

リンドウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
VU環境省  
NT

- 選定理由 減少率が高い所もあるが、生育地が40ヶ所以上と多いのでランクを下げた。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 平野部から丘陵地の湿地に広い範囲にわたり生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移など
- 主要文献番号 63、73、74、75、76、77、78、79、88、143、144、179、180、188、212、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## テングノコヅチ

*Tripterospermum japonicum* var. *involutum*

リンドウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
NT

- 選定理由 生育地は国定・県立公園内の10ヶ所程度で限定的である。
- 分布の概要 本州中部以北・北海道に分布している。南千島に分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰から船形連峰の山地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## ヒメナエ

*Mitrasacme indica*

マチン科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
VU

- 選定理由 生育地は2ヶ所で局限されている。個体数の減少が懸念される。
- 分布の概要 本州～沖縄に分布している。朝鮮・中国・インド・マレーシア・オーストラリアに分布する。
- 県内の生育状況 沿岸部の日当たりのよい湿地に生育している。最も新しい標本は約70年前のものである。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然災害、園芸採取など
- 主要文献番号 106

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一 [撮影地：茨城県])

## アイナエ

*Mitrasacme pygmaea*

マチン科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で少なく、絶滅に瀕している。
- 分布の概要 本州～沖縄に分布している。朝鮮・中国・インド・マレーシア・ミクロネシア・オーストラリアに分布する。
- 県内の生育状況 日当たりの良い低湿地に生育する。人家に近く開発されやすい環境にあり、開発から守る必要がある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、干拓、自然遷移など
- 主要文献番号 188、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## チョウジソウ

*Amsonia elliptica*

キョウチクトウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は数ヶ所でごく限られている。
- 分布の概要 本州・九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 仙北の川岸、池沼脇などの草原に生育するが、個体数は少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 河川開発、刈取など
- 主要文献番号 143、144、194

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## フナバラソウ

*Vincetoxicum atratum*

キョウチクトウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は20ヶ所程度で限られており、個体数も少ない。減少率の高い所が多い。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 各地の草原に生育するが、個体数は少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移、園芸採取、薬用採取など
- 主要文献番号 130、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：国京 潤一)

## コカモメヅル

*Vincetoxicum floribundum*

キョウチクトウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 各地の草原に生育するが、個体数は減少傾向にある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移、園芸採取など

(執筆：植物分科会)



(撮影：石隈 健斗 [撮影地：埼玉県])

## イヨカズラ

*Vincetoxicum japonicum*

キョウチクトウ科

要注目種

2016  
要注目種 環境省  
-

- 選定理由 本県は分布の北限。生育地は10ヶ所近くあるが、個体数は少ない。
- 分布の概要 本州～九州・小笠原に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 三陸沿岸及び島嶼の海岸の草地に生育する。東日本大震災の津波に遭遇し生育地が絶滅した可能性が高い。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 14、96、100、143、185

(執筆：植物分科会)



(撮影：国京 潤一)

## スズサイコ

*Vincetoxicum pycnostelma*

キョウチクトウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は40ヶ所近くと比較的多いが、減少率の高い所が多い。個体数も多くはない。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国・ロシア東部に分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の山野のやや乾いた草原に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移、園芸採取など
- 主要文献番号 33、143、180、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：滝口 政彦)

## マメダオシ

*Cuscuta australis*

ヒルガオ科

絶滅 (EX)

2016  
- 環境省  
EN

- 選定理由 約80年前の利府町の標本が1点あるのみである。
- 分布の概要 北海道から沖縄に分布している。中国・東南アジア・オーストラリアに分布する。
- 県内の生育状況 利府町で過去に確認された。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 帰化競合など

(執筆: 植物分科会)



(生態写真: 根本 秀一 [撮影地: 山形県] 標本写真: 植物分科会調査員 [東北大学植物園記念館所蔵])

## ヤマホロシ

*Solanum japonense*

ナス科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所と局限されており、生育環境は悪化している。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国中北部・東北部に分布する。
- 県内の生育状況 阿武隈山地、北上山地の丘陵地の林縁に生育するが、個体数は減少している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、管理放棄など
- 主要文献番号 248

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 市ノ渡 彰)

## ハダカホオズキ

*Tubocapsicum anomalum*

ナス科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
-

- 選定理由 本県が分布の大太平洋側北限。生育地は数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州から沖縄に分布している。東南アジアの熱帯から亜熱帯に広く分布する。
- 県内の生育状況 北上山地と金華山島の山地の林縁でのみ生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 100

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 大越 秀樹)

## サワリソウ

*Ancistrocarya japonica*

ムラサキ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 生育地が2ヶ所と局限されている。
- 分布の概要 東北地方以南の本州～九州の太平洋側に分布する。日本固有種。
- 県内の生育状況 県南の奥羽山地に生育地が限定されており、個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 根本 秀一 [撮影地: 福島県])

## スナビキソウ

*Heliotropium japonicum*

ムラサキ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所以上あるが、2011年の東日本大震災による津波によって生育地、個体数とも減少した。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・シベリア・ヨーロッパに分布する。
- 県内の生育状況 沿岸域の砂浜海岸に生育し、生育地、個体数とも減少した。東日本大震災の津波浸水域でも確認。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 海岸開発、自然災害、園芸採取など
- 主要文献番号 143、154、155、246、248

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 尾形 良太)

## ムラサキ

*Lithospermum murasaki*

ムラサキ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
EN

- 選定理由 生育地は以前10ヶ所以上あったが、年々減少している。保護対策が必要である。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国・アムールに分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地のやや乾燥した草原に広く生育していた。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 薬用採取、園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 21、33、101、102、138、212、238

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 杉山 多喜子)

## ハマベンケイソウ

*Mertensia maritima* subsp. *asiatica*

絶滅危惧I類 (CR+EN)

ムラサキ科

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 本県は太平洋側分布南限。生育地は数ヶ所で、個体数も少なく、絶滅の恐れがある。
- 分布の概要 日本海側・三陸地方の本州・北海道に分布している。千島・樺太・アリューシャン・オホーツク海沿岸・朝鮮に分布する。
- 県内の生育状況 県北の松島町から気仙沼市の島嶼・海岸の砂地や礫地に生育していたが、東日本大震災後、消滅が確認された所もある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 海岸工事、自然遷移、自然災害など
- 主要文献番号 96、100、197、209

(執筆：植物分科会)



(撮影：森 俊)

## ルリソウ

*Nihon krameri*

準絶滅危惧 (NT)

ムラサキ科

2016  
NT 環境省  
-

- 選定理由 生育地は40ヶ所以上と比較的多いが、局所的であり、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州の東北地方から中部地方に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 奥羽山地及び平野部の丘陵帯の落葉広葉樹林下に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、森林伐採、園芸採取など
- 主要文献番号 47、63、88、238

(執筆：植物分科会)



(撮影：加藤 啓子)

## ツルカメバソウ

*Trigonotis iinumae*

絶滅危惧I類 (CR+EN)

ムラサキ科

2016  
CR+EN 環境省  
EN

- 選定理由 生育地は数ヶ所と局限され、個体数も少ない。全国的にも稀少種である。
- 分布の概要 中部地方以北の本州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 丘陵地の林床に生育し、生育地は僅かである。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、園芸採取など

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## イワタバコ

*Conandron ramondioides*

絶滅危惧I類 (CR+EN)

イワタバコ科

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 生育地は1ヶ所で局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 岩手県・秋田県以南の本州～九州の岩壁に分布している。
- 県内の生育状況 県南の河岸の湿った岩壁に生育し、個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然災害、園芸採取など
- 主要文献番号 212

(執筆：植物分科会)



(撮影：石隈 健斗 [撮影地：栃木県])

## マルバノサワトウガラシ

*Deinostema adenocaulum*

絶滅危惧II類 (VU)

オオバコ科

2016  
VU 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は20ヶ所近くあるが減少率の高い所が多く、個体数とも減少している。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。朝鮮南部にも分布する。
- 県内の生育状況 平野部から丘陵地の池沼や休耕地に稀に生育している。生育環境の変化が憂慮される。東日本大震災の津波浸水域でも確認。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移など
- 主要文献番号 78、97、175、178

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## アブノメ

*Dopatrium junceum*

絶滅危惧I類 (CR+EN)

オオバコ科

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。個体数も少なく、ランクを上げた。生育環境の悪化が懸念される。
- 分布の概要 秋田県・岩手県以南の本州・九州・沖縄に分布している。朝鮮南部・中国・東南アジア・インドに分布する。
- 県内の生育状況 湖沼、池沼、ダムの湿地に生育している。生育地、個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湖沼・池沼開発、水質汚染、自然遷移など
- 主要文献番号 59

(執筆：植物分科会)



(撮影：葛西 英明)

## オオアブノメ

*Gratiola japonica*

オオバコ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
要注目種環境省  
VU

- 選定理由 生育地が30ヶ所近くと多いが、減少率が高い所も多くランクを上げた。環境省カテゴリーVU。
- 分布の概要 北海道・本州・九州に分布している。朝鮮・中国・中国北東部・ウスリーに分布する。
- 県内の生育状況 平野部の湿地に比較的広く生育するが、消滅した所もあり、減少傾向にある。東日本大震災の津波浸水域では一時的に増加した。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湿地開発、管理放棄など
- 主要文献番号 33、70、73、74、77、78、88、130、143、151、212、248

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 細谷 治夫)

## ヒシモドキ

*Trapella sinensis*

オオバコ科

絶滅 (EX)

2016  
EX環境省  
EN

- 選定理由 平地の胡沼、河川に分布していたが、最も新しい標本は約50年前の標本である。
- 分布の概要 本州・九州に分布している。朝鮮・中国の池沼に分布する。
- 県内の生育状況 仙北の伊豆沼、内沼、県南の4ヶ所の生育地の標本がある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 池沼開発、水質汚染など
- 主要文献番号 88、117、118、135、212、216

(執筆: 植物分科会)



(生態写真: 根本 秀一[撮影地: 東京都(植栽)] 標本写真: 植物分科会調査員[東北大学植物園記念館所蔵])

## ヒヨクソウ

*Veronica laxa*

オオバコ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地が10ヶ所程度と少ないのでランクを上げた。
- 分布の概要 北海道西南部・本州・四国に分布している。中国・ヒマラヤ・小アジアに分布する。
- 県内の生育状況 奥羽山地や北上山地の日当たりの良い草原にやや稀に生育する。個体数が減少している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 草地開発、管理放棄など
- 主要文献番号 142、143

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 市ノ渡 彰)

## クワガタソウ

*Veronica miqueliana*

オオバコ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
VU環境省  
-

- 選定理由 生育地は30ヶ所以上と比較的多いが、開発によって生育地が減少している。
- 分布の概要 本州の東北地方～関東・中部地方に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 丘陵地の林内に広い範囲にわたり生育するが、里山の管理不足等により生育環境が悪化している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 88、114、142、143

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 三島木 進)

## エゾリトラノオ

*Veronica ovata* subsp. *miyabei*

オオバコ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
-

- 選定理由 生育地は1ヶ所で局限され、個体数も少ない。
- 分布の概要 宮城県・山形県～北海道南部に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 奥羽山地の山地帯の林内に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、園芸採取など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 細谷 治夫)

## イヌノフグリ

*Veronica polita* var. *lilacina*

オオバコ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
NT

- 選定理由 生育地は10ヶ所程度で、半数で減少率が高い。人間の生活域の環境整備で生育地・個体数とも減少している。
- 分布の概要 本州・四国・九州・沖縄に分布している。東アジアの温帯～暖帯に分布する。
- 県内の生育状況 日当たりのよい路傍や畑地に稀に生育する。生育地は激減している。帰化種との競争に負けた可能性もある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、帰化競争など
- 主要文献番号 33、143

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 本多 隆[撮影地: 福島県])

## ミチノククワガタ

*Veronica schmidtiana* subsp. *senanensis* f. *tomentosa*

オオバコ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は県立公園内の数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 東北地方の山地に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 二口山塊の山地帯の岩礫地に生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移、園芸採取など
- 主要文献番号 102

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：山形県])

## カワヂシャ

*Veronica undulata*

オオバコ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は20ヶ所程度で限定されているが、個体数は少ない。
- 分布の概要 岩手県・山形県以南の本州・四国・九州・沖縄に分布している。中国・東南アジア・インドに分布する。
- 県内の生育状況 平野部の河川の河岸、水路に生育する。東日本大震災の津波の影響を受け生育地や個体数は減少している所もあるが、新たな生育地も確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 河川改修、自然災害など
- 主要文献番号 73、74、75、76、78、79、130、180、235、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## カイジンドウ

*Ajuga ciliata* var. *villosior*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
VU

- 選定理由 生育地は数ヶ所で海岸沿いの丘陵・島嶼に局限されている。
- 分布の概要 北海道・本州・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 三陸沿岸の石巻市、女川町の落葉広葉樹林の林床、草地に生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 142、143

(執筆：植物分科会)



(撮影：大越 秀樹)

## ツルカコソウ

*Ajuga shikotanensis*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
VU

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州・色丹島に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 丘陵地の日当たりのよい草地にごく稀に生育し、園芸採取の危険がある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取など

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：福島県])

## ゴマノハグサ

*Scrophularia buergeriana*

ゴマノハグサ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
VU 環境省  
NT

- 選定理由 本県は太平洋側の分布北限。生育地は10ヶ所以上あるが、局限されている。減少率が大きい所が多く、ランクを上げた。
- 分布の概要 秋田県・宮城県以南の本州・九州に分布している。朝鮮・中国北部・東北部に分布する。
- 県内の生育状況 平野部の河川敷などのやや湿った草原に生育している。津波浸水域でも確認されたが、復旧工事や河川の改修などにより、消滅した所もある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移など
- 主要文献番号 73、74、77、88、130、143、144、180、194

(執筆：植物分科会)



(撮影：杉山 多喜子)

## ヒナノウスツボ

*Scrophularia duplicatoserrata*

ゴマノハグサ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 関東以西の本州・四国・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 県南の丘陵地の林内に生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 22、165

(執筆：植物分科会)



(撮影：植物分科会調査員[東北大学植物園記念館所蔵])

## ハマヒナノウスツボ

*Scrophularia grayanoides*

ゴマノハグサ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は60ヶ所以上である。東日本大震災の津波後生育地が減少した恐れもある。
- 分布の概要 本州の宮城県北部から岩手県中部に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 塩竈市から北の三陸海岸の岩礫地に広く生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 復興工事など
- 主要文献番号 10、14、39、40、64、75、78、89、90、96、100、142、143、197、209、246

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## スズメノトウガラシ

*Bonnaya antipoda*

アゼナ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所近くで局限され、個体数も少ない。
- 分布の概要 福島県以南の本州～沖縄に分布している。東南アジアにも分布する。
- 県内の生育状況 平野部の水田の畔、池沼、沼沢地の湿地に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 農業汚染、除草、土地開発など
- 主要文献番号 74、78、109

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## ムシャリンドウ

*Dracocephalum argunense* var. *japonicum*

シソ科

絶滅 (EX)

2016  
EX 環境省  
VU

- 選定理由 80年以上前の標本が2点ある。
- 分布の概要 北海道・本州中部以北に分布している。朝鮮・中国北部・シベリア東部の日当たりの良い草原に分布する。
- 県内の生育状況 加美町、南三陸町の標本がある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発など
- 主要文献番号 100、171

(執筆：植物分科会)



(生態写真：藤田 玲 [撮影地：北海道] 標本写真：植物分科会調査員 [東北大学植物園記念館所蔵])

## タカクマヒキオコシ

*Isodon shikokianus* var. *intermedius*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 本県は分布の北限。生育地は2ヶ所でごく限られており、個体数も少ない。
- 分布の概要 宮城県以南の本州・四国・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 県南の阿武隈山地の丘陵帯の林縁などに局限されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 道路工事、土地開発など
- 主要文献番号 236

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一 [撮影地：福島県])

## キセワタ

*Leonurus macranthus*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
VU 環境省  
VU

- 選定理由 生育地は数ヶ所で限られているが、減少率の高い所が多くランクを上げた。開発等により生育環境が悪化している。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。中国にも分布している。
- 県内の生育状況 丘陵から山地下部の草地に稀に生育するが、個体数は減少している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、植林、管理放棄など
- 主要文献番号 33、143、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一 [撮影地：福島県])

## ヒメハッカ

*Mentha japonica*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は数ヶ所で極めて少なく、そのうち3ヶ所で絶滅した。
- 分布の概要 北海道から本州の近畿地方の湿地に分布する。日本固有種。
- 県内の生育状況 低地の湿地に生育する植物で、高茎草本で覆われ絶滅寸前の所が多い。東日本大震災の津波浸水域で保全対象として残された海岸林内で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 73、74、75、76、78、142、143、175、179、212

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## シラゲヒメジソ(ヒカゲヒメジソ)

*Mosla hirta*

シソ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
要注目種環境省  
-

- 選定理由 生育地が10ヶ所近くと少ないためランクを上げた。個体数も少ない。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。朝鮮南部・台湾に分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の半日陰の林縁に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、草刈りなど

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 細谷 治夫)

## ヤマジソ

*Mosla japonica*

シソ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
NT

- 選定理由 生育地は20ヶ所近くで、限定されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮南部にも分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の日当たりの良い裸地や林道沿いに稀に生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、道路改修、刈取など
- 主要文献番号 88、143、212

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 三島木 進)

## ミソガワソウ

*Nepeta subsessilis*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
-

- 選定理由 生育地は1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 北海道・本州・四国の亜高山帯草原に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 1998年に蔵王連峰の溪流沿いで数個体が確認された。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移、園芸採取など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 葛西 英明)

## ミズトラノオ

*Pogostemon yatabeanus*

シソ科

絶滅 (EX)

2016  
-環境省  
VU

- 選定理由 100年以上前の丸森町の標本が2点あるのみである。
- 分布の概要 本州から九州に分布している。朝鮮の低湿地に分布する。
- 県内の生育状況 丸森町阿武隈川河畔で過去に確認された。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然災害など
- 主要文献番号 33、200

(執筆: 植物分科会)



(生態写真: 杉山 多喜子 [撮影地: 福井県] 標本写真: 植物分科会調査員 [東北大学植物園記念館所蔵])

## アキノタムラソウ

*Salvia japonica*

シソ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は2ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州から沖縄に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の道端等に生育。仙台市の丘陵地と大和町の標本がある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、道路工事など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 根本 秀一 [撮影地: 福島県])

## ミゾコウジュ

*Salvia plebeia*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
NT

- 選定理由 本県が分布の北限。生育地は2ヶ所で限られており、個体数も非常に少ない。
- 分布の概要 本州～沖縄に分布している。東アジア・マレーシア・インド・オーストラリアに分布する。
- 県内の生育状況 県南のごく限られた湿った草地、畔に生育し、近年道路工事で失われた。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 道路工事、土地開発など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 葛西 英明)

## オカタツナミソウ

*Scutellaria brachyspica*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 本県は分布の北限。県南の1ヶ所のごく限られた地域に分布する。
- 分布の概要 本州・四国に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 生育地は丸森町で限定され、個体数は激減している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移、園芸採取、刈取など
- 主要文献番号 130

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 葛西 英明)

## シソバタツナミ(イガタツナミ)

*Scutellaria laeteviolacea*

シソ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- 選定理由 本県が分布の北限。生育地は20ヶ所以上あるが、限られている。生育地は減少し、個体数も減少している。
- 分布の概要 本州の宮城県以西～広島県に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 仙南部の丘陵地のコナラ林の林縁や道路沿いの日当たりの良い草原に稀に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、除草など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 葛西 英明)

## ナミキソウ

*Scutellaria strigillosa*

シソ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- 選定理由 生育地は40ヶ所近くで比較的多いが、東日本大震災の津波の影響で減少した。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国東北部・千島・樺太に分布する。
- 県内の生育状況 生育地は沿岸部の砂浜に限られている。東日本大震災の津波に遭遇し影響を受け生育地や個体数は激減した。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 海岸開発、自然災害、園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 73、74、78、158、171、179、180、246

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 三島木 進)

## テイネニガクサ

*Teucrium teinense*

シソ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
NT 環境省  
NT

- 選定理由 生育地が数ヶ所と少ないのでランクを上げた。個体数も少ない。
- 分布の概要 北海道・本州東北地方と島根県に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 奥羽山地の薄暗い樹林下に生育するが局所的であり、個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 69、256

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 細谷 治夫 [撮影地: 山形県])

## エゾニガクサ

*Teucrium veronicoides* var. *veronicoides*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
EN

- 選定理由 生育地は2ヶ所で局限され、個体数は少ない。
- 分布の概要 北海道・本州に分布している。朝鮮にも分布する。
- 県内の生育状況 県中部の奥羽山地の湿地や草場で確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 101、164

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 細谷 治夫)

## イヌニガクサ

*Teucrium veronicoides* var. *brachytrichum*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
VU 環境省  
CR

- 選定理由 本県は分布の太平洋側南限。生育地は1ヶ所で局限されており、ランクを上げた。
- 分布の概要 東北地方に分布している。
- 県内の生育状況 奥羽山地の山地帯のやや薄暗い森林内に稀に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 葛西 英明)

## カリガネソウ

*Tripora divaricata*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 生育地は2ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 南三陸の島嶼と牡鹿半島に少数が生育していた。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取など

(執筆：植物分科会)



(撮影：菅野 壽代)

## ハマゴウ

*Vitex rotundifolia*

シソ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
EX 環境省  
-

- 選定理由 現在生育地は1ヶ所であり、保護されている。カテゴリーを絶滅から変えた。
- 分布の概要 青森県以南の本州・四国・九州・小笠原・沖縄に分布している。朝鮮・台湾・東南アジア・太平洋諸島・オーストラリアに分布する。
- 県内の生育状況 牡鹿半島の島嶼、金華山だけであったが、東日本大震災によって消失した。震災後仙台市の海岸の砂浜で新たに確認された。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然災害など
- 主要文献番号 92、100、119、181

(執筆：植物分科会)



(撮影：杉山 多喜子)

## ナンバンギセル

*Aeginetia indica*

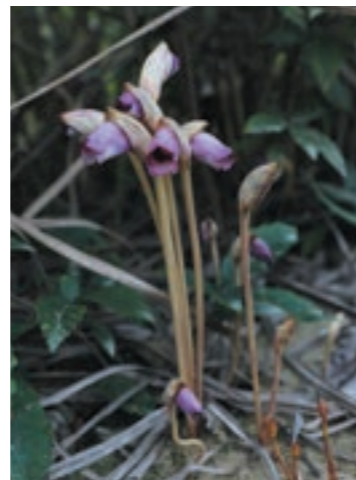
ハマウツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
- 環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所近くあるが、減少している。
- 分布の概要 北海道から沖縄に分布している。台湾・中国・インドネシア・マレーシア・インドに分布する。
- 県内の生育状況 普通スキの根に寄生する葉緑体を持たない寄生植物で、丘陵地の草地に生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地造成、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## ミチノクコゴメグサ

*Euphrasia maximowiczii* var. *arcuata*

ハマウツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は国定公園内の数ヶ所で局限されている。個体数が激減している。
- 分布の概要 本州の東北地方北部から北海道西南部に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰から二口山塊までの山地帯上部から亜高山帯の草原に生育し、生育地は局限されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## ヤマウツボ(変種ケヤマウツボを含む)

*Lathraea japonica*

ハマウツボ科

要注目種

2016  
要注目種 環境省  
-

- 選定理由 本県が分布の北限。生育地は数ヶ所で局限、個体数は激減している。
- 分布の概要 本州・四国・九州に分布している。
- 県内の生育状況 県南の奥羽山地、阿武隈山地のやや湿った林内に生育する。
- 近似種との区別 茎に毛があるものがケヤマウツボ。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 7、8

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## シコクママコナ

*Melampyrum laxum* var. *laxum*

ハマウツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
- 環境省  
-

- 選定理由 生育地は1ヶ所でごく限られている。
- 分布の概要 本州の東北地方南部・四国・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 山地の林縁などに生え、白石市で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 道路工事、自然遷移など
- 主要文献番号 42

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：茨城県])

## ハマウツボ

*Orobanche coerulescens*

ハマウツボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
NT環境省  
VU

- 選定理由 生育地は数ヶ所所在し、生育地及び個体数は減少し、ランクを上げた。
- 分布の概要 北海道～沖縄に分布している。朝鮮・中国・シベリア・ヨーロッパ東部に分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の日当たりのよい草原に生育し、カワラヨモギなどに寄生する寄生植物。草原が放置され自然遷移が進行し、生育地、個体数とも減少している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 草原開発、管理放棄、自然遷移など
- 主要文献番号 93、100

(執筆：植物分科会)



(撮影：藤田 玲[撮影地：北海道])

## ミヤマシオガマ

*Pedicularis apodochila*

ハマウツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
-

- 選定理由 生育地は1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州中部地方以北から北海道に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 船形山の亜高山帯の草原に生育し、生育地は局限されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 238

(執筆：植物分科会)



(撮影：国京 潤一)

## ヨツバシオガマ

*Pedicularis japonica*

ハマウツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は国定公園内の1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の中部地方から東北地方南部まで高山に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰の高山の草地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：岡崎 キヌ[撮影地：山形県])

## トモエシオガマ

*Pedicularis resupinata* subsp. *teucrifolia* var. *caespitosa*

ハマウツボ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は国定・県立公園内の2ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州中部から北海道の高山に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰、船形連峰の高山の草地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 99、220、226

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## キヨスミウツボ

*Phacellanthus tubiflorus*

ハマウツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所程度で限られている。生育環境は局限され、個体数も少ない。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国中北～東北部・樺太・ウスリーに分布する。
- 県内の生育状況 奥羽山地の山地帯の林床に生育し、ヤマハンノキなどの根に寄生する寄生植物。生育環境は局限され、個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 21、103、187

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## ムシトリスミレ

*Pinguicula macroceras*

タヌキモ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は国定公園内の2ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 四国・本州中部以北・北海道の高山帯に分布している。北半球に広く分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰、栗駒山の高山の岩場や草地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 220、226、238

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## イヌタヌキモ

*Utricularia australis*

タヌキモ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
VU 環境省  
NT

- **選定理由** 生育地が70ヶ所程度と多いのでランクを下げた。開発や水質汚染などにより生育地、個体数共に減少している。
- **分布の概要** 北海道・本州・四国・九州・沖縄に分布している。アジアの熱帯から温帯、ヨーロッパ・南アフリカなどに分布する。
- **県内の生育状況** 各地の池沼、溜池や沼沢地に生育するが、生育地、個体数とも減少している。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、水質汚染など
- **主要文献番号** 73、74、76、77、78、189、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：大越 秀樹)

## ミミカキグサ

*Utricularia bifida*

タヌキモ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- **選定理由** 生育地は10ヶ所以上あるが、池沼の改修やダム建設によって生育地、個体数共に激減してきた。
- **分布の概要** 本州～沖縄に分布している。中国・インド～マレーシア・オーストラリアの湿地に分布する。
- **県内の生育状況** 平野部から丘陵地の湿地に生育している。山地の湿地に僅かに残っている。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、園芸採取、自然遷移など
- **主要文献番号** 19、63、73、88

(執筆：植物分科会)



(撮影：尾形 良太)

## ホザキノミミカキグサ

*Utricularia caerulea*

タヌキモ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- **選定理由** 生育地は数ヶ所で、海岸沿いの開発や湿地の乾燥化などにより生育地、個体数ともに減少していた。
- **分布の概要** 北海道～沖縄に分布している。朝鮮・中国～インドの湿地に分布する。
- **県内の生育状況** 平野部から丘陵地の湿地に生育、東日本大震災の津波またその後の復旧、復興工事によって海岸のものは絶滅の危機に瀕している。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然災害、土地開発、湿地の乾燥、自然遷移など
- **主要文献番号** 242、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## フサタヌキモ

*Utricularia dimorphantha*

タヌキモ科

絶滅 (EX)

2016  
EX 環境省  
VU

- **選定理由** 涌谷町相野沼と仙台市大沼に生育していたが水質悪化等のため絶滅した。
- **分布の概要** 本州の東北地方南部から近畿地方の流れの緩い田の溝や小川に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 仙台市と涌谷町の標本がある。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 池沼開発、水質汚染など
- **主要文献番号** 17、31、131、178、212

(執筆：植物分科会)



(生態写真：上野 雄規 [撮影地：岩手県] 標本写真：植物分科会調査員 [仙台市野草園所蔵])

## オオタヌキモ

*Utricularia macrorhiza*

タヌキモ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
NT 環境省  
NT

- **選定理由** 本県は太平洋側南限。生育地は数ヶ所あるが、減少率の高い所が多くランクを上げた。
- **分布の概要** 北海道・本州の東北地方に分布している。サハリン・アムール・シベリア・カムチャツカ・モンゴル・中国北部・北アメリカ中部以北に分布する。
- **県内の生育状況** 県北の沼沢に生育する食虫植物の多年草である。生育地は極めて局限され、個体数も極めて少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 沼沢開発、管理放棄、自然遷移、園芸採取など
- **主要文献番号** 44、131

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## ヒメタヌキモ

*Utricularia minor*

タヌキモ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
NT

- **選定理由** 生育地は10ヶ所近く、数ヶ所の生育地は絶滅し、他の生育地でも絶滅の危機に瀕している。
- **分布の概要** 本州・北海道に分布している。千島にも分布する。
- **県内の生育状況** 丘陵地の池沼、溜池にごく稀に生育している。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 池沼干拓、土地開発、水質汚染など
- **主要文献番号** 33、46

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## ムラサキミミカキグサ

*Utricularia uliginosa*

タヌキモ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は40ヶ所程度で比較的多いが、減少率の高い所が多い。開発が進行し、生育地が減少した。
- 分布の概要 北海道～屋久島に分布する。東南アジア、インド、オーストラリアにかけて分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の貧栄養の湿地にまとまって生育する。開発によって生育地は減少した。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湿地開発、園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 33、63、242

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## ハグロソウ

*Peristrophe japonica* var. *subrotunda*

キツネノマゴ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 本県が分布北限。生育地が10ヶ所程度と少し多いのでランクを下げた。分布域は限られており、道路工事などにより個体数が激減している。
- 分布の概要 関東地方以西の本州～九州に分布している。朝鮮南部・中国中部・台湾に分布する。
- 県内の生育状況 県南の丘陵地の林縁などに生育するが、生育地、個体数共に減少している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 道路工事、土地開発など
- 主要文献番号 196、200、231、242、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## クマツヅラ

*Verbena officinalis*

クマツヅラ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は2ヶ所程度で、石巻市の島嶼に限られており、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。アジア・ヨーロッパ・アフリカ北部に分布する。
- 県内の生育状況 平野部の広い範囲に分布しているが、自生は島嶼のものだけに限定した。栽培品からの逸出のものが多い。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、道路改修、刈取など
- 主要文献番号 248

(執筆：植物分科会)



(撮影：加藤 啓子)

## オクノフウリンウメモドキ

*Ilex geniculata* var. *glabra*

モチノキ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は1ヶ所で局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 本州の北陸から東北地方・北海道西南部に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 二口山塊のブナ帯の日当たりのよい溪谷に局限されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移、森林伐採など
- 主要文献番号 102

(執筆：植物分科会)



(撮影：菅野 壽代)

## モチノキ

*Ilex integra*

モチノキ科

要注目種

2016  
要注目種 環境省  
-

- 選定理由 本県が分布の太平洋側北限。生育地は20ヶ所近くあるが、局限されている。
- 分布の概要 本州～沖縄に分布している。台湾・中国に分布する。
- 県内の生育状況 七ヶ浜町～南三陸町の沿岸域、島嶼に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採など
- 主要文献番号 77、92、96、100、143、179、197、246

(執筆：植物分科会)



(撮影：滝口 政彦)

## ソヨゴ

*Ilex pedunculosa*

モチノキ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- 選定理由 本県が分布の北限。生育地は10ヶ所程度で局限されている。生育地も個体数も少ない。
- 分布の概要 宮城県以南の本州・四国・九州に分布している。台湾・中国に分布する。
- 県内の生育状況 仙台市の丘陵地のコナラ林内に生育している。生育地も個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採など
- 主要文献番号 101、113、210、213、218、219

(執筆：植物分科会)



(撮影：滝口 政彦)

## ミヨウギシャジン

*Adenophora nikoensis* var. *petrophila*

キキョウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
環境省

- 選定理由 生育地は国定公園内の1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州中部の関東地方に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰の高山の砂礫地に生えるミヤマシャジンの変種である。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 石隈 健斗 [撮影地: 埼玉県])

## チシマギキョウ

*Campanula chamissonis*

キキョウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
環境省

- 選定理由 生育地は国定公園内の1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の中部以北から北海道に分布している。千島・樺太・カムチャツカ・アリューシャン・アラスカに分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰の高山の砂礫地や岩礫地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 20、22、102、165、220

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 市ノ渡 彰)

## バアソブ

*Codonopsis ussuriensis*

キキョウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
環境省  
CR+EN  
VU

- 選定理由 生育地は2ヶ所で、局限されており、個体数はごく少ない。
- 分布の概要 北海道~九州に分布している。朝鮮・中国東北部・ウスリー・アムールに分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の林床や林縁に生育しているが、生育地は少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移、園芸採取など
- 主要文献番号 143

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 岡崎 キヌ)

## キキョウ

*Platycodon grandiflorus*

キキョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
環境省  
VU  
NT

- 選定理由 生育地が80ヶ所以上と多く、減少率が高い所も多いがランクを下げた。以前は激減したが、自然保護の考えが浸透し、生育地、個体数ともに漸増して来ている。
- 分布の概要 北海道~九州・奄美諸島に分布している。朝鮮・中国・ウスリーに分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の日当たりのよい草原に生育するが、生育地、個体数とも以前より漸増して来ている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、草原開発、自然遷移など
- 主要文献番号 33、47、48、63、66、67、88、101、142、143、167、171、180、238、242、248

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 細谷 治夫)

## ムラサキセンブリ

*Swertia pseudochinensis*

キキョウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
環境省  
-  
NT

- 選定理由 生育地は1ヶ所で、2020年県内で初めて確認された。個体数も少ない。
- 分布の概要 関東以西の本州から九州に分布している。朝鮮・中国・ロシア東部に分布する。
- 県内の生育状況 白石市の日当たりのよい草地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 202

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 八巻 克己)

## ヒメシロアサザ

*Nymphoides coreana*

ミツガシワ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
環境省  
VU  
VU

- 選定理由 生育地は30ヶ所近くと限られており、個体数も減少している。
- 分布の概要 本州~九州・石垣島・西表島に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 平野部の湖沼、水田に広く生育し、水質悪化で減少が懸念される。東日本大震災の津波浸水域で一時的に増加した。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湖沼開発、水質汚染、農業汚染、園芸採取など
- 主要文献番号 73、74、75、77、78、88、117、118、135、175、177、178、180、216

(執筆: 植物分科会)



(撮影: 杉山 多喜子)

## ガガブタ

*Nymphoides indica*

ミツガシワ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
NT

- 選定理由 本県の分布は太平洋側北限。生育地は数ヶ所で水質汚染などによる環境悪化による個体数の減少の恐れがある。
- 分布の概要 本州～沖縄に分布している。朝鮮・中国・東南アジア・アフリカ・オーストラリアに分布する。
- 県内の生育状況 平野、丘陵地の湖沼に生育する多年草であるが、近年個体数の減少が見られる。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、水質汚染など
- 主要文献番号 88、212

(執筆：植物分科会)



(撮影：八巻 克己)

## アサザ

*Nymphoides peltata*

ミツガシワ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は10数ヶ所に限定されており、個体数も減少している。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。朝鮮・中国～ユーラシアの温帯に分布する。
- 県内の生育状況 県北の平野部の湖沼に生育し、水質悪化で減少が懸念される。東日本大震災の津波で消滅した生育地もある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湖沼開発、水質汚染、農業汚染、園芸採取など
- 主要文献番号 73、75、176、212、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：八巻 克己)

## エゾノコギリソウ

*Achillea ptarmica* subsp. *macrocephala* var. *speciosa*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。個体数の減少が見られる。
- 分布の概要 北海道・本州中部以北に分布している。樺太・千島・カムチャツカ・シベリア東部に分布する。
- 県内の生育状況 三陸沿岸地域の日当たりの良い草原に生育しているが、個体数の減少が見られる。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 14、92、96、100、143、185

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## カワラハハコ

*Anaphalis margaritacea* var. *yedoensis*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
-

- 選定理由 生育地は20ヶ所以上あるが、生育地の河川敷の環境変化で激減している。
- 分布の概要 北海道・本州・四国・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 上流～中流部の洪水時に冠水する砂礫地に生育している。洪水の減少で生育地が減少している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 河川開発、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## シロヨモギ

*Artemisia stelleriana*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- 選定理由 本県は分布の南限。20ヶ所程度と生育地が多いのでランクを下げた。しかし分布域は局限されている。
- 分布の概要 新潟県・茨城県以北の本州・北海道に分布している。千島・樺太・カムチャツカ・オホーツク海沿岸・朝鮮に分布する。
- 県内の生育状況 巨理町、山元町の海岸砂丘に生育し、東日本大震災による津波の影響で生育地や個体数は激減したが、回復しつつある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然災害、園芸採取など
- 主要文献番号 74、76、77、78、156、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：滝口 政彦)

## シュウブンソウ

*Aster verticillatus*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
-

- 選定理由 本県が分布の太平洋側北限。生育地は仙台市内の数ヶ所で特定の地域に限定される。
- 分布の概要 東北部の本州から沖縄に分布している。朝鮮・中国・東南アジア・インドに分布する。
- 県内の生育状況 仙台市の丘陵地の林床で生育が確認されている。生育地はごく限られている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 32、110、111

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## エゾノタウコギ

*Bidens maximowicziana*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所に局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 本州北部・北海道に分布している。樺太・南千島・朝鮮・中国東北部・ロシア東部に分布する。
- 県内の生育状況 奥羽山地の丘陵地の湖沼の湿草に生育している。個体数は少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湖沼開発、農業汚染など
- 主要文献番号 71、92

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## ヒメガンクビソウ

*Carpesium rosulatum*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所に局限されている。
- 分布の概要 本州の東北地方北部～九州に分布している。朝鮮(済州島)にも分布する。
- 県内の生育状況 生育地は丘陵地の林床に点在しており、個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 92、96

(執筆：植物分科会)



(撮影：大越 秀樹)

## リュウノウギク

*Chrysanthemum makinoi*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- 選定理由 生育地が数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 宮城県・新潟県以西の本州・四国・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 県南の日当たりの良い崖地などに生育地が限られている。生育地、個体数とも少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 7、8、112

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## イワインテン

*Chrysanthemum rupestre*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
-

- 選定理由 生育地は国定・県立公園内の数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の宮城県から中部地方まで分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰から二口山塊の山地帯上部から高山帯にかけての岩上に生育。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 102、220、226

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## キクタニギク

*Chrysanthemum seticuspe f. boreale*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
NT

- 選定理由 生育地は60ヶ所以上と比較的多い。環境省カテゴリーでNTに指定。
- 分布の概要 本州の岩手県以南の太平洋側から九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地はやや乾いた崖地に広く生育が確認されている。法面緑化で吹き付けられた外国産ヨモギの種子に混入して侵入した外来タイプも見られる。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 7、67、242、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## モリアザミ

*Cirsium dipsacolepis*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 本州・四国・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 奥羽山地の山地帯の日当たりの良い草原に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 山菜採取、管理放棄、草原開発など
- 主要文献番号 124、125

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## リクゼンアザミ

*Cirsium funagataense*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 宮城県特産のアザミで、生育地は数ヶ所で局所的である。
- 分布の概要 本州の宮城県に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 船形連峰の山地帯の崩壊地に局所的に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 81、124、125

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## ナトリアザミ

*Cirsium kasaianum*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
CR+EN環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で、仙南から南部の丘陵地の林内に局限され、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州の宮城県に分布する。宮城県固有種、日本固有種。
- 県内の生育状況 名取市、丸森町の丘陵地の林床に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採など
- 主要文献番号 41、81、124、125

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## ナンブタカネアザミ

*Cirsium nambuense*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は国定公園内の1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の宮城県・山形県の高山に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 栗駒山の山頂部の日当たりのよい草地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など
- 主要文献番号 125

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## キタカミアザミ

*Cirsium nipponicum*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は1ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の宮城県・岩手県・青森県に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 山地の林縁などに生育、大崎市の標本がある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移など
- 主要文献番号 42

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規 [国立科学博物館植物研究部所蔵])

## ウゴアザミ

*Cirsium ugoense*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 本県が太平洋側南限。生育地は1ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 東北地方の日本海側に分布し、高山草原に生える。日本固有種。
- 県内の生育状況 栗駒山の高山の草原に生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：大越 秀樹 [撮影地：秋田県])

## マルモリアザミ

*Cirsium yuki-uenoanum*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 宮城県固有種。生育地は数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 本州の宮城県・福島県に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 県南の丸森町、角田市の丘陵の林縁や草地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移など
- 主要文献番号 83、124、125

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## タカサブロウ

*Eclipta thermalis*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	-

- **選定理由** 生育地は20ヶ所近くで、局限されており、個体数も少ない。
- **分布の概要** 本州以南に分布している。世界の暖帯から熱帯に広く分布する。
- **県内の生育状況** 田圃や畦、水路壁などに生育しており、水田雑草の一つである。外来種との競争で減少している。
- **近似種との区別** 外来種のアメリカカタカサブロウは葉が細く、そう果に透明な翼がない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 管理放棄、帰化競合、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：葛西 英明)

## アズマギク

*Erigeron thunbergii*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
VU	-

- **選定理由** 生育地は50ヶ所程度であるが、草原など生育環境が減少し、個体数が急激に減少している。
- **分布の概要** 本州の中部以北に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 日当たりの良い草原に群生するが、草原が放置され自然遷移が進行したり、植林が行われたり、生育地、個体数とも激減している。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、園芸採取、自然遷移など
- **主要文献番号** 142、143、167、226、242、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## フジバカマ

*Eupatorium japonicum*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	NT

- **選定理由** 生育地は10ヶ所近くあるが、限定的である。環境省でNTに指定。
- **分布の概要** 関東以西の本州から九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- **県内の生育状況** 県南の角田市、亶理町の川岸の土手などで自生として生育が確認されている。他の地区は国内帰化扱いとしている。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 河川開発、自然災害など
- **主要文献番号** 52、130、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：八巻 克己)

## ホソバオグルマ

*Inula linariifolia*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
VU	VU

- **選定理由** 生育地は数ヶ所で局限されている。
- **分布の概要** 本州の関東地方・九州に分布している。朝鮮・中国・シベリアに分布する。
- **県内の生育状況** 県南の沿岸部と仙北の丘陵地の湿草地に生育は局限されている。個体数は極めて少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、自然遷移など
- **主要文献番号** 73、230、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：尾形 良太)

## タカネニガナ

*Ixeridium alpicola*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	-

- **選定理由** 生育地は国定公園内の2ヶ所で局限されている。
- **分布の概要** 本州中部から北海道の高山に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 船形山、栗駒山の高山の岩礫地や岩場で生育が確認されている。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然遷移など
- **主要文献番号** 93

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## タカサゴソウ

*Ixeris chinensis* subsp. *strigosa*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
VU	VU

- **選定理由** 生育地は10ヶ所程度で局限されている。
- **分布の概要** 本州～九州に分布している。朝鮮にも分布する。
- **県内の生育状況** 県中部から県南部の丘陵地の乾いた草原に生育に局限され、生育地、個体数とも極めて少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：菅野 登志子)

## ノニガナ

*Ixeris polycephala*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所近くで、局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。朝鮮・中国・インド・コーカサスに分布する。
- 県内の生育状況 沿岸部から丘陵地の河川敷、草地に生育する。生育地、個体数は少ない。東日本大震災津波後に改修された堤防の法面に国内帰化と思われる群生が確認された。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、管理放棄など
- 主要文献番号 130、194

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## カワラニガナ

*Ixeris tamagawaensis*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
NT

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。
- 分布の概要 中部以北の本州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 河川敷の礫地に僅かに生育していたが近年確認されていない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 河川工事、自然災害、自然遷移など
- 主要文献番号 17、33

(執筆：植物分科会)



(撮影：大野 隼 [撮影地：栃木県])

## コオニタビラコ

*Lapsanastrum apogonoides*

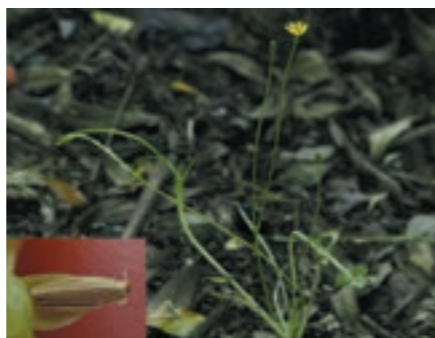
キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は20ヶ所近くで、限定されている。田畑の雑草であるが、生育地・個体数共に減少しているので取り上げた。
- 分布の概要 本州から九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- 県内の生育状況 平野部の田畑にごく普通に生育が確認されていたが、ここ20年間の標本は6点であり少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地造成、農薬汚染など
- 主要文献番号 88、130

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## ミチノクヤマタバコ

*Ligularia fauriei*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所以上あるが、生育環境の減少により激減している。
- 分布の概要 本州の東北地方～関東地方北部の太平洋側の丘陵地に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 丘陵地の草原や明るい林床に群生する大型草本。草原の減少や森林の自然遷移等により群生地が減少が著しい。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移など
- 主要文献番号 67、100、142、143、180、242、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：滝口 政彦)

## オオニガナ

*Nabalus tanakae*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地は50ヶ所近くで比較的多いが、土地開発で減少している。
- 分布の概要 近畿以北の本州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 丘陵地～山地の湿地、沼沢に生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、自然遷移など
- 主要文献番号 33、67、88、196

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## ムラサキニガナ

*Paraprenanthes sororia*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所程度で点在し、個体数は少ない。
- 分布の概要 本州・四国・九州に分布している。中国中部にも分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の半日陰の林床や林縁に生育している。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## カシワバハグマ

*Pertya robusta*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 本県は分布の北限である。生育地は10ヶ所程度で局限されている。
- **分布の概要** 本州(宮城県以南の主に太平洋側)・四国・九州に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 県中部の丘陵地の乾いた林床に生育している。個体数は少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採、自然遷移など
- **主要文献番号** 32、47、66、88、101、110

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## コウヤボウキ

*Pertya scandens*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 本県が分布北限。生育地は数ヶ所で局限されている。
- **分布の概要** 関東以西の本州～九州に分布している。中国にも分布する。
- **県内の生育状況** 石巻市の牡鹿半島、雄勝などに生育地が限られている。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然遷移、園芸採取など
- **主要文献番号** 92、100、222

(執筆：植物分科会)



(撮影：加藤 啓子)

## アキノハハコグサ

*Pseudognaphalium hypoleucum*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 VU	環境省 EN
------------	-----------

- **選定理由** 生育地は20ヶ所以上あるが、減少率が大きい所が多いためランクを上げた。
- **分布の概要** 本州～九州に分布している。朝鮮・中国・東南アジア・インドに分布する。
- **県内の生育状況** 丘陵地のやや乾いた草地に生育し、分布域は広いが、生育地は少なく、個体数も少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 草地開発、自然遷移など
- **主要文献番号** 33、67、88、130、143、196、246

(執筆：植物分科会)



(撮影：大越 秀樹)

## ミヤコアザミ

*Saussurea maximowiczii*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 本県は分布の北限に近い。生育地は数ヶ所で局限されている。
- **分布の概要** 岩手県以南の本州・四国・九州に分布している。朝鮮・中国東北部・アムールに分布する。
- **県内の生育状況** 七ヶ宿町から大和町にかけての丘陵の湿地脇の草地に生育し、個体数は少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然遷移、植林など
- **主要文献番号** 102、124

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## フボウトウヒレン

*Saussurea fuboensis*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

- **選定理由** 生育地は10ヶ所以上あるが、限定されている。
- **分布の概要** 本州の宮城県・山形県の蔵王連峰から船形連峰にかけて高山に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 蔵王連峰から船形連峰にかけての高山、亜高山の草地に分布している。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然遷移など
- **主要文献番号** 80、124、182、255

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## ヒメヒゴタイ

*Saussurea pulchella*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 VU
---------------	-----------

- **選定理由** 生育地は数ヶ所に限られている。個体数の減少が著しい。
- **分布の概要** 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国東北部・樺太・シベリア東部に分布する。
- **県内の生育状況** 奥羽山地、北上山地の日当たりのよい草地に生育地があるが、個体数の減少が見られる所もある。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然遷移、園芸採取など
- **主要文献番号** 33、101

(執筆：植物分科会)



(撮影：葛西 英明)

## キクアザミ

*Saussurea ussuriensis*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 本県が分布の北限。生育地は1ヶ所で局限されている。
- **分布の概要** 福島県以南の本州・九州に分布している。朝鮮・中国・ウスリーに分布する。
- **県内の生育状況** 県南の丸森町の草原に生育する。個体数も少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然遷移など
- **主要文献番号** 124

(執筆：植物分科会)



(撮影：森 俊)

## アブクマトウヒレン

*Saussurea yuki-uenoana*

キク科

準絶滅危惧 (NT)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

- **選定理由** 本県が分布の北限。生育地は数ヶ所でごく限られており、丸森町に多くみられる。
- **分布の概要** 本州の宮城県・福島県に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 丸森町に多く、白石市、大衡村の丘陵地の草地や林縁で生育が確認されている。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、自然遷移など
- **主要文献番号** 37、82、124

(執筆：植物分科会)



(撮影：上野 雄規)

## アオヤギバナ

*Solidago yokusaiana*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 本県は分布の北限に近い。生育地は数ヶ所で局限されており、ランクを上げた。
- **分布の概要** 本州の宮城県・山形県から九州・沖縄に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 県中部と北部の河川に生育地がある。川岸の岩上に生育する。個体数も少ない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 自然災害、河川改修など

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## オカオグルマ

*Tephrosia integrifolia* subsp. *kirilowii*

キク科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 本県は太平洋側の分布北限。生育地は10ヶ所近くあるが、丘陵地の環境変化で生育地、個体数とも減少しているためランクを上げた。
- **分布の概要** 本州～九州に分布している。朝鮮・中国に分布する。
- **県内の生育状況** 奥羽山地、阿武隈山地の丘陵地の湿った草地に生育する。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、自然遷移、園芸採取など
- **主要文献番号** 17、130、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：福島県])

## オナモミ

*Xanthium strumarium* subsp. *sibiricum*

キク科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 VU
------------	-----------

- **選定理由** 生育地は20ヶ所近くと少なく、最近では殆んど見られなくなっている。
- **分布の概要** 北海道～九州に分布している。アジア大陸にも分布する。
- **県内の生育状況** 各地の草原、畑地などに生育するが、生育地、個体数とも以前より減少している。競合する帰化種が増加している。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 土地開発、帰化競合など
- **主要文献番号** 130

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## ハナビゼリ

*Angelica inaequalis*

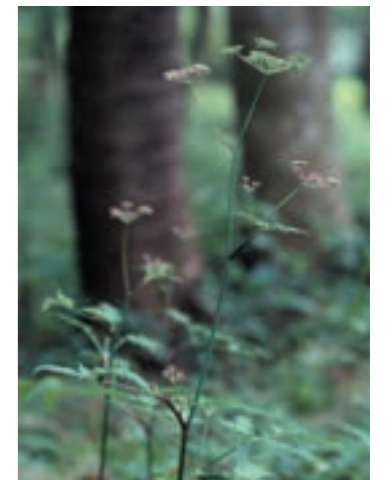
セリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 生育地は数ヶ所で、個体数共に少なく局所的である。
- **分布の概要** 岩手県以南の本州～九州に分布している。日本固有種。
- **県内の生育状況** 奥羽山地、北上山地の林床や林縁に点在して生育する。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 林地開発、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：葛西 英明)

## エキサイゼリ

*Apodicarpum ikenoi*

セリ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
NT

- 選定理由 本県は分布の北限。生育地は2ヶ所で、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州の関東地方・愛知県の湿地に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 仙北の平野部の河川敷の湿地に稀に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 河川開発、湿地開発など
- 主要文献番号 144

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## ホタルサイコ

*Bupleurum longiradiatum* var. *elatus*

セリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地は10ヶ所近くで限定的であり、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州・九州に分布している。サハリン・ウスリーに分布する。
- 県内の生育状況 奥羽山地、北上山地の日当たりの良い草地や林縁に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 220

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## ミシマサイコ

*Bupleurum stenophyllum*

セリ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
VU

- 選定理由 生育地は数ヶ所で限定されており、個体数も極めて少ない。
- 分布の概要 本州～九州に分布している。朝鮮にも分布する。
- 県内の生育状況 丘陵地の草地に生える稀産種で、園芸や薬用に採取されるため絶滅の恐れがある。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 園芸採取、薬用採取など
- 主要文献番号 164

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：福島県])

## カラフトニンジン

*Conioselinum pacificum*

セリ科

要注目種

2016  
要注目種環境省  
-

- 選定理由 本県は分布の南限。生育地は20ヶ所以上であるが、局限され個体数は少ない。
- 分布の概要 北海道・本州北部に分布している。千島・樺太・カムチャツカ・アリユーション・アラスカ・北カリフォルニアに分布する。
- 県内の生育状況 気仙沼市～石巻市の海岸の砂地に生育。東日本大震災の津波に遭遇し、津波後も生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 海岸開発、自然災害など
- 主要文献番号 73、100、142、143

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## セリモドキ

*Dystaenia ibukiensis*

セリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は2ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州の滋賀県以北の日本海側に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 白石市の2ヶ所の標本がある。山地帯のやや湿った場所に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 草地開発、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：山形県])

## ハナウド

*Heracleum sphondylium* var. *nipponicum*

セリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 本県が分布の北限。生育地は数ヶ所で極めて限定されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 東北部の本州・四国・九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 丘陵地のやや湿った場所に生育する。
- 近似種との区別 ハナウドの花期は早く、オオハナウドは少し遅い。ハナウドの葉は3～5裂するが、オオハナウドは普通3裂。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発、除草など

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：福島県])

## オオカサモチ

*Pleurospermum uralense*

セリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 北海道・本州中部以北に分布している。アジア北東部にも分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰～船形連峰にかけての山地帯から亜高山帯の草原に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## イワセントウソウ

*Pternopetalum tanakae*

セリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州・四国・九州に分布している。朝鮮半島・中国などに分布する。
- 県内の生育状況 奥羽山地の深山の木陰の湿った場所に生育。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：葛西 英明)

## タニミツバ

*Sium serra*

セリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
-

- 選定理由 生育地は数ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 本州の中部地方から北海道に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 丘陵地の湿った林床に生育、稀産で個体数の減少が懸念される。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 土地開発など
- 主要文献番号 160

(執筆：植物分科会)



(撮影：根本 秀一[撮影地：福島県])

## ヌマゼリ

*Sium suave var. nipponicum*

セリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
NT環境省  
NT

- 選定理由 生育地は20ヶ所程度と多いが、5ヶ所で減少率が高いのでランクを上げた。干拓によって絶滅した所もある。
- 分布の概要 北海道～九州に分布している。朝鮮・中国東北部に分布する。
- 県内の生育状況 平野部の湿地に生育し、生育地は限定的である。東日本大震災の津波により、消滅した生育地もある。湿地の干拓や管理放棄が懸念される。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 湿地開発、自然遷移、管理放棄など
- 主要文献番号 16、73、74、175、177

(執筆：植物分科会)



(撮影：恵美 泰子)

## レンプクソウ

*Adoxa moschatellina*

ガマズミ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地は30ヶ所以上と比較的多い。
- 分布の概要 近畿地方以東の本州・北海道に分布している。北半球の温帯に広く分布する。
- 県内の生育状況 丘陵帯～山地帯の森床、林縁に生育する。群生地も多い。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、土地開発など
- 主要文献番号 21、47、48、101、130、142、248

(執筆：植物分科会)



(撮影：細谷 治夫)

## エゾヒョウタンボク

*Lonicera alpigena subsp. glehnii*

スイカズラ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
VU

- 選定理由 生育地は1ヶ所で局限されている。個体数も少ない。
- 分布の概要 本州北部・北海道に分布している。南千島・樺太にも分布する。
- 県内の生育状況 奥羽山地の特異な環境、風穴に局限されており個体数も少ない。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移、園芸採取など

(執筆：植物分科会)



(撮影：市ノ渡 彰)

## クロミノウグイスカグラ

*Lonicera caerulea* subsp. *edulis* var. *emphylocalyx*

スイカズラ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT環境省  
-

- 選定理由 生育地が2ヶ所で局限されており、個体数も少ない。
- 分布の概要 中部地方以北の本州・北海道に分布している。朝鮮にも分布する。
- 県内の生育状況 蔵王連峰、船形連峰の高山に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移など

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## マツムシソウ

*Scabiosa japonica*

スイカズラ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
-環境省  
-

- 選定理由 生育地が20ヶ所近くあるが草原が少なくなり、生育地・個体数共に減少している。
- 分布の概要 本州の青森県から九州に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 かつては奥羽山地、北上山地、阿武隈山地の草地に群生、現在は奥羽山地のみで確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 草地開発、園芸採取、自然遷移など
- 主要文献番号 88、142、143、226、238

(執筆：植物分科会)



(撮影：三島木 進)

## クロブシヒョウタンボク

*Lonicera kurobushiensis*

スイカズラ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
-環境省  
EN

- 選定理由 生育地は1ヶ所で、生育が確認されている。個体数は少ない。
- 分布の概要 山形県東根市黒伏山で発見された。日本固有種。
- 県内の生育状況 七ヶ宿町の山地で生育が確認されている。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 自然遷移、園芸採取など
- 主要文献番号 224

(執筆：植物分科会)



(撮影：国京 潤一)

## ニッコウヒョウタンボク

*Lonicera mochidzukiana*

スイカズラ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
要注目種環境省  
-

- 選定理由 本県は分布の北限。生育地は数ヶ所と局限され、個体数も少ないのでランクを上げた。
- 分布の概要 本州の関東～中部地方に分布している。日本固有種。
- 県内の生育状況 蔵王連峰から船形連峰にかけての山地帯に生育する。
- 生育に対する脅威(減少の要因) 森林伐採、自然遷移など
- 主要文献番号 5、99、101

(執筆：植物分科会)



(撮影：杉山 多喜子)

動物編

# 哺乳類



## 哺乳類

## 生息環境

明治時代以降、宮城県で生息が確認された野生の哺乳類は75種にのぼる。生息環境の特性と保全上の課題を環境別に区分するとおおよそ以下のようになる。

①森林棲哺乳類

主に県西部の、自然度の高い森林内に分布するものたちである。環境の人為的な攪乱の影響を受けやすく、生息に適した環境が限られている。その保全のためには、水系・地形を含め、良好な自然生態系をそのままの形で維持することが重要である。

例えばカワネズミは、清流の水生昆虫類を好んで餌とする。岩や倒木が点在する溪流沿いに生息し、河道整備などの環境改変が行われると姿を消す。また多くのコウモリ類は森林内で採餌するだけでなく、休憩・哺育・冬眠などのために特定のねぐら（自然洞や樹洞、時に隧道など）を必要とする。オコジョ、ヤマネヤヒメヒミズなども同様で、豊かな自然環境のもと、人目につかず暮らしている。

②里山で見られる哺乳類

アカネズミやニホンリス、ニホンノウサギ、テンなど、人里に近い二次林でも見かけられ馴染み深いこれらの動物たちも、基本的には森林性である。ニホンカモシカは山岳地帯から二次林にかけ、森林内で広い縄張りを持って生活するが、春夏の行動圏が拡大する時期に里山の林縁部でしばしば目撃される。

移動能力が高く、人為的に改変された環境を柔軟に利用する適応能力の持ち主も少なくない。ハクビシン、アナグマ、ニホンザル、イノシシ、ツキノワグマなど雑食性の種、草地環境への適応力が高いニホンジカもここに含まれる。林業被害が問題視されるニホンジカは、かつて狩猟により牡鹿半島・金華山島以外ではほぼ姿を消していたが、20世紀終わりごろから牡鹿半島で急増、西進・北上。すでに岩手県の個体群と分布が連続する状況である。農業被害が問題となっているイノシシは、かつて丸森町を分布北限としていたが、1980年代以降から分布を広げ、現在は西部を中心に県南から県北まで分布が広がっている。ツキノワグマの人里への接近も問題となっている。いずれも、すみかであったはずの森林の分断や質の低下が動物を人里に押し出し、それを人間社会に寄せ付けない地域社会・里山管理の衰退が軋轢を生み出す原因となっている。宮城県はツキノワグマ、ニホンザル、ニホンジカ、イノシシの4種について、特定鳥獣保護管理計画のもとで人と動物の棲み分けに取り組んでいる。

外来種も分布を広げている。福島県で個体数が増加するアメリカミンク、宮城県内で分布が拡大するアライグマは特定外来生物に指定されており、生態系への影響が懸念される。

県内では、東日本大震災後の震災復興に伴う土地利用の変更や改修工事等は一段落した。しかし民間工場の誘致、太陽光・風力発電施設の建設など、比較的小規模の開発事業により丘陵部の森林の連続性が低下し、生物多様性は低下している。森林が分断されれば、哺乳類の移動経路が分断され人間との間で軋轢が起きやすくなる。里山の哺乳類と共生するためには、森林の面積だけでなくその質と連続性を保つ土地利用計画が求められる。

③海棲哺乳類

生活史を海中で過ごす海棲哺乳類、特に浅海に生息する種は、漁業との共存が課題となるだけでなく、水温変化や水質汚染、餌資源の変動などの影響を強く受けやすい。多くの種は個体の移動距離が長く、詳細な分布域や生態についての知見が少ないが、国際的な資源管理の対象である鯨類の科学的モニタリングは近年大きく発展している。今日、海水温上昇とともに海洋環境は大きく変化し、海の生態系には深刻な影響が生じている。海棲哺乳類のモニタリングに基づく保全は、地球環境の保全の上でも重要な意味を持つ。

### 希少種の動向

レッドデータブック2025では、環境省レッドリストのカテゴリーと判定基準を踏襲して、EX(絶滅)・CR+EN(絶滅危惧Ⅰ類)・VU(絶滅危惧Ⅱ類)・NT(準絶滅危惧)・DD(情報不足)・LP(絶滅のおそれのある地域個体群)の区分と判定を行い、その他本県における生息分布に留意すべき状況が特に見られる場合は

## 要注目種

個体数推定が困難な種については、質的判定に加え、国内(特に東北地方)における生息情報の近年の増加/減少傾向を加味した。レッドデータブック2016からの主要な変更点は以下の通りである。

・海棲哺乳類

最大の変更点は、沿岸で見られる海棲哺乳類を評価の対象に含めたことである。文献調査等に加え、「海棲哺乳類ストランディングデータベース(国立科学博物館)」を用いて、宮城県の確認記録を検討した。その結果、個体群サイズが小さく保全上の懸念が指摘されているコビレゴンドウの北方型(タツパナガ)とスナメリ(仙台湾-東京湾系群)をLPとした。また県内における生息確認情報がほとんどないラッコ、トド、コククジラ、ネズミイルカについてはDDとした。

・陸棲哺乳類

・海鳥

カワネズミは河床環境の改変の影響を受けやすく、県内での確認地点、生息適地は近年減少している。近隣の県においても同様の状況であることから、DDからNTへとカテゴリーを変更した。2014年に初確認されたノレンコウモリの県内の個体数はごく少数と推定される。国内においても生息確認事例が極めて少なく、生息に適した環境が限られていることからCR+ENとしている。一方、国内他地域で調査が進み確認地点が増えているカグヤコウモリとクロホオヒゲコウモリについてはCR+ENからVUへ、ニホンウサギコウモリとテングコウモリについてはVUからNTへと変更した。

東松島市では例年、ヒナコウモリの大規模な越冬集団が形成される。東日本大震災により最大規模のねぐらとなっていた洞穴が崩落したが、地域内で分散し複数の小規模なねぐらを形成している。国内における本種の生息情報は増加したが、当地は東日本では他に類のない大規模越冬集団であり、広域の遺伝的交流の観点からその保全は重要である。以上のことから、ヒナコウモリをVUからLP(東松島市のヒナコウモリ)に変更した。

### 種名および和名の表記について

分子系統学的研究の進展に伴い、改訂にあたりいくつかの種の種名・和名の変更を行なった。ノレンコウモリ*Myotis bombinus*は、従来ノレンコウモリ*M. nattereri*の亜種ホンドノレンコウモリ*M. n. bombinus*と表記されることが多かったが、現在は別種とされる。カグヤコウモリは*Myotis frater*の一亜種と考えられていたが、近年、別種*M. longicaudatus*とされる。チチブコウモリ*Bargastella pacifica*は、広域分布種*B. darjelingensis*から区別され2019年に記載された学名である。ニホンウサギコウモリ*Plecotus sacrimotis*は、かつてウサギコウモリ*Plecotus auritus*あるいはその亜種ニホンウサギコウモリ*P. a. sacrimontis*等とされてきたが、現在は別種とされる。ミズラモグラ*Oreoscaptor mizura*は、従来*Euroscaptor*属とされていたが、2016年以降、*Oreoscaptor*属が用いられるようになっている。

採用した種名および和名は、「世界哺乳類標準和名リスト2021年度版(川田ら, 2021)」による。またコウモリ類については「識別図鑑　日本のコウモリ(コウモリの会編, 2023)」を参照した。

### 【哺乳類分科会名簿】

氏名	所属等
高橋 修	宮城野野生動物研究会
秋葉 保夫	宮城野野生動物研究会
早坂 徹	宮城野野生動物研究会
田中 健二	宮城野野生動物研究会
斉藤 千映美	宮城野野生動物研究会

参考文献

- 阿部永 (2003) カワネズミの捕獲，生息環境および活動. 哺乳類科学 45: 51-63.
- 阿部永 (2011) カワネズミ*Chimarrogae platycephala*の胃内容について. 哺乳類科学 51: 311-313.
- 秋葉保夫, 高橋修, 高橋雄一 (1996) 宮城県の野生哺乳動物. 宮城野野生動物研究会.
- 安藤元一 (2008) ニホンカワウソウ絶滅に学ぶ保全生物学. 東京大学出版会, 233p.
- Bradford AL, Weller DW, Wade PR, Burdin AM, & Brownell Jr RL (2008) Population Abundance and Growth Rate of Western Gray Whales *Eschrichtius robustus*. Endang Species Res 6: 1-14.
- Burkanov VN & Loughlin TR (2005) Distribution and Abundance of Steller Sea Lions, *Eumetopias jubatus*, on the Asian coast, 1720's-2005. Mar Fish Rev 67: 1-62.
- Dinets V (2020) First Record of Tree Cavity Roosting in Frosted Myotis (*Myotis pruinusos*). J Bat Res Conserv 13: 10-11.
- Doroff A, Burdin A & Larson S (2021) *Enhydra lutris* (errata version published in 2022). The IUCN Red List of Threatened Species 2021: e.T7750A219377647. Accessed on 02 December 2025.
- Doroff AM, Hatfield B, Burdin A, Nichol L, Hattoris K & Burkanov V (2011) Status Review: Sea Otter (*Enhydra lutris*) Population Status and Trend. Proceedings of Xth International Otter Colloquium, IUCN Otter Spec Group Bull 28A: 22-30.
- 福田 大介, 上條 隆志, 安井さち子 (2006) 夏期におけるヒメホオヒゲコウモリ*Myotis ikonnikovi* Ognevの集団ねぐら. 哺乳類科学 46: 177-180.
- Fukui D, Sano A & Kruskop SV (2019) Far Eastern Myotis. The IUCN Red List of threatened species. https://www.iucnredlist.org/species/14149/22061650 (最終閲覧2025/11/30)
- 福島県 (2022) 福島県アメリカミンク防除実施計画 (第2期).
- Funakoshi K (1991) Reproductive Ecology and Social Dynamics in Nursery Colonies of the Nattere's Bat *Myotis nattereri bombinus*. J Mamm Soc Japan 15: 61-71.
- 橋本 勝, 斉藤千映美(2012) スナメリ *Neophocaena phocaenoides* の骨格標本の作成と活用. 宮城教育大学環境教育研究紀要 14: 25-27.
- 橋本勝, 斉藤千映美 (2017) 仙台市内におけるカヤネズミ*Micromys minutus*の記録. 宮城教育大学環境教育研究紀要 19: 43-47.
- 橋本勝, 斉藤千映美 (2018) 仙台市内の低標高地で確認されたミズラモグラ*Euroscaptor mizura*の記録. 宮城教育大学環境教育研究紀要 20: 25-26.
- 畠 佐代子, 新野 聡, 富樫悦夫, 上野山雅子, 澤邊久美子 (2018) カヤネズミの新北限産地. 伊豆沼・内沼研究報告 12: 53-62.
- Hattori K, Kawabe I, Mizuno AW & Ohtaishi N (2005) History and Status of Sea Otters, *Enhydra lutris* along the Coast of Hokkaido, Japan. Mammal Study 30: 41-51.
- Ishida M, Sakamoto Y, Hashimoto A & Matsumura S (2012) Population Dynamics and Long-term Survival of Hilgendorf's Tube-nosed Bat *Murina hilgendorfi* in the Akiyoshi-dai Karst Area, Yamaguchi, Japan. Mammal Study 37: 249-253.
- Ishiguro N, Inoshima Y & Shigehara N (2009) Mitochondrial DNA Analysis of the Japanese Wolf (*Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839) and Comparison with Representative Wolf and Domestic Dog Haplotypes. Zool Sci 26: 765-770.
- 石川創 (2019) 日本の小型捕鯨業の歴史と現状. 国立民族学博物館調査報告, 149: 129-152.
- IWC. Status of Eastern North Pacific Gray Whales. https://iwc.int/about-whales/intro-to-population-status/status-of-whales-graphics/summary-enp-gray (最終閲覧2025/11/29)
- 伊沢敏生, 中川尚史, 川添達朗, 藤田志歩, 風張喜子, 宇野壮春, 関健太郎, 三木清雅 (2013) 金華山島に生息する野生ニホンザルの個体数調査. 霊長類研究所年報 43: 113.
- (株) 建設環境研究所 (2015) 平成26年度鳴瀬川総合開発環境調査(陸域動物)業務調査結果(哺乳類・両生類・爬虫類).
- 海棲哺乳類ストラレンジングデータベース. 国立科学博物館. https://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/drift/index.php(最終閲覧2025/09/05)
- Kamiyama S & Kawai K (2025) Population Genetics of the Asian Parti-Colored Bat, *Vespertilio sinensis*: Insights into Seasonal Migration in the Japanese Archipelago. Zool Sci Japan 42: 270-278.
- 金治佑 (2016) 北太平洋に生息する小型鯨類の分布・個体数の時空間的動態に関する研究. 東京大学博士論文.
- Kanaji Y, Maeda H & Sasaki H (2025) Recovering or Still Depleted? Updated Population Assessment of Tappanaga, a Northern Local Population of Short-Finned Pilot Whales (*Globicephala macrorhynchus*) off the Coast of Japan. Aquat Conserv Mar Freshw Ecosyst 35: e70051.
- 金子之史 (2008) ネズミの分類学. 東京大学出版会, 302p.
- 粕谷俊雄 (2011) イルカー小型鯨類の保全生物学. 東海大学出版会, 640p.
- Kato H, Ishikawa H, Bando T, Mogoe T, & Moronuki T (2006) Status Report of Conservation and Researches on the Western Gray Whales in Japan, June 2005- May 2006. SC/58/O14: presented to 58th IWC/SC meeting.
- 川田伸一郎, 岩佐真宏, 福井大, 新宅勇太, 天野雅男, 下稲葉さやか, 樽創, 姉崎智子, 鈴木聡, 押田龍夫, 横畑泰志(2021) 世界哺乳類標準和名リスト2021年度版. URL :https://www.mammalogy.jp/list/index.html (最終閲覧2025/09/05)
- Kawada S (2016) Morphological Review of the Japanese Mountain Mole (Eulipotyphla, Talpidae) with the Proposal of a New Genus. Mammal Study 41: 191-205.
- Kawai K, Echenique-Diaz LM, Takahashi O & Saito C (2015) Insights into the Natural History of *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959 from Survey Records in Miyagi Prefecture. 宮城教育大学環境教育研究紀要 17: 53-57.
- Kim B, Bae Y, Lee J, Park J, Choi YS, Ryu H & Kim SS (2021) The Complete Mitochondrial Genome of the Far Eastern Myotis: *Myotis bombinus* Thomas, 1906 in Mainland of Korea (Chiroptera, Vespertilionidae). Mitochondrial DNA B: Resour 6: 615–616.
- King CM, Powell RA (2007) The Natural History of Weasels and Stoats: Ecology, Behavior, and Management (2nd ed.). Oxford University Press. 512p.
- Kishimoto R, Kawamichi T (1996) Territoriality and monogamous pairs in a solitary ungulate, the Japanese serow, *Capricornis crispus*. Anim Behav 52: 673–682.
- 郡山尚紀, 茶屋原夕子 (2021) 北海道沿岸に回遊する野生トド (*Eumetopias jubatus*) に見られる水中社会行動. J Rakuno Gakuen Univ 45: 115-124.
- コウモリの会 (編) (2023) 識別図鑑 日本のコウモリ. 文一総合出版, 240p.
- コウモリの会 (編) (2011) コウモリ識別ハンドブック改訂版. 文一総合出版, 88p.
- Matsui N, Sasaki M, Kobayashi M, Shindo J & Matsuishi TF (2021) Growth and Reproduction in Harbor Porpoise (*Phocoena phocoena*) inhabiting Hokkaido, Japan. Aquat Mamm 47: 185–195.
- 三原良吉 (2008) 郷土史 仙台耳ぶくろ. 宝文堂, 246p.
- 宮城県(2022) 第三期宮城県ニホンジカ管理計画.

- 宮城県 (2022) 第四期宮城県イノシシ管理計画.
- 宮城県 (2022) 第四期宮城県ツキノワグマ管理計画.
- 宮城県(2025) 第五期宮城県ニホンザル管理計画.
- 宮城のサル調査会 (編) (1987-2023) 宮城県のニホンザル 第1～36号.
- 本川雅治 (2008) 日本の哺乳類学 1小型哺乳類. 東京大学出版会, 304p.
- 中川智裕, 坂田拓司, 渡邊竜己, 石橋康弘 (2025) 球磨川流域におけるクロホオヒゲコウモリ*Myotis pruinusos*の生息初記録と利用高度に関する考察. 日本哺乳類学会2025年度大会ポスター発表.
- 中井真理子, 横畑泰志, 橋屋 誠, 相良直彦 (2016) 営巢事例に基づいて見い出された岐阜県北部におけるミズラモグラの生息地. 森林野生動物研究会誌 41: 39-41.
- 中島福男 (2006) 日本のヤマネ (改訂版). 信濃毎日新聞社, 179 pp.
- 中村玄, 加藤秀弘 (2014) 日本沿岸域に近年 (1990–2005 年) 出現したコククジラ *Eschrichtius robustus* の骨学的特徴，特に頭骨形状から見た北太平洋西部系群と東部系群交流の可能性. 哺乳類科学 54:73-88.
- Nakamura-Kojo Y, Kojo N, Tamate HB (2016) Spatial Differences in Arboreal Activity of Two Rodents, the Japanese Dormouse (*Glirulus japonicus*) and the Small Japanese Field Mouse (*Apodemus argenteus*). Annales Zoologici Fennici 53: 81-90.
- 仲村得喜秀, 広瀬章裕 (1986) 宮城県のコウモリ. 東北の自然 17: 2-7.
- 中沢智恵子 (2010) 明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除. 野生生物保護 12: 19-38.
- 南部久男, 石川 創, 山田格 (2010) アジア系コククジラの記録―その分布と回遊―. 日本セトロジー研究 20: 21-29.
- Niga Y, Fujioka E, Heim O, Nomi A, Fukui D & Hiryu S (2023) A Glimpse into the Foraging and Movement Behaviour of *Nyctalus aviator*; a Complementary Study by Acoustic Recording and GPS Tracking. R Soc Open Sci 10: 230035.
- Ochiai K, Susaki K, Mochizuki T, Okasaka Y, Yamada Y (2010) Relationships Among Habitat Quality, Home Range Size, Reproductive Performance and Population Density: Comparison of Three Populations of the Japanese Serow (*Capricornis crispus*). Mammal Study 35: 265-276.
- 小川奈津子 (2017) 日本沿岸域におけるスナメリ *Neophocaena asiaeorientalis*の分布と個体数. 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科博士論文.
- 小川奈津子, 吉田英可, 赤木太, 勝俣浩, 酒井孝, 長谷川修平, 古田正美, 服部薫, 加藤秀弘 (2013) 飛行機目視調査によるスナメリの個体数推定(2)―仙台湾～東京湾, 伊勢湾・三河湾, 瀬戸内海―. 第29回日本霊長類学会・日本哺乳類学会2013年度合同大会講演要旨集 125 p.
- 大館智志 (1999) 食虫類をめぐるブラキストン線に関する問題 一主にトガリネズミ類を中心として一. 哺乳類科学 39: 329-336.
- Ohdachi SD, Ishibashi Y, Iwasa MA, Fukui D & Saitoh T. (eds.) (2015) The Wild Mammals of Japan (2nd ed). SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan, 506p.
- Park HC, Kurihara N, Kim KS, Min MS, Han S, Lee H, Kimura J (2019) What Is the Taxonomic Status of East Asian Otter Species Based on Molecular Evidence?: Focus on the Position of the Japanese Otter Holotype Specimen from Museum. Anim Cells Syst (Seoul) 23: 228-234.
- Popov I & Iurmanov A (2024) Recent surveys of the sea otter (*Enhydra lutris*) population on Kuril Islands. Pacific Cons Biol 30: PC24026.
- Ruedi M, Csorba G, Lin L-K & Chou C-H (2015) Molecular Phylogeny and Morphological Revision of *Myotis* Bats (Chiroptera: Vespertilionidae) from Taiwan and Adjacent China. Zootaxa 3920: 301–342.
- 相良直彦 (1998) きのこを手がかりとしたモグラ類の営巢生態の調査法. 哺乳類科学 38: 271-292.
- 相良直彦, 上田俊穂, 西田富士夫, 正井俊郎 (2008) 滋賀県朽木におけるミズラモグラの存在，とくに低標高の地における生息について. 哺乳類科学 24: 31-38.
- 佐々木浩 (2016) 日本のカワウソはなぜ絶滅したのか. 筑策女学園大学人間文化 研究所年報 27: 95-111.
- 佐藤顕義, 勝田節子 (2018) 日本産コウモリ類16種の食性. 森林野生動物研究会誌 43: 55-73.
- 佐藤顕義, 勝田節子, 山本輝正 (2008) 大井川水系および天竜川水系で確認したノレンコウモリ *Myotis nattereri* の出産哺育と周年動態. コウモリ通信 16: 2-9.
- 佐藤顕義, 高橋修, 秋葉保夫, 峰下耕, 佐々木玲子, 作山宗樹 (2017) 標識調査で明らかとなった東北地方におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis*の生存期間と長距離移動. 森林野生動物研究会誌 42: 37–44.
- 芝田史仁 (2000) ヤマネ. 川道武男, 近藤宣昭, 森田哲夫 (編)「冬眠する哺乳類」pp. 162–186. 東京大学出版会, 335p.
- Shiozuka N, Katano I, Kanzaki T, Kikuchi R, Sato N, Nakashita R, Kudo S, Ikeda H & Azuma N (2025) Isotopic Diet Analysis of the Japanese Water Shrew *Chimarrogae platycephala* to Estimate Their Feeding Habits and the Usefulness of Body Hair Samples. Mammal Study 48: 19-29.
- Shirakihara K, Nakahara F, Shinohara M, Shirakihara M, Hiramatsu K & Irie T (2019) Abundance Decline in the Narrow-ridged Finless Porpoise Population off the Pacific Coast of Eastern Japan. Popul Ecol 61: 325-332.
- 菅原伸一 (2015) ニホンオオカミはいつ絶滅したのか―宮城県の場合―. 仙台郷土研究 (復刊第40巻第2号, 第41巻第1号, 第2号 ) 仙台郷土研究会.
- 水産庁 水産研究・教育機構 (2023) 小型鯨類の漁業と資源調査 (総説). 令和4年度国際漁業資源の現況 No.48.
- 水産庁 水産研究・教育機構 (2023) スナメリ 日本周辺. 令和4年度国際漁業資源の現況 No.56.
- 水産庁 水産研究・教育機構 (2024) トド 北太平洋沿岸・オホーツク海・ベーリング海. 令和5年度国際漁業資源の現況 No.58.
- 水産庁 水産研究・教育機構 (2025) 小型鯨類の漁業と資源調査 (総説). 令和6年度国際漁業資源の現況 No.48.
- 水産庁 水産研究・教育機構 (2025) 大型鯨類 (総説). 令和6年度国際漁業資源の現況, No.47.
- 水産庁 (2025) 捕鯨をめぐる情勢. https://share.google/J9ZqNcY9GkWNTRpqD (最終確認 2025/12/01)
- Swartz SL, Taylor BS & Rugh ID (2006) Gray whale *Eschrichtius robustus* Population and Stock Identify. Mammal Rev 36: 66–84.
- Taguchi M, Ishikawa H & Matsuishi T (2010) Seasonal Distribution of Harbour Porpoise (*Phocoena phocoena*) in Japanese Waters Inferred from Stranding and Bycatch Records. Mammal Study 35: 133-138.
- 高橋修, 高橋雄一 (2012) 商人沼県自然環境保全地域候補地学術調査報告書.
- Takada H, Nakamura K, Minami M (2024) Diet Selection of a Solitary Forest-Dwelling Ungulate, the Japanese Serow (*Capricornis crispus*), in Cool Temperate Forest. Mammal Study 49:97–105.
- Takada H, Sato A & Katsuta S (2022) Food habits of Two Species of Tube-nosed Bats, *Murina hilgendorfi* and *Murina ussuriensis*, in Hayakawa, central Japan. Anim Biol 72: 1-13.
- Takada H, Tezuka N, Yano R, Washida A, Hasegawa T & Yamazaki K (2025) Competition between native ungulates: negative

effects of sika deer (*Cervus nippon*) on foraging behavior, physiological stress, and population characteristics of Japanese serow (*Capricornis crispus*). J Zool 326: 403-413.

- 高田隼人, 戸田美樹, 大西信正, 南正人 (2017) 山梨県早川町に生息するテングコウモリ (*Murina hilgendorfi*) の活動期におけるねぐら利用およびねぐらの特徴. 哺乳類科学 57: 69-75.
- Takada H, Washida A & Yamasaki S (2025) Ecological Drivers of Population Abundance of the Japanese Serow in the Absence of Predation Risk. Eur J Wildl Res 71: 60.
- 高橋修 (2019) コウモリ雑記帳 2)チチブコウモリ*Barbastella darjelingensis* (Hodgson, 1855). コウモリ通信 29: 9.
- 辻大和 (2023) 宮城県金華山島のニホンザル (*Macaca fuscata*) が採食する樹種の展葉・開花・結実フェノロジー. Primate Res 39: 5-12.
- 移川仁, 齊藤千映美, 溝田浩二 (2005) 青葉山市有林 (仙台市) の哺乳類相. 宮城教育大学環境教育研究紀要 8: 131-138.
- 山本輝正, 松本和馬 (2016) カグヤコウモリ (*Myotis frater*) オス个体群の21 年間にわたる个体群調査. 哺乳類科学 56: 135-144.
- Yasui S, Kamijo T, Misaka A, Shigeta M & Tsuyama I (2004) Day Roosts and Roost-site Selection of Ikonnikov's Whiskered bat, *Myotis ikonnikovi*, in Nikko, Japan. Mammal Study 29:155-151.
- 谷戸崇, 岡部晋也, 池田悠吾, 本川雅治 (2022) Illustrated Checklist of the Mammals of the Worldにおける日本産哺乳類の種分類の検討. タクサ：日本動物分類学会誌 53: 31-47.
- Yokohata Y (2005) A Brief Review of the Biology on Moles in Japan. Mammal Study 30: S25-S30.
- Yoshida H, Yoshioka M, Shirakihara M & Chow S (2001) Population Structure of Finless Porpoises (*Neophocaena Phocaenoides*) in Coastal Waters of Japan Based on Mitochondrial DNA Sequences. J Mammal 82: 123–130.
- 吉倉智子, 村田浩一, 三宅隆, 石原誠, 中川雄三, 上條隆志 (2009) ニホンウサギコウモリの出産保育コロニーの構造と繁殖特性. 哺乳類科学 49: 225-235.
- Yoshiyuki M (1989) A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. National Science Museum, 242p.
- Kruskop SV, Kawai K & Tiunov MP (2019) Taxonomic status of the barbastelles (Chiroptera: Vespertilionidae: *Barbastella*) from the Japanese archipelago and Kunashir Island. Zootaxa 4567:461-476.
- Johnstone JB (2025) Study on a recolonizing population of sea otters (*Enhydra lutris*) in eastern Hokkaido : feeding habits and the effects of a major environmental disturbance upon them. 北海道大学博士論文. https://doi.org/10.14943/doctoral.k16573.

## ニホンザル (金華山島のニホンザル)

*Macaca fuscata*

霊長目
オナガザル科

絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	
<div><span><span></span></span></div> 2016 LP	<div><span><span></span></span></div> 環境省 LP



（撮影：辻 大和）

- 選定理由**　6群およそ250頭の島嶼孤立個体群であり、生息地の深刻な森林の崩壊に直面している。1980年代より学術調査が行われ、本種に関わる貴重な知見が数多く生み出されている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況**　霊長目の中でも北限に分布する日本固有種。本州・四国・九州の広葉樹林に広く分布。宮城県内には基亜種 *M. f. fuscata* (ホンドザル) の南奥羽・飯豊南個体群が分布するが、本土側と石巻市の太平洋上に位置する金華山島との間で、個体の交流はほぼないと考えられる。
- 形態ならびに近似種との区別点**　背面は褐色で、夏毛のほうが色が濃い。本種のオスは頭胴長53-60cm、体重10-18kg。メスは頭胴長47-55cm、体重8-16kg。金華山島の集団は体格がやや小型でずんぐりとしている。
- 生育に対する脅威（減少の要因）**　金華山島にはニホンジカが高密度で生息している。草地拡大、森林更新の阻害、土壌崩落等の環境変化が進行し、森林の質が顕著に低下している。
- 保護保全上の留意点**　金華山島には農地がなく、本個体群は農作物に依存しない自然群であるため、被害防除を目的とする宮城県ニホンザル個体群管理計画の対象には含まれない。
- 主要文献番号**　3、23、32、47、48、62、91

（執筆：哺乳類分科会）

## ヤマネ

*Glirulus japonicus*

齧歯目
ヤマネ科

**準絶滅危惧（NT）**

2016 NT	環境省 -
---------	-------



（撮影：高橋 修）

- 選定理由**　1属1種の日本固有種。自然度の高い森林への依存度が高く、開発等により生息数が減少していると考えられる。1975年に国の天然記念物に指定された。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況**　本州・四国・九州の落葉樹林・混交林に生息する。樹上性が強く樹洞で出産・哺育する。冬季は樹洞や落ち葉の下、土中などで冬眠する。県内では自然度の高い発達した落葉広葉樹林・混交林内に生息する。山小屋や巣箱で休息・冬眠する姿が見られることもある。
- 形態ならびに近似種との区別点**　頭胴長68-84mm、尾長44-54mm、体重14-20g(夏期)、34-40g(冬期)。背面は淡褐色で、背中に黒褐色の正中線が入る。
- 生育に対する脅威（減少の要因）**　森林の縮小、質の低下。
- 主要文献番号**　3、32、48、51、53、62、72

（執筆：哺乳類分科会）

## カヤネズミ

*Micromys minutus*

齧歯目
ネズミ科

**要注目種**

2016 要注目種	環境省 -
-----------	-------



（撮影：高橋 修）

- 選定理由**　宮城県は本種の国内北限に当たる。散発的に確認されるものの、個体群としての動向は不明であり、今後の推移が注目される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況**　ヨーロッパ・シベリア・朝鮮半島から日本。国内では宮城県以南の本州から九州にかけて分布。県南部から石巻市にかけて、平野部の河川敷や休耕田等、オギ・ススキ・ヨシ等の高茎草本類が優先する水辺の草地(カヤ原)でまれに確認される。
- 形態ならびに近似種との区別点**　背面はややオレンジがかった褐色、腹面は白色。頭胴長50-80mm、尾長61-83mm、体重7-14gの、日本で一番小さなネズミである。ハツカネズミ、ヒメネズミより背面の毛色は明るく尾の先端が一部無毛。切歯後方には切歯込みがない。
- 生育に対する脅威（減少の要因）**　草地環境の喪失、分断、攪乱。
- 主要文献番号**　3、15、17、29、32、62

（執筆：哺乳類分科会）

カテゴリー	絶滅 (EX)	野生絶滅 (EW)	絶滅危惧I類 (CR+EN)	絶滅危惧II類 (CR)	絶滅危惧III類 (EN)	絶滅危惧II類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)	絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	要注目種
-------	---------	-----------	----------------	--------------	---------------	--------------	------------	-----------	---------------------	------

## カワネズミ

*Chimarrogale platycephalus*

真無盲腸目  
トガリネズミ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- 選定理由** 日本固有種。渓流域に生息するが、生息好適地は限られており、環境の質の低下の影響、個体数の減少が懸念される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州の山地溪流付近に生息する。県内では主要河川の渓流域でまれに目撃、あるいは捕獲される。森林内の岩や倒木などが点々と存在する河床環境を好み、溪流の水生昆虫を主要な食物とするほか、魚類、小型無脊椎動物を採食する。
- 形態ならびに近似種との区別点** 頭胴長111-141mm、尾長82-117mm、体重25-63g。背面は黒っぽい褐色で冬毛はやや白っぽい。腹面は淡褐色。尾は長く下面に長い毛が生える。指の間に扁平な剛毛が生え、水かきの役割を果たしている。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小や質の低下、溪流環境の改変など。
- 主要文献番号** 1、2、3、29、32、62、73



(撮影：高橋 修)

(執筆：哺乳類分科会)

## シントウトガリネズミ

*Sorex shinto*

真無盲腸目  
トガリネズミ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- 選定理由** 日本固有種である。県内では自然度の高い奥羽山地の林内で捕獲されるのみである。生態や分布に不明な点が多い。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 四国・本州(京都府以北)の山地に生息。森林の地表面～腐植層で生活し、昆虫類や土壤動物を採食する。県内では奥羽山地の森林内でまれに採集される。
- 形態ならびに近似種との区別点** 宮城県に生息するのは基亜種*S. s. shinto*(ホンシュウトガリネズミ)とされる。頭胴長52-78mm、尾長40-55mm、体重3.9-13.5g。背面は褐色で、冬毛は色が濃い。モグラ科ヒメヒミズ(頭胴長70-84mm)は、背面は黒褐色で、吻が長毛で覆われていない。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。
- 主要文献番号** 3、32、48、61、62



(撮影：高橋 修)

(執筆：哺乳類分科会)

## ミズラモグラ

*Oreoscaptor mizura*

真無盲腸目  
モグラ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- 選定理由** 日本固有種。分布や生態についてよく知られていない。県内の確認事例は非常に少ない。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州(青森県～広島県)に分布。森林内の地中に巣を作り、土壤動物を採食する。排泄所跡からナガエノスギタケが生えることが知られている。川崎町の森林内、仙台市青葉区青葉山で発見されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 小型のモグラで、毛色は灰褐色～黒色。頭胴長80-106.5mm、後足長13.5-15.4mm、尾長20-26mm、体重26-35.5g。県内に生息するアズマモグラ(頭胴長121-159mm)より小型であり、下顎切歯は3本(アズマモグラは2本)。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 森林面積の縮小、質の低下。
- 主要文献番号** 3、16、32、33、48、50、62、66、67、96



(撮影：秋葉 保夫)

(執筆：哺乳類分科会)

## テングコウモリ

*Murina hilgendorfi*

翼手目  
ヒナコウモリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- 選定理由** 日本固有種。単独で観察されることが多く、個体数は多くないと考えられる。森林棲であり生息環境は限られている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道・本州・四国・九州の森林に生息する。日中はねぐら(樹洞、洞穴、葉の裏など)で休息する。洞穴では通常1個体(多くて数個体)で発見される。県内でも偶発的に確認される。生活史はよく知られていない。
- 形態ならびに近似種との区別点** 前腕長41-46mm、頭胴長59-73mm、体重9-15g。灰褐色の体毛には先端が銀色の金属光沢を帯びた刺毛がまじる。管状の鼻孔は外側前方に突出。近縁種コテングコウモリは前腕長29-33cmと小柄で、体色も薄茶～明るい茶色である。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。
- 主要文献番号** 3、19、32、39、40、62、86、88、99



(撮影：高橋 修)

(執筆：哺乳類分科会)

## ノレンコウモリ

*Myotis bombinus*

翼手目  
ヒナコウモリ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 なし	環境省 VU
------------	-----------

- 選定理由** 宮城県では2014年に初確認されたが、確認箇所は2地点のみ。国内の分布に関する情報は少ない。森林棲・洞穴性で、生息適地は極めて限定的であると考えられる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北東アジア地域に分布。国内では北海道、本州、四国、九州で確認されているが、確認地点は少数である。洞穴性で、夏季に出産保育集団を形成する。県内では2014年と2023年に鳴瀬川流域の横穴で、2023年には栗原市花山峠の林内で確認された。繁殖の有無などは不明。
- 形態ならびに近似種との区別点** 前腕長38-42mm、頭胴長47-53mm、体重5-10g。腿間膜の後縁に細毛が列生している。近年までヨーロッパに広く分布する*M. natteri*の亜種*M. n. bombinus*(和名ホンドノレンコウモリ)とされていた。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小や質の低下、洞穴環境の改変など。
- 主要文献番号** 11、13、24、32、35、39、40、62、69、70、99



(撮影：高橋 修)

(執筆：哺乳類分科会)

## カグヤコウモリ

*Myotis longicaudatus*

翼手目  
ヒナコウモリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- 選定理由** 森林棲である。宮城県での確認例は非常にまれである。繁殖集団も確認されておらず、生息個体数は少数と推測される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本・中国・朝鮮半島・ロシアに分布する本種は、国内では北海道、本州の自然林に生息。主に樹洞をねぐらとする。本州では繁殖期に最大数十頭の集団が確認されている。県内では奥羽山系の森林内で記録されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 前腕長36-41mm、頭胴長44-56mm、体重5.5-11.0g。体毛はこげ茶色。同属他種とは、下腿長が18mm以上あることなどから区別できる。なお、本種は日本では始め*M. kaguyae*として記載された後、大陸に広く分布する*M. frater*の一亜種とされてきた。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。
- 主要文献番号** 3、32、39、40、62、65、93、95、99



(撮影：高橋 修)

(執筆：哺乳類分科会)

## ヒメホオヒゲコウモリ

*Myotis ikonnikovi*翼手目  
ヒナコウモリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
-

■**選定理由** 県内では標高の高い森林内でまれに確認される。樹皮の下をねぐらにする樹洞性コウモリであり生息環境に限られる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 東アジアに分布。国内では北海道～本州に生息する。近縁のクロホオヒゲコウモリより標高の高い自然林内で、立木のめくれた樹皮の下、洞穴や石の隙間で単独または小集団で休む姿が確認される。県内では奥羽山系の落葉広葉樹林(主にブナ林)で見つかっている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 前腕長33-36mm、頭胴長42-51mm、体重4-7g。体毛は黒褐色で、背面の上毛先端は目立たない程度だが金色の金属光沢色を帯びる。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。

■**主要文献番号** 3、10、32、39、40、62、69、94、99

(執筆：哺乳類分科会)



(撮影：高橋 修)

## クロホオヒゲコウモリ

*Myotis pruinus*翼手目  
ヒナコウモリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
CR+EN環境省  
VU

■**選定理由** 日本固有種。自然度の高い森林内に生息し樹洞や廃坑をねぐらとするなど生息環境に限られ、県内の生息個体は少数であると考えられる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州・四国・九州の、比較的標高の低い広葉樹林、混交林で生息が確認されている。県内では加美町・色麻町・大崎市のブナ林でごくまれに確認される。本種の生態についての知見は極めて限られている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 前腕長30-34mm、頭胴長38-44mm、体重4-7g。体毛は黒色で、背面に先端が銀白色の刺毛が入る。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。

■**主要文献番号** 3、7、32、39、40、49、62、99

(執筆：哺乳類分科会)



(撮影：高橋 修)

## ヤマコウモリ

*Nyctalus aviator*翼手目  
ヒナコウモリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU環境省  
VU

■**選定理由** 森林棲であり、ねぐらとして大径木の樹洞を利用するため森林環境の変化の影響を受けやすい。県内での確認事例は少なく、その生息状況や生態に関わる知見が少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本、朝鮮半島、中国東部に分布。国内では北海道から本州・四国・九州の社寺林・公園・自然林で確認される。時速20km以上の速度で飛行し、高度300mで採餌する記録が得られている。捕獲が困難で生息に関わる情報が少ない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 日本の昆虫食コウモリ類の中では最も大型。前腕長57-66mm、頭胴長89-113mm、体重35-60g。光沢のある褐色系の体毛。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。

■**保護保全上の留意点** 風力発電施設に設置された風車との衝突リスクが高い種の一つである。

■**主要文献番号** 3、32、39、40、57、62、69、99

(執筆：哺乳類分科会)



(撮影：高橋 修)

## モリアブラコウモリ

*Pipistrellus endoi*翼手目  
ヒナコウモリ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN環境省  
VU

■**選定理由** 日本固有種。生息地は断片的であり、減少傾向にあるとされる。生態や生活史はよく知られていない。宮城県では本種の越冬が観察されており、生息地域として保全上の重要性が高いと考えられる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州・四国で確認されているが例数が少なく知見は限られている。自然度の高い天然林に生息し、ブナ・スギの樹洞等をねぐらにする。東松島市宮戸島では、本種では稀な越冬中の個体が観察されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 前腕長32-34mm、頭胴長43-53mm、体重5-9g。体毛は背面が橙褐色、腹面が黄褐色、飛膜が黒褐色。近縁のアブラコウモリは体色が灰褐色で、犬歯がより細く、陰茎骨がS字に屈曲。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。

■**保護保全上の留意点** 風力発電施設に設置された風車との衝突リスクが高い種の一つである。

■**主要文献番号** 3、32、34、39、40、62、99

(執筆：哺乳類分科会)



(撮影：高橋 修)

## チチブコウモリ

*Barbastella pacifica*翼手目  
ヒナコウモリ科

情報不足 (DD)

2016  
DD環境省  
LP

■**選定理由** 本州以南の個体数は少ないとされ、本県でもほとんど確認されていない。分布や生態に関する知見が限られ情報が不十分である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、国後島に分布するが、国内では北海道を除くと確認事例は極めて少ない。県内では2001年と2008年に東松島市宮戸島で同じ個体の越冬が確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 前腕長39-44mm、頭胴長50-63mm、体重8-12g。体毛は褐色。長い耳介を持つ。耳介(～20mm)はニホンウサギコウモリより短く、体色(背面)が濃い。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。

■**主要文献番号** 3、32、39、40、62、90、99、100

(執筆：哺乳類分科会)



(撮影：高橋 修)

## ニホンウサギコウモリ

*Plecotus sacrimontis*翼手目  
ヒナコウモリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
VU環境省  
-

■**選定理由** 樹洞等をねぐらとする森林棲のコウモリ。県内で繁殖集団は確認されておらず、個体数は限られていると考えられる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州、千島列島の山地に分布。樹洞や洞穴、人家等をねぐらとし、出産・哺育期には集団を形成する。近年、生息確認地点は増えており、宮城県内でも隧道内等で観察されているが、繁殖集団は見つかっていない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 前腕長40-45mm、頭胴長42-58mm、体重5-13g。薄茶～灰褐色の体毛。耳介(38-40mm)はチチブコウモリより長い。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の縮小、質の低下。

■**主要文献番号** 3、32、39、40、62、98、99

(執筆：哺乳類分科会)



(撮影：高橋 修)

## ヒナコウモリ（東松島市のヒナコウモリ）

*Vespertilio sinensis*

翼手目  
ヒナコウモリ科

絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)

2016  
VU

環境省  
-

■**選定理由** 国内最北の大規模越冬集団。県境を超えて長距離移動し当地の洞穴で越冬することから、本集団の保全上の重要性は高い。なお東日本大震災によって最大規模のねぐらとなっていた洞穴が崩落し、集団の地域内分散が確認されている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** シベリア～中国・日本の広い範囲に分布する洞穴性コウモリ。海蝕洞、新幹線の橋脚などを哺育場所として利用することもある。東松島市宮戸島の越冬集団からは、京都府・青森県に移動する個体が観察されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 前腕長47-54mm、頭胴長78-80mm、体重14-30g。黒褐色の体毛には白っぽい毛がまじる。

■**生育に対する脅威（減少の要因）** 森林の縮小や質の低下、洞穴環境の改変など。

■**保護保全上の留意点** 東日本大震災で東松島市宮戸島のコロニーの多くが損壊した。風力発電施設の風車への衝突が多い種でもある。

■**主要文献番号** 3、26、32、39、40、62、71、99

（執筆：哺乳類分科会）



（撮影：高橋 修）

## オオカミ（亜種ニホンオオカミ）

*Canis lupus (C. l. hodophilax)*

食肉目  
イヌ科

絶滅 (EX)

2016  
EX

環境省  
EX

■**選定理由** 亜種ニホンオオカミはかつて本州以南に広く分布したが、20世紀初頭に絶滅したと考えられている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 亜種ニホンオオカミは、最終氷期が終わるより以前、朝鮮半島を経由して渡来し、本州・四国・九州に広く分布した。標本の残る最後の生息情報は1905年に奈良県で得られている。宮城県では明治10-13年にかけて捕獲手当金制度が設けられ、この頃ほぼ全滅したと考えられている。旧黒川郡における1880年（明治13年）の捕獲届（狼児4頭）が最後の公式な記録であるが、その後の生息を示唆する記録も残っており、県内における正確な絶滅の時期は不明。

■**形態ならびに近似種との区別点** 頭胴長95～114cm、尾長30cm。北半球に広く分布するオオカミの亜種である。別亜種にエゾオオカミ（絶滅）。イヌとの違いは、吻部のくぼみが浅く、裂肉歯が大きいなど。

■**生育に対する脅威（減少の要因）** 駆除、家畜伝染病の蔓延、生息地の開発などの要因により絶滅したと考えられている。

■**主要文献番号** 3、20、32、42、55、62、75

（執筆：哺乳類分科会）



（収蔵：国立科学博物館）

## トド

*Eumetopias jubatus*

食肉目  
アシカ科

情報不足 (DD)

2016  
評価対象外

環境省  
NT

■**選定理由** 北海道・青森県では漁業被害対策のため個体数管理の対象とされているが、本州以南ではまれに確認されるのみ。宮城県では2021年に生体が確認された。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北太平洋に分布する本種のうちアジアの集団が、サハリン・千島列島で繁殖し、11月から6月にかけて北海道に回遊。本州以南では日本海側でまれに目撃される。2021年1月、南三陸町歌津葦の浜漁港近くの岩場にトド1頭が現れ、体を休める姿が撮影された。

■**形態ならびに近似種との区別点** アシカ科最大の種。体重はメスが240-350kg、オスが450-1,120kg。背面・腹面は褐色の毛で覆われ、四肢（ひれ）には体毛が生えていない。

■**生育に対する脅威（減少の要因）** 海洋環境の攪乱と質の低下、漁業との共存。

■**主要文献番号** 6、32、38、62、78

（執筆：哺乳類分科会）



（撮影：水産研究・教育機構 服部 薫〔撮影地：北海道宗谷岬周辺〕）

## ラッコ

*Enhydra lutris*

食肉目  
イタチ科

情報不足 (DD)

2016  
評価対象外

環境省  
CR

■**選定理由** 絶滅危惧種である。国内では北海道東部沿岸で観察されている。2008年、2016年に県内で生体が確認された。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北米～ロシア東部沿岸に生息し、日本では北海道東部沿岸で観察される。毛皮目的の乱獲により20世紀初頭には種絶滅の危機に陥り日本でも見られなくなったが、北海道では近年、再び目撃されるようになってきている。宮城県では2008年～2016年頃にかけて、女川町江島列島で単独個体が観察された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体重は14-45kg、体長は通常100-130cm。体毛密度が高く褐色－黒色の毛で覆われている。

■**生育に対する脅威（減少の要因）** 海洋環境の攪乱と質の低下、漁業との共存。

■**主要文献番号** 8、9、18、32、62、64、101

（執筆：哺乳類分科会）



（撮影：佐藤 賢二）

## ニホンカワウソ

*Lutra nippon*

食肉目  
イタチ科

絶滅 (EX)

2016  
EX

環境省  
EX

■**選定理由** 1975年の保護（愛媛県宇和島市）、1979年の目撃（高知県新荘川）が最後の記録であり、2012年に絶滅種に指定された。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** かつては全国の、河川の中・下流域～沿岸部に生息した。狩猟が禁止される以前の1927年までの狩猟統計においては宮城県での捕獲が記録されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 頭胴長70cm、尾長46cm。他のイタチ科動物からは、全長1mを越える体格、水かき・円錐型の尾を持つことなどから区別可能。なおニホンカワウソを大陸に分布するカワウソ*Lutra lutra*の亜種と見做す考え方もある。

■**生育に対する脅威（減少の要因）** 毛皮目的の乱獲、漁業者による駆除、各種開発による生息環境悪化により絶滅。

■**主要文献番号** 3、4、32、62、63、68

（執筆：哺乳類分科会）



（撮影：高橋 修）

## オコジョ（亜種ホンドオコジョ）

*Mustela erminea (M. e. nippon)*

食肉目  
イタチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
NT

■**選定理由** 生息適地が山岳帯に限定され、個体群の分布の分断が懸念されている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** ユーラシア大陸北部・北アメリカ大陸北部に広く分布。国内では本州中部以北の山岳地帯に生息する。県内では刈田岳、仙台神室、船形山など、山頂付近の岩場等で登山者に目撃されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 夏毛は背面が濃い褐色、腹面が白色。冬毛は全身が白色。頭胴長はオス18cm、メス16cmと、イタチより小型。比較的大きさの近い近縁種イイズナは宮城県では確認されていない。

■**生育に対する脅威（減少の要因）** 生息環境の分断や縮小、質の低下。

■**主要文献番号** 3、32、36、62

（執筆：哺乳類分科会）



（撮影：降幡 賢太郎）

## ニホンカモシカ

*Capricornis crispus*

- 選定理由** 固有種であり、日本の特別天然記念物に指定されている。宮城県では「南奥羽山系カモシカ保護地域」の一部として保護管理が行われる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州・四国・九州に分布する固有種。低山〜高山の、落葉広葉樹林や混交林に生息し、特に若齢人工林で林業被害を起こす。県内では山地から丘陵地の二次林まで比較的低密度で分布する。森林棲であるが、春季に行動圏が拡大し、林縁部でしばしば目撃される。
- 形態ならびに近似種との区別点** 四肢は太く、ずんぐりとした体型。全身が灰白色〜灰褐色の毛に覆われる。両性ともに加齢とともに伸長する角を持つ。頭胴長70-85cm、肩高70-75cm、体重30-45kg。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 森林の分断や縮小、質の低下。
- 保護保全上の留意点** 近年、ニホンジカの分布域拡大に伴う競合の影響が懸念されている。
- 主要文献番号** 3、32、37、58、62、85、87、89

(執筆：哺乳類分科会)



(撮影：早坂 徹)

偶蹄目  
ウシ科

要注目種	
2016 要注目種	環境省 -

## コククジラ

*Eschrichtius robustus*

- 選定理由** 日本列島に現れる本種の西系(アジア系)群は個体数減により絶滅が危惧されている。県内でも20世紀には姿を消していたが、2005年に生体が再確認された。今後の推移・情報の蓄積を見守る必要がある。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** かつて北半球に広く分布し捕鯨された。北大西洋では18世紀に絶滅し、北太平洋の分布は現在、東系・西系の個体群に区別されている。西系群は夏季にオホーツク海で採餌し冬季に中国沿岸へ南下し繁殖する。日本沿海には真夏を除き出現。西系群の個体数は2023年に推定222頭。2005年に親子と考えられる2頭が女川町江島の定置網で混獲された(右写真)。子クジラの骨格標本は現在おしかホエールランド(石巻市)に展示されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 小型のヒゲクジラで、体長は12-15m。背鰭はない。両側にそれぞれ140-180枚程度の鬃板を持つ。特徴的な体表の灰白色の模様は、付着した貝類やクジラジラミの脱落痕である。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 海洋環境の攪乱と質の低下、混獲など。
- 保護保全上の留意点** 2系群間の交流の可能性も指摘されている。
- 主要文献番号** 3、5、22、25、31、32、52、56、62、82

(執筆：哺乳類分科会)

情報不足 (DD)		
鯨目 コククジラ科	2016 評価対象外	環境省 評価対象外



(著者の許可を得てKato et al. 2006から転載)

## コビレゴンドウ(タッパナガ)

*Globicephala macrorhynchus*

- 選定理由** タッパナガ(コビレゴンドウの北方型)は限られた分布域に生息。宮城県を中心とする捕鯨が行われてきた。現在は捕獲規制が行われており、今後も適切な個体群管理が求められる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** ハクジラ的一种であるコビレゴンドウは熱帯から暖温帯に分布し、日本では北方型のタッパナガ、南方型のマゴンドウの2つの地域系群が見られる。タッパナガは三陸から道南沖の限られた範囲で主に夏季に確認され、推定個体数は2431-3602頭(2006年)。県内では2002年にタッパナガの混獲が1例記録されている。また基地式捕鯨により2019年に6頭が捕獲された。
- 形態ならびに近似種との区別点** 体色は黒から暗灰色。タッパナガ(体長5-7m)は南方型のマゴンドウと比べて30%ほど大きく、背鰭の後ろの鞍型の白斑が明瞭である。日本近海においては、海洋表面水温24度(夏季)、17-19度(冬季)が2系群の分布境界である。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 2019年を除き近年は捕獲されていないが、捕獲枠(36頭、2025年)が設定されている。海洋環境の攪乱と質の低下、混獲など。
- 主要文献番号** 3、21、25、27、28、30、31、32、62、76、79、81

(執筆：哺乳類分科会)

絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)		
鯨目 マイルカ科	2016 評価対象外	環境省 評価対象外



(提供：一般財団法人 日本鯨類研究所 [撮影地：北太平洋])

## スナメリ(仙台湾ー東京湾系群)

*Neophocaena asiaeorientalis*

- 選定理由** 宮城県は本種の分布北限にあたる。また地域個体群(仙台湾ー東京湾系群)の推定個体群サイズは1491頭(2012年)と少ない。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本、中国、台湾、韓国。日本では地理的・遺伝的に不連続な5つの個体群が見られる。水深50m以浅に生息し、県内ではストランディング、混獲、目撃が報告されている。妊娠個体や幼体が漂着していることから、宮城県沿岸で繁殖していると考えられる。
- 形態ならびに近似種との区別点** 体重2m程度の、比較的ほっそりとした姿をした小型のイルカ(ハクジラ)であり、吻部はほとんど突出せず、幅広く丸みを帯びている。背びれはほぼない。成体は灰色。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 海洋環境の攪乱と質の低下、混獲など。
- 主要文献番号** 3、14、25、30、31、32、59、60、62、74、77、97

(執筆：哺乳類分科会)

鯨目  
ネズミイルカ科

絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	
2016 評価対象外	環境省 評価対象外



(提供：うみの杜水族館)

## ネズミイルカ

*Phocoena phocoena*

- 選定理由** 本種に関する知見は少なく、県内の分布状況は明らかではない。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は北半球の寒冷地域の海域沿岸や河口部で生活する。うち太平洋沿岸の亜種*P. p. vomerina*が日本の主に北海道に生息し冬季に本州沿海に南下すると考えられているが、未知の点が多い。宮城県では2006年に気仙沼市の海岸で漂着が確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 体長最大1.7m程度と、小型のイルカ(ハクジラ)である。背びれは三角形で低い。背部は黒っぽい灰色で、腹部側は淡色である。
- 生育に対する脅威(減少の要因)** 海洋環境の攪乱と質の低下、混獲など。
- 主要文献番号** 25、31、32、41、62、83

(執筆：哺乳類分科会)

情報不足 (DD)		
鯨目 ネズミイルカ科	2016 評価対象外	環境省 評価対象外



(提供：ストランディングネットワーク北海道 [撮影地：北海道函館市、SNH23020])

動物編

# 鳥類



# 鳥類

宮城県は高山から平野、砂浜海岸や島嶼まで様々な地形があり、それらに海域を加え、それぞれの環境に適応した多くの鳥類が生息している。蔵王連峰頂上部の高山荒原ではイワヒバリ、ハイマツ帯ではホシガラスなどがみられ、亜高山帯となる蔵王のアオモリトドマツ帯や船形・栗駒の落葉低木林にはコマドリ、ルリビタキなどがみられる。山地帯となるブナ・ミズナラ帯から丘陵地帯となるクリ・コナラ帯では留鳥のクマタカ、ハイタカ、オオタカのほかハチクマ、ツミ、ハリオアマツバメなどの夏鳥や多くの鳥種がみられる。仙北平野地帯の湖沼群はガン類やクイナ類の重要な渡来地となっており、仙台平野の沿岸湖沼群では低湿地や汽水湖があり、干潟ではシギ類やチドリ類がみられる。南三陸海岸と仙台湾はコクガンの集団越冬地南限となっており、女川湾沖の江島列島の足島はウミツバメ類が渡来し、ウトウの繁殖地南限となっている。

近年、日本に生息する多くの鳥種の個体数が減少しているといわれている。宮城県でも丘陵地の住宅地開発や大規模圃場整備や道路の建設、水路の整備さらに風力発電や太陽光発電事業による大規模な造成により鳥類の生息環境は悪化している。また、県内の平野部では耕作地を含め湖沼など鳥類の生息適地となる多様な環境が存在するが、ひとつひとつの面積に限りのある環境が不連続に接していることが多く、そこに生息する鳥類の個体数は多くない。そのような場所では環境の変化により、容易に絶滅の危険にさらされる種が多い。

## 1. 掲載種の検討

鳥類の多くは季節によって移動する。夏鳥、冬鳥、旅鳥といわれる渡り鳥は、国内にとどまらず、南は東南アジアからオセアニア、北はシベリアから北極海沿岸までを広く生息範囲としている。改訂レッドデータブック掲載種検討にあたって、行動範囲の広い鳥類を宮城県という狭い地域だけのデータだけで選定することは難しい。そこで、国内および周辺の地域の生息状況から掲載を判断している環境省レッドリスト2020を参考にした。

今回の掲載検討にあたって、以下のように考えた。

- ・検討は種を単位に検討したが、異なる生態を持つ亜種が生息する種については亜種単位で検討した。
- ・生息範囲は、県内の陸地はもとより海上については領海内とした。
- ・県内において継続的に繁殖あるいは越冬している種、春や秋の移動の時期に生息する種のうち、生息数が減少してしまった種や現在も減少傾向のある種とした。
- ・本来の移動のルートや分布域から外れて宮城県内へ一時的に渡来するいわゆる迷鳥は対象から除いた。
- ・天然記念物や種の保存法など希少種の指定のある種また、環境省レッドデータブック掲載種でも県内での継続した生息個体数が多い場合や分布を拡大している場合はこれを除いた。

宮城県内で1994年以前に記録された鳥類は372種であったが、その後記録が増え、2024年までに記録された種は424種となった。記録種が増加したのは、観察者が増え、迷行種を効果的に拾い上げられるようになったためである。この記録から比較的継続して生息していると考えられる種は305種であり、この中から掲載種を検討した。

掲載検討を行った結果、13目23科66種(64種+2亜種)を掲載種として再選定した。その内訳は以下の通りであり、表1にカテゴリーと共に示した。

今回の見直しで新たに加わった種はイカルチドリ(VU)、オオソリハシシギ(NT)、オグロシギ(NT)、ハマシギ(NT)、ツルシギ(NT)、コシジロウミツバメ(要注目種)、ゴイサギ(NT)、コサギ(NT)、トラフズク(NT)、コシアカツバメ(CR+EN)、コヨシキリ(NT)、カワガラス(NT)の12種である。一方、除外した種はズグロカモメ、ヒメウ、ハヤブサ、サンショウクイの4種である。また、RDB2016では種ヒシクイとして掲載していたが、今回、亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイとで別々に掲載したため1種増えたこととなり、RDB2026では66種を掲載種として選定した。

沿岸地域では東日本大震災による復旧工事により防災堤防が設置され、その後背地には盛土造成を行った後、クロマツを主体とした植林が行われた。前回の改訂においてはこれらの工事が進められている最中であっ

たため、海岸線を生息地としている鳥類について新たな評価は行わなかった。今回、復旧工事が終了したため海岸に生息する鳥類の評価を行い、主に沿岸地域を生息域としているオオソリハシシギ、オグロシギ、ハマシギ、ツルシギが新たに加わった。コシアカツバメは2010年頃まで繁殖生息していたが、その後観察できなくなった。これは分布が北日本から後退したためと考え、これまでの県内の生息は一時的な北上による分布拡大と判断して2016年の改訂では掲載種から外した。その後、日本海側の繁殖北限である秋田県では継続して繁殖していることがわかり、本県においても後退ではなく減少だったと考えられることと、2021年に利府町でも繁殖が再確認されたが、生息地が限定的でごく少数であること繁殖地の増加が見られないことから絶滅危惧Ⅰ類とした。イカルチドリ、ゴイサギ、コサギ、コヨシキリ、カワガラスは生息環境の悪化による分布の縮小や個体数が減少しており、2020年代でもその傾向が続いていることが根拠である。

## 2. カテゴリー見直しの結果

次にカテゴリー区分については、県内の生息分布や個体数の変化などから適用した。従って環境省カテゴリーと異なる種もあった。また絶滅の定義に関して、国内の鳥類では一般に50年間観察記録されない時に絶滅が宣言されるが、宮城県内という狭い地域では30年間記録がない場合に絶滅とすることにした。以下にRDB2016からの見直しの結果を述べる。

カテゴリーを検討した結果、26種で変更があった。このうち絶滅のおそれがある種(絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)と絶滅危惧Ⅱ類(VU)に関連する種)についてカテゴリーが上位に引き上がったのは、クロコシジロウミツバメ(VU→CR+EN)、ヘラシギ(VU→CR+EN)、ウトウ(VU→CR+EN)、イワヒバリ(要注目種→CR+EN)である。いずれも生息個体数が危機的な状況となった。特にイワヒバリは蔵王の馬の背だけに生息し、推定される生息個体数は10羽程度である。ウトウは繁殖個体数の激減傾向が継続している。クロコシジロウミツバメは繁殖期に岩手県の日出島、三貫島、船越大島の3島の上に飛来しているがオオミズナギドリとの生息競合により生息数が激減している。近年女川町足島で極少数の繁殖兆候が確認されたことから今回のカテゴリーを上位に引き上げた。

絶滅危惧Ⅱ種(VU)にカテゴリーを上げたのは亜種ヒシクイ(NT→VU)、カリガネ(NT→VU)、ミゾゴイ(NT→VU)、ヨタカ(NT→VU)、オオジシギ(NT→VU)、ケイマフリ(要注目種→VU)、ハチクマ(NT→VU)である。いずれも個体数の減少が顕著な種である。

一方カテゴリーを引き下げたのがクマタカ(CR+EN→VU)で、調査が進んだことにより、以前考えられていたよりも分布が広く、個体数も多いことが明らかになったので見直した。またシジュウカラガン(VU→NT)の個体数も増加しているのでカテゴリーを引き下げた。

前回の改訂時に要注目種として16種を掲載していたが、今回これを生息分布や個体数を評価し適切なカテゴリーへ見直した。その結果、要注目種はハクガンとコシジロウミツバメの2種とした。コシジロウミツバメは女川町足島で繁殖が確認され、国内での繁殖地南限である。両種とも個体数の増加傾向がみられるが、もともと生息個体数が少なく、生息地も限定されていることから要注目種とした。

鳥類は広域を移動する種が多いので、分布や個体数の変動傾向は長期間にわたって観察しその結果を評価しなければならない。鳥類にとって生息環境は悪化しており、多くの種で個体数の減少傾向は今後も続くと言想されるが、現時点での知見からカテゴリーの見直しを行った。

表1 宮城県で記録された鳥類の目別科数及び種数とRDB掲載種

目名	科数	種数	RDB掲載種						
			EX	CR+EN	VU	NT	DD	LP	注目
カモ目	1	50			3	2		1	1
キジ目	1	3		1					
ヨタカ目	1	1			1				
アマツバメ目	1	3				1			
カクコウ目	1	5							
サケイ目	1	1							
ハト目	1	2							
ツル目	2	15		1		1	2		
カイツブリ目	1	5							
チドリ目	10	105		2	4	8			
アビ目	1	4							
ミズナギドリ目	4	19		1	1	1			1
コウノトリ目	2	2							
カツオドリ目	3	7							
ペリカン目	2	18		1	1	5			
タカ目	2	20		1	5	3	1		
フクロウ目	1	6			1	3	1		
サイチョウ目	1	1							
ブッポウソウ目	2	5				2			
キツツキ目	1	5							
ハヤブサ目	1	6				1			
スズメ目	35	142		4	2	3			
合計22目	75科	425種		11種	18種	30種	4種	1種	2種

\*分類及び種名は日本鳥学会編集「日本鳥類目録 改訂第8版」(日本鳥学会、2024)による

【鳥類分科会名簿】

氏名	所属等
竹丸 勝朗	日本野鳥の会宮城県支部
小室 智幸	日本野鳥の会宮城県支部
三浦 隆	日本野鳥の会宮城県支部
加藤 敬一	日本野鳥の会宮城県支部
瓜生 篤	日本野鳥の会宮城県支部
山田 洋治郎	日本野鳥の会宮城県支部
工藤 芳郎	日本野鳥の会宮城県支部
嶋 孝弘	日本野鳥の会宮城県支部
千葉 孝行	日本野鳥の会宮城県支部
本田 敏夫	日本野鳥の会宮城県支部
佐藤 賢二	日本野鳥の会宮城県支部
村上 良真	日本野鳥の会宮城県支部
高橋 和也	日本野鳥の会宮城県支部

参考文献

- 植田睦之・植村慎吾, 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 鳥類繁殖分布調査会.
- 植田睦之・奴賀俊光・山崎優佑, 2023. 全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022年,バードリサーチ・日本野鳥の会.
- 大八木昭, 1973. オオセッカの繁殖を確認, 野鳥, Vol.38, No.1, 日本野鳥の会.
- 奥山正樹, 2019. 知られざる日本の渡り鳥、ウズラ, 私たちの自然 No.624, 日本鳥類保護連盟.
- 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄, 1998. 山溪ハンディ図鑑7日本の野鳥, 山と溪谷社.
- 環境庁, 1978. 鳥類繁殖地図調査報告書.
- 環境庁, 1988. 動植物分布調査報告書(鳥類).
- 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- (脊椎動物編), 自然環境研究センター.
- 環境庁, 1998. レッドデータ見なおしリスト.
- 環境省, 2004. 鳥類繁殖分布調査報告書.
- 環境省, 2020. 【鳥類】環境省レッドリスト2020.
- 環境省自然環境局 生物多様性センター, 2015. モニタリングサイト1000 シギチドリ類調査業務 第2期とりまとめ 報告書.
- 環境省自然環境局 生物多様性センター, 2021. モニタリングサイト1000 小島嶼(海鳥)調査 2004-2018年度とりまとめ報告書.
- 環境省東北地方環境事務所, 2019. 平成30年度国指定仙台海浜鳥獣保護区自然環境調査報告書.
- 小松哲文・鈴木一博, 1977. 三共沼(堤)鳥類目録.
- 関山房兵, 2007. イヌワシの四季, 文一総合出版.
- 田中完一, 1982. 野鳥は空に花は野に.
- 東邦大学, 2014. 第114回鳥島アホドリ調査報告.
- 日本イヌワシ研究会, 2015. 「イヌワシの生息状況、つがい数の減少と繁殖成功率低下の33年間の推移」.
- 日本鳥学会, 1996. 1996年度日本鳥学会大会講演要旨集, 日本鳥学会.
- 日本鳥学会, 2024. 日本鳥類目録改訂第8版, 日本鳥学会.
- 日本野鳥の会, 2013. カンムリウミスズメ保護プロジェクト2012 事業報告
- 日本野鳥の会, 2015. フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂新版, 日本野鳥の会.
- 日本野鳥の会編, 1982~2024. Strix, Vol.1~40, 日本野鳥の会.
- 日本野鳥の会宮城県支部, 1987~1990. 台原森林公園における鳥類の調査.
- 日本野鳥の会宮城県支部, 1991~1993. 三共地区における鳥類の調査.
- 日本野鳥の会宮城県支部, 1994~1996. 仙台市七北田川流域における鳥類の調査今市橋から城前大橋.
- 日本野鳥の会宮城県支部, 2001~2025. 「雁」, No.190~330号.
- 日本野鳥の会宮城県支部, 2002. 宮城県の鳥類分布.
- 藤波不二雄・佐藤広巳, 1992. 宮城県網地島の鳥類-冬鳥を中心として-, 鳥と自然, No.64, 兵庫野鳥の会.
- 細野哲夫, 中村公義 1998. 「長野市に繁殖するチゴハヤブサ-初繁殖の記録-」, 市誌研究ながのNo.5, 長野市.
- 真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 日本の野鳥650, 平凡社.
- 宮城県, 1998. 斗蔵山県自然環境保全地域学術調査報告書.
- 宮城県, 1999. 鱒淵観音堂県自然環境保全地域学術調査報告書.
- 宮城県, 2000. 宮城県猛禽類生息調査報告書. 宮城県環境生活部自然保護課
- 宮城県, 2016. 環境影響生物基礎調査報告書. 宮城県環境生活部自然保護課(猛禽類調査)
- 宮城県, 2019. 仙台海浜県自然環境保全地域学術調査報告書.
- 宮城県文化財保護協会, 1984. 翁倉山のイヌワシ. (立花繁信)
- 南三陸ワシタカ研究会, 2024. 2023年度調査年報.
- 森岡照明・山形則男・川田隆・叶内拓哉, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, 文一総合出版.
- 山口典之ら, 2017. ジオロケーターにより明らかになったカンムリウミスズメの移動経路 (希少で絶滅の恐れがあるカンムリウミスズメの現状とモニタリング), 50-52, 海鳥保全グループ.
- 山階鳥類研究所, 1998. 山階鳥研NEWS, 第112号 (Vol.10 No.7).
- 山階鳥類研究所, 2024. アホドリ通信 No.2.
- 山階鳥類研究所標識研究室, 1996. 渡り鳥アトラス 鳥類回収記録解析報告書(スズメ目編1961年~1995年).

(執筆:小室 智幸)

<div><div><span><span></span></span></div><span><b>コクガン</b></span></div> <p><i>Branta bernicla</i></p>	カモ目 カモ科	絶滅危惧II類（VU）	
<span></span>	<span></span>	2016 VU	環境省 VU

■**選定理由** 越冬海域が局限される傾向が強い。宮城県は比較的大きな群れが定期的に渡来する越冬地の南限になっている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥として北日本の沿岸に渡来し、東北北部から北海道南部の太平洋側沿岸が主な越冬地になっている。防波堤の根固めブロックや漁港、養殖海域、浅海で海藻やアマモなどを採食する。

宮城県の定期的な越冬地として気仙沼湾から牡鹿半島にいたる南三陸沿岸および仙台市蒲生海岸がある。東日本大震災以降、生息数は増加し、近年は気仙沼湾、志津川湾を中心に約900羽が越冬している。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** コクガンの生息地要因として、採食地のほかに淡水の飲水場、上陸しての休息地がある。海岸堤防が完成し、コクガンが利用できる岸辺が少なくなった。また、流れ込みのある砂浜に入って遊ぶ人が増えており、コクガンが必要とする安全な飲水・休息地を脅かす存在となっている。また、海水温上昇により浅水域の採食可能な海藻の減少が懸念される。

■**文献等番号** 2、7、8、17、28、29、30

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：村上 良真）

<div><div><span><span></span></span></div><span><b>シジュウカラガン</b></span></div> <p><i>Branta hutchinsii</i></p>	カモ目 カモ科	準絶滅危惧（NT）	
<span></span>	<span></span>	2016 VU	環境省 CR

■**選定理由** 越冬地は日本とアメリカ西海岸に限られている。宮城県は数少ない定期的な越冬地である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** カナダガンの孤立亜種とされてきたが、近年は別種として扱われる。冬鳥として宮城県北部や秋田県八郎潟に毎年渡来する。宮城県以外では渡りの中継地になっている北海道石狩平野でも観察される。

宮城県では伊豆沼、蕪栗沼、化女沼およびその周辺に毎年定期的に渡来する。かつては渡来地周辺で他のガン類とともに1〜数羽が観察されるだけであったが、回復事業によって2000年以降渡来数が増加しており、2014年12月下旬に1000羽を超え、2022年12月には約1万羽が記録されている。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** シジュウカラガンを始めガン類の生息には、休息に適した安全な場所と、採食に適した広い農耕地や草地、湿草地を必要とするが、水田地帯の開発が直接の脅威となっている。また、限られた地域に多数のガン類が集中するため、病原性細菌の集団感染なども危惧される。

■**文献等番号** 2、7、8、28、29

（執筆：鳥類分科会）

<div><div><span><span></span></span></div><span><b>ハクガン</b></span></div> <p><i>Anser caerulescens</i></p>	カモ目 カモ科	要注目種	
<span></span>	<span></span>	2016 要注目種	環境省 CR

■**選定理由** 宮城県には少ない冬鳥として定期的に渡来するが局所的で個体数は少ない。安全と考えられるねぐらや採食場となっている水田地帯など、生息可能な環境が限定される。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** まれな冬鳥。古くは東京湾などに多数が渡来していたが、その後激減し、1〜2羽が記録されるだけになった。近年、保護事業により国内の渡来数が1000羽を超えた。新潟県や秋田県では群れで越冬する。

宮城県では少ない冬鳥として他のガン類やハクチョウ類とともに県北平野部に渡来する。日本に渡来する個体数の増加に伴い、宮城県の渡来数も増加しており、2022年12月の個体数は100羽ともいわれ、生息個体数は増加している。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** ハクガンを始めガン類の生息には、休息に適した安全な場所と、採食に適した広い農耕地や草地、湿草地を必要とするが、水田地帯の開発により直接の脅威となっている。また、限られた地域に多数のガン類が集中するため、高病原性インフルエンザや細菌の集団感染などが危惧される。

■**文献等番号** 2、7、11、17、28、29

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：本田 敏夫）

<div><div><span><span></span></span></div><span><b>亜種オオヒシクイ</b></span></div> <p><i>Anser fabalis middendorffii</i></p>	カモ目 カモ科	準絶滅危惧（NT）	
<span></span>	<span></span>	2016 NT	環境省 NT

■**選定理由** 宮城県に渡来する個体群はわずかに増加しているが、安全なねぐらや採食場となっている水田地帯など生息可能な環境が限定される。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥として、日本には亜種ヒシクイとともに亜種オオヒシクイの2亜種が渡来する。主な越冬地は局地的であり、宮城県、新潟県、石川県、鳥取県などが知られている。

宮城県における亜種オオヒシクイは冬鳥として県北平野部で見られる。伊豆沼、蕪栗沼、化女沼をねぐらとし、主に沼内の泥地や周辺農耕地で採食や休息をする。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 亜種オオヒシクイを始めガン類の生息には、採食に適した広い農耕地や草地、湿草地を必要とするが、水田地帯の開発により生息地は減少している。また、限られた地域に多数のガン類が集中するため、病原性細菌の集団感染などが危惧される。

■**文献等番号** 2、7、8、11、21、28、29

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：瓜生 篤）

<div><div><span><span></span></span></div><span><b>亜種ヒシクイ</b></span></div> <p><i>Anser fabalis serrirostris</i></p>	カモ目 カモ科	絶滅危惧II類（VU）	
<span></span>	<span></span>	2016 NT	環境省 VU

■**選定理由** 宮城県に渡来するガン類は渡来数が増加傾向にあるが、亜種ヒシクイの個体群は増加が見られない。安全なねぐらや採食場となっている水田地帯など生息可能な環境が限定される。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥として、日本には亜種ヒシクイ（*A. f. serrirostris*）と亜種オオヒシクイ（*A. f. middendorffii*）の2亜種が渡来する。亜種ヒシクイの主な越冬地は局地的であり、宮城県、新潟県、石川県、鳥取県などが知られている。宮城県の亜種ヒシクイの渡来数は亜種オオヒシクイの1/4程度であり、ほとんどが宮城県北部の伊豆沼、蕪栗沼、化女沼をねぐらとし、主に周辺農耕地で観察されるが、オオヒシクイと比較して遠方まで採餌に出かけ、平野東部の石巻市や旧桃生町などでも活動している。近年、登米市平筒沼や石巻市の旧北上川でもねぐらが確認されている。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 亜種ヒシクイを始めガン類の生息には、採食に適した広い農耕地や草地、湿草地を必要とするが、水田地帯の開発により生息地は減少している。また、限られた地域に多数のガン類が集中するため、高病原性インフルエンザや細菌の集団感染などが危惧される。

■**文献等番号** 2、7、8、11、15、17、21、28、29

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：瓜生 篤）

<div><div><span><span></span></span></div><span><b>カリガネ</b></span></div> <p><i>Anser erythropus</i></p>	カモ目 カモ科	絶滅危惧II類（VU）	
<span></span>	<span></span>	2016 NT	環境省 EN

■**選定理由** 宮城県には冬鳥として300羽程が渡来する程度であり、安全と考えられるねぐらや採食場となっている水田地帯など、生息可能な環境が限定される。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国的には迷鳥であるが、宮城県には毎年渡来する数が少ない冬鳥。県北平野部に渡来する。渡来数は増加傾向にある。登米市迫町に定期的に渡来しているが伊豆沼、蕪栗沼、化女沼周辺で他のガン類に数羽が混じっているなど、小さな群れも観察される。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** カリガネを始めガン類の生息には、特に適した安全な水域と、採食に適した広い農耕地や草地、湿草地を必要とするが、水田地帯の宅地化などの開発が直接の脅威となっている。また、限られた地域に多数のガン類が集中するため、高病原性インフルエンザや細菌の集団感染などが危惧される。

■**文献等番号** 2、7、11、28、29

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：瓜生 篤）

シノリガモ			カモ目 カモ科	絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
<i>Histrionicus histrionicus</i>	<span></span>	<span></span>	2016 LP	環境省 -

■**選定理由** 宮城県の栗駒山山系の溪流は国内における数少ない繁殖地の一つであるが、2008年6月の岩手・宮城内陸地震とその後の復興事業により、繁殖地の環境が大きく打撃を受けた。

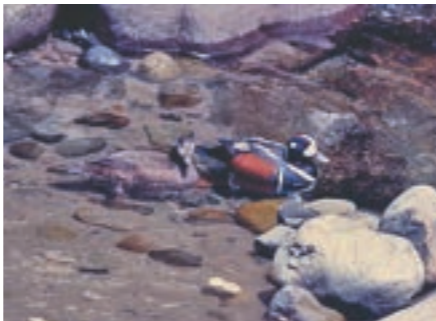
■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥として渡来し主に中部地方以北の太平洋側沿岸の岩が多い海岸で越冬する。宮城県から北海道にかけては、少数が山地の溪流で繁殖する。

宮城県では栗駒山―迫川水系で繁殖が確認されている。ここは国内における数少ない繁殖地の一つである。2008年6月の岩手・宮城内陸地震による大規模な地滑りとその後の復興事業により繁殖環境が悪化したが、近年同水系で繁殖期に成鳥が確認されている。冬季は主に南三陸地域の海岸に生息するが、個体数は多くない。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 自然災害を含め大規模な環境の変化があれば繁殖生息の直接の脅威となるほか砂防ダムの存在は飛翔力のないヒナの移動を妨げ、生存を脅かす。また、水温上昇に伴う食物資源の減少が懸念される。

■**文献等番号** 1、2、6、7、10、11、17、28、29、30

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：竹丸 勝朗）

ウズラ			キジ目 キジ科	絶滅危惧I類 (CR+EN)
<i>Coturnix japonica</i>	<span></span>	<span></span>	2016 CR+EN	環境省 VU

■**選定理由** 東アジアに分布し、宮城県にも生息する。生息数は著しく減少したままである。近年、観察情報が増えているが、年間1〜2件とかなり少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥・夏鳥として全国で繁殖記録があるが局地的である。平地から山地の草原や農耕地などに生息し、繁殖期にはつがいで、非繁殖期には単独か小群で生活する。

宮城県の記録は少なく、近年は主に春と秋に観察されている。記録が少ない要因として、人が近づいたりして危険を感じると草かげに入ったり、地面に伏せたりして危険がなくなるまで静止するため、目立ちにくい鳥である。加美町、大崎市蕪栗、仙台市蒲生、名取市、亶理町、石巻市、栗原市などで記録されているが、観察件数は少ない。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 狩猟鳥指定から外れたものの一度個体数が少なくなると回復には時間がかかっている。農地の整備が進み、生息環境である草場が少なくなり生息環境が悪化していることも一要因である。

■**文献等番号** 1、4、6、7、10、11、17、28、29

（執筆：鳥類分科会）

ヨタカ			ヨタカ目 ヨタカ科	絶滅危惧II類 (VU)
<i>Caprimulgus jotaka</i>	<span></span>	<span></span>	2016 NT	環境省 NT

■**選定理由** 山地における林相の変化に伴い生息環境が悪化し、個体数が減少している。■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として九州以北の平地から山地の林、森林の伐採地、疎林などに生息し、地上で営巣する。夜間、飛びながら昆虫などを捕食する。移動の時期は平地の林地や公園でも観察される。

宮城県では夏鳥として各地の山地の疎林、伐採地などに生息している。夜間よく鳴くことから比較的観察記録が多い。山林の開発や人工林の成長にともない低山では見られなくなった所が多いが、山地の伐採跡地に散在して記録がある。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 疎林を好むため密生した人工林の増加や山林開発による生息環境の減少、食物となる昆虫類などの減少により生息環境が悪化している。

■**文献等番号** 1、6、10、11、28、29

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：深瀬 徹）

ハリオアマツバメ			アマツバメ目 アマツバメ科	準絶滅危惧 (NT)
<i>Hirundapus caudacutus</i>	<span></span>	<span></span>	2016 要注目種	環境省 -

■**選定理由** 宮城県内における生息数が少ないことに加え、森林の伐採により営巣に適した樹洞のある大径木が少なくなり、営巣環境の悪化とともに生息個体数も少なくなっている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として本州中部以北の平野から山地の森林に渡来し、樹洞内に営巣する。渡りの時期には平地の海岸上空でも観察される。宮城県では夏鳥として山地に渡来する。繁殖期に蔵王山系、船形山系、栗駒山系などに生息するが、個体数は多くない。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 樹洞に営巣するために、営巣に適した樹洞の存在が不可欠だが営巣木となる樹洞のある大径木が少なくなり、繁殖環境が悪化している。また、農業などによって食物となる昆虫類が汚染され、その体内蓄積が懸念される。また、風力発電機でのバードストライクも懸念される。

■**文献等番号** 1、6、10、17、28、29

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：本田 敏夫）

クイナ			ツル目 クイナ科	準絶滅危惧 (NT)
<i>Rallus indicus</i>	<span></span>	<span></span>	2016 要注目種	環境省 -

■**選定理由** 宮城県は繁殖地南限にあたるが、個体数は少ない。水田の乾田化や水路のコンクリート化により繁殖環境の悪化とともに個体数が減少している。

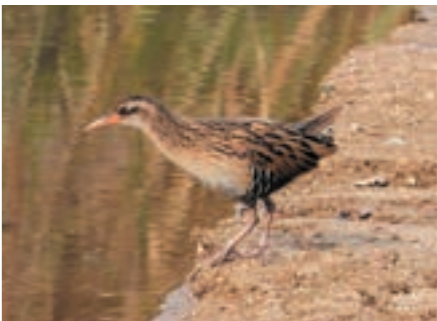
■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北地方以北では夏鳥だが、東北地方南部では旅鳥あるいは冬鳥として記録されることが多い。関東地方以南では冬鳥。湿性草地に生息し警戒心が強く姿をあらわすことは少ない。

宮城県では冬鳥として平野部各地の湿地に生息する。過去に仙台市荒井と名取市で繁殖記録がある。近年、冬期の記録は増えてきており、繁殖期の生息情報も出ている。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 水路のコンクリート化、水田の乾田化のほか河川流域の改修による河川敷湿性草地の減少や生息に適した平野部の湿地の激減により生息個体数の縮小が危惧される。

■**文献等番号** 1、2、7、17、28、29、37

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：本田 敏夫）

シマクイナ			ツル目 クイナ科	情報不足 (DD)
<i>Coturnicops exquisitus</i>	<span></span>	<span></span>	2016 要注目種	環境省 EN

■**選定理由** 宮城県にも生息しているが、個体数は少ない。水田の乾田化や水路のコンクリート化により生息環境は減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 数少ない冬鳥として各地から記録があるが少ない。繁殖期に北海道、青森県で確認されている。湿性草地に生息するが行動はひそやかで人目につくことが少なく記録も少ない。

宮城県では旅鳥として秋の渡りの時期に石巻市長面と東松島市鳴瀬川河口で記録があるのみである。渡来数が少なく、ヨシ原などの湿性草地に生息し、目撃しにくいことから情報不足である。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 水路のコンクリート化、水田の乾田化のほか河川流域の改修などによる生息適地の減少や農業による食物の減少などが危惧される。

■**文献等番号** 1、2、8、28、29

（執筆：鳥類分科会）



（撮影：菊田 英孝）

## ヒクイナ

*Zapornia fusca*

ツル目  
クイナ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 NT
---------------	-----------

■**選定理由** 宮城県内各地で繁殖していたが、近年個体数が激減している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥や夏鳥として全国に分布し、北日本より南の水田、池、湿地、河川に生息する。湿性草地に生息し、警戒心が強く姿をあらわすことは少ない。2010年以降、関東以西では観察記録が増加しているが、東北各地では減少傾向にある。

宮城県では夏鳥として平野部各地の湿地に生息する。湖沼、水路・堀や河川敷などの湿性草地に生息するが、目撃しにくいこともあり記録は多くない。2000年以前は県内各地で観察記録があったが、それ以降は急激に減少し、近年では2019年に名取市で、大崎市蕪栗沼では2024年まで継続して少数の声が観察されているだけである。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 水路のコンクリート化、水田の乾田化のほか河川流域の改修による河川敷湿性草地の減少や生息に適した平野部の池沼の激減が危惧される。

■**文献等番号** 1、6、10、11、28、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：安室 一雄)

## ヒメクイナ

*Zapornia pusilla*

ツル目  
クイナ科

情報不足 (DD)

2016 要注目種	環境省 -
--------------	----------

■**選定理由** 宮城県にも生息しているが、個体数は少ない。水田の乾田化や水路のコンクリート化により生息環境が減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 数少ない夏鳥として東北地方北部以北に渡来する。その他の地域では数少ない旅鳥または冬鳥として水田、湿地、湖沼に渡来する。宮城県では夏季に観察されているが記録は少ない。栗原市伊豆沼や大崎市蕪栗沼、仙台市荒井、仙台市川内などで記録がある。湖沼、水路・堀や河川敷などで、ヨシ原などの湿性草地に生息し、目撃しにくいことから情報不足であるが渡来数もごく少数と考えられる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 水路のコンクリート化、水田の乾田化のほか河川流域の改修による河川敷湿性草地の減少や生息に適した平野部の湿地の激減により生息個体数の縮小が危惧される。

■**文献等番号** 1、10、28、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：竹丸 勝朗)

## ケリ

*Vanellus cinereus*

チドリ目  
チドリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 要注目種	環境省 DD
--------------	-----------

■**選定理由** 繁殖地が局限される地域個体群として重要である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 近畿地方以北の本州に生息する留鳥。北日本や多雪地に生息するものは、冬は温暖な地方に移動する。東北地方では局地的に分布する。水田などの農耕地や草地に生息する。

宮城県では夏鳥として3月頃に渡来し、県北の内陸平野部(栗原市、大崎市、登米市、美里町)で繁殖するが局地的である。水田や休耕地などの草地や泥湿地でも繁殖が記録されている。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 良好な繁殖環境である農耕地や草丈の低い空き地は人の手によって湿地や草地として維持されているため、営農活動によって営巣が阻害されることもあり、人為的影響を受けやすい。

■**文献等番号** 1、2、6、10、11、12、28、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## イカルチドリ

*Charadrius placidus*

チドリ目  
チドリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

■**選定理由** 県内の河川域で繁殖に利用される砂礫地が少なくなり、個体数も減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 九州以北に留鳥として分布、北海道では夏鳥。砂礫地のある河川、湖沼、水田に生息する。越冬期でも大きな群れは作らない。宮城県では留鳥として、繁殖期は河川の中流域から上流域の砂利河原に生息する。非繁殖期は河川や湖沼の露出した泥地や水田のほか、南三陸では漁港でも観察される。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 河川の流量低下や河川改修に伴い、礫河原が減少したほか、残った河原も草地化や樹林化しており、生息環境が著しく悪化している。また、営巣地への人の立ち入りにより卵や雛への直接の影響も危惧される。

■**文献等番号** 1、2、6、7、10、12、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## シロチドリ

*Charadrius alexandrinus*

チドリ目  
チドリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 VU
------------	-----------

■**選定理由** 主な繁殖環境は海岸の広い砂浜や裸地であり、2011年の東北地方太平洋沖地震による地盤沈下と海岸防潮堤整備にともない繁殖適地が減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥または漂鳥として全国に広く分布する。北日本では夏鳥である。砂浜、埋立地や裸地で繁殖するが近年個体数は減少傾向にある。宮城県では留鳥として山元町から気仙沼市までの海岸の砂浜や干潟で観察される。仙台湾沿岸砂浜が主な繁殖地であったが、震災後、海岸防潮堤の建設などにより繁殖適地砂浜が大幅に減少し、繁殖数が減少している。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の縮小や草地化による営巣環境の悪化のほか、復旧工事の完了に伴い、営巣地への人の立入りが多くなっている。犬を連れた散歩による追い出しや車やオートバイの侵入による卵や雛への直接の影響が危惧される。

■**文献等番号** 1、2、6、7、10、11、12、14、17、28、29、37

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## ハウロクシギ

*Numenius madagascariensis*

チドリ目  
シギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 VU
------------	-----------

■**選定理由** 東アジアで繁殖し、オセアニアで越冬する。宮城県には旅鳥として少数が渡来するのみであり、渡来地となる干潟はわずかである。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国の干潟や内陸の湿地、水田、砂浜などに渡来する旅鳥。九州以南では少数が越冬する。宮城県では少ない旅鳥として春や秋の移動の時期に海岸線や干潟で見られる。巨理町鳥の海や仙台市蒲生干潟に渡来するほか、各地の砂浜で観察記録があるが、個体数は少ない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境である海岸線の干潟や河口域はわずかしか残っておらず、また、河川の汚濁や生活廃棄物により環境の悪化が懸念される。

■**文献等番号** 8、12、17、28、29、37

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：工藤 芳郎)

## オオソリハシシギ

*Limosa lapponica*

■**選定理由** 全国的に個体数が減少している。県内でも主な生息地である干潟は周辺地域の整備により生息環境が悪化し、渡来数が大幅に減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 旅鳥として全国の干潟や内陸の湿地、水田、砂浜などに渡来する。

宮城県では渡りの時期に干潟において見られる。仙台市蒲生海岸では1990年代前半まで100羽を越す群れが見られたが、現在は群れが見られなくなった。亶理町鳥の海、名取市広浦、仙台市井土浦、蒲生海岸で記録されているが、個体数は少ない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境である海岸線の干潟や河口域、休耕田はわずかしか残っておらず、また、河川の汚濁や生活廃棄物により環境の悪化が懸念される。

■**文献等番号** 11、12、14、28、29、37

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目  
シギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	VU



(撮影：工藤 芳郎)

## オグロシギ

*Limosa limosa*

■**選定理由** 全国的に個体数が減少している。県内でも主な生息地である干潟や休耕田は周辺地域の整備により生息環境が悪化している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 旅鳥として全国の干潟や内陸の湿地、水田、砂浜などに渡来する。

宮城県では渡りの時期に干潟や休耕田において少数が見られる。亶理町鳥の海、名取市広浦、仙台市井土浦、蒲生海岸で記録されているが、個体数は少ない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 主な生息環境である海岸線の干潟や水を張った休耕田はわずかしか残っていない。また、河川の汚濁や生活廃棄物により環境の悪化が懸念される。

■**文献等番号** 12、14、28、29、37

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目  
シギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	-



(撮影：佐藤 賢二)

## ヘラシギ

*Calidris pygmaea*

■**選定理由** 繁殖地が極東の北部のみと非常に狭く、世界的に個体数は激減しており、宮城県にはまれな旅鳥として渡来する程度であるが、生息環境である干潟や砂浜の状況が悪化している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 数少ない旅鳥として日本を通過する。干潟、砂浜、埋立地に生息しトウネンなどの群れに混じって見られることが多い。渡りの時期の渡来数は全国で多くても2,3羽程度と推定され、国際的にも絶滅が危惧されている。

宮城県ではまれな旅鳥として秋の渡りの時期に見られる。石巻市の埋立地や仙台市蒲生海岸より南の干潟や海岸線波打ち際で記録されているが件数、個体数ともに少ない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 主な生息環境である干潟や海岸線は人の出入りや護岸整備などの影響を受けやすい不安定な所であるため、環境の維持が重要である。

■**文献等番号** 8、12、28、29、32

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目  
シギ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016	環境省
VU	CR



(撮影：工藤 芳郎)

## ハマシギ

*Calidris alpina*

■**選定理由** 全国的に個体数が減少している。県内でも主な生息地である干潟は周辺地域の整備により生息環境が悪化し、個体数が減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 旅鳥として全国の干潟や海岸砂浜、内陸の湿地、水田などに渡来する。

宮城では冬鳥として、海岸砂浜や干潟において群れで見られる。亶理町鳥の海、名取市広浦、仙台市井土浦で定期的に記録されているが、個体数は減少傾向にあり、南三陸海岸では越冬群が見られなくなった。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境である海岸線砂浜や干潟、河口域砂浜の面積は広いが、特に秋期の食物生物の貧弱化が懸念される。また、河川や水田の汚濁や生活廃棄物により環境の悪化が危惧される。

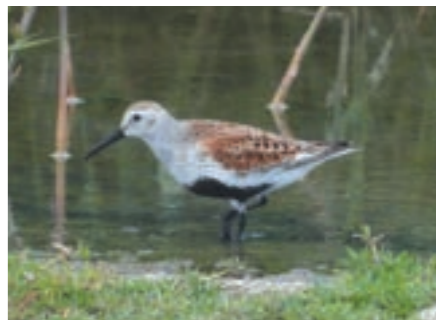
■**文献等番号** 2、7、11、12、14、28、29、37

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目  
シギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	NT



(撮影：本田 敏夫)

## オオジシギ

*Gallinago hardwickii*

■**選定理由** 繁殖地は日本および極東ロシアとサハリン南部に限定される。越冬地となるオーストラリアでの狩猟が禁止されたが、繁殖環境の悪化により本州で繁殖する個体数は減少しており、宮城県でも繁殖期の生息数がもともと少ないことに加え減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として渡来し、北海道では農耕地や草地、湿地に普通に生息するが、本州では中部地方以北に局地的に分布する。それ以南では旅鳥。渡りの時期には水田や湿地で観察される。

宮城県では夏鳥として高原草地に渡来するが局地的で、栗駒山世界谷地や泉ヶ岳、薬菜山麓で求愛行動が記録されているが個体数はごく少ない。蔵王山麓は不明である。繁殖期以外は旅鳥で、春や秋の渡りの時期には平野部でも観察される。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 県内の繁殖生息地は栗駒山世界谷地を除き、農耕地、採草地、耕作放棄地など人的に繁殖環境が生成された所であり、湿地の乾燥化や、牧草地の放棄による樹林化、太陽光発電などの開発行為など、人による環境の変化が起こりやすく、繁殖のみならず生息も脅威にさらされている。また世界谷地などでは個体数が増加したイノシシによる影響も懸念される。

■**文献等番号** 1、6、8、10、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目  
シギ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
NT	NT



(撮影：本田 敏夫)

## ツルシギ

*Tringa erythropus*

■**選定理由** 全国的に個体数が減少している。県内でも主な生息地が県北部の湖沼地域だけになった。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 旅鳥として全国の干潟や内陸の湖沼湿地、水田などに渡来する。

宮城県内でも旅鳥として春の渡りの時期に内陸の大崎市蕪栗沼や伊豆沼周辺において群れで見られる。蒲生海岸では1990年代前半まで100羽を越す群れが見られたが、現在は見られなくなった。秋の渡りの時期は沿岸干潟や泥湿地で少数が記録されている。近年、県内の個体数は減少している。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境である海岸線の干潟や河口域はわずかしか残っておらず、また内陸の湖畔泥湿地や水田周辺は、人の影響を受けやすい。

■**文献等番号** 1、6、8、10、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目  
シギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	VU



(撮影：本田 敏夫)

## コアジサシ

*Sternula albifrons*

チドリ目  
カモメ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
VU



(撮影：本田 敏夫)

- 選定理由** 宮城県は集団繁殖地の太平洋側北限にあたる。近年繁殖地は定まらず、人工的に造成された裸地でも繁殖が行われているが、安定的な繁殖地の存続は望めない。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として本州以南に渡来する。群れで行動し、砂浜、埋立地、河原など植被の少ない開けた場所に集団で繁殖する。東北地方では太平洋側は宮城県以南、日本海側は秋田県以南でほぼ毎年繁殖が記録されている。宮城県の海岸に渡来し、仙台市蒲生海岸や名取市閑上の海岸、亶理町吉田海岸などで繁殖しているが、巣立ち個体は1~3羽ととても少ない状況にある。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 集団繁殖地への人の侵入、カメラマンの接近によりコアジサシに脅威を与えている。さらに繁殖地の放棄、カラスやキツネなど獣による食害が起きている。また、県内の砂浜海岸は波浪や海岸堤防の建設による砂浜の後退や草地化により集団繁殖に適した生息地が縮小し、繁殖の継続が危惧される。
- 文献等番号** 1、6、8、10、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)

## ケイマフリ

*Cepphus carbo*

チドリ目  
ウミスズメ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
要注目種

環境省  
VU



(撮影：熊谷 潤)

- 選定理由** 北海道の半島や島嶼で局地的に繁殖するが個体数の減少傾向が続いている。宮城県でも過去に繁殖記録があったが、現在はごく少数が冬鳥として渡来するのみとなった。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道以北で繁殖し、本州以南には冬鳥として渡来する。岩礁のある海岸で見られ、潜水して小魚や甲殻類を捕食する。宮城県では過去に石巻市双子島で繁殖の記録があるが、現在はごく少ない冬鳥として石巻市田代島や網地島周辺海域、南三陸沿岸海域で記録されている。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 国内全体の生息個体数の減少に伴い、冬季に県内に渡来する個体数も減少していると推定される。県内の生息海域においては海洋汚染や漁業による混獲が直接の脅威となるほか海水温上昇に伴う食物資源の減少が危惧される。
- 文献等番号** 2、7、11、17、28、29、30

(執筆：鳥類分科会)

## カンムリウミスズメ

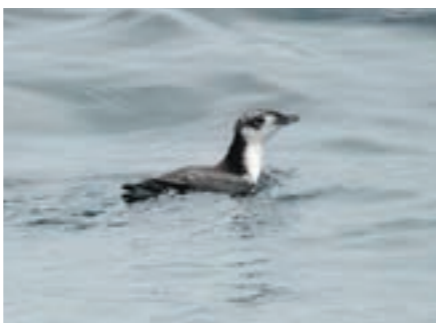
*Synthliboramphus wumizusume*

チドリ目  
ウミスズメ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
VU



(撮影：佐藤 賢二)

- 選定理由** 日本周辺にのみ生息する世界的希少種。宮城県の沿岸海域も生息地であるが情報が少ない。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として全国の海域に生息する。繁殖地は本州、四国、九州の島嶼や伊豆諸島のみである。宮城県では石巻市牡鹿半島、金華山、網地島周辺海域で記録がある。近年、気仙沼市、南三陸町海域でも群れで観察されている。ただ海域に生息するため陸からの観察が難しく、情報が不足している。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 繁殖地においてはカラスやネズミによる捕食圧があるといわれている。県内の生息海域においては海洋汚染や漁業による混獲が直接の脅威となる。
- 文献等番号** 1、8、22、28、29、41

(執筆：鳥類分科会)

## ウトウ

*Cerorhinca monocerata*

チドリ目  
ウミスズメ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
VU

環境省  
-



(撮影：村上 良真)

- 選定理由** 宮城県は集団繁殖地の南限にあたる。近年生息数は減少している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北地方以北では留鳥または夏鳥。以南では冬鳥。太平洋側、日本海側ともに島嶼で繁殖し、繁殖地周辺海域では周年観察されるが、寒冷地のは南下する。繁殖期でも日中は海上で生活し、夜間繁殖地に戻る。潜水してイカナゴやイワシなどの小魚を捕食する。宮城県では留鳥として牡鹿半島から北の沿岸海上で見られる。女川町足島は集団繁殖地の南限である。繁殖時期には足島周辺等、三陸地域の海上に生息する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 巻き網や刺し網による事故が危惧される。また、足島ではオオミズナギドリの増加により競合する繁殖適地への侵略が脅威になっている。さらに海水温上昇により、繁殖時期の魚種や分布の変化など、食物の量の減少など繁殖生息に大きく影響を受けている。
- 文献等番号** 1、6、7、10、13、17、28、29、30

(執筆：鳥類分科会)

## アホウドリ

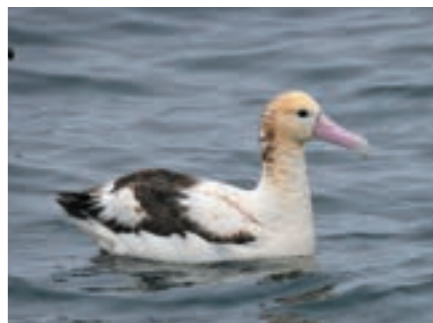
*Phoebastria albatrus*

ミズナギドリ目  
アホウドリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
VU



(撮影：佐藤 賢二)

- 選定理由** アホウドリ類のうち、最も数の少ない種のひとつで、世界的な希少種である。宮城県沖合はアホウドリの移動ルートになっている。近年2種に分けることが提唱され、宮城県沖では両タイプとも確認されているが、情報が不足している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北太平洋に生息し、伊豆諸島の鳥島、尖閣列島で繁殖する。一時絶滅が宣言されたがその後少数の繁殖が鳥島で確認された。現在は保護事業の進展に伴い個体数は8000羽台まで増加している。外洋性の鳥であるため陸地からの観察記録はない。宮城県では発信器をつけた移動ルートの調査で、仙台の数キロメートル沖を通過した記録があり、近年南三陸沖で観察される個体数が増えている。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 採食中に漁網に絡まったり、はえなわやひきなわの釣り針や海上を浮遊するゴミ(発泡スチロール類の碎片、プラスチックペレット)の誤飲による事故死が懸念される。
- 文献等番号** 1、8、17、18、28、29、42、43

(執筆：鳥類分科会)

## ヒメクロウミツバメ

*Hydrobates monorhis*

ミズナギドリ目  
ウミツバメ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
VU



(撮影：佐藤 賢二)

- 選定理由** 国内において繁殖分布が局限されている種である。女川町足島でごく少数が繁殖している可能性が高い。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として日本近海に渡来する。京都府沓島、岩手県三貫島など全国で数ヶ所の島嶼で繁殖するが近年繁殖が確認されていないところが多い。宮城県では記録は少ないが夏鳥として宮城県沖の海上および離島が繁殖期の生息域となっている。夜間に飛来するため観察は難しいものの、2023年7月、足島での調査において嘴に土が付いている個体が捕獲され、巣穴を掘り、土中から出てきた直後と考えられ、繁殖の可能性が高い。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 繁殖地は人間が居住しない島のため、人間活動による直接の影響はないが、ドブネズミ等捕食者の再侵入が脅威となる。また、営巣地は林地の土中と考えられるため、同じ環境で営巣する体の大きなオオミズナギドリによって営巣地が占領・攪乱されており、営巣が難しい状況にある。
- 文献等番号** 1、8、28、29

(執筆：鳥類分科会)

## コシジロウミツバメ

*Hydrobates leucorhous*

ミズナギドリ目  
ウミツバメ科

要注目種

2016	環境省
-	-

■**選定理由** 宮城県で唯一繁殖が確認されているのは女川町江島列島足島のみであり、個体数が少ない。また、国内の繁殖地南限にあたる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北太平洋に広く分布し、洋上で生活している。国内では足島の他、北海道大黒島、岩手県日岬島、船越大島、三貫島で繁殖している。宮城県では夏鳥として南三陸の海上に渡来し、足島では2017年にドブネズミの駆除が行われた後の2021年に初めて繁殖が確認された。その後、少数の繁殖が確認されており、生息数は増加傾向にある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 足島は無人島で、天然記念物ということもあり安易に上陸ができないため、人の影響はない。しかし、大型ネズミが侵入した場合に捕食圧が生じることが懸念される。足島では2017年以後3回にわたりドブネズミの駆除が行われたが、再びドブネズミが増加する事によって本種の個体数が急激に減少する恐れがある。また、同所で営巣する大型のオオミズナギドリによって営巣地が占領・攪乱され、営巣が難しい状況にある。

■**文献等番号** 1、10、13、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：佐藤 賢二)

## クロコシジロウミツバメ

*Hydrobates castro*

ミズナギドリ目  
ウミツバメ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016	環境省
VU	CR

■**選定理由** 国内において繁殖分布が局限されていることに加え、繁殖地の環境が悪化していることで著しく個体数が減少している。記録は少ないが宮城県沖の海上および離島も繁殖期の生息域となっている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として日本近海に渡来する。国内の繁殖は岩手県の日出島、船越大島、三貫島が知られているだけである。

宮城県では繁殖期に女川町江島列島足島で渡来が確認されているほか、仙台市や旧志津川町などの陸地でも迷行した個体が保護された事例がある。足島では繁殖期にコシジロウミツバメとともに飛来しており、繁殖の兆候が見られるが、個体数はごく少数である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 繁殖地は人間が居住しない島のため、人間活動による直接の影響はないが、ドブネズミ等捕食者の再侵入が脅威となる。また、営巣地は林地の土中のため、同じ環境で営巣する体の大きなオオミズナギドリによって営巣地が占領・攪乱されており、営巣が難しい状況にある。

■**文献等番号** 1、6、7、8、10、11、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：佐藤 賢二)

## サンカノゴイ

*Botaurus stellaris*

ペリカン目  
サギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
NT	EN

■**選定理由** 個体数の少ないサギ類のひとつである。宮城県内にも生息するが個体数が少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道には夏鳥として渡来し、少数が繁殖している。本州以南では旅鳥や冬鳥だが局地的に繁殖が記録されている。常に広いヨシ原で生活し、開けた場所に現れることは少ない。

宮城県ではまれな旅鳥あるいは冬鳥として観察されている。伊豆沼・内沼、登米市長沼、大崎市蕪栗沼、石巻市釜谷、仙台市蒲生海岸および亘理町荒浜で記録されているが観察記録は少ない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境である河川、湖沼周辺の広大な湿性草地であるヨシ原の減少が危惧される。また、これらの水辺環境は農業との関わりが深く、農薬などに汚染された小動物を採取することによる有害物質の影響が懸念される。

■**文献等番号** 1、2、7、8、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## ヨシゴイ

*Ixobrychus sinensis*

ペリカン目  
サギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
NT	NT

■**選定理由** 夏鳥として平地のヨシ原に渡来し繁殖するが、近年全国的に個体数が減少している。宮城県でも繁殖するが、個体数は減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 九州以北で繁殖する夏鳥。湖沼や河川周辺のヨシ原に生息する。薄明薄暮性で開けた場所には現れず、ヨシ原などの湿性植物帯で獲物を探す。

宮城県では夏鳥として渡来し、平地の河川、水路、湖沼、水田周辺の湿性草地に生息するが生息数は減少している。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 主な採食環境であるヨシ原や抽水植物の群落は減少しており、人の影響を受けやすいとともに河川や農地整備事業による採食環境の悪化が懸念される。

■**文献等番号** 1、6、10、11、17、27、28、29、37

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## オオヨシゴイ

*Ixobrychus eurhythmus*

ペリカン目  
サギ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016	環境省
CR+EN	CR

■**選定理由** 全国的に分布が局地的で個体数の少ないサギ類のひとつであり、近年全国的に激減している。宮城県でも繁殖が確認されていたが、近年個体数が著しく減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として繁殖のため北海道や本州中部以北に渡来するが、分布は局地的であり、近年全国的に生息域が縮小し、個体数も少ない。薄明薄暮性で魚類、両生類、昆虫、甲殻類などを採食する。

宮城県では夏鳥として県内の河川、水路、湖沼、水田などの湿性草地やその周辺の草地に生息するが、目立ちにくいこと、個体数が少ないこともあり観察記録は少ない。生息地として涌谷町、名取市、仙台市若林区、大崎市蕪栗沼、山元町牛橋などがあるが、2000年以降、県内の観察記録がない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 河川、水路整備、耕地整理によりヨシ原や湿性草地が減少し、生息環境、繁殖環境が悪化している。

■**文献等番号** 1、6、8、10、11、17、29

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：佐竹 清夫)

## ミゾゴイ

*Gorsachius goisagi*

ペリカン目  
サギ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
NT	VU

■**選定理由** 繁殖地として知られているのは日本だけであり、個体数も少ない。宮城県でも繁殖しているが低山の森林開発により個体数は減少の傾向にある。

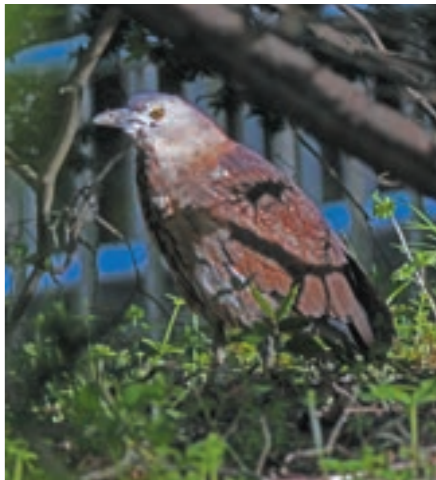
■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として本州以南に渡来し、西日本で多く生息繁殖する傾向がある。丘陵から山地の林につがい単位で生息する。夜行性でもあるために観察の機会は少なく、個体数は多くないと推定されている。

宮城県では夏鳥として丘陵から低山の林に生息しているが個体数は少ない。繁殖期の記録として角田市斗蔵山、涌谷町成沢、石巻市上品山、白石市小原、川崎町などで観察されているが目立ちにくさから観察記録が少ない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵および低山における林地の開発により生息可能な環境が減少している。特に太陽光発電事業による大規模な造成開発が脅威となっている。

■**文献等番号** 1、6、8、10、17、28、29、33

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：竹丸 勝朗)

## ゴイサギ

*Nycticorax nycticorax*

■**選定理由** 宮城県内の平地や丘陵地の水田や湖沼、河川で見られるが、繁殖期の個体数が大幅に減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として本州以南に分布する。東北地方以北では夏鳥である。

宮城県では留鳥として、平野部の河川、水路に生息する。繁殖は県内各地に散在するサギ類のコロニーで行われるが、ゴイサギの個体数は減少している。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 同じコロニーで繁殖するダイサギとアオサギの個体数は増加傾向にあるが、ゴイサギの繁殖個体数は減少しており、屋敷林の減少や河川整備事業による営巣環境の悪化が懸念される。主な採食環境である水田や水路、溜池は人の影響を受けやすく、農業などに汚染された小動物を採取することによる有害物質の影響が懸念される。

■**文献等番号** 1、2、6、7、10、15、17、28、29、34、37

(執筆：鳥類分科会)

ペリカン目  
サギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	-



(撮影：本田 敏夫)

タカ目  
タカ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
NT	NT



(撮影：嶋 孝弘)

## ハチクマ

*Pernis ptilorhynchus*

■**選定理由** 宮城県の山林でも繁殖しているが、生息個体数は少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 九州から北海道までの低山や平地の林で繁殖する夏鳥。春と秋に渡りが観察され、春の渡りは夏鳥の中では遅く5月中旬から下旬にかけて繁殖地に渡来する。両生類、爬虫類のほかにハチ類を好んで食する。宮城県では夏鳥として低山から高山に渡来するが記録は多くない。繁殖も山地で行われているが、生息個体数は少ない。近年、七ヶ宿町や川崎町など観察地が増え、2021年に白石市福岡で繁殖が確認できた。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 低山の営巣に適した大径木の減少や、針葉樹の造林が行われてきたことから生息に適した環境が減少している。

■**文献等番号** 1、6、8、10、17、28、29、35、36、39

(執筆：鳥類分科会)

## コサギ

*Egretta garzetta*

■**選定理由** 宮城県内の平地の湖沼や河川、潟湖で見られる。繁殖期の個体数が減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として本州から九州で繁殖する。宮城県では留鳥として、平野部の河川、水路および潟湖で見られる。繁殖は他のサギ類とともにコロニーで行われ、仙台平野の各地に散在していたが、現在では柴田町中名生、石巻市旧北上川、仙台市宮城野区港でのみ確認されている。南三陸沿岸地域では冬季に見られ、越冬個体数はわずかではあるが増加している。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** ダイサギとアオサギの生息個体数は増加傾向にあるが、コサギの繁殖個体数は減少している。主な採食環境である水路や潟湖環境は人の影響を受けやすいとともに河川整備事業による採食環境の悪化が懸念される。

(執筆：鳥類分科会)

ペリカン目  
サギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	-

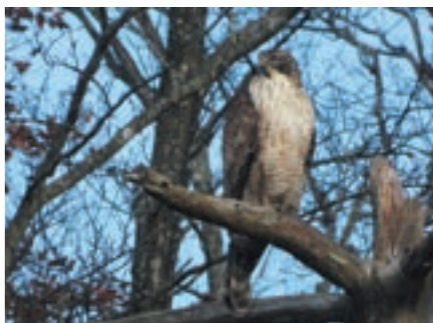


(撮影：本田 敏夫)

タカ目  
タカ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
CR+EN	EN



(撮影：本田 敏夫)

## クマタカ

*Nisaetus nipalensis*

■**選定理由** 森林性の大型のタカで、宮城県でも繁殖しており、山地の森林における生態系の頂点に立つが生息数は少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として北海道から九州まで分布する。低山から亜高山の林に生息し、十分に成長した広い森林地帯の大木に営巣する。宮城県内でも留鳥として奥羽山系および北上山系の山地およびそこから派生する丘陵地でみられる。本県はもともと山地の面積が少なく、テリトリーが広いクマタカの個体数は多くない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 森林の伐採による生息ならびに繁殖環境の消失。また、植林による広葉樹から針葉樹への林相の変化による食物の減少にともなう生息可能域の減少が懸念される。さらに繁殖期に営巣地近くで工事などの人為的行為が行われることや風力発電機によるバードストライクが直接の脅威となる。近年はカメラマンによる圧力も懸念される。

■**文献等番号** 1、2、6、7、8、10、17、28、29、35、36、39

(執筆：鳥類分科会)

## カラシラサギ

*Egretta eulophotes*

■**選定理由** アジア東部に局地的に分布し、個体数も少ない。宮城県では1度だけ繁殖の記録がある。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本では旅鳥または稀な冬鳥として記録され、繁殖の記録はない。海岸線の干潟や河口域に生息することが多く、魚などを採食する。宮城県内でもまれな旅鳥として干潟に飛来する。1990年代から観察例があり、仙台市蒲生海岸では繁殖期を通して観察された記録がある。他に亶理町鳥の海や東松島市野蒜での記録もある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 同じコロニーで繁殖するダイサギとアオサギの生息個体数は増加傾向にあるが、コサギの繁殖個体数は減少したままである。主な採食環境である水路や潟湖環境は人の影響を受けやすいとともに河川整備事業による採食環境の悪化が懸念される。

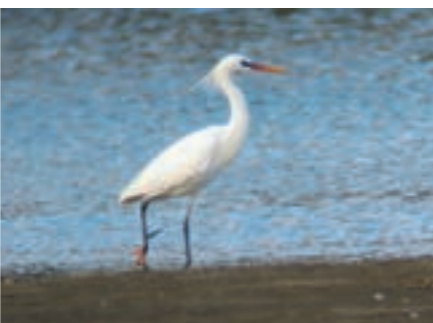
■**文献等番号** 1、2、6、7、10、15、17、27、28、29、34、37

(執筆：鳥類分科会)

ペリカン目  
サギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
DD	NT



(撮影：田中 哲郎)

タカ目  
タカ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016	環境省
CR+EN	EN



(撮影：加藤 敬一)

## イヌワシ

*Aquila chrysaetos*

■**選定理由** 山地における生態系の頂点に立つ個体数の少ない大型猛禽類。宮城県でも繁殖が確認されているが、生息数は極わずか、繁殖つがいの大半が消滅しており、希少性が高い。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として北海道から九州の低山から高山に生息する。国内の生息数は500羽程度と推定され少ない。樹木にも営巣するが、多くは岩棚に営巣し、開けた場所で獲物を狩る。

宮城県では留鳥として奥羽山系および北上山系の山地で見られるが、1990年代以降繁殖の成功率が低下し、北上山系では現在、繁殖つがいが消滅しており、近年、漂行個体が散発的に観察される程度である。奥羽山系でも繁殖が確認されなくなっている。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 植林による壮齢林から密生人工林への変化や、農地や牧場の放棄による樹林化、林業の衰退、太陽光発電開発による狩り場及び食物の減少、風力発電におけるバードストライクや飛行障壁、営巣地近くで工事など人為的行為が行われることによる影響がある。また各種汚染された獲物や駆除された有害獣を摂食することによる有害物質の体内蓄積や鉛中毒、感染症が懸念される。また、カメラマンや過度の調査による外圧も多くなっている。

■**文献等番号** 7、8、16、17、19、28、29、34、35、36、38、39、

(執筆：鳥類分科会)

## ツミ

*Accipiter gularis*

タカ目  
タカ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

■**選定理由** 宮城県内の生息地は局所的で個体数は少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 九州以北で夏鳥だが西日本では少ない。春と秋に日本各地で渡りが見られる。平地から亜高山までの林で繁殖するが、都市近郊での繁殖も記録されるようになった。

宮城県では夏鳥として平地から低山帯にかけて記録があるが少ない。1990年代に一時仙台市青葉区台原森林公園で繁殖の記録があり、本県においても都市近郊の環境に適応した生息が確認された。しかしその後は生息情報が少なく、近年加美町や蔵王町で繁殖が確認された。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 林内や林縁で狩りをすることが多く、過去に行われた針葉樹の広範囲の一斉造林や、手入れされなくなった二次林は樹木が密生するために採食環境が悪化している。また都市近郊の場合、人間社会から排出される各種有害物質で汚染された獲物を捕っているため、その体内蓄積が懸念される。

■**文献等番号** 1、6、10、17、28、29、35、36、39、40

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：斎藤 憲二)

## ハイタカ

*Accipiter nisus*

タカ目  
タカ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

■**選定理由** 越冬期は普通に見られるが、繁殖期の記録は少なく、この時期目立ちにくさを考慮しても繁殖個体数は減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 中国、四国地方以北では留鳥、それ以南では冬鳥または漂鳥である。平地から山地の林に生息し、林内や周囲の開けた場所で狩りをする。宮城県では留鳥として沿岸から平野、丘陵、山地に至る県内各地で観察されるが個体数は少ない。冬期は北方から移動してきた個体が増えるため、各地でよく観察されるようになり、市街地に現れることもある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 林内や林縁で狩りをすることが多く、過去に行われた針葉樹の広範囲の一斉造林や、手入れされなくなった二次林は樹木が密生するために採食環境が悪化している。

■**文献等番号** 1、2、6、7、8、10、17、28、29、30、33、34、35、36、39、40

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：佐藤 賢二)

## オオタカ

*Accipiter gentilis*

タカ目  
タカ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

■**選定理由** もともと個体数が少ない種である。一時期個体数の増加傾向が見られていたが、近年再び減少傾向に転じている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 主に本州・四国・九州に生息する分布の狭い固有種の亜種。九州以北では留鳥として平地から山地の農耕地や草地などの開けた環境が混在する林に生息する。

宮城県では留鳥として沿岸部から平野部、山間部に至る県内各地に生息する。特に冬季は湖沼や河川敷など獲物となる鳥が集まる環境でよく見られる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵地の開発や植林の荒廃による営巣に適した環境の減少、特に営巣に適した大径木の減少や、採食環境の悪化による減少が懸念される。

■**文献等番号** 1、2、6、7、8、10、17、25、26、27、28、29、30、33、34、35、36、39

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## チュウビ

*Circus spilonotus*

タカ目  
タカ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 EN
------------	-----------

■**選定理由** アジア東部産の亜種。湿原の生態系の頂点に立つ。河川を中心に生息環境であるヨシ原が減少している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥または留鳥。北海道から東北地方北部、中部地方や近畿地方のいくつかの県では繁殖している。広いヨシ原や草原に生息し、非繁殖期には農耕地や河川、湖沼などにも出現する。

宮城県では冬鳥として9月から4月にかけて見られる。沿岸および平地の河川、湖沼などのヨシ原に生息しているが、周辺の水域や農耕地でも記録されている。大崎市蕪栗沼などで越冬する個体も確認されている。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 海岸線の湿地周辺や河口域のヨシ原はわずかしか残っており、さらに埋め立てや河川の改修により河原のヨシ湿地や草地など、生息環境の減少が懸念される。

■**文献等番号** 1、2、7、8、17、28、29、35、36、40

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## オオワシ

*Haliaeetus pelagicus*

タカ目  
タカ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 VU
------------	-----------

■**選定理由** 極東北部だけに分布する希少種で世界的に数が少ない。宮城県は定期的な越冬地の太平洋側の南限になっている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥として主に東北地方中部以北に渡来する。越冬地は海岸沿いが多く、北海道東部沿岸では特に数が多い。

宮城県では冬鳥として渡来し、11月下旬から3月にかけて観察される。特に1、2月の記録が多い。魚類を主な食物とするため、主に松島湾より北の海岸沿いにかけてと伊豆沼などの平野部内陸湖沼で見られる。オジロワシより観察記録は少なく局所的である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 湖沼、河川においては農業に汚染されている魚から摂取する有害物質の蓄積が懸念される。また、駆除後、放置された有害獣の死骸を摂食することによる鉛中毒の影響も懸念される。

■**文献等番号** 2、7、8、17、28、29、30、35、36、39

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：瓜生 篤)

## オジロワシ

*Haliaeetus albicilla*

タカ目  
タカ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 VU
------------	-----------

■**選定理由** 世界的には減少が目立つ希少種である。国内の繁殖地である北海道では繁殖個体数が増えているようだが、宮城県における越冬個体数は少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥として日本に渡来するが、北海道では少数が留鳥。冬は北海道全域と本州太平洋沿岸では関東地方、日本海沿岸では若狭湾までの地域で越冬する。越冬地は海岸沿いが多く、内陸の湖沼、河川などにも出現する。

宮城県では冬鳥として渡来し、11月下旬から3月にかけて見られる。魚類を主な食物とするため、海岸沿いや沿岸部での観察記録が多い。この他伊豆沼などの内陸湖沼や大きな河川沿いでも見られる。山地のダム湖での記録もある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 湖沼、河川においては農業などに汚染されている魚から摂取する有害物質の蓄積が懸念される。また、風力発電機によるパードストライクの影響も懸念される。

■**文献等番号** 2、7、8、15、17、28、29、30、35、36、39

(執筆：鳥類分科会)



(撮影：本田 敏夫)

## サシバ

*Butastur indicus*

タカ目  
タカ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
VU



(撮影：本田 敏夫)

- 選定理由** 夏鳥で里山を特徴付けるタカであるが生息数は多くはない。里山環境の開発や荒廃によって個体数が減少している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州以南九州までに夏鳥として渡来する。平地から山地の林に生息し、特に谷沿いに農耕地が入り込んでいる丘陵地に生息していることが多い。繁殖が確認されているのは青森県以南である。宮城県では夏鳥として4月上旬から見られる。県内全域で記録されているが、頻度は低く、特に平野部や南三陸の沿岸地域では少ない。標高1000m以下の山地、丘陵水田が林に入り込んだいわゆる里山環境に生息している。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 圃場整備が丘陵農耕地まで行われており、水路もコンクリート化のために食物動物の減少や山間部の放棄された水田が樹林化することにより採食環境が悪化している。また近年、農地での害獣対策で電気柵が設置されることにより、狩りが行えなくなっていることも懸念される。
- 文献等番号** 1、6、10、11、17、28、29、35、36、39

(執筆：鳥類分科会)

## アオバズク

*Ninox japonica*

フクロウ目  
フクロウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
-



(撮影：竹丸 勝朗)

- 選定理由** 市街地にも生息する小型のフクロウだが営巣環境の悪化に伴い、市街地では次第に見かけなくなっている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国に生息する夏鳥で東日本以西では普通。平地から山地の開けた場所に接する林に住むが、市街地の公園や緑地などにも生息する。薄暮時に昆虫などを捕食する。宮城県では夏鳥として5月から9月に平地の市街地から丘陵にかけて見られる。公園や神社、お寺など太い木が残るところで夜間よく鳴くことから比較的観察されやすいが、生息観察地は減少している。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 樹洞に営巣するために、営巣に適した樹洞の存在が不可欠だが営巣木となる樹洞のある大径木が少なくなり、繁殖環境が悪化している。また、食物となる昆虫類が減少すること、農業汚染された食物の摂取による体内蓄積が懸念される。また、カメラマンによる営巣木への接近や長時間にわたる滞在や追いまわしが直接の脅威となっている。
- 文献等番号** 1、6、10、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)

## コノハズク

*Otus sunia*

フクロウ目  
フクロウ科

情報不足 (DD)

2016  
要注目種

環境省  
-



(撮影：杉野 目斉(秋田県))

- 選定理由** 森林の伐採により営巣樹洞のある大径木が少なくなり、営巣環境の悪化とともに生息個体数も少なくなっている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国に生息する夏鳥。平地から山地の林に生息し夜間活動して主に昆虫類を捕る。樹洞営巣のために繁殖には適当な大きさの樹洞の供給が不可欠である。宮城県では栗駒山から蔵王山に至る脊梁山地から低地丘陵で記録されているが、個体数は少ない。繁殖期の特徴的な鳴き声で生息を確認することができるがその期間は短いとされ、情報不足である。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 営巣木となる樹洞のある大径木が少なくなり、繁殖環境は悪化している。また、植林による広葉樹から針葉樹への樹種転換による生息可能域の減少が懸念される。
- 文献等番号** 1、6、10、17、28、29、34

(執筆：鳥類分科会)

## オオコノハズク

*Otus semitorques*

フクロウ目  
フクロウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
要注目種

環境省  
-



(撮影：佐藤 賢二)

- 選定理由** 森林の伐採により営巣に適した樹洞のある木が少なくなり、営巣環境の悪化とともに生息個体数も少なくなっている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国に生息する留鳥または漂鳥。寒冷地のもは、冬は暖地に移動する。夜林内で活動し、樹洞で営巣する。多雪時や寒気が厳しいときは食物をとれずに衰弱して保護される事も多い。宮城県では留鳥として平地から山地の林に生息するが、夜間林内で活動し、頻繁に鳴くことも少ないので観察されにくい。仙台市太白区の秋保馬場と郡山、若林区藤塚、加美町青野、大河原町金ヶ瀬、女川町足島、大崎市燕栗沼などで記録されている。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 営巣木となる樹洞のある木が少なくなり、繁殖環境は悪化している。また、植林による広葉樹から針葉樹への樹種転換によって森林環境が単調化するため、食物資源の減少が懸念される。
- 文献等番号** 1、2、7、15、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)

## トラフズク

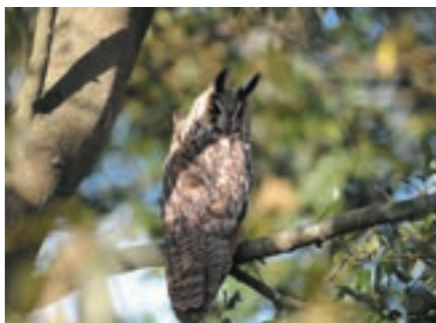
*Asio otus*

フクロウ目  
フクロウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-

環境省  
-



(撮影：嶋 孝弘)

- 選定理由** 留鳥として生息するが、個体数は少ない。寺社林や住宅の防風林の消失など生息環境が悪化している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として本州中部以北の平地から山地の林、果樹園、河川敷の林などで局地的に繁殖する。宮城県では繁殖記録もあるが、観察の多くは冬季である。日中はじっとしていることもあり目立ちにくく観察されにくい。大崎市燕栗沼、仙台市荒井、蒲生海岸、旧河北町追波川などで記録されているが個体数は少ない。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 海岸線の整備や河川の整備など、特に日中の安全な休息地となる灌木の減少による生息環境の悪化や農薬の使用によって、獲物となる小動物が汚染され、その体内蓄積が懸念される。
- 文献等番号** 1、2、28、29

(執筆：鳥類分科会)

## コミミズク

*Asio flammeus*

フクロウ目  
フクロウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
要注目種

環境省  
-



(撮影：本田 敏夫)

- 選定理由** 平野部の草地の減少や農地整備の大規模化、道路の建設や河川の整備などによる生息環境の悪化で渡来数が減少している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 冬鳥として渡来し、全国の平地から山地の農耕地や草原などの開けた場所に生息する。日中は草藪などで過ごし夕方から活動を始める。日中の安全な休息地となる草藪が減少するとあまり見られなくなる。宮城県では冬鳥として沿岸から内陸の平野部で見られる。伊豆沼周辺、亶理町など草藪のある農耕地や草原のほか河川敷や湖沼周辺に生息しているが個体数は少ない。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 水田の大規模化や河川の整備など、特に日中の安全な休息地となる草藪の減少による生息環境の悪化や農薬の使用によって、獲物となる小動物が汚染され、その体内蓄積が懸念される。
- 文献等番号** 2、7、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)

## アカショウビン

*Halcyon coromanda*

ブッポウソウ目  
カワセミ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 要注目種	環境省 -
--------------	----------

- **選定理由** 渡来数が少ない。自然林の減少と共に渡来地が縮小している。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道以南沖縄まで生息する夏鳥で、暖地に多い。樹洞に営巣するため山地の落葉樹が多い森林に好んで生息する。北日本では日本海側で記録が多い。宮城県内では夏鳥として5月から10月に栗駒山、船形山、蔵王山麓周辺などの山地に生息するが個体数は少ない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 食物となる魚類、両生類、爬虫類が豊富な自然林の沢沿いに生息する。県内でまとまった面積で存続している自然林はごくわずかであり、森林伐採により生息地の減少が危惧される。
- **文献等番号** 1、6、10、17、28、29



(執筆：鳥類分科会)

(撮影：瓜生 篤)

## ヤマセミ

*Megasceryle lugubris*

ブッポウソウ目  
カワセミ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 要注目種	環境省 -
--------------	----------

- **選定理由** 平地から山地にかけての河川の中上流部、山地の湖沼に生息するが、ダムの建設や護岸整備などにより河川が貧弱になることや営巣環境である土崖がコンクリートで埋められることにより生息環境が悪化し、個体数が減少した。現在も個体数は少ない状態が続いている。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として九州以北に分布し、山地の溪流や湖沼に生息する。冬には低山の河川や海岸付近でも見られる。宮城県内では留鳥として低山から山地の河川の中上流部に生息するが、現在生息が確認されているのは上流域に限られる。南三陸では海岸でも生息していたが、現在は生息していない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ダム建設や護岸整備、営巣環境のコンクリート化による生息環境の悪化に加え、人間社会から排出される各種有害物質で汚染された獲物を捕ることによる、その体内蓄積が懸念される。近年、カメラマンによる長時間におよぶ撮影圧が懸念される。
- **文献等番号** 1、2、6、7、10、17、28、29



(執筆：鳥類分科会)

(撮影：嶋 孝弘)

## チゴハヤブサ

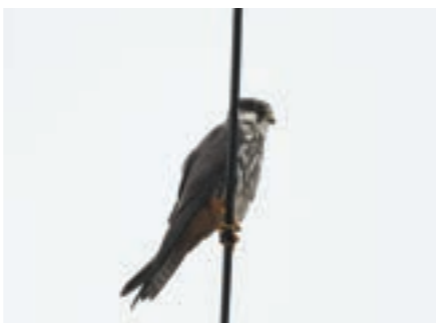
*Falco subbuteo*

ハヤブサ目  
ハヤブサ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 要注目種	環境省 -
--------------	----------

- **選定理由** 繁殖分布域の拡大の兆候が見られ、県内でも繁殖しているが局所的で個体数は少ない。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として渡来し、北海道が主な繁殖地であるが本州中部以北でも局地的に少数が繁殖する。平地の農耕地や草原、林などに生息し、カラスなどの古巣を利用し、樹木だけではなく鉄塔などにも営巣している。宮城県内では夏鳥として平地で見られるものの局所的で個体数は少ない。仙台市や栗原市、加美町、大崎市で繁殖の記録がある。川崎町、亶理町でも観察されているが、一時的である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 農村近郊の環境に生息するため、人間社会から排出される各種有害物質で汚染された獲物を捕ることによる、その体内蓄積が懸念される。
- **文献等番号** 1、6、10、17、28、29、31、34、39、40



(執筆：鳥類分科会)

(撮影：嶋 孝弘)

## チゴモズ

*Lanius tigrinus*

スズメ目  
モズ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 CR
---------------	-----------

- **選定理由** 全国的に渡来数が減少している夏鳥。宮城県でも近年、渡来数は著しく減少している。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国の平地から低山の林縁部や疎林に夏鳥として渡来する。従来から生息数は多くはなかったと考えられるが、近年、日本での繁殖個体数は著しく減少している。宮城県内では少ない夏鳥として渡来し、平地から山地の開けた農耕地などと林が混在するような環境に生息する。近年渡来地は減少し、1990年代の渡来地として仙台市青葉区花壇、太白区富沢、登米市新田、石巻市上品山、気仙沼市徳仙丈山がある。1998年以降、県内における観察記録がない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境を含め、減少の要因は不明である。生息地に不用意に近づくと繁殖放棄など直接の脅威となる。
- **文献等番号** 1、6、10、11、17、28、29



(執筆：鳥類分科会)

(撮影：工藤 芳郎 (山形県))

## アカモズ

*Lanius cristatus*

スズメ目  
モズ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 EN
---------------	-----------

- **選定理由** 全国的に渡来数が減少している夏鳥。宮城県でも近年、渡来数は著しく減少している。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として北海道から九州まで渡来する。平地から山地の疎林、灌木のある草地や農耕地、果樹園などに生息するが、近年全国的に減少している。宮城県内では少ない夏鳥として、4月から11月に平地から山地の開けた農耕地などで見られる。近年渡来地は激減し、1990年代の渡来地として蔵王町賽の河原、仙台市井土浦、岩沼市下野郷、東松島市大曲、石巻市上品山があるが観察記録は少ない。1998年以降、県内における観察記録がない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 越冬地環境の悪化が減少の一因であると考えられている。宮城県内での減少の要因について、生息環境の変化を含め不明である。生息地に不用意に近づくと繁殖放棄など直接の脅威となる。
- **文献等番号** 1、6、7、10、11、17、28、29



(執筆：鳥類分科会)

(撮影：竹丸 勝朗)

## コシアカツバメ

*Cecropis daurica*

スズメ目  
ツバメ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

- **選定理由** 全国的に分布が縮小している夏鳥。宮城県でも渡来数は著しく減少している。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として北海道から九州まで渡来する。海岸部に近い平地から山地の市街地や集落の農耕地に生息する。人家の軒下に泥でとっくり型の巣を作る。近年、分布が縮小し、局所的となっており、北海道や東北から姿を消している。宮城県内では夏鳥として市街地で見られる。過去に石巻市、旧河北町、気仙沼市、旧志津川町、旧歌津町、大河原町、柴田町、旧築館町、塩釜市、松島町で繁殖記録があるが、その後繁殖記録が途絶えた。近年は一時的に記録されるのみであったが、2021年の繁殖期に利府町で生息が観察され、2022年に繁殖を確認した。加えて2023年に松島町でも繁殖が確認された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地が市街地ということもあり、人との共存が重要である。また、新築される建物の外壁は巣が落ちやすく利用できない。さらに市街地周辺で巣の材料となる泥を採るところも少なくなっていることで、営巣環境が悪化している。
- **文献等番号** 1、6、10、17、28、29



(執筆：鳥類分科会)

(撮影：嶋 孝弘)

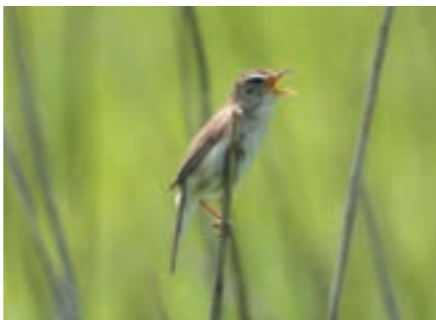
## コヨシキリ

*Acrocephalus bistrigiceps*

- 選定理由** やや乾いたヨシ原など、生息に適した湿性草地環境に敏感である。生息地の環境の変化には弱いと思われ、集団繁殖地の消滅が見られる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として九州以北の高原などに渡来するが繁殖地は局所的である。宮城県内でも夏鳥として渡来し、北上川や名取川、阿武隈川の下流域河川敷、沿岸のやや乾いたヨシ原で局所的に繁殖する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 繁殖環境は河川の高水敷ヨシ原が多いが、人的に整備された環境であることから、環境変化が起こりやすく、このような環境の維持について将来的な不安がある。

(執筆：鳥類分科会)

準絶滅危惧 (NT)	
2016	環境省
-	-



(撮影：本田 敏夫)

## オオセツカ

*Locustella pryeri*

- 選定理由** アジア東部のごく一部にのみ分布する希少種である。宮城県では、渡りの時期に少数が出現するが、過去には繁殖の記録がある。近年継続した越冬が記録された。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥または漂鳥。平地のヨシ原や草原などで繁殖し、青森県、秋田県、茨城県、千葉県の一部が繁殖地として知られている。寒冷地で繁殖する個体は冬には関東以西に移動する。宮城県では少ない冬鳥として県北内陸平野部湖沼や沿岸部の湿性草地で見られる。宮城県は青森県で繁殖し、茨城県や千葉県で越冬する個体群の移動ルートにあたり、春と秋に記録が多いが、近年、亶理町で冬季も継続して観察されている。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 本種はヨシとチガヤが混在し、やや乾燥気味の湿性草地に生息するが、このような環境は河川整備や農地開発などにより容易に変化し、生息地の減少あるいは消失する可能性がある。
- 文献等番号** 2、3、5、8、28、29、44

(執筆：鳥類分科会)

絶滅危惧II類 (VU)	
2016	環境省
VU	EN



(撮影：竹丸 勝朗)

## カワガラス

*Cinclus pallasii*

- 選定理由** 沢や河川において砂防堤防の建設とともに、個体数が減少した。現在はさらに生息域が上流へと狭くなり、個体数も減少している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 留鳥として北海道から屋久島の河川、溪流沿いに生息する。宮城県では留鳥として山地の河川の中上流部に生息するが、生息域はより上流部の溪流域に変化している。南三陸地域の小河川にも生息しているが、激減している。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川や溪流における砂防ダムによって生息環境の変化があれば繁殖の直接の脅威となる。また、中上流部の河床部の整備は河川生態系の貧弱化につながり、生息環境の悪化が懸念される。
- 文献等番号** 1、2、6、7、10、17、28、29

(執筆：鳥類分科会)

準絶滅危惧 (NT)	
2016	環境省
-	-



(撮影：瓜生 篤)

## イワヒバリ

*Prunella collaris*

- 選定理由** 高山の露岩地周囲に生息するため、生息環境自体の面積が少ない。宮城県における繁殖期の記録は刈田岳から馬の背周辺のみであり、個体群が孤立して存在し、生息数も少ない。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州北部および中部の高山の岩場や草原で繁殖する。冬は雪の少ない亜高山から低山の主に岩場に移る。岩の上で観察されることが多く、人に対する警戒心は非常に少ない。宮城県の繁殖期は南蔵王および中央蔵王で記録があるが、営巣場所は刈田岳から熊野岳に至る馬の背のみであり、生息数は数羽程度である。越冬期の記録として仙台市青葉区作並、川崎町峯々温泉、白石市材木岩、大崎市鳴子ダム、船形山山頂、仙台市大倉ダム、亶理町四方山があるが一時的な観察記録である。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 県内の繁殖地一帯は観光地であり、生息地に不用意に近づくと繁殖放棄など直接の脅威となる。また、自然界の捕食者であるキツネが生息地に出現しており、その影響が懸念される。
- 文献等番号** 1、6、10、28、29

(執筆：鳥類分科会)

絶滅危惧I類 (CR+EN)	
2016	環境省
要注目種	-



(撮影：小室 智幸)

## ノジコ

*Emberiza sulphurata*

- 選定理由** 生息に適した環境に不連続に分布する。宮城県を含め繁殖地は日本以外に知られていない。繁殖期の生息環境選択の中が狭いことから生息地の環境の変化には弱いと思われ、個体数は少ない。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 夏鳥として中部地方以北青森県まで分布し、局所的に繁殖する。平地から山地の、溪畔林や湿地周辺のよく茂った林床を持つ林や疎林に生息する。宮城県では夏鳥として溪畔林や湿地周辺のよく茂った林床を持つ林や疎林に生息する。生息適地環境の変化により分布も変化し、極めて局所的である。渡りの時期には平地でも記録されている。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 繁殖環境は二次林と造林地が混在し、さらに周囲に草地や水田などの農耕地があるような人的な環境であることが多いことから、林相の変化で繁殖地が失われている。このような環境の維持について将来的な不安がある。
- 文献等番号** 1、6、10、11、17、28、29、34

(執筆：鳥類分科会)

準絶滅危惧 (NT)	
2016	環境省
要注目種	NT



(撮影：本田 敏夫)

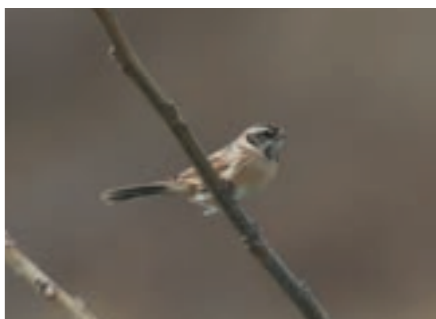
## コジュリン

*Emberiza yessoensis*

- 選定理由** この種は日本を含め東アジアのごく限られた地域にのみ分布する。宮城県では渡りの時期や越冬に少数が生息するのみである。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 関東地方東部と東北地方北部の平野部の湿原、九州中部山地の草原で繁殖する。冬は関東地方以西の草原やヨシ原などで越冬する。宮城県では少ない冬鳥として内陸平野部に渡来する。下層部が密生した、やや湿り気のある草地を好み、休耕田や耕作放棄地、河口周辺のヨシ原で確認されている。近年、亶理町吉田で少数が越冬している。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 主な生息地である湖沼周辺や海岸線の干潟周辺、河口域および海岸線後背湿地のヨシ原、休耕田はわずかしか残っており、さらに防災林整備による埋め立てによって生息環境の減少消失が懸念される。
- 文献等番号** 2、8、17、28、29、44

(執筆：鳥類分科会)

絶滅危惧II類 (VU)	
2016	環境省
VU	VU



(撮影：田中 哲郎)

動物編

爬蟲類  
兩生類



## 両生類・爬虫類

### 両生類・爬虫類を取り巻く環境について

日本の両生類、爬虫類相は南西諸島や西日本で多様性が高く、東日本、北日本では多様性が低くなっている。宮城県内に生息する両生類、爬虫類も多いとは言えないが、分布の北限、南限になっている種がいたり、トウキョウダルマガエルトノサマガエルのように複雑な分布の境界になっている種群もあり、生物地理学的に興味深い。

2016年のレッドデータブックの発行以来これまでの間、宮城県内の両生類、爬虫類を取り巻く生息環境に著しい変化は無かった。しかし、近年、県内の山間部において、太陽光発電や風力発電、廃棄物最終処分地等のための土地改変が盛んになってきており、今後も小規模なものから大規模なものまで開発が計画されているため、高度経済成長期も生き延びてきた山地性の種にも危機が及んでいると考えられる。山地を中心に分布する本県産のサンショウウオ類は、以前からいずれかのカテゴリーでレッドデータリストに記載されていたが、無尾目では山地性の種でリストに入っていない種があったので、2021年版のレッドリストからヤマアカガエルとタゴガエルをNTとして追加した。

この類の開発のうち一部の、里山と言われるような人里に近い地域のもは、地元住民の反対運動などもあって計画が中止されるケースもあり、反対運動自体は必ずしも野生動植物保護の立場に立ったものではなくても結果的に動植物保護に資することとなっている場合もある。一方で地域生活に直接関わりの無い、手付かずの自然が豊かに残っている地域での開発に対しては、目立った反対運動も無く、法的に有効な歯止めもないため、開発計画が進行していることが多い。そうした地域こそ、他地域で消滅してしまった希少種の最後の砦になっている場合が少なくないので問題は深刻である。現時点で宮城県内でのこうした開発行為によって絶滅の危険度が増した両生類、爬虫類は無いが、これらの種は広域に移動できないものが多いので、大規模な土地改変が行われると、その地域の個体群は大きなダメージを受けると考えられる。従って、今後も注意深く見守っていく必要がある。

一方、環境影響評価の対象にならないような小規模開発による蚕食的な土地改変も問題となってきた。これらの中には山地などの開発の他に休耕田等の放置されていた土地を転用するケースも見られる。水田は言うまでもなく両生類にとって重要な生活環境であるが、休耕田となっても湿田であれば、何らかの形で両生類の生息場所となっている場合が多い。畑作に転用された場合も産卵や幼生の生活の場ではなくなるが、成体や爬虫類の生活場所としては利用されている。しかし、太陽光発電所となった場合には、当然ながら地表面に届く太陽光は激減し、植生(地表)の管理のされ方によっては、両生類、爬虫類を含めた地表性の動物の生息環境としては好ましくないものに変化してしまうと考えられる。また、水田を含めた農耕地に関して言えば、使用される農薬が脊椎動物への影響を考慮したものに変わってきた中で、両生類、爬虫類への直接的な影響は減っていると考えられるが、その一方で、殺虫剤のターゲットである昆虫を含む節足動物などに対する影響は甚大であるとされており、それら餌動物の減少が水田周辺を生息場所とする両生類・爬虫類の生存に少しずつ悪影響を及ぼしている可能性は否定できない。これは、以前に挙げていた農地の区画整理を含む土地改変による影響ほど急激な変化がない分、見過ごされてきたが、今後、注意していく必要がある。

また、この間の調査により、放置されたゴルフ場跡地の自然度が意外と高く、敷地内の水辺やそこに隣接する林内に出現する両生類の種数が多い場合があることがわかってきた。これまで、自然状態に近い環境が破壊されることにのみ目を向けがちであったが、人の手が加わったのちの環境であっても現状で多くの生物が生息している場所の保全には気を配る必要があることがわかった。同様に、植林地は人工林ということでややもすると軽視されがちであるが、40～50年以上経過した林は植樹された種以外の樹木も侵入したり低木層、草本層も発達したりして、両生類、爬虫類を含む地表生の動物にとって良好な環境となっている。しかし、その程度の年数が経過すると、林業としての必然性から伐採されることがあり得、その際に、現代的な施業では大型の重機が入って作業するために、例えそれが間伐であっても単に目的の樹木が伐採されるだけでなく、低木層以下の植生や微地形が大きく破壊される状況がしばしば観察される。このような改変は両生類、爬虫類の生息にとっては深刻な問題であるが、これらの施業は「林地の開発」には当たらないため、種々

の規制にはかからず、「開発」であれば、諸手続きの際に環境負荷の低減努力がチェックされる場所であるが、それが無い分、重大な環境影響があると考えられる。したがって、林業による山地環境への影響も、他のいわゆる開発行為による山地の環境破壊と同様に注視すべき問題だと思われる。

また、開発行為が実施される場合、改変される土地本体の生息環境が悪化するのはもちろんであるが、そこに至る道路の交通量増大による轢死の増加が懸念される。定量的な調査ではないが、仙台市郊外の道路で継続的に観察を行ったところ、交通量が少ないにもかかわらずアカハライモリやアカガエル類を主とする無尾目の轢死が多く、加えてヘビ類の轢死体もしばしば確認された。このことは、特段の開発行為がなくとも交通状況の変化などにより両生類、爬虫類の生息が脅かされる恐れがあることを示唆している。

### カテゴリーの変更

2016年版RDBからの主な変更点として、まず、トノサマガエルのDDからVUへの変更が挙げられる。これまで、宮城県内では古いトノサマガエルの生息記録はあったものの標本を含めた確実な記録が無く、トウキョウダルマガエルの誤同定の可能性も高かったことからDDとしていたが、2018年に県内にも生息しているとの報告があり、VUとした。また、アカウミガメも同じくDDであったが、県内海岸での産卵の情報が蓄積され、継続的であると考えられたのでENとした。

### リストへの追加

一方、この間の生息情報を考慮した結果、ヒガシニホントカゲについては生息環境の悪化が懸念される一方で目撃情報が少ないため、すでにリストに挙げられているタカチホヘビやシロマダラと同じ状況にあると考え、DDとしてリストに加えることにした。また、上述のように山地の生息環境の悪化が考えられることから、ヤマアカガエルとタゴガエルをNTとして追加した。

### 分類学的な変更に伴うリストの変更

両生類では、ツチガエル(*Glandirana rugosa*)から主に東日本に生息するグループがムカシツチガエル(*Glandirana reliquia*)として区分されたためリストの学名と和名を変更した。これにより、本県産のツチガエルはムカシツチガエルとされることになったが、トウキョウダルマガエルトノサマガエルの関係と同様に山形県側にはツチガエルが分布しているので、県境付近に生息可能な環境が存在する地域の分布については、今後、注意深く調査・検討をする必要がある。また2021年にリストに加えたタゴガエルの学名は、これまで本種の亜種とされていたオキタゴガエルとヤクシマダゴガエルが2023年に独立種とされたため、*Rana tagoi tagoi*から*Rana tagoi*に変更となった。爬虫類では、ニホンスッポンの学名について近年のDNA解析を踏まえた検討の結果、*Pelodiscus japonicus*という学名が有効となったので、リストの学名を変更した。

加えて、レッドリストに含まれない種についての分類学的な変更についても本県に関係するものをここにまとめておく。アズマヒキガエルはこれまではニホンヒキガエルの亜種とされていたが別種とするという研究が発表された。これにともない学名が*Bufo formosus*に変更された。ニホンアマガエル(*Dryophytes japonicus*)では近畿地方を境として東日本のものを別種ヒガシニホンアマガエル(*Dryophytes leopardus*)とする記載があった。

### その他

ニホンイシガメとニホンスッポンについては、いずれも東北地方には自然分布しないとしている文献も見られるが、そもそも宮城県内での捕獲例が少なく、現代的なDNAを用いた研究などでも宮城県産のサンプルを使った解析は見られず、はっきりと宮城県産のこれらの亀が国内移入種であるとする証拠は無いのが現状である。したがって、自然分布で無い可能性が高いものの、引き続きDDとしてリストに残すこととした。

また、2023年にはセンザンサンショウウオが、従来のトウホクサンショウウオから分けられる形で報告された。しかし、両生類の分類を専門とする研究者からは、この論文に対する懐疑的な意見が多数挙がっており、



## バンダイハコネサンショウウオ

*Onychodactylus intermedius*

有尾目  
サンショウウオ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

■**選定理由** 本種の生存のためには良好な森林環境と溪流が必要で、個々の繁殖集団は常に絶滅の脅威にさらされていると考えられるため。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は2014年にハコネサンショウウオから区分される形で新種記載された種で、県内では蔵王より南の奥羽山脈と阿武隈山地に生息する。溪流に産卵し、幼生は1年以上水中に留まる。成体は林床で生活するが、繁殖期以外に成体を見つけるのは難しい。本種が区分されたことで、本県にはハコネサンショウウオは分布しないことになった。

■**形態ならびに近似種との区別点** トウホクサンショウウオ、クロサンショウウオに比べると尾が長くスマートな印象。外見だけからキタオウシュウサンショウウオと区別するのは困難である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 近年は風力発電施設や廃棄物の処分場など、人里離れた山中の環境が改変されるケースも多く見られることから、山地性の本種の生息環境も安泰ではなくなった。

■**特記事項** 本県南部が本種の太平洋側での分布の北限である。

(執筆: 太田 宏)



(撮影: 伊藤 真)

## アカハライモリ

*Cynops pyrrhogaster*

有尾目  
イモリ科

絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)

2016 LP	環境省 NT
------------	-----------

■**選定理由** 平地から標高の高い山地まで分布する本種であるが、特に都市近郊では激減していると考えられるため。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 繁殖期には成体が水中で見られる。そして繁殖期が春から夏まで比較的長く続くために結果として水中で良く発見されるが、繁殖期以外、成体は陸上で生活する。都市近郊の水田ではほとんど見られなくなったが、山に近い水田やため池、山間部の湖沼では、まだまだ見られる。

■**形態ならびに近似種との区別点** 本州には近似種は居ない。腹が赤ければ本種であるが、本県産のものには、赤い部分が少ないものもある。トウホクサンショウウオやクロサンショウウオに比べると耳腺が発達しており、皮膚がざらざらした感じである。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 都市部においては、生息環境そのものの消失、水田地帯では農地改良、耕作方法の変化や農業による餌動物の減少により数を減らしたと考えられる。また、近年は山地開発の影響での生息環境の悪化が危惧される。

(執筆: 太田 宏)



(撮影: 太田 宏)

## タゴガエル

*Rana tagoi*

有尾目  
アカガエル科

準絶滅危惧 (NT)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

■**選定理由** 本種の生存のためには良好な森林環境と溪流が必要で、近年新たに生息地減少の脅威にさらされていると考えられるため。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 山地を中心に県内に広く分布している。溪流の伏流水中に産卵し、成体は林内で生活する。分布の中心である山地の開発行為による影響を受けている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 下顎から胸部にかけて黒褐色の点が多く黒っぽく見える点で他のアカガエル類と区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** これまで、比較的良好に保たれていた山地の生息地において、近年、廃棄物処分場や、風力発電、太陽光発電のための開発が行われており、新たな脅威が及んでいる。

■**特記事項** 2023年に、これまで本種の亜種とされていたオキタゴガエルとヤクシマタゴガエルが独立種とされたため、学名が変更された。

(執筆: 太田 宏)



(撮影: 伊藤 真)

## ヤマアカガエル

*Rana ornativentris*

無尾目  
アカガエル科

準絶滅危惧 (NT)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

■**選定理由** 本種の生存のためには良好な森林環境と水辺が必要で、近年新たに絶滅の脅威にさらされていると考えられるため。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 里山から標高の高い山まで県内に広く分布している。早春に池や沼などに産卵する。成体は水辺から離れた林床でも見られる。分布の中心である山地の開発行為による影響を受けている。

■**形態ならびに近似種との区別点** ニホンアカガエルでは背側線が鼓膜の後方でほとんど曲がらないが、本種では明らかに外側に湾曲している。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** これまで、比較的良好に保たれていた山地の生息地において、近年、廃棄物処分場や、風力発電、太陽光発電のための開発が行われており、新たな脅威が及んでいる。また、山間の道路の交通量の増加に伴い轢死も増えている。

(執筆: 太田 宏)



(撮影: 太田 宏)

## ムカシツチガエル

*Glandirana reliquia*

無尾目  
アカガエル科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

■**選定理由** 平野から山地まで分布するが、平野や山あいの溜池の消滅、土地利用形態の変化により減少しているため。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は2022年にツチガエルから区分される形で新種記載された種で、関東から東北地方の太平洋側に分布していて、北限は岩手県内にあるとされる。県内では、池沼や水田などを中心に平野部から低山にかけて生息しているが、都市近郊では少なくなった。

■**形態ならびに近似種との区別点** 背中にいぼ状の突起が点在するのが特徴で他のアカガエル類とは識別しやすい。一方、ツチガエルとは幼生の腹面腺の分布に違いがあるとされるが、成体の形態、鳴き声で区別するのは難しい。山形県にはツチガエルが分布する。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 平野での開発や、山間部での耕作放棄で、生息環境が消失。幼生で越冬するため、冬期にも水環境が必要となる。農業による餌動物の悪化も脅威となる。

(執筆: 太田 宏)



(撮影: 太田 宏)

## トウキョウダルマガエル

*Pelophylax porosus porosus*

無尾目  
アカガエル科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

■**選定理由** 平野部から山地まで広く分布するが、近年、水田の耕作方法、土地利用形態の変化や宅地開発等により個体数が減少しているため。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 水田や湖沼などを中心に平野部から低山にかけて県内に広く分布している。なお、山形県には本種ではなく、トノサマガエルが分布している。

■**形態ならびに近似種との区別点** トノサマガエルと良く似ていて、混同・誤認されることも多い。本種の方が体長に比べて手足が短いとされるが、両者の変異が大きく区別が難しい場合もある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 農業による餌動物の減少や圃場整備による乾田化、減反による水田そのものの減少などによって生息環境が悪化・減少している。また、水田地帯の道路改良による交通量の増加に伴い轢死も増加している。

(執筆: 太田 宏)



(撮影: 太田 宏)

## トノサマガエル

*Pelophylax nigromaculatus*

無尾目  
アカガエル科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
要注目種

環境省  
NT

- **選定理由** 仙台平野には本種は分布しないが、近年、山形県境近くでの生息が確認された。県内では生息地が限られており絶滅の危機にあるため。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 一般には平地から低山の池沼や水田環境に生息するが仙台平野には生息していない。県内で確認されている生息地は山形県に近い1カ所のみである。
- **形態ならびに近似種との区別点** トウキョウダルマガエルに極似しているが外見上見分け難い。本種の方が体長に比べて手足が長いとされるが、両者の変異が大きく区別しにくいこともある。特に一瞬見た程度では判断が困難である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 山間地の水田の耕作放棄によって、生息環境そのものが失われる可能性がある。

(執筆：太田 宏)



(撮影：太田 宏、撮影地：山形県)

## アカウミガメ

*Caretta caretta*

カメ目  
ウミガメ科

絶滅危惧IB類 (EN)

2016  
DD

環境省  
EN

- **選定理由** 世界的に絶滅が危惧されている種であり、県内での産卵も見られるため。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内での主な産卵地は琉球列島から関東地方の太平洋岸とされる。本県でも散発的に海岸に死骸が打ち上げられているのが報告されるので、宮城県の沿岸部を恒常的に回遊している可能性は高い。加えて、県の南部で産卵が報告されているので、本種の産卵地の北限が本県と考えられている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 海洋汚染などの世界規模の環境破壊や、護岸工事による産卵地の破壊、漁業による混獲、卵も含めた食用の捕獲により、世界的に減少している。また、プラスチック製品の誤食による死亡なども問題になっている。
- **特記事項** 本県が産卵地の北限。

(執筆：太田 宏)



(撮影：仙台湾の杜水族館、飼育個体)

## ニホンイシガメ

*Mauremys japonica*

カメ目  
イシガメ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
NT

- **選定理由** 県内に生息していると考えられるが、目撃例が少なく、情報不足であるため。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 淡水性で池沼から溪流に住む。東北南部が北限とされており、本県のもものは自然分布ではない可能性もある。平野部から低山を中心に河川や湖沼、ため池などに生息していると考えられる。
- **形態ならびに近似種との区別点** 背甲は褐色で黄土色に近い場合もあり、はっきりしない暗色の模様がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発による生息地の消失や、外来種であるミシシッピアカミミガメとの競合による生息数の減少も懸念されている。

(執筆：太田 宏)



(撮影：仙台湾の杜水族館、飼育個体)

## ニホンスッポン

*Pelodiscus japonicus*

カメ目  
スッポン科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
DD

- **選定理由** 県内に生息していると考えられるが、目撃例が少なく、情報不足であるため。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は大産 (Pelodiscus sinensis) と同種と考えられていたが、近年の遺伝的な研究により、日本固有種であることがわかった。淡水性で底が砂泥質の沼や川などに住む。平野部を中心に河川や湖沼、ため池などに生息している。ただし、本県産のものが自然分布であるかどうかは不明。
- **形態ならびに近似種との区別点** 甲羅には他のカメの様な鱗板が見られず、柔らかな皮膚に覆われている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発による生息地の消失や、農業による餌生物の減少により生育環境が悪化していると考えられる。

(執筆：太田 宏)



(撮影：小池 花苗)

## ヒガシニホントカゲ

*Plestiodon finitimus*

有鱗目  
トカゲ科

情報不足 (DD)

2016  
-

環境省  
-

- **選定理由** 本県は生息範囲であるが目撃例が少なく、情報不足である。平野部から低山では開発等のため生息地が失われていると考えられるので今後も情報収集が必要であるため。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 県内全域の平野部から低い山地にかけて生息していると考えられる。昼行性で人里にも住むはずなのにニホンカナヘビに比べて目撃情報は少ない。住宅敷地内の舗装化や石垣の減少など、これまで人間と共存できていた生息環境が変化したこと起因する減少かもしれない。
- **形態ならびに近似種との区別点** ニホンカナヘビと間違われることもあるが、本種の方がずんぐりとして、体表はすべすべした印象がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 平野部では人間の住宅環境の変化、山地では種々の開発行為による生息地の攪乱により、生息数を減らす恐れがあると考えられる。

(執筆：太田 宏)



(撮影：菊池 彰人)

## タカチホヘビ

*Achalina spinalis*

有鱗目  
タカチホヘビ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 目撃例が少ないが生息地である山地の開発が進み、今後も注視が必要のため。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 県内では低地から山地に広く分布していると考えられるが、生息数が少ないためか、地中性、夜行性のため目撃例は少ない。林床のリター層や地中で生活し、ミミズなどを主に食べていると考えられている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 頭胴長は成体で20~40cm程度。背面は褐色ないし黄褐色で正中線上の鱗が黒い筋となっているのが特徴だが、幼体では目立たないこともある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 近年は風力発電や太陽光発電など、山間地の環境が改変される場合も多く、山地性の本種の生息環境も安泰ではなくなった。林道のアスファルト舗装により交通量が増加したところでは、轢死も増加している。

(執筆：太田 宏)



(撮影：細見 周平)

# シロマダラ

*Lycodon orientalis*

有鱗目  
ナミヘビ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 目撃例が少ないが生息地である山地の開発が進み、今後も注視が必要なため。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 県内では低地から山地にかけての森林に広く住んでいる。仙台郊外の道路上でも轢死体が発見されるが、夜行性のためか、生きている状態での目撃例は少ない。気仙沼市の離島、大島からの報告もある。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体色は淡灰褐色ないし灰褐色で黒褐色のはっきりした横縞があるので、見分けやすい。頭胴長は25~60cm程度。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 近年は風力発電や太陽光発電など、山間地の環境が改変される場合も多く、山地性の本種の生息環境も安泰ではなくなった。林道のアスファルト舗装により交通量が増加したところでは、轢死も増加している。

(執筆：太田 宏)



(撮影：相蘇 巧)

# 汽水・淡水魚類

動物編



## 汽水・淡水魚類

宮城県産の汽水・淡水魚類

宮城県内には、県南地域を集水域に含む阿武隈川水系、県北地域を集水域に含む北上川水系の二大水系のほか、名取川水系や七北田川水系、鳴瀬川水系のように、水源から河口まで県内を流れる中規模河川が複数存在する。県北沿岸部の南三陸地域には小規模河川も多い。また、平野部には伊豆沼、蕪栗沼など大小様々な池沼が見られ、丘陵地から山間部にかけては湿地や溜め池が点在し、河川の河口部周辺には井土浦や蒲生干潟といった干潟が形成されるなど、水環境は多様性に富む。

県内の汽水・淡水魚類相には、牡鹿半島を境に南北で違いが見られる。複数の河川と共に発達した平野部が広がる牡鹿半島以南の地域には、緩流部を好む温水性のコイ科魚類が多く生息し、またこれまで各地で遊漁対象として様々な魚種が放流されてきた。そのため生息種は多いが、外来種が種数全体に占める割合も高い。海岸線に沿って阿武隈川から七北田川までを繋ぐ貞山運河や、治水の目的で鳴瀬川と江合川の間に開削された新江合川など、水系間に構築されたネットワークも、平野部における外来種の分布拡大を助長していると考えられる。一方、海岸線がリアス式となる牡鹿半島以北の河川においては、確認される魚類の種数は少なく、回遊性魚類が全体に占める割合が高くなる。多くの河川が小規模な独立河川であり、低水温であること、緩流部となる下流域の流程が短いことで、生息種が限定されている様子である。

### 宮城県の汽水・淡水魚類相

宮城県版レッドデータブックでは、河川や湖沼、湿地といった陸水域と、干潟など海岸域の一部に生息する汽水・淡水魚類を評価対象としている。情報の整理に際して、目名、科名、標準和名および配列は、中坊(2013)におおむね準拠した。

県内で記録がある汽水・淡水魚類は、淡水性魚類が6目15科60種、回遊性魚類が6目11科26種、汽水性魚類が3目4科14種、合計8目24科96種となる(4種は淡水性、回遊性の両型が存在する)。この他、80種を超える海水性魚類が主に汽水域から記録されている。これには黒潮によって輸送された死滅回遊魚や、偶発的に河川内へ進入したと考えられる種も多く含まれるが、半数程度は河口域で比較的良好に見られる種であり、一部は淡水域まで遡上する場合もある。これらは周縁性淡水魚とも呼ばれており、ボラ、スズキ、マハゼ、ヌマガレイなどが該当する。

汽水・淡水魚類相の分類群構成については、淡水性魚類を代表するコイ目コイ科魚類が30種、回遊性および汽水性の種が多く含まれるスズキ目ハゼ科魚類が24種で、この2科で種数全体の半数以上を占めている。この他、冷水性のサケ目サケ科魚類が8種で、それ以外の21科に属する種はいずれも5種未満となっている。

新たな外来種の侵入や、回遊性・汽水性の暖水性魚類の新規確認などにより、県内における汽水・淡水魚類の確認種数は年々増加している。また近年、スナヤツメ類、カマツカ類、ドジョウ類の分類が再検討され、これに伴いキタスナヤツメ、ミナミスナヤツメ、スナゴカマツカ、キタドジョウが県内の生息種として新たにリストへ加えられた。

過去に県内での生息情報があった国外外来種のハクレン、チョウセンブナも淡水性魚類の種数に計上しているが、これらについては近年、県内での確認がない。2種共に県内への定着には至らなかったようである。

### 宮城県版レッドデータブックの掲載種

今回の宮城県版レッドデータブックの見直しにより、9目17科38種を掲載種として選定した。これは県内に生息する在来の汽水・淡水性魚類の約6割に該当し、県内において、汽水・淡水性魚類の生息状況が危機的な状態にあることを示唆している。各カテゴリーの内訳は絶滅危惧ⅠA類(CR)が6種、絶滅危惧ⅠB類(EN)が6種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)が6種、準絶滅危惧(NT)が13種、情報不足(DD)が3種、要注目種が4種となった。カテゴリーの最上位ランクである絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に該当する種が10種を超えており、このうちカワヤツメとニホンイトヨの2種は、県内において既に絶滅した可能性がある。

掲載種には、在来タナゴ類の全種が含まれた。生息環境の悪化や外来タナゴ類との競争、オオクチバスなどによる捕食に加え、産卵母貝となるイシガイ目二枚貝の減少や、愛好家による捕獲圧など、在来タナゴ類

タナゴ類の生息状況

の減少要因は多岐にわたる。これらの複合的な作用が在来タナゴ類に大きな打撃を与え、生息状況の回復を困難にしていると考えられる。また、これまで県内でヤリタナゴは情報不足(DD)として扱われてきたが、県内の個体群は西日本産の外来個体群であることが、遺伝子解析により明らかとなった。同様に、在来種であるタナゴについても、一部の個体群は他地域からの移入に由来する可能性があるが、これらの形態的な区別は困難であり、交雑による遺伝子汚染が深刻な問題となり得る。またシナイモツゴについても、これまで生息していなかった池沼で生息、再生産が確認された事例がある。なお、令和7年にゼニタナゴは「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」における「特定第一種国内希少野生動植物種」に、シナイモツゴは「特定第二種国内希少野生動植物種」に指定され、これによりゼニタナゴは原則として捕獲禁止、シナイモツゴは販売、頒布目的での捕獲が禁止となった。

汽水性魚類については、県内に生息する14種のうち10種を掲載種に選定した。東北地方太平洋沖地震により発生した津波は沿岸の広域に大規模な攪乱をもたらしたが、それから十五年を経て、各地の汽水性魚類の生息地は、完全に消失した一部を除きおおむね回復傾向にある。アナジャコ類の巣穴を利用するエドハゼや塩性湿地の限られた場所に生息するマサゴハゼなどは、生息状況の回復に予想以上の時間を要したが、攪乱後に行われた生息地の人為的な改変も、その回復を遅らせる要因の一つとなったと考えられる。汽水性魚類の生息地の多くは市街地と隣接しており、人為的改変を受けやすいことから、適切な保全措置が求められる。

近年は、全国的にかつてない規模の自然災害が多発しており、温暖化に伴う気候変動の影響が指摘されている。県内の各地においても大規模な出水があり、山間部に局所的に分布するエゾウグイ、ハナカジカの生息地の一部が大きな被害を受けた。同様に、県内では小規模河川のみに生息するカンキョウカジカやルリヨシノボリについても、出水による個体群の消失が危惧される。今後、自然災害による淡水魚類の生息地の攪乱が更に深刻化する恐れがある。

近年、河口域などにおいては、これまで出現が想定されなかった暖水性魚類の確認が相次いでいる。これには温暖化に伴う海水温の長期的な上昇傾向や、黒潮の短期的な流路変動などが影響していると考えられる。このような状況がいつまで持続するか明らかではないが、暖水性魚類の出現状況を指標する種として、県内における確認が北限記録となっているテングヨウジとオオクチユゴイ、東北地方太平洋側で記録が少ないクロホシマンジュウダイを要注目種に選定した。このうちテングヨウジは、2009年の初確認以降、県内における確認例数が年々増加傾向にある。また、県内で越冬個体が確認されたボウズハゼについては、情報不足(DD)に選定し、県内での定着状況について情報収集を行うこととした。一方で、沿岸部における海水温の上昇はサクラマス(通し回遊型)やウツセミカジカ、カンキョウカジカなど、冷水性の回遊魚の生息状況に深刻な影響を与える可能性もある。一度衰退した冷水性魚類の生息状況の回復は容易ではないと考えられるため、これらの生息状況に悪化の兆しが見られた場合は、できる限りの保全措置を講じなければならない。

魚取沼に生息するテツギョはかつて絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に選定されていたが、遺伝子解析によりキンギョとフナ類の交雑個体群であることが明らかになった。しかしながら「魚取沼のテツギョ生息地」は宮城県の指定文化財(天然記念物)に指定されており、これまで学術調査によって貴重なデータが蓄積されてきた経緯がある。これを踏まえて要注目種として、引き続き生息状況を監視することとした。

2022年に南三陸町の海岸部において、テンジクダイ科クダリボウズギスの生息地が発見された。本種は全国的に生息情報が少なく、生態についてもこれまでほとんど知られていなかったが、今回の発見およびその後の調査により、干潟環境への依存度が極めて高い種である可能性が示唆され、生態的に汽水性魚類に位置づけられると判断された。このため本種を暫定的に情報不足(DD)として選定したが、今後、蓄積された情報をもとに、本種をより高いカテゴリーへ移行することも検討する。

### 宮城県内における外来種の生息状況

宮城県内から確認されている外来種は、国内の他地域から移入された国内外来種が4目5科19種、国外から移入された国外外来種が4目8科17種、合計5目12科36種となる。国内外来種の多くはコイ科魚類で、こ

これらの大部分は琵琶湖産アユの放流などに混入して分布を拡大したとされているが、近年、県内において生息が確認されたアブラボテなどは、愛好家の放流によって定着した可能性がある。国内各地の日本産淡水魚が様々な方法で容易に入手できるようになったことで、国内外来種の放流が個人単位で行われる危惧が新たに生じた。

近年は北海道産のフクドジョウが、県内で分布域を拡大している。本種は阿武隈川水系のみで定着していたが、仙台地域の丘陵地を流れる小規模河川などからも確認されるようになった。本種の侵入により、在来種であるヒガシマドジョウの個体数が著しく減少した河川が存在する。また、本種とカジカ類やヨシノボリ類との間にも、競争が生じる可能性がある。東北地方の他県では、本種が爆発的に増殖し、優占種となっている河川も複数見られるため、今後の分布状況には注意を払う必要がある。

国内外来種であるギギもまた、近年県内の複数の水系で分布域を拡大している。同属の在来種であるギバチの生息地においても、一部で本種の侵入が確認されており、このような場所では競争によりギバチが排除される恐れがある。

2019年に従来のカマツカはカマツカ、ナガレカマツカ、スナゴカマツカの3種に分けられ、東日本はスナゴカマツカの自然分布域であることが明らかとなった。しかしながらこの時点で既に、本来は西日本に分布するカマツカが県内各地に定着しており、2種間で交雑も生じていることが確認されている。

県内に定着している国外外来種のうち、チャンネルキャットフィッシュ、ブルーギル、オオクチバス、コクチバスの4種は「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(外来生物法)」において、「特定外来生物」に指定されている。

ブルーギル、オオクチバスは既に県内の広域に分布を広げている。登米市・栗原市の伊豆沼では、人工産卵床の設置と浮上稚魚捌いを組み合わせたオオクチバス駆除活動が継続して行われており、成果をあげている。また、池干し、電気ショッカーボート、刺し網などによる駆除活動が各地で行われているが、これらの種が河川へ定着した場合、駆除は容易ではない。

1990年代から阿武隈川水系で生息情報があったコクチバスは、近年、鳴瀬川水系にも定着しており、名取川水系においても確認がある。

チャンネルキャットフィッシュについては、2000年代に阿武隈川水系で定着したとみられる。本種は魚類、水生昆虫、甲殻類、生物の死骸など、様々なものを餌とすることが知られており、藻類などを大量に摂餌していた事例もある。本種の個体数増加に伴い、阿武隈川の底生魚類は著しく減少しており、外来種が生態系にもたらす影響としては、これまでにない深刻な状況となっていると考えられる。本種の分布拡大の阻止は、今後重要な課題となる。

在来のドジョウと遺伝的、形態的に異なるドジョウ(中国大陸系統)が日本各地で在来系統と置き換わるようにして分布を広げており、交雑個体も生じていることが報告されている。県内においても中国大陸系統は増加傾向にあり、平野部のみならず、山間部の池沼などでもその生息が確認されている。水田環境に生息するドジョウ類は、放流などの人為的要因による分布拡大が起りやすい。ドジョウ類のビオトープなどへの移殖も各地で行われている様子だが、保全対象が在来系統であるか、事前に十分な精査を行うことが望ましい。

### 宮城県産汽水・淡水魚類の種数およびRDB掲載種

目名	科名	種数	RDB掲載種
ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	3	キタスナヤツメ [NT] ミナミスナヤツメ [NT] カワヤツメ [CR]
ウナギ	ウナギ	1	ニホンウナギ [NT]
コイ	コイ	31	キンブナ [EN] テツギョ [要注目種] タナゴ [EN] アカヒレタビラ [CR] ゼニタナゴ [CR] エゾウグイ [EN] シナイモツゴ [CR] スナゴカマツカ [VU]
	ドジョウ	4	キタドジョウ [NT]
	フクドジョウ	2	ホトケドジョウ [NT]
ナマズ	ギギ	2	ギバチ [NT]
	ナマズ	1	
	アメリカナマズ	1	
サケ	キュウリウオ	1	ワカサギ(通し回遊型) [VU]
	アユ	1	
	シラウオ	1	シラウオ [NT]
	サケ	8	サクラマス(通し回遊型) [NT]
トゲウオ	トゲウオ	1	ニホンイトヨ [CR]
	ヨウジウオ	1	テングヨウジ [要注目種]
ダツ	メダカ	1	ミナミメダカ [NT]
	サヨリ	1	クルマサヨリ [VU]
スズキ	サンフィッシュ	3	
	テンジクダイ	1	クダリボウズギス [DD]
	ユゴイ	1	オオクチユゴイ [要注目種]
	カジカ	4	ウツセミカジカ [VU] カンキョウカジカ [CR] ハナカジカ [EN]
	ハゼ	24	ヒモハゼ [NT] シロウオ [NT] ボウズハゼ [DD] アベハゼ [NT] マサゴハゼ [VU] ルリヨシノボリ [VU] ヘビハゼ [DD] ジュズカケハゼ [NT] チクゼンハゼ [EN] エドハゼ [EN]
	クロホシマンジュウダイ	1	クロホシマンジュウダイ [要注目種]
	ゴクラクギョ	1	
	タイワンドジョウ	1	
合計8目	24科	96種	38種 (CR:6種 EN:6種 VU:6種 NT:13種 DD:3種 要注目種:4種)

### 【汽水・淡水魚類分科会名簿】

氏名	所属等
旗 薫(代表)	株式会社エコリス
赤池 貴大	株式会社エコリス
秋葉 保夫	宮城野生動物研究会
阿部 拓三	南三陸町自然環境活用センター
坂本 順一	



## ニホンウナギ

*Anguilla japonica*

- 選定理由** 全国的に漁獲量が減少傾向にある。県内の多くの河川で遡上が阻害され、生息範囲が縮小している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道中部以南の日本各地に分布する。県内に生息河川は少なくないが、中・上流域での確認は限られる。
- 形態ならびに近似種との区別点** グラム沖で産卵・孵化後、海流に乗って北上した葉型のレプトケファルス幼生が、河口部に達するとシラスウナギに変態し、河川を遡上する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修による生息環境の悪化。河川横断工作物による遡上、降下の阻害。シラスウナギの採捕。
- 特記事項** 13cm以下の個体は国指定の特定水産動植物に該当し、漁業権などに基づかない採捕は原則として禁止されている。13cmを超える20cm以下の個体は、宮城県内水面漁業調整規則により周年採捕が禁じられている。
- 文献等番号** 14

(執筆：旗 薫)

ウナギ目  
ウナギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
EN



(撮影：旗 薫)

## キンブナ

*Carassius buergeri* subsp.2

- 選定理由** 人為的改変による生息地の減少が著しい。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 関東地方から東北地方にかけての太平洋側に分布。かつては県内の広域に生息していたと考えられるが、平野部の河川およびその周辺においては、生息情報がほとんど得られなくなった。丘陵地の農業水路や溜め池などに生息地が残る。
- 形態ならびに近似種との区別点** 体色は金色味を帯びる。他のフナ類と比較して小型で体高が低く、背鰭基底部の長さが短い。繁殖期には鰓蓋に追星が生じる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川、農業水路、溜め池などの改修による生息環境の悪化、消失。小規模な水域を好むため、圃場整備の影響を受けやすい。
- 保護保全上の留意点** 他のフナ類が本種と同定されることで生息状況が過大評価される傾向があり、注意が必要。
- 文献等番号** 11、17

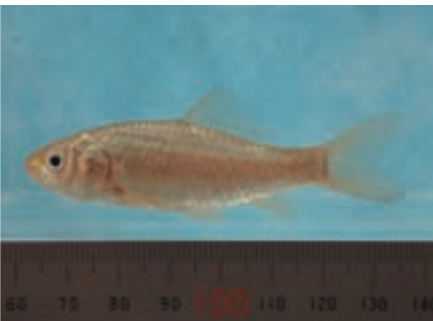
(執筆：旗 薫)

コイ目  
コイ科

絶滅危惧IB類 (EN)

2016  
NT

環境省  
VU



(撮影：旗 薫)

## テツギョ

*Carassius buergeri* × *C. auratus*

- 選定理由** 「魚取沼テツギョ生息地」は昭和8年に国指定文化財の天然記念物に指定されている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 県内では山間部の湖沼に生息地がある他、河川や溜め池、ダム湖などで偶発的に出現する。
- 形態ならびに近似種との区別点** 魚取沼には尾の長いテツギョ型と尾の短いフナ型が生息し、朱色や白色、紅白模様の個体も確認されている。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 愛好家による採集圧。魚取沼では過去に白点病による大量死が起こっている。
- 特記事項** 遺伝子解析により、テツギョはフナ属とキンギョの交雑を起源とする事が明らかとなった。
- 文献等番号** 37、39

(執筆：坂本 順一・旗 薫)

コイ目  
コイ科

要注目種

2016  
CR+EN

環境省  
-



(撮影：坂本 順一)

## タナゴ

*Acheilognathus melanogaster*

- 選定理由** 県内に生息地は少なく、人為的な環境改変による影響が危惧される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 神奈川県以北の本州太平洋側に分布していたが、神奈川県、東京都、埼玉県、群馬県では絶滅した可能性がある。県内における生息地の大部分は小規模な農業水路や溜め池であるが、中規模以上の河川にもわずかに生息する。
- 形態ならびに近似種との区別点** タナゴ類の中では体高が低く、口髭は短い。体側に青い縦帯がある。繁殖期は雄の臀鰭の下縁部が白色になる。カラスガイ族貝類やカワシンジュガイに産卵する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川、農業水路、溜め池の改修による生息環境の悪化、消失。ブルーギル、オオクチバスによる捕食。外来タナゴ類との競争。産卵母貝の減少。愛好家による採集圧。
- 保護保全上の留意点** タナゴ類は愛好家による放流が多いため、遺伝的な攪乱にも注意を払う必要がある。
- 文献等番号** 14、19

(執筆：旗 薫)

コイ目  
コイ科

絶滅危惧IB類 (EN)

2016  
CR+EN

環境省  
EN



(撮影：旗 薫)

## アカヒレタビラ

*Acheilognathus tabira erythropterus*

- 選定理由** 県内に残る生息地はわずかである。いずれの生息地も小規模な農業水路または溜め池であり、人為的な環境改変による影響が危惧される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 岩手県から関東地方にかけての本州太平洋側に分布するが、東京都、埼玉県、群馬県では絶滅した。県内に残る生息地は数カ所のみ。
- 形態ならびに近似種との区別点** 口髭は短く、体側に青い縦帯がある。繁殖期は雄の背鰭、臀鰭が赤色になる。イシガイ、マツカサガイなどに産卵する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 農業水路、溜め池の改修による生息環境の悪化、消失。ブルーギル、オオクチバスによる捕食。外来タナゴ類との競争。産卵母貝の減少。愛好家による採集圧。
- 保護保全上の留意点** 県内において本種は絶滅の危機に瀕しているが、有効な保全対策は講じられていない。生息地の改変は極力回避すべきである。
- 文献等番号** 11、14、19

(執筆：坂本 順一・旗 薫)

コイ目  
コイ科

絶滅危惧IA類 (CR)

2016  
CR+EN

環境省  
EN



(撮影：旗 薫)

## ゼニタナゴ

*Acheilognathus typus*

- 選定理由** 県内では保全活動により、かろうじて生息が維持されている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 青森県を除く東北地方、関東地方、新潟県に分布していたが、現在生息が確認されているのは秋田県、岩手県、宮城県、福島県のみ。県内の生息地は数カ所に限られる。
- 形態ならびに近似種との区別点** 鱗が細かく口髭は無い。繁殖期は秋季で、カラスガイ族貝類に産卵する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川、農業水路、溜め池の改修による生息環境の悪化、消失。ブルーギル、オオクチバスによる捕食。外来タナゴ類との競争。産卵母貝の減少。愛好家による採集圧。
- 保護保全上の留意点** 生息地の保全に際しては、情報の管理にも注意を払う必要がある。
- 特記事項** 令和7年に「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」における「特定第一種国内希少野生動植物種」に指定された。
- 文献等番号** 9、14、16、19

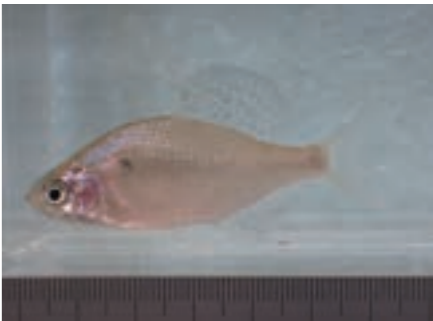
(執筆：坂本 順一・旗 薫)

コイ目  
コイ科

絶滅危惧IA類 (CR)

2016  
CR+EN

環境省  
CR



(撮影：坂本 順一)

## エゾウグイ

*Pseudaspius sachalinensis*

コイ目  
コイ科

絶滅危惧IB類 (EN)

2016  
VU

環境省  
LP(東北地方)

- 選定理由** 県内における分布は局所的で、個体群はいずれも規模が小さい。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、新潟県以北の本州日本海側、福島県以北の本州太平洋側に分布。県内の生息河川は数河川のみ。
- 形態ならびに近似種との区別点** 臀鰭の外縁が直線状で、朱色の婚姻色が頬部のみに発現することで、他のウグイ属と区別できる。繁殖期には雌の吻が伸長する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修、林道や砂防堰堤の造成による生息環境の悪化。山林の荒廃や消失がもたらす減水や、それに伴う水温の上昇。出水による生息地の攪乱。
- 保護保全上の留意点** 日中は淵などの深場に潜んでいるため、生息密度が低い河川では確認が容易ではない。河道の直線化により淵が消失すると、生息は困難となる。
- 文献等番号** 11、21、25



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

## シナイモツゴ

*Pseudorasbora pumila*

コイ目  
コイ科

絶滅危惧IA類 (CR)

2016  
CR+EN

環境省  
CR

- 選定理由** かつては県内各地に生息していたと考えられるが、現存する生息地はわずかである。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 関東地方では絶滅、現在は東北地方、新潟県、長野県に分布する。県内に残る生息地の大部分は小規模な溜め池である。
- 形態ならびに近似種との区別点** 側線が不完全で胸鰭上方までしか達しないことでモツゴと区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 溜め池の改修による生息環境の悪化、消失。ブルーギル、オオクチバスによる捕食。国内外来種モツゴとの競争、交雑。愛好家による採集圧。
- 保護保全上の留意点** 県内の生息地の一部は、他地域からの移入に由来する可能性がある。
- 特記事項** タイプ標本の産地は松島町品井沼。大崎市鹿島台で保全活動が行われている。令和7年に「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」における「特定第二種国内希少野生動植物種」に指定された。
- 文献等番号** 11、14、25



(撮影：旗 薫)

(執筆：坂本 順一・旗 薫)

## スナゴカマツカ

*Pseudogobio polystictus*

コイ目  
コイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
-

環境省  
-

- 選定理由** 近縁の国内外来種との競争や、交雑による遺伝子汚染が深刻化している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** フォッサマグナ以东の本州に分布。県内の広域に生息するが、生息地の多くに国内外来種のカマツカが侵入している。丘陵地を流れる支川などには、良好な生息地が残されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 口髭が長く、背面から体側にかけての暗色斑が不明瞭、体側の黒点が明瞭であることで、他のカマツカ属と区別できる。遺伝子解析によりカマツカとの交雑個体も多く確認されているが、外部形態からこれらを識別することは困難。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵地の開発や河川改修による生息環境の悪化、消失。国内外来種カマツカとの競争、交雑。
- 特記事項** 2019年に従来のカマツカが3種に分けられ、本種はスナゴカマツカ *Pseudogobio polystictus* として新種記載された。
- 文献等番号** 11、36



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

## キタドジョウ

*Misgurnus* sp.(Clade A)

コイ目  
ドジョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-

環境省  
DD

- 選定理由** 県内に生息地は少ない。人為的な影響を受けやすい、小規模で閉鎖的な環境に生息する。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、福井県以北の本州日本海側、神奈川県以北の本州太平洋側に分布する。県内では丘陵地や山間部の溜め池から確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** ドジョウと比較して口髭が長い。これまで県内で確認されている個体は、東北地方日本海側の集団とは遺伝的に異なるグループに属しており、雄の胸鰭基部の骨質盤の形状にも違いがある。また、これらの多くは尾鰭付け根の上部に暗色斑を持たない。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵地や山間部の開発による生息環境の悪化、消失。ドジョウとの交雑が確認されている。
- 特記事項** 遺伝的特徴からドジョウ属クレードAと呼ばれていた集団で、2017年に新標準和名キタドジョウが提唱された。県内産のキタドジョウは雄の胸鰭基部の骨質盤の形状がドジョウと同じ斧状であるため、同定の際は注意が必要である。
- 文献等番号** 8、11、27、28



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

## ホトケドジョウ

*Lefua echigonia*

コイ目  
フクドジョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
EN

- 選定理由** 生息地の多くは小規模で、人為的改変の影響を受けやすい。丘陵地の開発による生息地の減少が危惧される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 青森県を除く東北地方から大阪府・和歌山県を除く近畿地方にかけて分布。県内では南三陸地域を除く各地の丘陵地を流れる小規模河川、細流、湿地などに生息する。
- 形態ならびに近似種との区別点** ドジョウは口髭が5対であるのに対し、本種の口髭は4対。ドジョウと比較して体がやや太く、短い。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵地の開発や河川改修、圃場整備、湿性遷移の進行による生息環境の悪化、消失。
- 保護保全上の留意点** 湧水に依存する種であるため、生息地を保全する際は水源の維持が重要となる。
- 文献等番号** 11、15、21



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

## ギバチ

*Tachysurus tokiensis*

ナマズ目  
ギギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
VU

- 選定理由** 中規模以上の河川で個体数の減少が目立つ。丘陵地の小規模河川においても、開発による生息地の減少が危惧される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 富山県以北の本州日本海側、神奈川県以北の本州太平洋側に分布。県内各地の河川中流域や山間部の溜め池に生息する。
- 形態ならびに近似種との区別点** 口髭は4対。背鰭と胸鰭の棘に毒を持つ。同属の国内外来種であるギギと比較して眼径が小さく、尾鰭の切れ込みが浅い。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵地の開発や河川改修による生息環境の悪化、消失。国内外来種ギギとの競争。
- 保護保全上の留意点** 小規模河川においても、改修の際は本種をはじめとする小型魚類の移動を阻害しないよう、配慮が必要である。
- 文献等番号** 11、15、17



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

## ワカサギ(通し回遊型)

*Hypomesus nipponensis*

サケ目  
キュウリウオ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
環境省



(撮影：旗 薫[撮影地：青森県])

- 選定理由** 県内に遡上河川は少なく、遡上数も減少傾向にある。ダム湖などに生息する陸封型は国内外来種に該当するため、評価の対象外とする。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、島根県以北の本州日本海側、茨城県以北の本州太平洋側に分布。県内では北上川水系や県北地域沿岸部の中小河川などで遡上が確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 河川で産卵を行う遡河回遊魚。背鰭の起点が腹鰭の起点より後方に位置することで、海水魚である近縁種の子カと区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 防潮堤の建設や河川改修による生息環境、産卵環境の悪化。河川横断工作物による遡上、降下の阻害。
- 文献等番号** 11、20、26

(執筆：旗 薫)

## シラウオ

*Salangichthys microdon*

サケ目  
シラウオ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
環境省



(撮影：旗 薫)

- 選定理由** 大河川の河口部に生息するため、人為的な改変による影響を受けやすい。個体数の年変動が大きく、生息状況が不安定である。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国の瀬戸内海側、九州に分布。県内では5月頃、大河川に遡上し産卵を行う。
- 形態ならびに近似種との区別点** 汽水域に生息する。尾柄部の上端と下端に黒点がないことで、海水魚である近縁種のイシカワシラウオと区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 防潮堤の建設や河川改修による生息環境、産卵環境の悪化。
- 特記事項** 県内でシラウオとして漁獲されているものの多くは、近縁種のイシカワシラウオである。
- 文献等番号** 25、26

(執筆：旗 薫)

## サクラマス(通し回遊型)

*Oncorhynchus masou masou*

サケ目  
サケ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT  
環境省  
NT



(撮影：高橋 晋史[撮影地：秋田県])

- 選定理由** 遡上河川においても再生産に関する情報は少ない。種苗放流による遺伝的攪乱が危惧される。河川残留型のヤマメおよび湖沼のサクラマスは評価の対象外とする。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、山口県以北の本州日本海側、静岡県以北の本州太平洋側、大分県を除く九州に分布。県内各地の中規模以上の河川に遡上するが、遡上状況が安定している河川は限られる。
- 形態ならびに近似種との区別点** 河川で産卵を行う遡河回遊魚で、河川生活期の幼魚は体側にパーマークがある。海洋生活期は銀白色となり、産卵期には黒ずんだ体に桜色の婚姻色を呈する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 温暖化や海流の変化に伴う海水温の上昇。渇水による河川水温の上昇。河川横断工作物による遡上、降下の阻害。種苗放流が在来系統にもたらす遺伝的攪乱。
- 文献等番号** 11

(執筆：旗 薫)

## ニホンイトヨ

*Gasterosteus nipponicus*

トゲウオ目  
トゲウオ科

絶滅危惧IA類 (CR)

2016  
DD  
環境省  
LP(本州)



(撮影：旗 薫)

- 選定理由** 近年、県内では確認がない。県内においては絶滅した可能性がある。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州および九州の日本海側、千葉県以北の本州太平洋側に分布する。県内では阿武隈川水系、名取川水系、大川水系などで出現記録があるが、東日本太平洋沖地震以降の記録は1例のみである。5月下旬から6月上旬にかけての遡上が確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 県内に生息するトゲウオ科は本種のみ。河川で産卵を行う遡河回遊魚であり、体色は銀白色で背鰭の棘は3本、体側には鱗板が見られる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 防潮堤の建設や河川改修による生息環境、産卵環境の悪化。河川横断工作物による遡上、降下の阻害。海洋環境の変化。
- 保護保全上の留意点** 本種が生息する可能性が残る水系において河川改修など行う場合は、遡上時期を考慮した調査を実施する必要がある。
- 文献等番号** 11、21

(執筆：旗 薫)

## テングヨウジ

*Microphis (Oostethus) brachyurus brachyurus*

トゲウオ目  
ヨウジウオ科

要注目種

2016  
環境省



(撮影：赤池 貴大、旗 薫)

- 選定理由** 県内で本種は死滅回遊魚に位置付けられるが、このような種の出現は、温暖化や海流の変動を指標する学術的に重要な記録となる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本国内では宮城県以南の黒潮の影響を受ける地域に分布する。県内においては4つの河川(鳴瀬川、七北田川、名取川、阿武隈川)の河口域から数個体が記録されている。県内では越冬や再生産することができない無効分散と考えられるが、近年の確認個体数は増加傾向にある。
- 形態ならびに近似種との区別点** 体は棒状で細長い。吻が長く、軀幹部は太い。尾部は軀幹部より短い。主鰓蓋骨の隆起は明瞭。軀幹部と尾部の下隆起線は不連続。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川・沿岸域の改修による生息環境の悪化、河川横断工作物による遡上、降下の阻害。
- 特記事項** 宮城県は本種の分布北限に該当する。
- 文献等番号** 7、11、25

(執筆：赤池 貴大)

## ミナミメダカ

*Oryzias latipes*

ダツ目  
メダカ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT  
環境省  
VU



(撮影：旗 薫)

- 選定理由** 圃場整備などにより生息地が減少している。飼育個体の放流による遺伝的攪乱が危惧される。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 京都府以南の本州日本海側、岩手県以南の本州太平洋側、四国、九州、琉球列島。隠岐や対馬などの島嶼にも分布する。県内では平野部や島嶼の農業水路、塩性湿地などで在来個体群が維持されていると考えられるが、市街地の溜め池などに生息する個体は、他地域からの移入に由来する可能性がある。
- 形態ならびに近似種との区別点** 雄の背鰭の切れ込みが深く、体側後半の黒色素が網目模様や染み状の斑紋を形成しないことで、キタノメダカと区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川、農業水路、溜め池の改修による生息環境の悪化、消失。特に、圃場整備による越冬環境の消失が著しい。飼育個体の放流による遺伝的攪乱。
- 保護保全上の留意点** 保全活動に先立ち、対象とする個体群が在来系統であるかを確認する必要がある。
- 文献等番号** 11、25

(執筆：秋葉 保夫・旗 薫)

## クルマサヨリ

*Hyporhamphus intermedius*

- 選定理由** 県内における出現記録は少ない。大河川の汽水域に生息するため、人為的な改変による影響を受けやすい。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州北西部に分布。県内では北上川水系、鳴瀬川水系、名取川水系で記録があり、河川と連絡する運河でも確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 汽水域に生息する。下顎が頭長より長く、下顎の下面が黒色であることで、海水魚である近縁種のサヨリと区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修による生息環境の悪化。河川横断工作物による移動障害。
- 文献等番号** 11

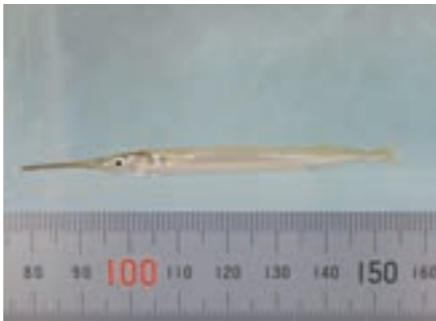
(執筆：旗 薫)

ダツ目  
サヨリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
DD

環境省  
NT



(撮影：旗 薫)

## クダリボウズギス

*Gymnapogon japonicus*

- 選定理由** 県内の生息情報は少なく、生態も不明である。沿岸域の護岸工事等の人為的改変の影響で、生息地の多くが消失した可能性があり、生息地が著しく限られていると考えられる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 新潟県佐渡から山口県までの日本海、宮城県志津川湾から高知県土佐湾の太平洋、瀬戸内海、日向灘、九州北西岸、種子島、奄美大島および沖縄島に分布。県内では2022年6月、志津川湾の水戸辺川河口干潟の潮間帯上部の地中から複数個体が発見された。
- 形態ならびに近似種との区別点** 体長5cmほどの小型種で、半透明な体に赤い色素を持つ。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 防潮堤の造成や河川改修、埋め立て等による生息地の直接的な改変により生息域自体が減少・消滅。
- 特記事項** 本種は国内でも標本数が極めて少ない稀種であり、長い間生態も不明であった。まとまった生息域が確認されたのは志津川湾が初めてであり、生息環境の保全と生態解明が求められる。また、県内での本種の確認が、標本に基づく北限記録となる。
- 文献等番号** 12、25、29、32、33、34、38

(執筆：阿部 拓三)

スズキ目  
テンジクダイ科

情報不足 (DD)

2016  
-

環境省  
-



(撮影：鈴木 将太)

## オオクチユゴイ

*Kuhlia rupestris*

- 選定理由** 県内で本種は死滅回遊魚に位置付けられるが、このような種の出現は、温暖化や海流の変動を指標する学術的に重要な記録となる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本国内では宮城県以南の黒潮の影響を受ける地域に分布する。県内においては気仙沼市の只越川から1個体の幼魚が報告されているのみであり、越冬や再生産することができない無効分散と考えられる。
- 形態ならびに近似種との区別点** 体高が高く、体は側扁する。体色は銀白色で、頭部と体側に小黑点が散在する。ユゴイに似るが、側線有孔鱗は44枚以下であること、幼魚の尾鰭の上葉と下葉に1対の黒色斑があることで識別される。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川・沿岸域の改修による生息環境の悪化、河川横断工作物による遡上、降下の障害。
- 特記事項** 宮城県は本種の分布北限に該当する。
- 文献等番号** 7、11、25

(執筆：赤池 貴大)

スズキ目  
ユゴイ科

要注目種

2016  
-

環境省  
-



(撮影：旗 薫)

## ウツセミカジカ

*Cottus reinii*

- 選定理由** 工事等で河川の連続性が断たれることで、生息状況に重大な影響が生じる可能性があり、東日本大震災後の復旧工事の影響もふまえ注視していく必要がある。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道日本海側南部、本州、四国、九州北西部に分布。県内では主に南三陸地域の中小河川に生息し、石礫底の中下流域で見られる。
- 形態ならびに近似種との区別点** 同属のカジカに酷似するが、カジカは胸鰭条数が12~14本なのに対し、本種では13~17本と多い。カジカは上流域に生息するが、本種は中下流域に生息し、ふ化した後、仔魚は一度海に降りる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 川と海を行き来する両側回遊魚であるため、河川の連続性の確保が重要である。落差工による流路遮断や取水による流量減少、河口閉塞が脅威となる。生息域が中下流域であるため、汚水流入の影響を受けやすい。
- 文献等番号** 21、25、34、41

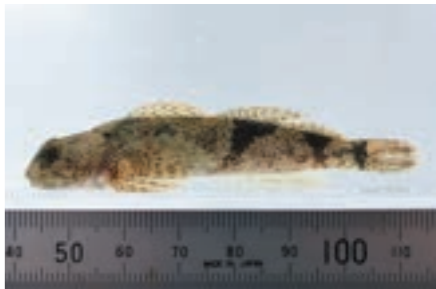
(執筆：阿部 拓三)

スズキ目  
カジカ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
EN



(撮影：阿部 拓三)

## カンキョウカジカ

*Cottus hangiongensis*

- 選定理由** 県内の生息河川は1河川のみ。生息個体数は少なく、生息環境も悪化している。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、富山県以北の本州日本海側、宮城県以北の本州太平洋側に分布。県内では北部沿岸地域の小規模な1河川のみに生息する。
- 形態ならびに近似種との区別点** 河川で孵化し降海した後、再び河川へ遡上し成長する両側回遊魚。体側に白く縁どられた緑褐色斑が散在し、腹鰭に縞模様があることで、同所的に生息するウツセミカジカと区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河口閉塞や河川横断工作物による遡上、降下の障害。河川改修による生息環境の悪化。山林の荒廃や消失がもたらす減水や、それに伴う水温の上昇。
- 保護保全上の留意点** 近年は当歳魚の確認が少ない。稚魚の遡上障害が生じている可能性がある。
- 特記事項** 県内の分布が本州太平洋側の南限となる。
- 文献等番号** 11、17

(執筆：旗 薫)

スズキ目  
カジカ科

絶滅危惧IA類 (CR)

2016  
CR+EN

環境省  
LP(東北・北陸地方)



(撮影：旗 薫)

## ハナカジカ

*Cottus nozawae*

- 選定理由** 県内における分布は局所的。個体群はいずれも小規模で、生息範囲も限られる。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、新潟県以北の本州日本海側、宮城県以北の本州太平洋側に分布。県内において本種の生息地の大半は、カジカの生息地より上流の緩勾配な支沢にあり、これらは砂防堰堤などによって隔てられている場合が多い。
- 形態ならびに近似種との区別点** 胸鰭上部の軟条が分岐し、腹鰭に縞模様があることでカジカと区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修、林道や砂防堰堤の造成による生息環境の悪化。山林の荒廃や消失がもたらす減水や、それに伴う水温の上昇。出水による生息地の攪乱。
- 保護保全上の留意点** 支沢の上流端付近など、水系の限られた一部のみ生息する場合がほとんどであるため、生息地を見落とさぬよう注意が必要である。
- 特記事項** 県内には遺伝的に異なる2系統が存在する。県内の分布が本州太平洋側の南限となる。
- 文献等番号** 11、21、35

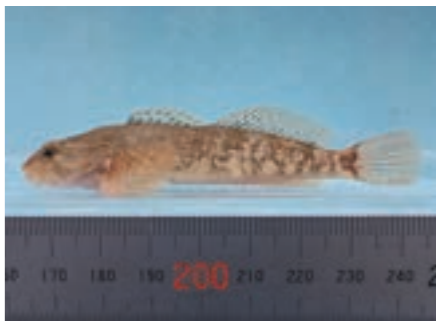
(執筆：旗 薫)

スズキ目  
カジカ科

絶滅危惧IB類 (EN)

2016  
CR+EN

環境省  
LP(東北地方)



(撮影：旗 薫)

ヒモハゼ						
<span></span> <div><i>Eutaenichthys gilli</i></div>						
<div><span></span></div>						
<ul style="list-style-type: none"><li><b>選定理由</b> 主要な生息地である河口域や干潟は、人為的な環境改変の影響を受けやすい。</li> <li><b>分布の概要ならびに県内の生息状況</b> 日本国内では青森県から沖縄県まで分布し、河川の河口域や前浜干潟などの砂底や砂泥底に生息する。県内の広域で確認されているが、津谷川河口域と長面浦の生息地は東日本大震災に伴う津波により消失した。その他の生息地も津波による攪乱の影響を受けたが、生息環境と個体数は回復傾向にある。</li> <li><b>形態ならびに近似種との区別点</b> 体が細長く、吻は上唇を覆う。体側の中央には1本の黒色縦帯がある。</li> <li><b>生息に対する脅威（減少の要因）</b> 河口域や干潟の改修・埋め立てによる生息地の改変、汚染水による水質の悪化。</li> <li><b>特記事項</b> スナモグリ類やアナジャコ類の巣穴を生息場所や産卵場所として利用することが知られている。なお、九州以北の個体群と西表島の個体群は遺伝的・形態的に異なることが報告されており、分類学的研究が進められている。</li> <li><b>文献等番号</b> 6、11、13、14、21、23、31</li></ul>	スズキ目 <p>ハゼ科</p>	<div> <div><div><b>準絶滅危惧（NT）</b></div></div> <table> <tbody><tr> <td>2016</td> <td>環境省</td></tr> <tr> <td>NT</td> <td>NT</td></tr> </tbody></table> </div>	2016	環境省	NT	NT
2016	環境省					
NT	NT					
<span></span> <div>（撮影：赤池 貴大）</div>						
		（執筆：赤池 貴大）				

シロウオ						
<span></span> <div><i>Leucopsarion petersii</i></div>						
<div><span></span></div>						
<ul style="list-style-type: none"><li><b>選定理由</b> 本種が遡上し、産卵を行う小規模河川の下流域は、人為的な環境改変を受けやすい。東日本大震災に伴う大津波とその後の復旧工事による人為的改変により生息環境の悪化が懸念されたが、生息河川の多くで産卵遡上個体の著しい減少は見られていない。</li> <li><b>分布の概要ならびに県内の生息状況</b> 北海道函館湾、青森県から九州南岸の太平洋および日本海沿岸、東シナ海沿岸、瀬戸内海、有明海。県内での遡上河川は県北に偏る。県内における遡上期は5月。</li> <li><b>形態ならびに近似種との区別点</b> 全長約5cmほどの小型種。生時の体は半透明で、浮袋が透けて見える。</li> <li><b>生息に対する脅威（減少の要因）</b> 防潮堤の造成や河川改修、埋め立て等による生息地の直接的な改変や、これらがもたらす底質等の変化、河川の伏流。汚染水の流入による水質、底質の悪化。河口閉塞による遡上阻害。</li> <li><b>特記事項</b> 南三陸町の伊里前川では「ざわ漁」と呼ばれる伝統漁が行われている。</li> <li><b>文献等番号</b> 21、25、34、41</li></ul>	スズキ目 <p>ハゼ科</p>	<div> <div><div><b>準絶滅危惧（NT）</b></div></div> <table> <tbody><tr> <td>2016</td> <td>環境省</td></tr> <tr> <td>VU</td> <td>VU</td></tr> </tbody></table> </div>	2016	環境省	VU	VU
2016	環境省					
VU	VU					
<span></span> <div>（撮影：阿部 拓三）</div>						
		（執筆：阿部 拓三）				

ボウズハゼ						
<span></span> <div><i>Sicyopterus japonicus</i></div>						
<div><span></span></div>						
<ul style="list-style-type: none"><li><b>選定理由</b> 県内では2019年に初めて確認された種であり、情報が少ない。県内での越冬が示唆されており、今後再生産を行い、定着する可能性もあるため、注視していく必要がある。</li> <li><b>分布の概要ならびに県内の生息状況</b> 日本国内では岩手県以南の太平洋沿岸、兵庫県以南の日本海沿岸に分布する。県内では津谷川、後川、淀川、名取川水系の広瀬川および名取川、阿武隈川水系の白石川で確認されている。これらの河川のうち、広瀬川と白石川を除く4つの河川で成魚が得られていることから、越冬が示唆されている。</li> <li><b>生息に対する脅威（減少の要因）</b> 河川横断工作物による遡上、降下の阻害、河川や沿岸部の改修による生息環境の悪化。</li> <li><b>保護保全上の留意点</b> 本種は両側回遊魚であり、河川と海域を行き来する生活史であるため、河川と海域の両方の生息環境を保全することが重要である。</li> <li><b>特記事項</b> 近年、東北地方太平洋側における記録が相次いでおり、分布の北上が示唆されている。</li> <li><b>文献等番号</b> 7、11、31</li></ul>	スズキ目 <p>ハゼ科</p>	<div> <div><div><b>情報不足（DD）</b></div></div> <table> <tbody><tr> <td>2016</td> <td>環境省</td></tr> <tr> <td>-</td> <td>-</td></tr> </tbody></table> </div>	2016	環境省	-	-
2016	環境省					
-	-					
<span></span> <div>（撮影：赤池 貴大）</div>						
		（執筆：赤池 貴大）				

アベハゼ						
<span></span> <div><i>Mugilogobius abei</i></div>						
<div><span></span></div>						
<ul style="list-style-type: none"><li><b>選定理由</b> 県内における生息地と個体数はともに少ない。主要な生息地である干潟や河口域は、人為的な環境改変の影響を受けやすい。</li> <li><b>分布の概要ならびに県内の生息状況</b> 日本国内では宮城県および新潟県から種子島にかけて分布する。県内では北上川の河口域周辺、松島湾、仙台湾に注ぐ河川の河口域周辺から確認されている。東日本大震災に伴う津波による攪乱を受けたが、生息環境と個体数は回復傾向にある。</li> <li><b>形態ならびに近似種との区別点</b> 体側の後方に横帯をもつイズミハゼと似るが、本種は縦帯をもつことで識別される。</li> <li><b>生息に対する脅威（減少の要因）</b> 干潟の改修・埋め立てによる生息地の改変、汚染水による水質の悪化。</li> <li><b>特記事項</b> 宮城県は本種の国内における分布北限に該当する。なお、紀伊半島南部、宮崎県、鹿児島県上甕島および種子島では、アベハゼとイズミハゼの中間的な模様をもつ個体が両種の交雑個体として報告されている。</li> <li><b>文献等番号</b> 11、13、22、24、31</li></ul>	スズキ目 <p>ハゼ科</p>	<div> <div><div><b>準絶滅危惧（NT）</b></div></div> <table> <tbody><tr> <td>2016</td> <td>環境省</td></tr> <tr> <td>NT</td> <td>-</td></tr> </tbody></table> </div>	2016	環境省	NT	-
2016	環境省					
NT	-					
<span></span> <div>（撮影：赤池 貴大）</div>						
		（執筆：赤池 貴大）				

マサゴハゼ						
<span></span> <div><i>Pseudogobius masago</i></div>						
<div><span></span></div>						
<ul style="list-style-type: none"><li><b>選定理由</b> 県内における生息地は少ない。主要な生息地である干潟や河口域は、人為的な環境改変の影響を受けやすい。</li> <li><b>分布の概要ならびに県内の生息状況</b> 日本国内では宮城県以南の太平洋沿岸、瀬戸内海沿岸、対馬以南の日本海・東シナ海沿岸に分布する。県内では蒲生干潟、井戸浦、広浦、鳥の海で記録されていたが、いずれの生息地も東日本大震災に伴う津波による攪乱の影響を受けた。現在では多くの生息地で個体数が回復傾向にあるが、蒲生干潟では数個体しか確認されていない。また、近年になって北上運河、松島湾、東谷地においても生息が確認された。</li> <li><b>形態ならびに近似種との区別点</b> 全長3cmほどの小型種。体高が低く、第1背鰭に黒色斑をもたない。</li> <li><b>生息に対する脅威（減少の要因）</b> 干潟の改修・埋め立てによる生息地の改変、汚染水による水質の悪化。</li> <li><b>特記事項</b> 宮城県は本種の国内における分布北限に該当する。</li> <li><b>文献等番号</b> 4、11、13、21、31</li></ul>	スズキ目 <p>ハゼ科</p>	<div> <div><div><b>絶滅危惧II類（VU）</b></div></div> <table> <tbody><tr> <td>2016</td> <td>環境省</td></tr> <tr> <td>CR+EN</td> <td>VU</td></tr> </tbody></table> </div>	2016	環境省	CR+EN	VU
2016	環境省					
CR+EN	VU					
<span></span> <div>（撮影：赤池 貴大）</div>						
		（執筆：赤池 貴大）				

ルリヨシノボリ						
<span></span> <div><i>Rhinogobius mizunoi</i></div>						
<div><span></span></div>						
<ul style="list-style-type: none"><li><b>選定理由</b> 県内に生息河川は少なく、その大部分で生息環境が悪化している。</li> <li><b>分布の概要ならびに県内の生息状況</b> 北海道、本州、四国、九州に分布。県内では牡鹿半島以北の中小河川に生息する。</li> <li><b>形態ならびに近似種との区別点</b> 河川で孵化し降海した後、再び河川へ遡上し成長する両側回遊魚。頬にルリ色の点が散在し、尾鰭基底部の斑が八の字状であることで、他のヨシノボリ属と区別できる。</li> <li><b>生息に対する脅威（減少の要因）</b> 河口閉塞や河川横断工作物による遡上、降下の阻害。河川改修、林道や砂防堰堤の造成による生息環境の悪化。山林の荒廃や消失がもたらす減水や、それに伴う水温の上昇。</li> <li><b>保護保全上の留意点</b> 生息地のほとんどが保全対象として注目されにくい小規模河川であり、また生息個体数が少ない場合はその確認が容易ではないため、県北沿岸地域での河川改修に際しては十分な注意が必要である。</li> <li><b>文献等番号</b> 31</li></ul>	スズキ目 <p>ハゼ科</p>	<div> <div><div><b>絶滅危惧II類（VU）</b></div></div> <table> <tbody><tr> <td>2016</td> <td>環境省</td></tr> <tr> <td>VU</td> <td>-</td></tr> </tbody></table> </div>	2016	環境省	VU	-
2016	環境省					
VU	-					
<span></span> <div>（撮影：旗 薫）</div>						
		（執筆：旗 薫）				

カテゴリー	<b>絶滅（EX）</b>	<b>野生絶滅（EW）</b>	<b>絶滅危惧I類（CR+EN）</b>	<b>絶滅危惧IA類（CR）</b>	<b>絶滅危惧IB類（EN）</b>
-------	---------------	-----------------	----------------------	--------------------	--------------------

<b>絶滅危惧II類（VU）</b>	<b>準絶滅危惧（NT）</b>	<b>情報不足（DD）</b>	<b>絶滅のおそれのある地域個体群（LP）</b>	<b>要注目種</b>
--------------------	------------------	-----------------	---------------------------	-------------

## ヘビハゼ

*Gymnogobius mororanus*

■**選定理由** 生活史や県内の生息状況に不明な点が多い。近年における確認事例がほとんどない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本国内では北海道、青森県、秋田県、富山県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県、東京都、大分県から記録されている。県内では東日本大震災以前は南三陸、長面浦、万石浦、東名運河、松島湾、井戸浦から記録があったが、津波により多くの生息地が攪乱を受けた。東日本大震災以降の記録は2012～2013年に松島湾と井戸浦でそれぞれ1個体ずつ確認されているのみであり、近年の確認事例はない。

■**形態ならびに近似種との区別点** ニクハゼに似るが、眼下の縦列孔器が4列であること、雌の第1背鰭に白色の斑紋があることで識別される。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 本種の主な生息地である干潟やアマモ場の改変や汚染。

■**特記事項** アナジャコとヨコヤアナジャコの巣穴を生息場所として利用することが知られている。

■**文献等番号** 1、6、10、13、14、18、21、25、41

(執筆：赤池 貴大)

スズキ目  
ハゼ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
DD



(撮影：旗 薫)

## ジュズカケハゼ

*Gymnogobius castaneus*

■**選定理由** 平野部における生息地の消失が著しい。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、兵庫県以北の本州日本海側、神奈川県以北の本州太平洋側に分布。純淡水魚で、県内では南三陸地域を除く各地の河川中・下流域や農業水路、溜め池などに生息する。

■**形態ならびに近似種との区別点** 淡水域で一生涯を過ごす。眼下感覚管に開孔が無いことで、両側回遊魚である近縁種のピリングと区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵地の開発や河川改修による生息環境の悪化、消失。ブルーギル、オオクチバスなどによる捕食。

■**保護保全上の留意点** 河川中流域においては、ワンド・たまりといった緩流部や止水域の保全が重要となる。

■**文献等番号** 17

(執筆：旗 薫)

スズキ目  
ハゼ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
-

環境省  
NT



(撮影：旗 薫)

## チクゼンハゼ

*Gymnogobius uchidai*

■**選定理由** 現在確認されている県内の生息地は1箇所のみである。主要な生息地である干潟や河口域は、人為的な環境改変の影響を受けやすい。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本固有種で、北海道から鹿児島県までの太平洋沿岸、瀬戸内海沿岸、秋田県および京都府から鹿児島県までの日本海・東シナ海沿岸に分布する。県内では東日本大震災に伴う津波により、津谷川河口域と長面浦の生息地が消失した。近年では松島湾のみでしか確認されていない。

■**形態ならびに近似種との区別点** エドハゼに似るが、下顎腹面に肉質突起があること、体側に明瞭な黒色横帯があることで識別される。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 干潟の改修・埋め立てによる生息地の改変、汚染水による水質の悪化。

■**特記事項** スナモグリ類やアナジャコ類の巣穴を生息場所や産卵場所として利用することが知られている。

■**文献等番号** 1、2、5、6、11、13、21、31、40

(執筆：赤池 貴大)

スズキ目  
ハゼ科

絶滅危惧IB類 (EN)

2016  
VU

環境省  
VU



(撮影：赤池 貴大)

## エドハゼ

*Gymnogobius macrognathos*

■**選定理由** 県内における生息地と個体数はともに少ない。主要な生息地である干潟や河口域は、人為的な環境改変の影響を受けやすい。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本国内では北海道、宮城県から宮崎県までの太平洋沿岸、瀬戸内海沿岸、京都府から熊本県までの日本海・東シナ海沿岸に分布する。県内では東日本大震災に伴う津波により、津谷川河口域と長面浦の生息地の消失し、その他の生息地も攪乱の影響を受けた。現在は個体数が回復傾向にあるが、北上川河口域、松島湾、仙台湾に流入する河川の河口域周辺のみでしか確認されていない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 下顎腹面に肉質突起がない。繁殖期の雌の第1背鰭は伸長し、後方に黒色斑がある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 干潟の改修・埋め立てによる生息地の改変、汚染水による水質の悪化。

■**特記事項** スナモグリ類やアナジャコ類の巣穴を生息場所や産卵場所として利用することが知られている。

■**文献等番号** 6、10、11、13、14、18、21、25

(執筆：赤池 貴大)

スズキ目  
ハゼ科

絶滅危惧IB類 (EN)

2016  
VU

環境省  
VU



(撮影：赤池 貴大)

## クロホシマンジュウダイ

*Scatophagus argus*

■**選定理由** 県内で本種は死滅回遊魚に位置付けられるが、このような種の出現は、温暖化や海流の変動を指標する学術的に重要な記録となる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本国内では北海道、秋田県以南の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海沿岸、宮城県以南の太平洋沿岸に分布する。内湾や汽水域に生息し、幼魚はよく河川の汽水域に侵入する。県内では2018年に七北田川の河口域で4個体が確認されたのみであり、越冬や再生産することができない無効分散と考えられる。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体は平たい四角形状で、体側に多数の黒斑がある。仔魚期には頭部が甲羅のように固いトリチクス幼生を経る。幼魚には黒い横帯があるが、成長とともに小さな黒斑になる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 河川の河口域や沿岸域の改修による生息環境の悪化。

■**文献等番号** 3、7、11、17、25

(執筆：赤池 貴大)

スズキ目  
クロホシマンジュウダイ科

要注目種

2016  
-

環境省  
-



(撮影：旗 薫)

動物編

# 昆蟲類



# 昆虫類

## はじめに

昆虫類はあらゆる陸上生態系に生息し、地球上でもっとも繁栄している生物グループのひとつである。植食者や肉食者、分解者、送粉者などとして重要な生態的地位を占め、既知種だけでも100万種を越すほどの多様性を誇る。日本からはこれまでに約3万2千の昆虫種が記載されているが、調査・研究が進めば10万種に達するだろうと考えられている。昆虫は膨大な種数を抱える分類群であるがゆえに、地域ファウナの全容解明は困難をきわめる。宮城県の昆虫相については、亀井文蔵・小野泰正『宮城県の蝶(1971)』、渡辺 徳『宮城県の鱗翅類(1973)』、高橋雄一『宮城県のトンボ(1988)』、渡部 徳『宮城県の甲虫(1989)』、保谷忠良氏らによる『宮城県昆虫分布資料1-26(1989-2005)』、郷右近勝夫・氏家創平『宮城県の有剣ハチ類相(2004)』、宮城昆虫地理研究会『宮城県蛾類目録(2009)』、柳田則明『宮城県トンボ目録(2017)』といった分類群ごとのインベントリーが出版されているほか、宮城昆虫地理研究会による『インセクトマップオブ宮城1-63(1994-、継続中)』において新知見や分布記録が報告され続けている。その一方で、宮城県内に昆虫類を専門に扱う研究機関や自然史系博物館がないという事情も関係してか、日本国内に数百～数千種を産しながらも県内における調査・研究がほとんど進んでいない分類群(たとえば、カゲロウ目、カワゲラ目、アザミウマ目、トビケラ目、ハエ目など)も多く残されている。宮城県の昆虫相の全体像は今なお把握できていないのが現状である。

改めて説明するまでもなく、レッドデータブック(以下、RDB)とは、絶滅のおそれのある種(レッド種)をリストアップし、それらの生息の現状などについて記載した出版物である。RDBを作成するためには、昆虫類の分布や生息状況について長期継続的なフィールド調査を行い、得られたデータをもとに絶滅のおそれの度合いについて検討し、慎重に種を選定することが求められる。そうした一連の作業には、高度な専門知識や技術、経験が必要だけでなく、途方もない時間と労力を要するものである。宮城県は西側に脊梁山脈である奥羽山脈が聳え、東側は太平洋に面するという西高東低の地形を有し、高山・亜高山帯から海岸地帯に至るまで変化に富んだ自然環境がみられる。『宮城県RDB2026』の作成にあたっては、『宮城県RDB2016(以下、旧版RDB)』の発行以降およそ10年間にわたって、変化に富んだ宮城県内のフィールドをくまなく踏査し、資料やデータを丹念に収集するとともに、その整理や写真撮影などを地道に続けてきた。これは宮城昆虫地理研究会(阿部剛代表)の会員を中心に構成された10名の調査員(青木俊彦、阿部 剛、五十嵐由里、郷右近勝夫、紺野広昭、鈴木 理、細見周平、牧野 周、町田禎之、溝田浩二；五十音順、敬称略)と15名の調査協力員(新井孝明、栗野宗博、伊藤 智、尾崎俊寛、海原 要、川崎 敦、児玉雅一、齋藤雄二、高橋雄一、平舘 学、村上直樹、目崎喜治、八木沼康之、矢崎雅巳、渡辺啓子；五十音順、敬称略)の不断の努力なしには到底なしえないことであった。多大なご尽力をいただいた皆様に心より敬意を表したい。

## 評価の手順

宮城県の昆虫類については、分布や生態に関するデータがかなりの精度で蓄積されている分類群がある一方、多くの分類群ではまだデータの蓄積が不十分な段階にある。『宮城県RDB2026』の作成に際して、五十嵐由里氏が中心となって宮城県内の昆虫分布記録を網羅的に収集・整理し、宮城県産昆虫類データベースを構築した。そこに蓄積されたデータを基盤として、データの蓄積が十分であると判断されたトンボ目およびチョウ類(チョウ目)については「定量判定(Quantitative judgement)」を、それ以外の分類群については「定性判定(Qualitative judgement)」を行い、それぞれ絶滅のおそれの度合いを判定した。具体的な選定基準については、後掲する「昆虫分科会におけるレッドリスト判断基準」に示した。なお、判断基準の内容についても今回新たに見直しを行い、旧版RDBから若干の修正をおこなっている。

※【選定理由】欄に示したカタカナ記号は、「昆虫分科会におけるレッドリスト判断基準」に示された各評価区分に対応している(補正を行った場合は、カタカナ記号の後に①、②などと表記してある)。

※【分布の概要ならびに県内の生息状況】欄に示された地名は、平成の大合併完了(2010年)前の旧市区町村名(仙台市以外が70市町村、仙台市が5区、計75市区町村)で統一している。宮城県の面積は 約7,282km<sup>2</sup>

であり、それを単純に75等分すると1区画当たりの平均面積は約97km<sup>2</sup>となりほぼ第2次メッシュの区画面積に相当する。

## 昆虫類分科会におけるレッドリスト判断基準(2026改定)

1. ランク判定のための信頼に足る過去(50年程度前まで)の産地についての資料があるか？

なお、資料としては、標本が現存している、または、信頼に足る公表された記録(データをともなうもの)があることを最低要件とする。

(1) 資料が十分にある、または、過去のデータの蓄積が比較的豊富である  
ア. 過去に分布していたが既に絶滅<sup>\*1</sup>し、飼育系統もないと考えられる …………… 絶滅(EX)  
イ. 過去に分布し野外では既に絶滅<sup>\*1</sup>したが、飼育系統が存続している …………… 野生絶滅(EW)  
― 現在も分布している …………… 2.「定量判定」へ

(2) 資料が十分とはいえない、または、過去のデータの蓄積が豊富とはいえない  
ウ. 過去に分布していたが既に絶滅<sup>\*1</sup>し、飼育系統もないと考えられる …………… 絶滅(EX)  
エ. 過去に分布し野外では既に絶滅<sup>\*1</sup>したが、飼育系統が存続している …………… 野生絶滅(EW)  
― 現在も分布している、または、現存もしくは現存の可能性有と判断される … 3.「定性判定」へ

(3) 分布している(いた)のは確実だが資料はきわめて不十分である …………… 4.「生息状況未詳」へ

## 2. 定量判定

以下の(1)に示す絶滅率と現存数<sup>\*2</sup>から、環境省が採用する数値基準によるカテゴリーを参考に、カテゴリー区分の判定を行う。対象となる種の分布の単位は、平成の大合併完了(2010年)前の旧市区町村(仙台市以外が70市町村、仙台市が5区、計75市区町村)<sup>\*3</sup>とし、必要に応じて①、②に基づく補正を行う。

(1) 絶滅率と現存数に基づく基本的なカテゴリー区分  
オ. 絶滅率50%以上、かつ現存数5以下 …………… 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)  
カ. 絶滅率20%以上、かつ現存数5以下 …………… 絶滅危惧Ⅱ類(VU)  
キ. 絶滅率20%以上、かつ現存数6~15 …………… 準絶滅危惧(NT)  
ク. 上記以外(絶滅率20%未満、または現存数15超) …………… ランク外

①絶滅率や現存数では表せない各種の生態要素等を考慮し、上記カテゴリーの補正を行う。

②生息地の環境破壊のされやすさを考慮し、補正を行う。

なお、記録が1旧市区町村のみの種については、絶滅率にかかわらず、生態要素や生息地の環境破壊のされやすさ等を考慮し、必要に応じて上記カテゴリーを当てはめる。

## 3. 定性判定

次の(1)~(3)の全項目を検討し、総合的な判断のもとにランクを決める。

(1) 個体数の減少  
ケ. 既知のすべての産地で危機的水準にまで減少 …………… 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)  
コ. 大部分の産地で大幅に減少 …………… 絶滅危惧Ⅱ類(VU)  
サ. 一部の産地において顕著な減少 …………… 準絶滅危惧(NT)  
シ. その他 …………… ランク外

(2) 生息環境の悪化  
ス. 既知のすべての産地で著しく悪化 …………… 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)  
セ. 大部分の産地で明らかに悪化 …………… 絶滅危惧Ⅱ類(VU)  
ソ. 一部の産地において顕著な悪化 …………… 準絶滅危惧(NT)  
タ. その他 …………… ランク外

(3) 捕獲・採集の影響

- チ. 既知のすべての産地で再生産能力を上回る圧力 …………… 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)
- ツ. 大部分の産地で再生産能力を上回る圧力 …………… 絶滅危惧Ⅱ類(VU)
- テ. 一部の産地において顕著な影響 …………… 準絶滅危惧(NT)
- ト. その他 …………… ランク外

なお、必要に応じて①、②に基づく補正を検討する。

- ①上記の項目では表せない各種の要素を考慮し、上記カテゴリの補正を行う。
- ②将来の生存可能性を考えるため、生息地の環境破壊のされやすさを考慮し、補正を行う。

4. 生息状況未詳

- ナ. 十分な生息情報が得られれば絶滅危惧のカテゴリにランクされる可能性が大きい種 …………… 情報不足(DD)
- ニ. その他 …………… ランク外

注の説明

※1「絶滅種」の判定要件

1(1)にあっては過去おおむね25年以上、1(2)にあっては過去おおむね50年以上、信頼できる生息情報が得られていない種を判定する。

※2 絶滅率の計算方法に用いる現存と絶滅の定義

生存確認はおおむね2005年以降のデータを基準とする。

A 現存：2005年以降に記録があり、かつ生息環境も維持されている。

B 絶滅：記録はあるが、生息環境が破壊されている、または、発生の最盛期に複数人かつ複数回の調査でも生存が確認されない。

$$\text{絶滅率(\%)} = [ B / (A + B) ] \times 100$$

なお、次の場合は絶滅率の算出に含めない。

記録はあるが、生息地が不明、または記録後調査がされていない。

飛来に起因し、定着していないと判断される記録。

誤りと判断される記録。

※3 分布の単位を「旧市区町村」とした理由

分布をマクロ的にみるには、ある面積毎の分布状況をみればよい。その場合、面積の単位を小さく(=区画を多く)するほど精度は上がるが、現地調査等にかける時間等を考慮して、平成の大合併完了(2010年)前の75市区町村を分布の単位として採用した。なお、宮城県の面積は約7,282km<sup>2</sup>であり、上記75市区町村の平均面積は約97km<sup>2</sup>で、ほぼ第2次メッシュの区画面積に相当する。

選定種の概要

『宮城県RDB2026』では、217種の昆虫類がレッド種として選定された(表1)。2016年に発行された旧版RDBの214種から3種が増加したことになる。これは単純に3種が増えたということではなく、新規追加された16種からランク外となった13種を差し引いた数値であり、カテゴリが変更された種も16種にのぼった。カテゴリごとの内訳は、絶滅(EX)6種、絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)38種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)40種、準絶滅危惧(NT)75種、情報不足(DD)58種であった。分類群ごとの内訳は、コウチュウ目110種、チョウ目(チョウ類+ガ類)43種、ハチ目24種、トンボ目21種、カメムシ目9種、バッタ目5種、アミメカゲロウ目4種、ゴキブリ目1種となり、コウチュウ目がほぼ半数を占めた。

表1 『宮城県RDB2026』における昆虫各目の掲載種数

目名	種数	『宮城県RDB2026』掲載種数 ※( )内は『宮城県RDB2016』掲載種数				
		EX	CR+EN	VU	NT	DD
トンボ目	21(23)種	3(3)	9(11)	4(6)	5(3)	0(0)
ゴキブリ目	1(1)種	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)
バッタ目	5(5)種	0(0)	2(1)	1(1)	1(2)	1(1)
カメムシ目	9(7)種	0(0)	2(2)	1(1)	6(4)	0(0)
アミメカゲロウ目	4(4)種	0(0)	2(2)	1(1)	0(0)	1(1)
コウチュウ目	110(108)種	0(0)	5(5)	21(21)	44(41)	40(41)
ハチ目	24(22)種	0(0)	8(6)	6(5)	7(8)	3(3)
チョウ目：チョウ類	18(14)種	3(2)	4(5)	5(1)	4(4)	2(2)
チョウ目：ガ類	25(30)種	0(0)	6(3)	0(2)	8(16)	11(9)
合計	217(214)種	6(5)	38(35)	40(39)	75(78)	58(57)

旧版RDBから新たに追加されたのは、キイロヤマトンボ(NT)、シロヘリツチカメムシ(NT)、ヒウラカメムシ(NT)、ナミハンミョウ(NT)、ツガルホソシデムシ(DD)、オオセイボウ(VU)、クズハキリバチ(VU)、ムモンアカシジミ(NT)、クロミドリシジミ(VU)、ミヤマカラスシジミ(NT)、オオゴマシジミ(DD)、ツマジロウラジャノメ本州亜種(NT)、ヒロバカレハ(CR+EN)、ミヤケカレハ(DD)、シロオビハイイロヤガ(DD)、キミミヤガ(DD)の16種である。その一方で、新たな生息地が確認されるなどして絶滅のおそれが低減したことから、マルタンヤンマ、オオトラフトンボ、コノシメトンボ、カラスシジミ、ツチイロツトガ、ゼニガサミズメイガ、タツカカモクメシャチホコ、キシタアツバ、イチモジヒメヨトウ、オオチャバナヨトウ、キスジウスキヨトウ、ガマヨトウ、ツマグロキヨトウの13種がリストから除外された。ランクが上がった種は11種あり、そのうち30年以上にわたって生息が確認できていないクロシジミは、メガネサナエ、ベッコウトンボ、オオキトンボ、ミヤマシジミ、オオウラギンヒョウモンに続く6番目の絶滅種(EX)となった。また、オオセスジイトンボ、カワラバッタ、キスジクモバチ、キスジツチスガリは絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)にランクを上げ、水生昆虫や水辺に生息する昆虫類が置かれている厳しい現状が浮き彫りとなった。一方、カトリヤンマ、エゾトンボ、ヒメアカネ、キトンボ、コシロシタバの5種はランクが下げられた。これは調査精度が向上して新たな生息地や記録が発見されたことによるものであり、個体数の増加や生息環境の改善に起因するものではないことを付記しておく。

宮城県の昆虫類の危機要因

『宮城県RDB2026』に掲載されたレッド種のうち、絶滅(EX)、絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)、絶滅危惧Ⅱ類(VU)の上位3つのカテゴリに含まれる計84種を抽出し、生息環境のタイプ別に整理したものが表2である。これをみると、「池沼・湧水湿地・湿原」に生息するトンボ目(11種)やコウチュウ目(7種)、「乾性・湿性草地」に生息するチョウ類(8種)、「海浜・河原砂地」に生息するハチ目(6種)やコウチュウ目(6種)の占める割合が多いことがわかる。特に「池沼・湧水湿地・湿原」に生息するトンボ目で3種、「乾性・湿性草地」に生息するチョウ類でも3種が絶滅しており、きわめて危機的な状況にあることが読み取れる。

表2をもとに、生息環境別の割合を示したものが図1である。「乾性・湿性草地」・「池沼・湧水湿地・湿原」がともに23.8%(20種ずつ)、「森林・林縁」が21.4%(18種)、「海浜・河原砂地」が20.2%(17種)と似たような割合でみられ、この4つの生息環境で全体の約9割を占めた。残りの約1割は河川に生息する種であり、上流から下流に向かうにつれてレッド種が増える傾向がみられた。

表2 『宮城県RDB2026』に掲載された絶滅危惧Ⅱ類(VU)以上の昆虫類(生息環境別)

種名の前の●は絶滅、太字は絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)を示す

生息環境	トンボ目	バッタ目・ゴキブリ目	カメムシ目	アミメカゲロウ目
森林・林縁		オオゴキブリ		
乾性・湿性草地				ツノトンボ キバネツノトンボ
池沼・湧水湿地・湿原	コバネアオイトトンボ オオモノサシトンボ カラカネイトトンボ オオセスジイトトンボ ルリイトトンボ カトリヤンマ ●メガネサナエ ヒメアカネ ●ベッコウトンボ ●オオキトンボ ハッチョウトンボ		タガメ コバンムシ	
河川上流・溪流	ヒメサナエ			
河川中流・緩流	グンバイトンボ ナゴヤサナエ ハネピロエソトンボ			
河川下流・河口	ヒヌマイトンボ			
海浜・河原砂地		ハマスズ ヤマトマダラバッタ カワラバッタ	スナヨコバイ	オオウスバカゲロウ
生息環境	コウチュウ目	ハチ目	チョウ目	
			チョウ類	ガ類
森林・林縁	クロヒラタシデムシ ヤマトキモンハナカミキリ フタスジカタピロハナカミキリ ヨツボシカミキリ サドチビアメイロカミキリ	アオスジハナバチ ミヤギノヨコバイバチ ニトベギングチ マイマイツツハナバチ オオセイボウ クズハキリバチ	ウラジロミドリシジミ ハヤシミドリシジミ クロミドリシジミ キマダラモドキ	ギンボシスズメ オガサワラヒゲヨトウ
乾性・湿性草地	ダイコクコガネ ヒメピロウドカミキリ クロスジカメノコハムシ タグチホソヒラタハムシ	コウノスジガバチモドキ トモンハナバチ	チャマダラセセリ ホシチャバネセセリ ヘリグロチャバネセセリ ヒメシロチョウ ●クロシジミ ●ミヤマシジミ ●オオウラギンヒョウモン ギンボシヒョウモン本州亜種	ヒロバカレハ ヒメスズメ ウスジロドクガ ギンモンセダカモクメ
池沼・湧水湿地・湿原	エゾゲンゴロウモドキ オオイチモンジシマゲンゴロウ シマケンゲンゴロウ マークオサムシ ツヤキベリアオゴミムシ クロガネネクイハムシ シラハタミズクサハムシ			
河川下流・河口	ハマベミズギワゴミムシ オオキバナガミズギワゴミムシ キバナガミズギワゴミムシ カツオマルドROMシ			
海浜・河原砂地	カワラハンミョウ アオホソゴミムシ ホネゴミムシダマシ コホネゴミムシダマシ シラフヒョウタンゾウムシ クロツヤハマベゾウムシ	キスジクモバチ ニッポンハナダカバチ キスジツチスガリ ホソメンハナバチ ノウメンハナバチ キヌゲハキリバチ		

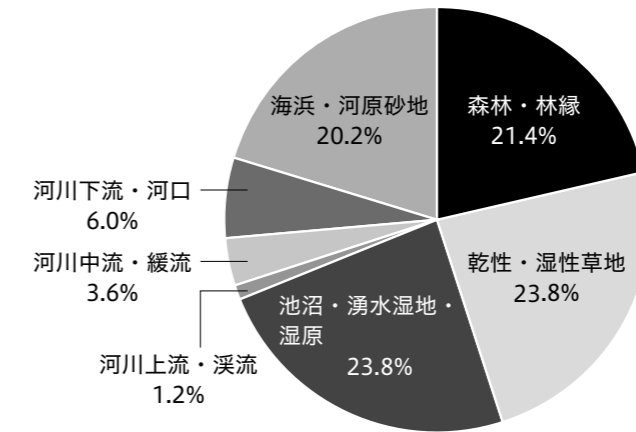


図1 『RDB2026』に掲載された絶滅危惧Ⅱ類(VU)以上の昆虫類を生息環境のタイプ別にみた割合

環境省が発表した『生物多様性国家戦略 2023-2030』では、生物多様性に負の影響を及ぼす原因について、開発など人間活動による危機(第1の危機)、自然に対する働きかけの縮小による危機(第2の危機)、人間によって持ち込まれたものによる危機(第3の危機)、地球環境の変化による危機(第4の危機)の4類型に整理している。ここで『宮城県RDB2026』の【生育・生息に対する脅威(減少の要因)】欄の記載を生息環境ごとに整理してみると、以下のような危機要因が列挙されている。「森林・林縁」: 開発、森林の荒廃、森林伐採と植林化、寄主植物の盗掘、里山放置や気候変化による植生の遷移など。「乾性・湿性草地」: 開発、乾燥化、採草や野焼きの中止、管理放棄による植生の遷移・樹林化、畜産の近代化・衰退など。「池沼・湧水湿地・湿原」: 開発、埋め立て、圃場整備、放棄水田の増加による植生の遷移、乾燥化、ため池や水路のコンクリート護岸化、農業や生活排水の流入による水質悪化や富栄養化、外来種による捕食など。「河川」: 上流ではダム建設による森林の伐採、道路工事による土砂流入、中流では護岸工事や河川改修、河川敷の多面的利用、下流では護岸工事や埋め立て、ヨシ原の消失、水質の悪化など。「海浜・河原砂地」: 侵食等による砂浜の衰退、植生の遷移、車両による乗り入れ、防潮堤建設や海岸林造成などによる生息地の分断・破壊、復興工事による生息環境の改変、ダム建設による河原の安定化など。

宮城県のレッド種では、どの生息環境においても、森林伐採や河川改修、埋め立て、護岸建設、圃場整備などの開発行為に伴う物理的な環境変化によって影響を受ける「第1の危機」に関わるものが主要な危機要因となっていることがわかる。しかし、人口減少や人と自然との関わり合いの減少によって里地里山の生態系の質が低下する「第2の危機」、人が持ち込んだ外来生物や農業などが深刻な影響をもたらす「第3の危機」、地球温暖化やそれに起因する異常気象が負の影響を及ぼす「第4の危機」も少なからず含まれており、これらが相互に関連し合うことでより複雑で深刻な問題を引き起こしているように思われる。近年では再生可能エネルギーの導入にともなうメガソーラーや風力発電などの乱開発や、シカの個体数増加に伴う採食圧なども昆虫類にとって新たな脅威となっており、宮城県の生物多様性の劣化が加速していくことが懸念されている。

### 水生昆虫や水辺に生息する昆虫類の衰退

『宮城県RDB2026』からみえてきたことは、水生昆虫や水辺に生息する昆虫類の著しい衰退である。トンボ類やゲンゴロウ類、タガメやコオイムシといったかつては里山の水辺でふつうに見られた昆虫類が、水田やため池の減少、圃場整備による乾田化、水路のコンクリート化・暗渠化、ため池の改修、農業・生活排水による水質の汚染といった様々な要因で姿を消している。これに追い討ちをかけるようにオオクチバスやブルーギル、ウシガエル、アメリカザリガニ、ミシシッピアカミミガメなどの外来生物が次々と侵入しており、残存するわずかばかりの水生昆虫にとどめを刺すかっこうとなっている。今回の改訂では、幼虫期もしくは一生を通じて水中で生活する真性の水生昆虫の割合は、全レッド種中18%(39種)を占め、これに水際や湿地、河川敷、河口、海岸などで多少とも水と関わる生活域をもつ昆虫類を加えると44%(95種)に達した。さらに、

絶滅危惧I類の代表種

絶滅危惧II類の代表種

絶滅危惧III類の代表種

絶滅危惧IV類の代表種

絶滅危惧V類の代表種

絶滅危惧VI類の代表種

絶滅危惧VII類の代表種

絶滅危惧I類（CR＋EN）に限定すると実に約60%（23種）が水生あるいは水辺に生息する昆虫であった。

また、2011年3月に発生した東日本大震災とその後に行われた復興事業の影響から、依然として海岸域やその周辺に生息する種が回復していない現状も明らかになった。キスジクモバチ、キスジツチスガリが絶滅危惧I類（CR＋EN）へとランクを上げたほか、ヒウラカメムシ、ツガルホソシデムシといった種が新たにリストアップされている。また、オオモノサシトンボ、ヒヌマイトトンボ、ハマスズ、スナヨコバイ、オオウスバカゲロウ、カワラハンミョウ、オオキバナガミズギワゴミムシ、ニッポンハナダカバチ、ホソメンハナバチ、ノウメンハナバチなどの海浜性昆虫類は、絶滅危惧I類（CR＋EN）にランクされたままである。旧版RDBでも水生昆虫や水辺に生息する昆虫類の危機的状況を訴えてきたが、『宮城県RDB2026』においてもそうした状況はまったく変わっていない。

宮城県の分布の北限とする種

#### 宮城県を分布の北限とする種、南限とする種

宮城県は暖温帯を代表する常緑広葉樹林帯と冷温帯を代表する落葉広葉樹林帯との移行帯（中間温帯）にあたり、それに呼応するように本県を分布境界とする昆虫類―暖地性種の北限的分布と寒地性種の南限的分布―が多くみられる。こうした種にとっては宮城県が「分布の端」となることから、生息基盤が脆弱で生息密度も低くなる傾向があり、結果的にレッド種に選定されやすい。宮城県を分布の北限とするレッド種には、グンバイトンボ（CR＋EN）、オオモノサシトンボ（CR＋EN）、ヒヌマイトトンボ（CR＋EN）、ベッコウトンボ（EX）、アブクマナガゴミムシ（DD）、ネプトクワガタ（DD）、コルリクワガタ（DD）、オオメツツシンクイ（DD）、ヒガシツヤヒサゴゴミムシダマシ（DD）、トビイロヒョウタンゾウムシ（NT）、シラクモゴボウゾウムシ（NT）、ジャコウホソハナカミキリ（NT）、フトスジエダシヤク（DD）、ヒマラヤハガタヨトウ（NT）など多くの種が含まれ、ヤマトタマムシ（NT）、スナサビキコリ（NT）、クチビロハムシドロバチ（DD）は太平洋側の北限種である。また、宮城県を分布の南限としているレッド種としては、アオホソゴミムシ（VU）、ハヤチネベニコメツキ（NT）、エンマハバピロガムシ（DD）、ツガルホソシデムシ（DD）、クロヒラタシデムシ（VU）、ホネゴミムシダマシ（VU）、コホネゴミムシダマシ（VU）、シラフヒョウタンゾウムシ（VU）などが挙げられる。なお、模式産地（新種記載の際に基準となるタイプ標本が採集された場所）が宮城県内にあるスギウラナガタマムシ（DD）、ツヤカタモンチビコメツキ（DD）、カツオマルドロムシ（VU）、*Catops houyai*（DD）は、現在のところ宮城県でしか発見されていない「宮城県固有種」である。近年は地球温暖化の影響によって、南方系種が分布を拡大し、北方系種が分布を縮小させる傾向がより強まっていることから、こうした宮城県を分布境界とする昆虫類の動向にはさらなる注視が必要である。

『宮城県RDB2026』に掲載されている昆虫種は、その一種一種が宮城県の自然環境の悪化や生物多様性の劣化を物語る証人である。一度絶滅してしまった昆虫は二度と戻ってくることはない。手遅れになる前に、私たち一人一人が宮城県の動植物が置かれている現状を知り、健全な生態系を取り戻すための努力を続けていかななくてはならない。このリストが宮城県の自然環境を次世代に引き継ぐための基礎資料として広く活用され、生命のにぎわいであふれた豊かな社会の実現に向けた一助となることを切に願いたい。

宮城県の分布の南限とする種

#### 【昆虫類分科会名簿（執筆担当者）】

氏名	担当分類群	所属
青木 俊彦	チョウ目（ガ類）	宮城昆虫地理研究会
阿部 剛	チョウ目（チョウ類）	宮城昆虫地理研究会
五十嵐 由里	コウチュウ目	宮城昆虫地理研究会
郷右近 勝夫	ハチ目	宮城昆虫地理研究会
紺野 広昭	ゴキブリ目・バッタ目・カメムシ目・アミメカゲロウ目	宮城昆虫地理研究会
牧野 周	トンボ目	宮城昆虫地理研究会
溝田 浩二	総括	宮城昆虫地理研究会

参考文獻

- 阿部光典, 1990. 北日本におけるマルコガタノゲンゴロウの記録. Elytra 18(2): 281-282.
- 阿部剛, 2009. 宮城県におけるチャマダラセセリの衰退. インセクトマップオブ宮城31: 3-9.
- 阿部剛, 2015. チャマダラセセリの保全の可能性を探る. インセクトマップオブ宮城42: 1-7.
- 阿部剛, 2018. 宮城県における水棲昆虫の記録. インセクトマップオブ宮城49: 59.
- 阿部剛, 2020. ヒメシロチョウの衰退要因と保全の課題. インセクトマップオブ宮城52: 77-83.
- 阿部剛, 2020. 気仙沼市におけるホシチャバネセセリ及びオナガシジミの採集例. インセクトマップオブ宮城53: 86.
- 阿部剛, 2021. 河岸段丘に生き残ったヒメギフチョウ. インセクトマップオブ宮城54: 1-6.
- 阿部剛, 2022. 宮城県. 日本産チョウ類の衰亡と保護 第8集（平井規央・森地重博・矢後勝也・神保宇嗣編）: 144-147, 大阪公立大学出版会.
- 阿部剛, 2022. 住宅団地に囲まれたヒメギフチョウの生息地－仙台市泉区長命館公園－. インセクトマップオブ宮城56: 1-5.
- 阿部剛, 2023. 2018-2019年の蝶類採集・確認記録. インセクトマップオブ宮城59: 60-63.
- 阿部剛, 2023. 2020-2021年の蝶類採集・確認記録. インセクトマップオブ宮城58: 65-70.
- 阿部剛, 2024. 加美町鹿原田谷地でヒメギフチョウを確認. インセクトマップオブ宮城61: 82-83.
- 阿部剛, 2024. 宮城県南蔵王におけるヒメギフチョウの分布調査結果(2024年). インセクトマップオブ宮城61: 42-46.
- 阿部剛, 2024. 宮城県北部におけるチョウ類3種の記録. インセクトマップオブ宮城61: 83-84.
- 青木俊彦, 2018. 石巻市の北上川でゲンゴロウを採集. インセクトマップオブ宮城48: 75.
- 青木俊彦, 2020. 鳴瀬川河口でカワラハンミョウを採集. インセクトマップオブ宮城53: 86.
- 青木俊彦, 2022. 宮城県北部の蛾類(17). インセクトマップオブ宮城56: 6-18.
- 青木俊彦, 2023. 宮城県北部の蛾類(18). インセクトマップオブ宮城58: 24-36.
- 新井孝明, 2015. エンマハバピロガムシ宮城県の記録. インセクトマップオブ宮城42: 94.
- 朝日純一・寒沢正明・小島慎一・有田斉（共編）, 2019. 珠玉の標本箱 日本産蝶類標本写真およびデータベース19 ヒメギフチョウ（パートIII）: 113pp., NRC.
- 朝比奈正二郎, 1957. 日本の蜻蛉. 新昆虫10: 56-62.
- 栗野宗博, 2016. ホシチャバネセセリを二口林道で確認. インセクトマップオブ宮城45: 76-77.
- 栗野宗博, 2016. 仙台市泉区でヒメピロウドカミキリ採集. インセクトマップオブ宮城45: 76.
- 栗野宗博, 2022. 泉ヶ岳でクロミドリシジミの生息を確認. インセクトマップオブ宮城57: 53.
- Belousova, E. N., 2007. Revision of the shield-bug genera *Holcostethus* Fieber and *Peribalus* Mulsant et Rey (Heteroptera, Pentatomidae) of the Palaearctic region. Entomological Review 87(6): 701–739.
- 千田安男, 1972. ヒヌマイトトンボの縁紋異常. 昆虫と自然7(5): 35.
- 千田安男, 1972. 宮城県でヒメサナエを採集. 昆虫と自然7(6): 29.
- 枝重夫, 1971. イトトンボの新種. 昆虫と自然6(8): 29.
- 藤岡健司・真部和代, 2018. 昭和万葉の森及び番ヶ森山周辺地域緑地環境保全地域候補地の哺乳類相・爬虫類相・両生類相・底生動物相. 昭和万葉の森及び番ヶ森山周辺地域緑地環境保全地域学術調査報告書: 58-88, 宮城県.
- 後藤淳・高橋雄一, 1978. ハネピロエソトンボ宮城県下の初記録. 昆虫と自然13(2): 11.
- 郷右近勝夫, 1989. 仙台平野産スズメバチ上科目録の補遺. 東北昆虫27: 10-12.
- 郷右近勝夫, 1998. 仙台湾海岸砂丘林におけるカリバチ相. 東北昆虫36: 1-4.
- 郷右近勝夫, 2000. 宮城県「県民の森」地域. 昆虫類の多様性保護のための重要地域 第2集: 24-25, 日本昆虫学会自然保護委員会.
- 郷右近勝夫, 2006. 蒲生海岸の干潟と砂丘における訪花昆虫とそれらの季節消長. 中国昆虫20: 51-69.
- 郷右近勝夫, 2010. 砂浜の後退ともなう海浜性有剣ハチ類の衰退. 日本の昆虫の衰亡と保護: 174-188, 北隆館.
- 郷右近勝夫, 2011. 宮城の希少な有剣ハチ類の記録. インセクトマップオブ宮城35: 7-10.
- 郷右近勝夫, 2014. トモンハナバチの東北地方の分布および訪花性と若干の生態的知見. 東北昆虫51: 1-4.
- 郷右近勝夫, 2015. 阿武隈川河口北の有剣ハチ類の危機的現状. 昆虫と自然50(3): 4-9.
- 郷右近勝夫, 2016. 宮城県岩沼市の昆虫調査報告－有剣ハチ類. インセクトマップオブ宮城44: 5-17.
- 郷右近勝夫, 2017. 宮城県岩沼市の昆虫調査報告―有剣ハチ類(補遺と訂正). インセクトマップオブ宮城46: 19-24.
- 郷右近勝夫, 2017. 鳴瀬川水系の有剣ハチ類相調査結果. インセクトマップオブ宮城47: 28-34.
- 郷右近勝夫, 2020. 仙台市蒲生海岸の干潟と砂丘及び隣接する陸地における大震災以降の有剣ハチ類相について. インセクトマップオブ宮城53: 1-11.
- 郷右近勝夫, 2022. 1990年代における仙台湾砂浜海岸の有剣ハチ類相. インセクトマップオブ宮城57: 10-18.
- 郷右近勝夫, 2022. 名取市下増田の広浦海浜および旧海岸林盛土区域におけるハチ類相の推移. インセクトマップオブ宮城57: 30-39.
- 郷右近勝夫, 2023. 磯浜海水浴場(宮城県山元町)隣接の石組堤防で採れた有剣ハチ類. インセクトマップオブ宮城58: 19-23.
- 郷右近勝夫, 2024. 宮城県RDBハチ目改訂のための主要18種の確認記録. インセクトマップオブ宮城61: 13-21.
- 郷右近勝夫・郷原匡史・渡辺啓子・五十嵐由里, 2015. 宮城県産アオスジハナバチ*Nomia (Hoplonomia) incerta* Gribodoの生息状況の変遷と訪花性について. インセクトマップオブ宮城43: 10-13.
- 郷右近勝夫・五十嵐由里・斎藤勝雄・高橋雄一, 2012. 南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングサイトと周辺域における大津波被災後の昆虫相について. インセクトマップオブ宮城36: 1, 3-21.
- 郷右近勝夫・氏家創平, 2004. 宮城県の有剣ハチ類相 1. スズメバチ上科の種類と分布. つねきばち2: 57-73.
- 羽田義任, 1982. コウノスジガバチモドキ雄の記載とニッポンジガバチモドキ雌の異常型. 蜂友通信14: 54-56.
- 羽田義任, 2003. ミヤギノヨコバイカリバチについて. 福井虫報32: 11-12.
- 長谷川源, 2019. 2019年の蝶類採集・確認記録. インセクトマップオブ宮城51: 50-54.
- 長谷川源, 2024. 2024年の蝶類採集・確認記録. インセクトマップオブ宮城61: 70-73.
- 早坂徹, 1999. ハッチョウトンボの記録. インセクトマップオブ宮城11: 42.
- 早坂徹, 1999. 採集記録. インセクトマップオブ宮城11: 68-73.
- 早坂徹・斎藤雄二, 2017. ヨツボシカミキリ25年ぶりの記録. インセクトマップオブ宮城47: 61.
- 平野幸彦, 1979. 宮城県産甲虫類採集目録I. 神奈川虫報56: 22-36.
- 平野幸彦, 1979. 宮城県産甲虫類採集目録II. 神奈川虫報57: 19-31.
- 平舘学, 2011. 宮城県南部におけるチシマコナガクチキの記録. インセクトマップオブ宮城35: 99.
- 平舘学・新井孝明・児玉雅一, 2001. 宮城県黒川郡大和町升沢旗坂キャンプ場周辺の甲虫(3). インセクトマップオブ宮城15: 3-15.
- 細見周平, 2024. ムラサキオオツチハンミョウを仙台市で確認. インセクトマップオブ宮城60: 74.
- 細見周平, 2024. メススジゲンゴロウとタガメ同所での確認. インセクトマップオブ宮城61: 76.

- 保谷忠良, 1985. 宮城県白石市の昆虫 (II). みやぎインセクト7: 1-12.
- 保谷忠良, 1989. 宮城県名取市の昆虫 (その2) 甲虫類 (I). みやぎインセクト11: 21-22.
- 保谷忠良, 1990. II丸森町の昆虫 2丸森町の昆虫. 宮城県丸森町の昆虫: 17-25, 宮城県仙台第二高等学校生物部.
- 保谷忠良, 1990. 宮城県昆虫分布資料3 宮城県の斑猫. 24pp.
- 五十嵐由里, 2011. 宮城県の砂浜海岸で採集した昆虫類. インセクトマップオブ宮城34: 2-3, 5-12.
- 五十嵐由里, 2012. 仙台市泉区朴沢の甲虫類. インセクトマップオブ宮城37: 8-23.
- 五十嵐由里, 2015. 宮城の海浜性甲虫をたずねて. インセクトマップオブ宮城42: 26-32.
- 五十嵐由里, 2015. 宮城県色麻町産ホッケミズムシの前胸背板の斑紋について. インセクトマップオブ宮城42: 18-19.
- 五十嵐由里, 2017. アオホソゴミムシの採集例. インセクトマップオブ宮城46: 77.
- 五十嵐由里, 2019. 南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングサイトその後. インセクトマップオブ宮城51: 1-24.
- 五十嵐由里, 2020. 石巻市雄勝町の海岸で採集した昆虫. インセクトマップオブ宮城53: 89.
- 五十嵐由里, 2021. 仙台市大倉での昆虫類調査記録1. インセクトマップオブ宮城55: 1-21.
- 五十嵐由里, 2022. 仙台市大倉での昆虫類調査記録2. インセクトマップオブ宮城56: 19-37.
- 五十嵐由里, 2024. 2024年の昆虫類等採集確認記録. インセクトマップオブ宮城61: 67-70.
- 五十嵐由里, 2024. クロサツツピズムシの鳴瀬川での再確認と仙台市の新産地. インセクトマップオブ宮城61: 76-78.
- 五十嵐由里, 2024. 仙台市竜ノ口のナミハンミョウ生息地に異変. インセクトマップオブ宮城61: 80.
- 五十嵐由里・郷右近勝夫・青木俊彦, 2018. 昭和万葉の森及び番ヶ森山周辺地域緑地環境保全地域候補地の昆虫相. 昭和万葉の森及び番ヶ森山周辺地域緑地環境保全地域候補地学術調査報告書: 108-170. 宮城県.
- 五十嵐由里・高橋雄一, 2019. 仙台湾海浜県自然環境保全地域および周辺域の昆虫相. 仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書: 162-222, 宮城県.
- 五十嵐由里・高橋雄一, 2020. 仙台湾南部海岸における東日本大震災後の昆虫類調査結果. インセクトマップオブ宮城53: 15-56.
- 飯田睦・玉田明洋, 2022. 宮城県からキイロヤマトンボを初記録. Tombo 65: 54-55.
- 井上寛, 1979. 日本産*Gastropacha*属について. 蛾類通信104: 57-65.
- 伊東憲正, 2016. ムネアカカナガクチキを水の森公園で採集. インセクトマップオブ宮城44: 79.
- 伊藤智, 1994. 故山本弘コレクション内の蜻蛉目に関するメモ. 岩手虫の会会報21: 5-12.
- 伊藤智, 2011. 宮城県のオオモノサシトンボが受けた大津波被害. 月刊むし489: 2-3.
- 伊藤智, 2011. 宮城県のネアカヨシヤンマの記録について. インセクトマップオブ宮城34: 4, 15.
- 伊藤智・中瀬潤, 2009. 大和町宮床川からグンバイトンボ再発見. インセクトマップオブ宮城30: 1, 3.
- 伊藤智・中瀬潤・牧野周, 2007. 宮城県産グンバイトンボに関する知見. Aeschna 43: 20.
- Jendek, E., 2007. Nineteen new *Agrilus* species from the Palaearctic and Oriental regions (Coleoptera: Buprestidae: Agrilinae). Entomological problems 37(1-2): 31-43.
- 株式会社ニュージェック, 2020. 平成31年度 地震防災雑1-B01号 河川海岸環境調査検討業務委託報告書. 宮城県土木部河川課.
- 海原要, 2003. 2002年に確認した昆虫類. インセクトマップオブ宮城18: 61-66.
- 海原要, 2005. 2003～2004年に確認した昆虫類. インセクトマップオブ宮城22: 1, 51-54.
- 亀井文蔵・小野泰正, 1971. 宮城県の蝶. 147pp. 宮城むしの会.
- 亀澤洋・菅谷和希, 2020. 大津波後に再確認された宮城県名取川河口からのギョウトクコムズギワゴミムシの記録. さやばねニューシリーズ38: 34-36.
- 神室理穂・平吹喜彦・五十嵐由里, 2020. 東日本大震災と復興事業の影響下にある砂浜海岸エコトーンにおけるゴミムシ類の種多様性. インセクトマップオブ宮城52: 1-17.
- 菅間敬治ほか, 2000. 宮城・福島両県におけるヒメギフチョウの分布. 青森の蝶11(1): 23-79.
- 加藤陸奥雄・吉岡邦二, 1967. 自然の栗駒－生物－. 90pp. 宮城県栗駒開発連絡協議会.
- 川崎敦, 2024. 宮城県の水生昆虫採集記録. インセクトマップオブ宮城61: 62-63.
- 喜多英人, 1980. 泉市将監のトンボ. みやぎインセクト3: 1-8.
- 喜多英人, 1982. 宮城県産トンボ3種の生態について. みやぎインセクト4: 6-10.
- 喜多英人, 1991. 宮城県のナゴヤサナエ. 月刊むし246: 37-38.
- 喜多英人, 2003. モートンイトトンボ属の摂食行動について. みやぎインセクト24: 16-18.
- 児玉雅一, 1995. 宮城県におけるタマムシ2種の記録. インセクトマップオブ宮城3: 42.
- 児玉雅一, 1997. 宮城県におけるコホネゴミムシダマシとホネゴミムシダマシの記録. インセクトマップオブ宮城7: 40.
- 児玉雅一, 2019. チャイロチビゲンゴロウとシマケシゲンゴロウ宮城県の記録. インセクトマップオブ宮城50: 91-92.
- 児玉雅一・保谷忠良・吉武啓, 1993. 宮城県昆虫分布資料9 宮城県のクワガタムシ. 48pp.
- 紺野広昭, 2018. 東北地方各地の昆虫の記録 (II). インセクトマップオブ宮城48: 4-13.
- 紺野広昭, 2020. 東北地方各地の昆虫の記録 (III). インセクトマップオブ宮城52: 69-76.
- 紺野広昭, 2021. 仙台市竜ノ口渓谷におけるナミハンミョウの観察記録. インセクトマップオブ宮城55: 36-37.
- 紺野広昭, 2024. タグチホソヒラタハムシの採集記録. インセクトマップオブ宮城60: 73.
- 倉谷忠禎, 2018. オオルリハムシ宮城県伊豆沼の記録. インセクトマップオブ宮城48: 74.
- 倉谷忠禎, 2022. 宮城県におけるウスジロドクガの記録. インセクトマップオブ宮城57: 51.
- 倉谷忠禎, 2022. 宮城県涌谷町におけるマダラケシミズギワゴミムシの記録. インセクトマップオブ宮城57: 53.
- 京那粹, 2024. 宮城県内でアイヌコブスジコガネを採集. インセクトマップオブ宮城61: 75.
- 京那粹, 2024. 宮城県内でフタホシドクガを採集. インセクトマップオブ宮城61: 78.
- 前田泰生・皆木宏明, 1999. キヌゲハキリバチの巣の構造. ホシザキグリーン財団研究報告3: 165-172.
- 前田泰生・宮永龍一, 1999. 日本産7種のツツハナバチ類の分布記録. ホシザキグリーン財団研究報告3: 141-147.
- 牧野周, 2001. マダラヤンマの記録. インセクトマップオブ宮城15: 51.
- 牧野周, 2002. 2001年版宮城県レッドデータブックにリストされたトンボの未記録生息地について. インセクトマップオブ宮城16: 3-6.
- 牧野周, 2002. カラカネイトトンボの新生息地の発見. インセクトマップオブ宮城17: 49.
22. 牧野周, 2002. ミヤササナエとナゴヤサナエの記録. インセクトマップオブ宮城17: 18-19.
23. 牧野周, 2002. 採集記録. インセクトマップオブ宮城17: 55-57.
24. 牧野周, 2004. 松島湾のタイリクアカネとマダラヤンマ. インセクトマップオブ宮城21: 2, 31.
25. 牧野周, 2009. 宮城県RDB改訂のための調査記録 (2008年). インセクトマップオブ宮城30: 1, 20-22.
26. 牧野周, 2010. 宮城県RDB関連トンボ類の確認記録. インセクトマップオブ宮城32: 31-37.

27. 牧野周, 2011. 震災後の宮城県のトンボの生息状況. 月刊むし489: 5-8.
28. 牧野周, 2017. 震災後の宮城県のヒヌマイトトンボとコバネアオイトトンボの生息について. Tombo 59: 11-15.
29. 牧野周, 2019. 宮城県RDB関連トンボ類の2015～2018年の未発表記録. インセクトマップオブ宮城51: 35-37.
30. 牧野周, 2021. 宮城県RDB関連トンボ類の2019年から2021年の記録. インセクトマップオブ宮城55: 30-32.
31. 牧野周, 2024. レッドデータ関連トンボ類の宮城県内での記録 (2022-2023年). インセクトマップオブ宮城60: 33-35.
32. 牧野周・伊藤智・中瀬潤, 2011. 網地島でハネビロエゾトンボを再確認. インセクトマップオブ宮城34: 4, 99.
33. 牧野周・伊藤智・白坂一広・中瀬潤・喜多英人, 2011. 宮城県RDB関連トンボ類の未発表記録. インセクトマップオブ宮城35: 64-68.
34. 牧野周・永幡嘉之・伊藤智・中瀬潤・柳田則明, 2015. 宮城県RDB 改訂版発行に関連する震災後のトンボ類の記録. インセクトマップオブ宮城42: 8-17.
35. 三田村敏正・横井直人, 1993. 阿武隈川流域のナゴヤサナエII. ふくしまの虫11: 28-29.
36. 三田村敏正・宮畑年弘・横井直人, 1992. 阿武隈川流域のナゴヤサナエ. ふくしまの虫10: 6-8.
37. 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団, 2011. 伊豆沼・内沼産昆虫リスト. 伊豆沼・内沼研究報告5: 37-56.
38. 宮城県環境生活部自然保護課 (編), 2016. 宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 RED DATA BOOK MIYAGI 2016. 503pp., 宮城県.
39. 宮城県水産林政部森林整備課, 2023. 散布薬剤の昆虫影響調査結果. 宮城県森林審議会森林保護部会情報提供資料.
40. 水情報国土データ管理センター(国土交通省), 河川環境データベース(河川水辺の国勢調査).
41. 水野谷昭三, 2009. 金華山島の自然を訪ねて フタスジカタピロハナカミキリとの出会い. ふくしまの虫27: 59-63.
42. 森田誠司, 1985. オオキバナガミズギワゴミムシの新産地 (ミズギワゴミムシ分布資料7). 甲虫ニュース67/68: 10.
43. 村上直樹, 2016. 2015年の蝶類採集・確認記録. インセクトマップオブ宮城44: 72-74.
44. 村上直樹, 2017. 2016年の蝶類採集・確認記録. インセクトマップオブ宮城47: 51-53.
45. 永井信, 1954. 仙台付近の蜻蛉. IZUMI 3(3): 9-16.
46. 中村裕之, 1985. 岩手県のツガルホソシデムシの記録. 月刊むし174: 41.
47. 中村康弘, 2023. 愛媛・宮城・長野・岐阜県でのチャマダラセサリの保全活動. チョウの舞う自然34: 12-17.
48. Nakane, T., 1995. Notes on some little-known beetles (Coleoptera) in Japan 13. 北九州の昆蟲42(1): 41-46.
49. 成田正弘, 2016. 宮城県大崎市鬼首にてFITで得られた興味深い甲虫類. インセクトマップオブ宮城44: 22-33.
50. 日本気象協会, 2024. CS宮城やくらいGC太陽光発電事業に係る環境影響評価準備書. CS宮城加美町合同会社.
51. 野村周平・尾崎俊寛, 2017. 宮城県蔵王山塊の刈田岳山頂域でチシマオノヒゲアリヅカムシを採集. さやばねニューシリーズ25: 15.
52. Ôhira, H., 1995. New or Little-known Elateridae (Coleoptera) from Japan, XXXIII. Elytra 23(2): 187-193.
53. 小野泰正, 1975. 宮城・岩手両県下における休耕田のトンボ類. 東北昆虫12: 1-2.
54. 小野泰正, 1976. 岩手県および宮城県地域のルリイトトンボについて. 東北昆虫13/14: 11-13.
55. 小野泰正, 1985. 太白山県自然環境保全地域の動物 7昆虫類. 太白山県自然環境保全地域学術調査報告書: 106-115, 宮城県.
56. 小野泰正・佐藤和夫, 1976. V県立自然公園園船形連峰の動物相 4昆虫類. 県立自然公園船形連峰学術調査報告: 66-74, 宮城県.
57. 遅沢壮一・周亮, 2000. キトンボの記録. インセクトマップオブ宮城12: 35.
58. 斎藤勝雄, 1985. '84シーズンをふりかえて. にらがみ39: 3-16.
59. 斎藤勝雄, 1989. コバネアオイトトンボ内陸部で採集. みやぎインセクト11: 29.
60. 斎藤勝雄, 1990. ジャコウホソハナカミキリ北限の記録. みやぎインセクト12: 30.
61. 斎藤勝雄, 1991. 宮城県におけるアブクマナガゴミムシの記録. みやぎインセクト13: 50.
62. 斎藤勝雄, 1993. クロスジカメノコハムシ宮城県の記録. みやぎインセクト15: 35-36.
63. 斎藤勝雄, 1993. コバネアオイトトンボの記録. みやぎインセクト15: 36.
64. 斎藤勝雄, 1999. アリスアトキリゴミムシの採集例. インセクトマップオブ宮城10: 39.
65. 斎藤勝雄, 1999. オオメツツシンクイの採集例. インセクトマップオブ宮城10: 39.
66. 斎藤勝雄, 2000. シラクモゴボウゾウムシ宮城県に産す. インセクトマップオブ宮城12: 41.
67. 斎藤勝雄, 2000. 採集記録. インセクトマップオブ宮城12: 55-57.
68. 斎藤勝雄, 2012. 宮城県におけるアラメエンマコガネの記録. インセクトマップオブ宮城36: 88.
69. 斎藤雄二, 2008. 宮城県レッドデータブック掲載種調査報告 その1. インセクトマップオブ宮城29: 1, 5-8.
70. 斎藤雄二, 2011. 宮城県レッドデータブック掲載種調査報告 その2 2004年～2010年の記録. インセクトマップオブ宮城35: 69-71.
71. 桜谷鎮雄, 1988. 石巻地方の甲虫分布資料[3]. 石巻昆虫同好会連絡紙986 14: 6-13.
72. 寒沢正明・朝日純一・前田博, 2023. 宮城県島嶼の金華山と宮戸島の蝶類調査報告. Butterfly Science 29: 45-56.
73. 佐野孔亮, 2023. キバネツノトンボを仙台市青葉山にて採集. インセクトマップオブ宮城59: 73.
74. 佐野孔亮, 2024. 仙台市川内および青葉山周辺におけるチョウ類の採集記録. インセクトマップオブ宮城60: 1-4.
75. 佐々木源市郎, 2009. 宮城県北部の採集記録. インセクトマップオブ宮城30: 54-57.
76. 佐々木源市郎, 2024. 宮城県北部地方のチョウ類. インセクトマップオブ宮城60: 10-16.
77. 佐藤英寿, 2001. ハンミョウの集団越冬. みやぎインセクト22: 33.
78. 佐藤光一, 1989. 宮城県におけるネクイハムシの分布について. 栃木県立博物館研究紀要6: 43-48.
79. Satô, M., 1982. Discovery of Torridincolidae (Coleoptera) in Japan. Annotationes Zoologicae Japonenses 55(4): 276-283.
80. 佐藤正孝, 1985. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書III. 甲虫ニュース69: 1-5.
81. 佐藤嘉明, 1963. 宮城県北のトンボ. Danburi 4: 8-9.
82. 信夫禎, 1970. 久保田山における林床昆虫の生態学的研究. 宮城県教育研修センター長期研修員研究報告書: 33-42.
83. 白坂一広, 2002. 採集記録. インセクトマップオブ宮城17: 58-67.
84. 白坂一広, 2012. 宮城県で確認した昆虫類の記録. インセクトマップオブ宮城37: 34-35.
85. 白坂一広, 2020. 2019年の虫の記録. インセクトマップオブ宮城52: 108-109.
86. 白坂一広, 2023. 2023年のトンボ類確認記録. インセクトマップオブ宮城59: 57-58.
87. 白坂一広, 2024. 2024年のトンボの記録. インセクトマップオブ宮城61: 63-65.
88. 白石拓也, 2022. 東日本大震災後の宮城県におけるネアカヨシヤンマの生息状況. Tombo 65: 49-53.
89. 染谷保, 1980. 宮城県岩沼市のヒヌマイトトンボ. 昆虫と自然15(12): 30-31.
90. 染谷保, 1988. 宮城県のヒヌマイトトンボ. るりばし12: 15-17.
91. 鈴木崇洋, 1993. 小野田町のチョウとトンボ. みやぎインセクト15: 6-14.
92. 鈴木互, 1998. 宮城県で採集されたハヤチネベニコメツキ. 甲虫ニュース122: 7.
93. 高橋忠二, 2024. 宮城県南部の蝶類採集記録. インセクトマップオブ宮城61: 65-66.
94. 高橋寛義, 1978. 宮城県でグンバイトンボを発見. みやぎインセクト1: 28.

195. 高橋雄一, 1976. 宮城県初記録か?ハネピロエゾトンボ. いらがみ10: 10.

196. 高橋雄一, 1979. ルリイトトンボ・ハッチョウトンボ県内の新産地. みやぎインセクト2: 16.

197. 高橋雄一, 1988. 宮城県のトンボ. 144pp. ぶなの木出版.

198. 高橋雄一, 1990. 仙台市太白区坪沼にハッチョウトンボの生息地. みやぎインセクト12: 26.

199. 高橋雄一, 1991. 山元町の昆虫. みやぎインセクト13: 19-29.

200. 高橋雄一, 1996. 自然観察の森の昆虫目録II 甲虫類. 平成7年度(1995)仙台市太白山自然観察の森自然観察センター 事業報告及び研究報告書: 53-70.

201. 高橋雄一, 1999. 休耕田のハッチョウトンボ. インセクトマップオブ宮城11: 2, 25.

202. 高橋雄一, 1999. 斗蔵山及び周辺地域の昆虫. 斗蔵山周辺自然環境調査報告書: 258-330, 角田市教育委員会.

203. 高橋雄一, 2002. 仙台湾海浜県自然環境保全地域の昆虫相. 仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書: 67-95, 宮城県.

204. 高橋雄一, 2007. 宮城県の絶滅危惧昆虫. 昆虫と自然42: 39-42. 北隆館.

205. 高橋雄一, 2011. ヒメサナエの気仙沼での記録. インセクトマップオブ宮城35: 97.

206. 高橋雄一, 2012. マダラヤンマの採集例. インセクトマップオブ宮城37: 51.

207. 高橋雄一, 2016. 太白区策川でゲンジボタル発生を確認. インセクトマップオブ宮城44: 80.

208. 高橋雄一, 2017. オオゴキブリとカワラバッタの古い記録. インセクトマップオブ宮城47: 65.

209. 高橋雄一, 2017. 普通種の減少について考える. インセクトマップオブ宮城46: 1-8.

210. 高橋雄一, 2021. 宮城のナミハンミョウについて. インセクトマップオブ宮城55: 33-35.

211. 高橋雄一, 2022. 虫との付き合い昭和・平成・令和 その1. インセクトマップオブ宮城57: 1-9.

212. 高橋雄一・高橋義寛・郷右近勝夫, 1991. 宮城の昆虫. 223pp. 河北新報社.

213. 高橋雄一・斎藤勝雄・五十嵐由里, 2013. 宮城県岩沼市の昆虫調査報告2. インセクトマップオブ宮城38: 1, 11-36.

214. 高橋雄一, 2023. 虫との付き合い昭和・平成・令和 その2. インセクトマップオブ宮城58: 7-18.

215. 高桑正敏, 1995. 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標準目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録第8号, 66pp.

216. 高嶋清明, 2011. 宮城県山元町で見た震災後の昆虫たち. 月刊むし489: 18-21.

217. 武田文昭, 2000. 阿武隈山地におけるクワガタムシ3種. 月刊むし354: 43-44.

218. 武田哲, 2021. 宮城県大崎市鳴子でヒメギフチョウを採集. インセクトマップオブ宮城55: 56-57.

219. 玉田明洋, 2024. 2023年に宮城県で突如復活したカトリヤンマからみる北日本におけるカトリヤンマ減少要因の整理・考察. Tombo 67: 172-181.

220. 玉田明洋・白石拓也・中瀬潤・牧野周, 2025. 宮城県RDB関連トンボ類の2021年から2024年の記録. インセクトマップオブ宮城62: 27-30.

221. 鳥羽明彦, 2011. 2010年北上川(キタカミミナミマイマイ)採集記. 採集記シリーズ7: 1-16. 西多摩昆虫同好会.

222. 遠山豊, 2023. 宮城県南三陸町でフタスジギンエダシャクを採集. インセクトマップオブ宮城59: 71-72.

223. 内山旬人・内山えりか・葦島悠介, 2024. キバネツノトンボ *Libelloides ramburi* (M'Lachlan)は九州に分布するのか? . 北九州市立自然史・歴史博物館研究報告A類(自然史)22: 21-25.

224. 梅津晋, 1960. 宮城県産クワガタムシ科ハンミョウ科概観. IZUMI 13: 9-11.

225. 梅津晋, 2020. 宮城県版RDB掲載種の未発表記録. インセクトマップオブ宮城52: 96-98.

226. 渡辺一生, 1983. 記録報告'82. いらがみ28: 3-8.

227. 渡邊綱平・渡邊泰史, 2019. 川崎町でヒメアカネを確認. インセクトマップオブ宮城50: 92.

228. 渡邊綱平・渡邊泰史, 2021. 2011-2021年のトンボ類の記録(不均翅亜目ヤンマ科). インセクトマップオブ宮城55: 45-50.

229. 渡部徳, 1989. 宮城県の甲虫. 365pp., 日本鞘翅学会.

230. 渡辺徳, 1973. 宮城県昆虫誌 宮城県の鱗翅類. 358pp., 日本蛾類学会.

231. 山路賀藤次, 1935. 宮城県加美郡色麻村産甲蟲類. 昆虫界15: 176-189.

232. 山本弘, 1973. 伊豆沼・内沼周辺の顕著な昆虫等の調査報告. 日本自然保護協会調査報告49 伊豆沼湖沼群学術調査報告書: 52-63, 日本自然保護協会.

233. 山本直樹・新井孝明, 2023. 福島県内でヒメギフチョウ *Luehdorfia puziloi* (Erschoff, 1872)を採集. Butterfly Science 25: 98-102.

234. 山下善平・中根猛彦・石井孝, 1967. 1966年宮城県金華山島におけるライト・トラップによる昆虫調査の結果とその考察. 文部省科学研究費特定研究「生物圏の動態」各種陸上生態系における二次生産構造の比較研究 昭和41年度研究報告書: 79-105, JIBP-CT-5.

235. 山谷文仁, 1984. 山形・宮城のゾウムシ. 山形昆虫同好会会誌13: 26-30.

236. 山谷文仁・草刈広一, 1991. 上杉博物館蔵昆虫目録(7) 鞘翅目(ハンミョウ科). ファウナ・ウキタム6: 42-51.

237. 山谷文仁・草刈広一, 1995. 上杉博物館蔵昆虫目録(41) 甲虫目(食糞性コガネムシ類). ファウナ・ウキタム42: 320-326.

238. 柳田則明, 1999. カトリヤンマの採集記録. インセクトマップオブ宮城11: 44.

239. 柳田則明, 2000. カトリヤンマの追加記録. インセクトマップオブ宮城13: 36.

240. 柳田則明, 2008. 宮城県内におけるRDB掲載種の採集記録. インセクトマップオブ宮城28: 6-10.

241. 柳田則明, 2009. 宮城県内におけるRDB掲載種の採集記録(2008年10月～2009年9月). インセクトマップオブ宮城31: 20-22.

242. 柳田則明, 2010. 宮城県内におけるRDB掲載種の記録(2009年10月～2010年9月). インセクトマップオブ宮城33: 19-24.

243. 柳田則明, 2011. 宮城県内における宮城県版RDB掲載種等の記録. インセクトマップオブ宮城34: 86-89.

244. 柳田則明, 2014. 宮城県におけるエゾトンボの新産地での記録など. インセクトマップオブ宮城41: 82.

245. 柳田則明, 2014. 宮城県におけるトンボの市区町村未記録種の記録. インセクトマップオブ宮城40: 37-41.

246. 柳田則明, 2014. 宮城県レッドリスト2013年版に掲載されたトンボの東日本大震災以降の記録. インセクトマップオブ宮城40: 54-55.

247. 柳田則明, 2015. トンボの環境省レッドリストおよび宮城県レッドリスト種の宮城県における2015年の記録. インセクトマップオブ宮城43: 21-25.

248. 柳田則明, 2016. オオセスジイトトンボ宮城県東松島市の記録. インセクトマップオブ宮城45: 34-35.

249. 柳田則明, 2016. 宮城県でオオモノサシトンボの新産地を発見. インセクトマップオブ宮城45: 25-27.

250. 柳田則明, 2016. 宮城県内で絶滅危険度が増大しているコバネアオイトトンボの現状. インセクトマップオブ宮城45: 39-41.

251. 柳田則明, 2017. オオセスジイトトンボの新産地と2017年の記録. インセクトマップオブ宮城47: 35-37.

252. 柳田則明, 2017. キバネツノトンボ宮城県セヶ宿町の記録. インセクトマップオブ宮城47: 67.

253. 柳田則明, 2017. ヒメサナエ宮城県登米市東和町の記録. インセクトマップオブ宮城47: 63-64.

254. 柳田則明, 2017. 宮城県トンボ目録. 247pp., 自刊.

255. 柳田則明, 2017. 宮城県におけるオオモノサシトンボの雑種化の現状. インセクトマップオブ宮城47: 7-14.

256. 柳田則明, 2018. 宮城県におけるオオモノサシトンボの雑種化の現状2. インセクトマップオブ宮城49: 23-28.

257. 柳田則明, 2019. 宮城県内の低標高地でメススジゲンゴロウを4月中旬に採集. インセクトマップオブ宮城50: 94-95.

258. 柳田則明, 2020. キバネツノトンボ宮城県村田町の記録. インセクトマップオブ宮城52: 116.

259. 柳田則明, 2020. 宮城県における水生半翅類調査結果. インセクトマップオブ宮城52: 84-93.

260. 柳田則明, 2020. 宮城県産蝶類旧市区町村別記録種についておよび旧市区町村での未記録種102種の追加記録. インセクトマップオブ宮城52: 37-68.

261. 柳田則明, 2021. カワラハンミョウを宮城県岩沼市で記録. インセクトマップオブ宮城55: 63.

262. 柳田則明, 2021. トガリアツバを宮城県内3市町で採集. インセクトマップオブ宮城55: 57.

263. 柳田則明, 2021. ヒメギフチョウの雌個体を宮城県内で3月下旬に2頭同時に採集. インセクトマップオブ宮城54: 74-75.

264. 柳田則明, 2021. ヒョウタンゴミムシとホソヒョウタンゴミムシの記録. インセクトマップオブ宮城55: 63.

265. 柳田則明, 2021. 宮城県におけるナミハンミョウの多産地を含むいくつかの産地について. インセクトマップオブ宮城54: 34-36.

266. 柳田則明, 2021. 宮城県村田町のキバネツノトンボ2ヵ所目の産地と生息状況. インセクトマップオブ宮城54: 7-16.

267. 柳田則明, 2022. 宮城県における水生甲虫類の記録. インセクトマップオブ宮城56: 46-52.

268. 矢崎雅巳, 2023. 2021-2023年の蝶類採集・確認記録. インセクトマップオブ宮城59: 63-66.

269. 矢崎雅巳, 2023. 宮城県産チャマダラセセリについて. インセクトマップオブ宮城58: 75-76.

270. 阿部剛, 2025. 宮城県セヶ宿町におけるカワラバッタの記録. インセクトマップオブ宮城62: 101.

271. 青木俊彦, 2025. 宮城県大崎市鬼首でタガメを採集. インセクトマップオブ宮城63: 96.

272. Habu, A., 1978. Some rare spesies of ground-beetles found by Mr. S. Kasahara in the Ryukyus (Coleoptera, Carabidae). Entomological Review of Japan 32(1/2): 61-80.

273. 五十嵐由里, 2025. 保谷忠良氏採集のヒガシツヤヒサゴミムシダマシ. インセクトマップオブ宮城62: 102.

274. 五十嵐由里, 2025. アカガネネクイハムシの新産地. インセクトマップオブ宮城63: 93.

275. 紺野広昭, 2025. 高橋義寛氏が採集したウスバカゲロウ科2種の記録. インセクトマップオブ宮城62: 101-102.

276. 紺野広昭, 2025. 名取市内でムネアカナガクチキを採集. インセクトマップオブ宮城62: 102-103.

277. 紺野広昭, 2025. 宮城県松島町におけるキンイロネクイハムシ産地の消失例. インセクトマップオブ宮城62: 103.

278. 溝野広昭, 2025. 宮城県松島町におけるオオイチモンジシマゲンゴロウの観察記録. インセクトマップオブ宮城63: 93.

279. 溝田浩二・阿部剛・青木俊彦・郷右近勝夫・細見周平・五十嵐由里・紺野広昭・町田禎之・白石拓也・鈴木理, 2025. 宮城県金華山の昆虫相調査報告(2025年7月). インセクトマップオブ宮城63増刊 宮城県金華山の昆虫相調査報告書: 1-35.

280. Ôhira, H., 1967. The Elateridae of the Ryukyu archipelago, III (Coleoptera). Bulletin of the Japan Entomological Academy 3(5): 27-38.

281. 阿部剛, 2025. 宮城県におけるシナノエンマコガネの記録. インセクトマップオブ宮城63: 91.

282. 青木俊彦, 2025. 宮城県北部の蛾類(20). インセクトマップオブ宮城62: 49-60.

283. 郷右近勝夫, 2025. 宮城県内陸部におけるニッポンハナダカバチ集団営巣地の観察記録. インセクトマップオブ宮城63: 15-21.

284. 郷右近勝夫・前田泰生, 2022. 日本産4種のヒメハナバチ類、コガタウツギヒメハナバチ、アカアシヒメハナバチ、シロヤヨイヒメハナバチ、エチゼンヒメハナバチの巣の構造と若干の生態的知見. ホシザキグリーン財団研究報告25: 203-215.

285. 前田泰生・郷右近勝夫, 2020. 日本産ツツハナバチ類8種の分布記録の補遺. ホシザキグリーン財団研究報告23: 209-217.

286. 横原寛・阿部學・新里達也・早川浩之・飯嶋一浩, 2004. ワシタカ類の巣で生活するアカマダラハナムグリ. 甲虫ニュース148: 21-23.

287. 那須義次・三橋陽子・大迫義人・上田恵介, 2012. 兵庫県豊岡市のコウノトリの巣に共生する動物. 昆虫ニューシリーズ15(3): 151-158.

288. 齋藤昭, 2025. オオセイボウの採集記録. インセクトマップオブ宮城62: 103.

289. 高野創士・五十嵐由里, 2025. 宮城県東松島市大浜田湿地の昆虫類調査記録. インセクトマップオブ宮城62: 14-24.

290. 郷右近勝夫・前田泰生・宮永龍一, 1996. クズハキリバチの大営巣集団. 中国昆虫10: 11-16.

291. 森田誠司, 1983. 宮城県名取川のミズギワゴミムシ類(ミズギワゴミムシ類分布資料3). 甲虫ニュース61: 5.

なお、和名や学名、種の配列は、上記のほか以下の文献等に準拠した。

【トンボ目】
・尾園暁・川島逸郎・二橋亮, 2022. ネイチャーガイド日本のトンボ改訂版(改訂第2版). 532pp., 文一総合出版.

【ゴキブリ目】
・小松謙之・伊藤ふくお, 2023. 日本産ゴキブリ全種図鑑. 200pp., 北海道大学出版.

【バツタ目】
・日本直翅学会(編), 2006. バツタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 687pp., 北海道大学出版.

【アミメカゲロウ目】
・日本昆虫目録編集委員会(編), 2016. 日本昆虫目録第5巻 脈翅目群,長翅目,隠翅目,毛翅目,撚翅目. 186pp., 権歌書房.
〈キバネツノトンボの分布について〉
・内山旬人・内山えりか・葦島悠介, 2024. キバネツノトンボ *Libelloides ramburi* (M'Lachlan)は九州に分布するのか? . 北九州市立自然史・歴史博物館研究報告A類(自然史)22: 21-25.

【カメムシ目】
・日本昆虫目録編集委員会(編), 2016. 日本昆虫目録第4巻 準新翅類. 629pp., 権歌書房.
・中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫. 351pp., 文一総合出版.
・石川忠・高井幹夫・安永智秀(編), 2012. 日本原色カメムシ図鑑―陸生カメムシ類 第3巻. 573pp., 全国農村教育協会.
〈ヒウラカメムシ学名について〉
・Belousova, E. N., 2007. Revision of the shield-bug genera *Holcostethus* Fieber and *Peribalus* Mulsant et Rey (Heteroptera, Pentatomidae) of the Palaearctic region. Entomological Review 87(6): 701–739.

【コウチュウ目】
・日本昆虫目録編集委員会(編), 2022. 日本昆虫目録第6巻 鞘翅目第1部. 131pp., 権歌書房.
・鈴木茂. 日本列島の昆虫全種目録(2024/2025)年. https://japanesebeetles.jimdofree.com/
・上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝(編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑II. 514pp., 保育社.
・黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之(編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑III. 500pp., 保育社.
・林匡夫・森本桂・木元新作(編著), 1984. 原色日本甲虫図鑑IV. 438pp., 保育社.

【ハチ目】

- 多田内修・村尾竜起(編), 2014. 日本産ハナバチ図鑑 . 477pp., 文一総合出版 .
- 寺山守・須田博久(編著), 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑 . xxxvi+737 pp., 東海大学出版部 .
- 日本昆虫目録編集委員会(編), 2020. 日本昆虫目録 第 9 巻 膜翅目 ( 第 3 部 細腰亜目有剣類 ). xxv+434 pp., 権歌書房 .

【チョウ目チョウ類】

- 日本昆虫目録編集委員会(編), 2013. 日本昆虫目録第7巻 鱗翅目(第1号セセリチョウ上科－アゲハチョウ上科). 119pp., 権歌書房.(国内の分布、生息環境等について)
- 白水隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 336pp., 学習研究社 .
- 日本チョウ類保全協会(編), 2019. フィールドガイド増補改訂版日本の蝶. 343pp., 誠文堂新光社 .
- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2015. レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-5昆虫類. 509pp.,ぎょうせい .

【チョウ目ガ類】

- 岸田泰則(編), 2011. 日本産蛾類標準図鑑 I . 352pp., 学研教育出版 .
- 岸田泰則(編), 2011. 日本産蛾類標準図鑑 II . 416pp., 学研教育出版 .
- 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則(編), 2013. 日本産蛾類標準図鑑 IV . 552pp. 学研教育出版 .
- 岸田泰則, 2020. 日本の蛾 . 200pp, 学研プラス .

## コバネアオイトトンボ

*Lestes japonicus*

トンボ目
アオイトトンボ科

**絶滅危惧I類（CR+EN）**

2016
CR+EN

環境省
EN



（撮影：牧野 周[撮影地：仙台市太白区]）

（執筆：牧野 周）

## ゲンバイトンボ

*Platycnemis foliacea sasakii*

トンボ目
モノサシトンボ科

**絶滅危惧I類（CR+EN）**

2016
CR+EN

環境省
NT



（撮影：牧野 周[撮影地：大和町]）

（執筆：牧野 周）

## オオモノサシトンボ

*Pseudocoptera rubripes*

トンボ目
モノサシトンボ科

**絶滅危惧I類（CR+EN）**

2016
CR+EN

環境省
EN



（撮影：牧野 周[撮影地：河北町]）

（執筆：牧野 周）

■**選定理由** 同じ水系に2箇所の生息地があったが、現在は1箇所のみが残存となったため。（ク①）

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 宮城県の宮床川水系を北限に東日本の産地は数えるほど。福島の産地は震災被害で絶滅。九州、四国まで分布。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 生息地の河川汚れ。

■**文献等番号** 88、89、125、129、130、134、194、197、212、220、254

（執筆：牧野 周）

■**選定理由** 県内1ヶ所のみ産地は、津波により被災し、生存が危機的状況になったため。（オ①）

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 宮城、新潟、関東5県に生息するのみ。宮城県は富士沼周辺のみ。種の北限。

■**形態ならびに近似種との区別点** 同属のモノサシトンボと酷似。本種の特異な形態は学術的に指摘されているものの中間的な個体も混在。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 富士沼では、津波被災により、もっとも激減した種であった。

■**特記事項** 震災後個体数が著しく減少したため、普通種モノサシトンボの流入に伴い雑種化が進行。大半がモノサシトンボとの中間型となってしまった。

■**文献等番号** 86、126、131、183、197、220、249、254、255、256

（執筆：牧野 周）

カテゴリー	絶滅（EX）	野生絶滅（EW）	絶滅危惧I類（CR+EN）	絶滅危惧IA類（CR）	絶滅危惧IB類（EN）	絶滅危惧II類（VU）	準絶滅危惧（NT）	情報不足（DD）	絶滅のおそれのある地域個体群（LP）	要注目種
-------	--------	----------	---------------	-------------	-------------	-------------	-----------	----------	--------------------	------

## カラカネイトトンボ

*Nehalennia speciosa*

トンボ目  
イトトンボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 NT
---------------	-----------

- **選定理由** スゲ類が繁茂する湿地に極限的に分布し、2つの旧市町村の生息地が1つの地区のみとなり生息数も激減したため(絶滅率50%)。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から東北地方に分布。南限は栃木。産地は局所的。県内は加美町の荒沢地区で確認
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 環境の変化が全く見られない中激減していて、北方種であることを考慮すると温暖化の影響の可能性が高い。
- **文献等番号** 92、121、125、129、133、134、189、191、197、220、254  
(執筆：牧野 周)



(撮影：牧野 周[撮影地：加美町])

## オオセスジイトトンボ

*Cercion plagiosum*

トンボ目  
イトトンボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 VU	環境省 EN
------------	-----------

- **選定理由** 11の旧市町村に生息していたが、現在の生息地は2つの旧市町村に減少したため(絶滅率81%)。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 関東地方と青森県や新潟県に産地があるが、青森県を除きほぼ絶滅模様。県内では伊豆沼周辺、相野沼などでわずかに残存。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 農業排水による富栄養化。ブルーギルなどの外来魚の繁殖による影響か。
- **特記事項** 宮城県は全国的にも本種の多産地を複数有していたが、減少が著しい。保護は急務である。
- **文献等番号** 93、126、127、130、131、133、134、183、184、187、197、212、220、232、245、247、248、251、254  
(執筆：牧野 周)



(撮影：牧野 周[撮影地：涌谷町])

## ヒヌマイイトトンボ

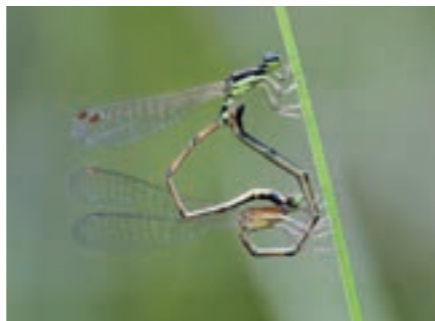
*Mortonagrion hirosei*

トンボ目  
イトトンボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 EN
---------------	-----------

- **選定理由** 産地が海岸沿いの植生豊かな汽水域に限定。7つの旧市町村で記録されていたが、現在の生息地は2つの市町村のみとなったため(絶滅率71%)。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 宮城県の北上水系を北限に香港まで分布。県内産地は北上水系のみ。種の北限。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河口の湿地に生息するので、堤防護岸等の公共事業により産地消失。さらに、東日本大震災の津波により残存産地も破壊された。
- **文献等番号** 26、28、67、92、93、101、103、126、127、128、131、133、134、189、190、197、203、212、216、220、254  
(執筆：牧野 周)



(撮影：牧野 周[撮影地：名取市])

## ルリイトトンボ

*Enallagma boreale circulatum*

トンボ目  
イトトンボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 2つの旧市町村に限られた生息地であるため。(ク②)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道では普通種。長野、岐阜まで分布。県内は加美町の荒沢地区と大和町の一部のみで確認。
- **文献等番号** 92、125、126、133、154、156、191、196、197、220、254  
(執筆：牧野 周)



(撮影：牧野 周[撮影地：加美町])

## ネアカヨシヤンマ

*Aeschnophlebia anisoptera*

トンボ目  
ヤンマ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 2010年に初めて宮城で記録。震災後消滅したが、現在2つの旧市町村の林床湿地で定着が確認。(ク①)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 現在の北限は岩手県。九州まで分布するが、産地はかなり局所的。県内の産地は宮戸島など限られる。
- **特記事項** 明確な北上種。
- **文献等番号** 87、127、131、134、188、220、254  
(執筆：牧野 周)



(撮影：牧野 周[撮影地：東松島市])

## カトリヤンマ

*Gynacantha japonica*

トンボ目  
ヤンマ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 減少が著しく一時県内絶滅が危惧された。近年復活の兆しがあるものの産地は限られているため(絶滅率42%)。(カ①)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国に広く分布するが、東北地方では限定的。猛暑の影響か近年県内の複数地で確認。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 海岸線沿いの限られた後背湿地に残存していたが、震災とその後の復興工事により消滅。
- **文献等番号** 133、134、145、181、183、186、197、219、220、232、238、239、240、242、243、254



(執筆：牧野 周)

(撮影：牧野 周[撮影地：仙台市若林区])

## マダラヤンマ

*Aeshna mixta soneharai*

トンボ目  
ヤンマ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 海岸沿いを中心に震災後の農耕地跡の湿地に分布を広げ、15の旧市町村で確認されたが、復興工事等で多くの産地で消滅したため(絶滅率47%)。(キ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から北関東、長野、北陸にかけて分布。産地はやや局所的。県内では海岸線沿いにいくつか残存している。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災後の農地の湿地化に伴い、生息分布が広がり個体数も増加。しかし、その後の復興工事で多くの産地が消失。また、震災で失われた産地もある。
- **文献等番号** 119、123、124、126、134、169、183、186、187、197、206、213、220、228、232、240、254

(執筆: 牧野 周)



(撮影: 牧野 周[撮影地: 名取市])

## ヒメサナエ

*Sinogomphus flavolimbatus*

トンボ目  
サナエトンボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 県内では5つ以上の河川で記録があったが、現在は4つの河川で成虫が確認されているため(絶滅率20%)。(カ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州から九州にかけて分布。関東以北の産地はかなり局所的。県北にいくつか生息地がある。
- **文献等番号** 27、131、133、134、197、205、220、246、253、254

(執筆: 牧野 周)



(撮影: 牧野 周[撮影地: 東和町])

## ナゴヤサナエ

*Stylurus nagoyanus*

トンボ目  
サナエトンボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 VU
---------------	-----------

- **選定理由** 県内の4つの水系で記録があるが、現在では2つの水系でしか確認されていないため(絶滅率50%)。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州まで記録はあるが、北日本の記録はきわめて局所的。
- **形態ならびに近似種との区別点** メガネサナエに酷似するが、尾部付属器や腹部黄斑形状が異なる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川の中流域から下流域に生息するため汚染の影響を受けやすい。
- **文献等番号** 102、122、126、134、135、136、158、197、220、254

(執筆: 牧野 周)



(撮影: 牧野 周[撮影地: 丸森町])

## メガネサナエ

*Stylurus ocellatus*

トンボ目  
サナエトンボ科

絶滅 (EX)

2016 EX	環境省 VU
------------	-----------

- **選定理由** 成虫の確認記録は伊豆沼と岩出山町であり、1980年以降の記録がないため。ただし、1992年に伊豆沼で羽化殻の確認記録がある。(ア)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 近畿から東北にかけて記録があるが、近年、関東以北では記録はない。伊豆沼と岩出山町の他に化女沼と亘理町で記録。亘理町の記録は阿武隈流域に生息するナゴヤサナエの誤同定の可能性もある。
- **形態ならびに近似種との区別点** ナゴヤサナエに酷似するが、尾部付属器や腹部黄斑形状が異なる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 平野部の大きな湖沼や流入する河川が生息地であるため、農業の流入や農業排水の富栄養化が要因と考えられる。
- **文献等番号** 21、134、197、212、254

(執筆: 牧野 周)



(撮影: 牧野 周[所蔵: 山元町歴史民俗資料館][産地: 伊豆沼])

## エゾトンボ

*Somatochlora viridiaenea*

トンボ目  
エゾトンボ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 10の旧市町村で記録されていたが、現在は7つの市町村で確認ができているものの生息地は林床湿地などに限られるため(絶滅率32%) (キ)。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州まで分布。北海道では普通種であるが、県内の確実な産地は宮戸島など限られる。
- **形態ならびに近似種との区別点** 雄はハネビロエゾトンボに酷似。尾部付属器にわずかな違いがある。亜種オオエゾトンボとは明確な区別はつかない。
- **文献等番号** 126、132、134、187、197、220、242、244、254

(執筆: 牧野 周)



(撮影: 牧野 周[撮影地: 東松島市])

## ハネビロエゾトンボ

*Somatochlora clavata*

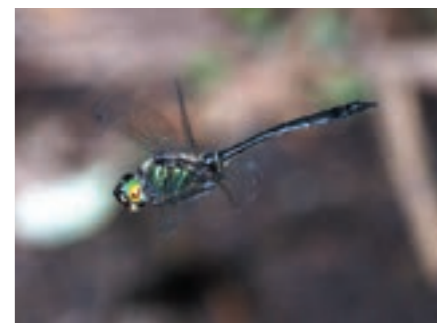
トンボ目  
エゾトンボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 VU
---------------	-----------

- **選定理由** 4つの旧市町村で記録はあるが、現在、2か所のみ記録となったため(絶滅率50%)。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州まで分布するが、産地は限定的で確実に減少傾向。県内の確実な生息地は網地島のみ。
- **形態ならびに近似種との区別点** 雄はエゾトンボに酷似。尾部付属器にわずかな違いがある。エゾトンボが湿地に生息するのに対し、本種は流水域に生息。
- **文献等番号** 30、132、134、195、197、220、254

(執筆: 牧野 周)



(撮影: 牧野 周[撮影地: 栃木県])

## キイロヤマトンボ

*Macromia daimoji*

- **選定理由** 福島県が北限記録であったが、2022年に一頭が県内で採集、24年には生息地が確認されたため(ク①)。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 岩手県を北限に九州まで分布。北日本の記録はきわめて局所的。
- **形態ならびに近似種との区別点** コヤマトンボに似るが腹部第3節の黄斑が切れる。腹部黄斑が大きい。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河床や護岸の改修工事等。
- **文献等番号** 82、220

(執筆：牧野 周)

トンボ目  
ヤマトンボ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	NT



(撮影：牧野 周[撮影地：茨城県])

## ヒメアカネ

*Sympetrum parvulum*

- **選定理由** 7つの旧市町村で記録があるものの、確実な生息地は4つの市町村に減少したため(絶滅率43%)。(カ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国には広く分布しているが、県内の産地は極端に限られている。
- **形態ならびに近似種との区別点** マユタテアカネやマイコアカネと酷似。雌雄ともに、交尾器の形態に違いがある。
- **文献等番号** 100、126、133、134、184、186、197、220、227、254

(執筆：牧野 周)

トンボ目  
トンボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
CR+EN	-



(撮影：牧野 周[撮影地：仙台市泉区])

## キトンボ

*Sympetrum croceolum*

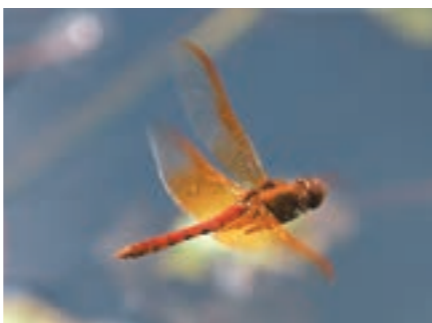
- **選定理由** 9つの旧市町村に記録があり、現在は7市町村で確認されているが産地は限られているため(絶滅率22%)。(キ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州まで分布。産地はやや局所的。県内では状態の良い湖沼に生息するのみ。
- **形態ならびに近似種との区別点** オオキトンボに似るが、やや小型で赤みが強い。
- **文献等番号** 100、120、126、133、145、157、187、191、197、220、240、254

(執筆：牧野 周)

トンボ目  
トンボ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
VU	-



(撮影：牧野 周[撮影地：加美町])

## オオキトンボ

*Sympetrum uniforme*

- **選定理由** 1977年の化女沼での採集記録以降、確認されていないため。(ア)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北地方から九州にかけて分布。全国的に減少が著しいが、北限の青森県では現存。県北の伊豆沼・内沼と化女沼で記録があるのみ。
- **形態ならびに近似種との区別点** ショウジョウトンボの未熟個体に似るが、前胸に毛が少ない。翅の着色状況はタイリクアカネに似るが橙褐色が強い。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 平野部の湖沼が生息地であるため、農業の流入や農業排水の富栄養化が要因と考えられる。
- **文献等番号** 126、134、197、254

(執筆：牧野 周)

トンボ目  
トンボ科

絶滅 (EX)

2016	環境省
EX	EN



(撮影：牧野 周[所蔵：山元町歴史民俗資料館][産地：化女沼])

## ハッチョウトンボ

*Nannophya pygmaea*

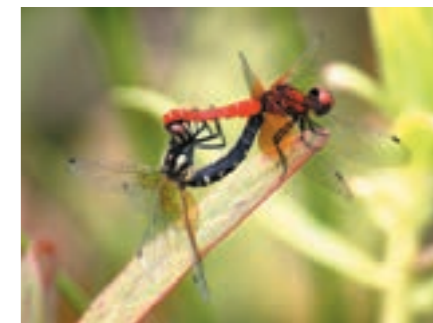
- **選定理由** 10以上の旧市町村で記録されていたが、現在、安定した産地は山沿いの泥炭湿地など5市町村に限られているため(絶滅率44%)。(カ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州から九州にかけて分布するが、産地は局所的。県内の安定した産地は気仙沼市と旧宮崎町と旧小野田町に数ヶ所あるのみ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 公共事業等の土地開発によって消滅した産地が多い。また、湿地に棲みつく種の中でも、乾燥化に極端に弱い。
- **特記事項** 日本最小のトンボである。
- **文献等番号** 54、63、75、92、120、129、130、134、175、181、191、196、197、198、199、201、220、254

(執筆：牧野 周)

トンボ目  
トンボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016	環境省
VU	-



(撮影：牧野 周[撮影地：加美町])

## ベッコウトンボ

*Libellula angelina*

- **選定理由** 1966年の伊豆沼での採集記録以降、確認されていないため。(ア)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** かつては宮城県伊豆沼が種の北限地。全国的に減少が著しく、東北地方と関東は絶滅。現存産地はすでに数えるほど。県内の確認記録は伊豆沼のみ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 平野部の湖沼が生息地であるため、農業の流入や農業排水の富栄養化が要因と考えられる。
- **文献等番号** 85、126、134、197、232、254

(執筆：牧野 周)

トンボ目  
トンボ科

絶滅 (EX)

2016	環境省
EX	CR



(撮影：喜多 英人[撮影地：静岡県])

## オオゴキブリ

*Panesthia angustipennis spadica*

ゴキブリ目  
オオゴキブリ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
-

- **選定理由** 丘陵地における大径木林の遺存種で、県内では生息環境が限定される。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。県内では、金華山、大和町、仙台市太白区、角田市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 樹林性。体長約40mm。大型で厚みもあり、県内に近似種はいない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 県内では暖地性の大径木の林が開発され、社寺などに僅かに残っている程度。このため好適な環境は限られる。
- **文献等番号** 138、208、279

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## カスミササキリ

*Orchelimum kasumigauraense*

バッタ目  
キリギリス科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 生息地である河川のヨシ原の縮小。大津波による生息地のダメージが大きい。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州。県内では、河北町、伊豆沼、名取市、岩沼市、亶理町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長25~30mm。翅が一般的に短いが、長翅型がまれに出現する。♀の産卵管が上方に反る。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 海浜、河口部の工事によるヨシ原の縮小。
- **文献等番号** 91、138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## ハマスズ

*Dianemobius csikii*

バッタ目  
ヒバリモドキ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN

環境省  
-

- **選定理由** 砂浜の縮小を主な原因とし、震災後現存する産地は1か所のみと考えられる。今後震災復旧・復興工事の影響が懸念される。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、朝鮮半島、中国。県内では、仙台市若林区、岩沼市、亶理町、山元町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長は♂6.7mm、♀7.4mm(産卵器端まで10.1~11.2mm)。体色は生息地の砂地に紛らわしく、灰白色地に茶、黒色の斑模様。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂地の縮小、消滅。復興工事による生息環境の改変。
- **文献等番号** 72、138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：五十嵐 由里[撮影地：青森県])

## ニンポイナゴ

*Oxya ninpoensis*

バッタ目  
バッタ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 県内では1970年代の記録のみであり、その後は見つかっていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内における最近の記録はない。青森県、宮城県、新潟県から知られ、県内では涌谷町から記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長はコバネイナゴより同じかやや大きい。後腿節が長い。コバネイナゴよりも出現期が早い。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 自然度の高い平地の池沼湿地に生息、かつて東北の水田にもいたという。減少要因は不詳。
- **文献等番号** 138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭[所蔵：農研機構])

## ヤマトマダラバッタ

*Epacromius japonicus*

バッタ目  
バッタ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
-

- **選定理由** 生息地が海浜に限られ、砂浜の消滅、減少のため、生息範囲が狭まっている。大津波による生息地のダメージが大きい。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、南西諸島。県内では、東松島市、仙台市若林区・宮城野区、名取市、岩沼市、亶理町、山元町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長約30~40mmの中型のバッタ。体色は灰褐色で黒紋を散布。まれに緑色を帯びた個体が出現。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂地海岸の侵食による減少、防波堤工事等による改変と、海浜植生の縮小。
- **文献等番号** 91、138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## カワラバッタ

*Eusphingonotus japonicus*

バッタ目  
バッタ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 県内では1998年以降の記録がない。生息地である上・中流河川の河原の、遷移による生息地の縮小。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。県内では、鳴子町、仙台市青葉区、七ヶ宿町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 中型のバッタで体長25~43mm。体色は灰青色。後翅中央部より内側は青色。前胸背板の後半部が隆起する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地である河川中流域の護岸工事等による開発。上流のダムによる河原の安定化による、草地への遷移。
- **文献等番号** 138、208、270

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：五十嵐 由里[撮影地：岩手県])

## スナヨコバイ

*Psammotettix maritimus*

カメムシ目  
ヨコバイ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 NT
---------------	-----------

- **選定理由** 生息地が海浜に限られ、砂浜の消滅、人工化により生息地が少なくなっている。大津波による生息地のダメージが大きい。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州。県内では、本吉町、河北町、東松島市、仙台市宮城野区、名取川河口、亶理町、山元町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長3.5mm内外。体色は白色に砂地に褐色と黒色の斑紋があり、砂地と紛らわしい。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 食草であるコウボウムギが生育する砂浜植生の復興工事による減少のほか、浸食による砂浜の消滅。
- **文献等番号** 72、91、138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## コオイムシ

*Appasus japonicus*

カメムシ目  
コオイムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 生息地である水田の環境悪化。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本全国、中国、朝鮮半島。県内では、伊豆沼・内沼、米山町、松島町、色麻町、仙台市太白区、名取市、大河原町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 扁平で小判型。体長約20mm。オオコオイムシは大型で、体色も濃い茶褐色。前胸背板、前腿節の形状が異なる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地である水田の土側溝の圃場整備による改変。植物が豊富な沼沢地の減少。
- **文献等番号** 29、76、137、138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## タガメ

*Lethocerus deyrollei*

カメムシ目  
コオイムシ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 VU
---------------	-----------

- **選定理由** 農村の溜池等に見られたが、全国的に減少しており、県内も例外ではない。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、台湾、朝鮮半島、中国。県内では、志波姫町、古川市、涌谷町、小野田町、加美町、大和町、仙台市太白区、仙台市泉区、川崎町、名取市、大河原町、角田市、白石市等。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長60mm。国内最大級の水生カメムシ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 成虫は灯火によく飛来する。生息地周辺の市街地化により、電灯に飛来した個体が生息地に戻れずに死ぬことがある。溜池、水路の護岸化。
- **文献等番号** 62、99、138、267、271

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：細見 周平)

## ホッケミズムシ

*Hesperocorixa distanti hokkensis*

カメムシ目  
ミズムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 生息地である溜池の環境悪化。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。東北北部、北海道には亜種ミズムシが分布する。県内では、若柳町、色麻町、大河原町、亶理町、角田市、塩釜市野々島。
- **形態ならびに近似種との区別点** ミズムシ科の中では大型で、体長10mm前後。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地である池沼の水質汚濁、改修工事などによる改変、ブラックバス等の外来生物による捕食。
- **文献等番号** 70、138、150

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：五十嵐 由里)

## コバンムシ

*Ilycoris cimicoides exclamationis*

カメムシ目  
コバンムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 EN
------------	-----------

- **選定理由** 浮葉植物が生育する、自然度の高い池沼の減少。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州、朝鮮半島、中国。県内では、若柳町、迫町、伊豆沼・内沼、涌谷町、亶理町(戦前の記録)。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長11~12.5mm。体型は扁平で小判型。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 浮葉植物が多い沼沢地の護岸化、管理放棄などによる減少。アメリカザリガニ等の外来生物による捕食。
- **文献等番号** 138、267

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## キイロマツモムシ

*Notonecta reuteri*

カメムシ目  
マツモムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 県内は地勢的に山地の湿原が少ない。生息地である山地湿原の池沼の遷移。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州。県内では、鳴子町、小野田町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 長円筒形。体長13~16mm、体色は灰黄白色。マツモムシは本種より小型で、背面に黒紋がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地である山地池沼の遷移と、人の立ち入りによる踏み荒らし。
- **文献等番号** 138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## クロマダラナガカメムシ

*Heterogaster urticae*

カメムシ目  
クロマダラナガカメムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 県内の生息地が限られる。(テ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州(北部)。県内では、涌谷町、桃生町、岩出山町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長7~8mm。体は黒色で、直立毛に覆われる。本種の所属する属は、国内では一種のみ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 本種が利用するエゾイラクサが豊富な草地環境の乾燥化、遷移。改修工事などによる改変。
- **文献等番号** 91、138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## シロヘリツチカメムシ

*Canthophorus nivemarginatus*

カメムシ目  
ツチカメムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
NT

- **選定理由** 生息地が限定される。生息地である草地の遷移、管理放棄による消滅。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。県内では、仙台市青葉区、松島町、色麻町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長6~8mm。光沢のある黒藍色で体表は顕著な点刻を散布する。体の側縁は細く黄白色で縁取られる。前胸背中央前方に平滑な隆起横帯がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 本種が利用するカナビキソウが生育する、安定した草地環境の減少。
- **文献等番号** 109

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## ヒウラカメムシ

*Paraholcostethus breviceps*

カメムシ目  
カメムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
- 環境省  
-

- **選定理由** 県内の生息地が限られる。(テ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州(青森、宮城、福島、茨城)。県内では、石巻市、仙台市若林区、仙台市太白区、名取市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長7.0~8.5mm。光沢のある黄褐色の地に黒い点刻を密に散布する。頭部中葉は側葉より短い。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 本種が利用するカヤツリグサ科やイネ科が豊富な湿地環境の乾燥化、遷移。改修工事などによる改変。
- **特記事項** 学名はBelousova(2007)に従った。
- **文献等番号** 25、91、108

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## オオウスバカゲロウ

*Heoclisia japonica*

アミメカゲロウ目  
ウスバカゲロウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- **選定理由** 幼虫の生息地が海浜や砂地に限られ、大津波や工事の影響により減少している。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州。県内では鳴子町、牡鹿町、東松島市、涌谷町、仙台市青葉区・泉区・若林区、宮城野区、名取市、岩沼市、亶理町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 成虫は体長40mm。終齢幼虫は20mm程度。近似種に比べ成虫、幼虫ともに大型。幼虫は土中にすり鉢状の巣を造らない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂地海岸の侵食による減少、防波堤工事等による改変。海浜植生や樹林の縮小。
- **文献等番号** 72、91、138、275

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：五十嵐 由里)

## カスリウスバカゲロウ

*Distoleon nigricans*

アミメカゲロウ目  
ウスバカゲロウ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 県内の記録が少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。県内では、気仙沼市大島、仙台市泉区、岩沼市、川崎町、蔵王町、白石市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長約40mm。翅に斑紋がある。コカスリウスバカゲロウは、より小型で、翅の斑紋が不明瞭。幼虫は両種共に非営巣性。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 幼虫の生息地である砂地の減少と考えられるが、不詳。
- **文献等番号** 76、138、275

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：高橋 雄一)

## ツノトンボ

*Hybris subjacens*

アミメカゲロウ目  
ツノトンボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- **選定理由** 県内では近年記録がない。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。県内では、仙台市泉区・太白区、名取市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長30~35mm程度。トンボ類に形状が似ている。触角が長いのが名前の由来。オオツノトンボよりも体毛が短い。体色は♂が赤褐色、♀が黄褐色。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 幼虫の生息地である草地の、管理放置による樹林化。
- **文献等番号** 138

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：高橋 雄一)

## キバネツノトンボ

*Ascalaphus ramburi*

アミメカゲロウ目  
ツノトンボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- **選定理由** 生息地が限定される。生息地である草地の遷移、管理放棄による消滅。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州。県内では、伊豆沼・内沼、宮崎町、七ヶ宿町、村田町、加美町、仙台市青葉区。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長約23mm。頭部と胸部の一部が黄色で、他は黒色で毛に覆われる。翅は黄色と褐色の斑模様。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地である草原の遷移による縮小、草原開発。
- **特記事項** 最近、九州の記録は疑わしいとされる。
- **文献等番号** 138、173、223、233、252、266

(執筆：紺野 広昭)



(撮影：紺野 広昭)

## マダラコガシラミズムシ

*Haliptus sharpi*

コウチュウ目  
コガシラミズムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
VU

- **選定理由** 開発や管理放棄などにより、生息に適した健全な里山的環境が衰退している。食餌とするシャジクモ類の減少が著しい。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。水生植物の豊富な浅い水域、水田などに生息する。県内では伊豆沼内沼、松島町、青葉区、蔵王町、丸森町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発による埋め立て、圃場整備や水田の乾田化、管理放棄による遷移。水質の悪化、外来生物による水生植物の減少。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：斎藤 勝雄)

## エゾヒメゲンゴロウ

*Rhantus yessoensis*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 本州での分布はきわめて局地的。宮城県での生息域はほとんどが何らかの保全対象となっているが、都市近郊に位置するため周辺開発などの影響に注意が必要。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州中部以北に分布する。樹林内の水たまりに生息する。県内では泉区、青葉区、名取市で記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** ヒメゲンゴロウ、オオヒメゲンゴロウに似るが、本種は前胸背板の黒紋が円形。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発、造成による破壊、周辺開発、汚水の流入。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里[産地：青森県])

## マルコガタノゲンゴロウ

*Cybister lewisianus*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
CR

- **選定理由** きわめて局地的に分布し、個体数が少ない。全国的にも減少傾向が著しい。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州に分布する。自然度の高い大きな池沼に生息する。県内では石巻市、名取市で記録があるが、いずれも灯火に飛来したもので、生息環境については不明。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発、造成による破壊、ため池の護岸、管理放棄。水質の悪化、外来生物による捕食などが想定される。
- **文献等番号** 1、171

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里[産地：岩手県])

## ゲンゴロウ

*Cybister chinensis*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
VU

- **選定理由** 全国的に激減していて、近年は宮城県でも平地で見るとはほとんどない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、自然池沼、ため池、水田などの止水に生息する。県内では気仙沼市、本吉町、北上町、松島町、利府町、塩竈市、若柳町、宮崎町、小野田町、大衡村、大和町、大郷町、泉区、青葉区、太白区、名取市、柴田町、川崎町、蔵王町、七ヶ宿町、角田市、亶理町、山元町、丸森町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 池沼やため池の埋め立て、護岸など改変、圃場整備、乾田化。ため池の管理放棄、放棄水田の遷移。水質の悪化、捕食者の放流、侵入。
- **文献等番号** 4、15、74、91、99、138、150、185、267

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## メススジゲンゴロウ

*Acilius japonicus*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 分布は局地的だが産地での個体数は少なくない。船形山系の既知産地の一つ大和町桑沼では、ニジマスの放流によって絶滅したとされる。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州中部以北に分布する。水質が良く水温の低い池沼に生息する。県内では栗駒町、小野田町、色麻町、大和町、泉区、青葉区で記録があり、船形山系に生息地が多い。山間や高標高地の池沼、ときにため池に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ため池の埋め立てなど改変、管理放棄、水質の悪化。捕食者の放流、侵入。
- **文献等番号** 62、138、185、257、267

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## エゾゲンゴロウモドキ

*Dytiscus marginalis czerskii*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 VU
------------	-----------

- **選定理由** 宮城県での分布はきわめて局地的で、現存する産地は2か所のみ。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州中部以北に分布する。県内では小野田町、大和町に記録があり、山間の自然池沼、ため池に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 池沼の埋め立てなど改変、水質の悪化、捕食者の放流、侵入。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## オオイチモンジシマゲンゴロウ

*Hydaticus pacificus conspersus*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 EN
------------	-----------

- **選定理由** 全国的にきわめて局所的に分布し、個体数が少ない。人里近くに生息するため、生息環境が人の活動の影響を受けやすい。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は近畿以北の本州に分布する。県内では石巻市、松島町、利府町、加美町、大郷町、若林区、名取市、柴田町、大河原町、亶理町、山元町、丸森町で記録されている。平地から低山にかけての、湧水のある水田、樹林中の細流や池沼などに生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発による生息環境の破壊、山林の伐採や管理放棄による乾燥化、湧水の減少、水質の悪化、水田の乾田化、農薬汚染など。
- **文献等番号** 79、138、204、215

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## シマケシゲンゴロウ

*Hygrotus chinensis*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 局地的に分布する。宮城県での主な生息環境である海岸付近の湿地は、震災復旧・復興工事により大きく改変された。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、九州に分布し、池沼や湿地に生息する。県内では矢本町、鳴瀬町、名取市、角田市、亶理町、山元町に記録があり、主に沿岸部で確認されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 防潮堤建設、海岸林造成などによる後背湿地の埋め立て、破壊。
- **文献等番号** 91、106、138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：斎藤 勝雄)

## ルイスツブゲンゴロウ

*Laccophilus lewisius*

コウチュウ目  
ゲンゴロウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 VU
------------	-----------

- **選定理由** 分布は局地的で個体数が少ない。低地に生息するため人の活動の影響を受けやすい。生息環境の悪化に敏感であるという。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州に分布する。低地の池沼、湿地に生息する。県内では迫町、若柳町、角田市で記録されている。同属のニセルイスツブゲンゴロウと混棲する産地もある。ニセルイス報告以前の記録には注意が必要。
- **形態ならびに近似種との区別点** 近似種ニセルイスツブゲンゴロウは、上翅の一番内側の縦条が基部でほぼ円形に分離し、次の長い縦条は太いまま上翅基部に達する。体長は4mm以下で、ルイスツブより一回り小さい。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 池沼やため池の埋め立てなど改変、圃場整備、乾田化。ため池の管理放棄、放棄水田の遷移。水質の悪化、捕食者の放流、侵入。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## カワラハンミョウ

*Chaetodera laetescrpta laetescrpta*

コウチュウ目  
ハンミョウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 EN
---------------	-----------

- **選定理由** 砂浜の縮小を主な原因とし、全国各地で急速に生息地が失われつつある。震災後、一時的な砂浜の環境の拡大にともなう生息数の回復が確認されたが、震災復旧・復興工事の影響が強く懸念される。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道から九州、伊豆大島の砂浜や河川敷などの広い砂地に生息する。県内では古くは内陸の色麻町、震災前には河北町、石巻市でも記録されていたが、現時点では鳴瀬町と仙台市以南の太平洋岸で確認されている。奥行きのある広い砂浜に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設や海岸林造成などによる生息地の分断や大規模破壊。
- **文献等番号** 16、81、91、96、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ホソハンミョウ

*Cicindela gracilis*

コウチュウ目  
ハンミョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 VU
------------	-----------

- **選定理由** 分布は局地的。本種の好む環境は、火入れの停止など草地の管理方法の変化なども一因となって遷移が進行しやすい。泉区の産地はリゾート施設の建設により大半が失われた。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では色麻町、泉区、白石市に記録があり、山間や河川敷の半裸地ないし低茎草地に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修や開発による草地の破壊、改変。植生の遷移。
- **文献等番号** 138、225

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## ナミハンミョウ

*Sophiodela japonica*

コウチュウ目  
ハンミョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	-

- **選定理由** かつては都市近郊の墓地や林道、農道、耕作地周辺などに普通の身近な種だったが、近年は生息適地が少なくなり、見る機会が減少している。多産地の仙台市竜ノ口ではイノシシにより幼虫が捕食された。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、屋久島などに分布する。県内では平野部から山地まで広く記録されていた。植生のない、土がむき出しになった場所に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 墓地、林道、農道の舗装、コンクリートや砂利などによる被覆。植生の遷移。イノシシの捕食圧。
- **文献等番号** 55、57、64、65、66、68、78、98、110、155、158、177、200、202、209、210、214、229、226、231、236、265

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## ヒメクロオサムシ

*Carabus opaculus shirahatai*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
NT	-

- **選定理由** 宮城県の山岳は東北の他県と比較して標高が低く、本種の分布南限にも近いため、生息環境は山頂付近の狭い範囲に限定される。近年の調査は行われておらず現況は不明。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は東北地方の高地に分布する。原名亜種が北海道に分布。県内では栗駒山、船形山、蔵王山塊の高標高地で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 気候変化による植生の遷移、それともなう生息環境の縮小、孤立。
- **特記事項** 栗駒山、蔵王山塊上部は国定公園の特別保護地区に属する。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## アカガネオサムシ

*Carabus granulatus telluris*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
NT	VU

- **選定理由** 本種が生息する平野から周辺の丘陵地の湿地は開発など人為の影響を受けやすく、生息に適した環境が失われつつある。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は本州中部以北に分布する。北海道産は別亜種。県内では東和町、中田町、津山町、豊里町、河北町、桃生町、石巻市、鳴瀬町、涌谷町、松島町、岩出山町、古川市/三本木町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修や圃場整備、湿地の埋め立て、改変、生息地周辺の開発などによる湿地の乾燥化。
- **文献等番号** 91、138、140、221

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：阿部 剛)

## セアカオサムシ

*Carabus tuberculosus*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
NT	NT

- **選定理由** 河川の氾濫や人為による管理で生息環境が維持されてきた種であるが、ダム等による治水や里地里山の荒廃によって、生息に適した環境が失われつつある。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州ほかに分布する。県内では豊里町、河北町、鳴瀬町、小牛田町、古川市、三本木町、鹿島台町、色麻町、大衡村、大和町、富谷町、大郷町、泉区、青葉区、太白区、名取市、柴田町、蔵王町、角田市、山元町、丸森町で記録されている。低地から山間まで広く分布するが、多くは河川敷や農耕地周辺など、人里近くの適度に攪乱された環境に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修や開発行為による破壊。治水による河川氾濫の減少、管理放棄による植生の遷移、湿地の乾燥化など。
- **文献等番号** 79、91、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## マークオサムシ

*Carabus maacki aquatilis*

コウチュウ目  
オサムシ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016	環境省
CR+EN	VU

- **選定理由** 分布が局地的であることに加え、生息に適した水辺の環境が急速に失われつつある。かつて多産していた古川市化女沼ではダム湖化により絶滅した。その他ほとんどの産地で記録が途絶えている(ケ、セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は本州北部に分布し、低地ないし丘陵地の湿地や水田周辺、湖沼の周囲、湿った河川敷などに生息する。県内では松島町、利府町、伊豆沼、岩出山町、古川市、大和町、富谷町、大郷町、仙台市泉区で記録があり、岩出山町、富谷町では比較的最近まで確認されていた。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 宅地開発、ダム建設や護岸による破壊。水田の整備、乾田化。生息地周辺の開発による乾燥化。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：阿部 剛)

## オオハンミョウモドキ

*Elaphrus japonicus*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
NT	-

- **選定理由** 奥羽山系に生息するが、分布は連続せず局地的。乾燥化と植生の遷移で確認できなくなった産地もある。宮城県の山間湿地の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州中部以北に分布し、泥炭地や山間の湿地に生息する。県内では宮崎町、小野田町、大和町で記録されている。ミズバショウが生えるような湿地に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 改変による湿地の破壊、周囲の改変による乾燥化、植生の遷移。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## ヒョウタンゴミムシ

*Scarites aterrimus*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 砂浜の衰退傾向に加え、震災復旧・復興工事の影響が懸念される。良好な砂浜海岸の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州の砂浜海岸に生息し、流木など自然の漂着物下に住む。県内では唐桑町、気仙沼市、本吉町、歌津町、北上町、河北町、雄勝町、女川町、牡鹿町、鳴瀬町、七ヶ浜町、塩竈市、宮城野区、若林区、名取市、岩沼市、亶理町、山元町で記録され、一部では震災後再確認されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移。車両の乗り入れ、防潮堤建設などによる破壊。海水浴場などでの過剰な清掃行為。
- **文献等番号** 73、76、81、91、138、264

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ハマベミズギワゴミムシ

*Bembidion collutum semilutum*

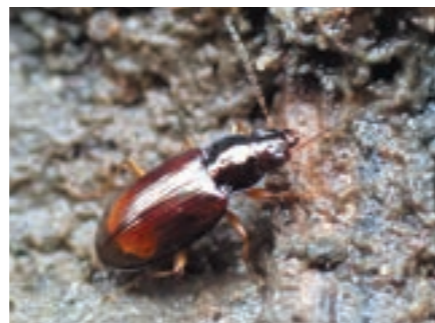
コウチュウ目  
オサムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 河口付近の環境は変化しやすく、自然条件や周辺域を含めた改変により大きな影響を受けやすい。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は本州、九州に分布し、河口付近に生息する。県内では北上川、鳴瀬川、名取川、阿武隈川の河口部に記録があり、一部では震災後再確認されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による環境の変化。河川堤防の改修工事や防潮堤建設など河口部の改変。
- **文献等番号** 91、95、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## オオキバナガミズギワゴミムシ

*Bembidion sumai*

コウチュウ目  
オサムシ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 VU
---------------	-----------

- **選定理由** 生息環境がきわめて限定されるため、自然条件や周辺域を含めた改変により大きな影響を受ける恐れがある。近年の記録がない。(ケ、ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州の千葉県以北に分布するがきわめて局地的。河口付近の潮間帯の砂地ないし泥地に生息する。県内では阿武隈川河口から記録されたが、以後の報告がない。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体は扁平で大顎が発達し、キバナガミズギワゴミムシに似るが大型(体長5.5~6mm)。上翅は黄褐色で暗色の紋をもつ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による環境の変化。河川堤防の改修工事や防潮堤建設など河口部の改変。
- **文献等番号** 142、272

(執筆：五十嵐 由里)



(Habu, A., 1978より引用)

## キバナガミズギワゴミムシ

*Bembidion yokohamae*

コウチュウ目  
オサムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 生息環境がきわめて限定的。河口付近の環境は変化しやすく、自然条件や周辺域を含めた改変により大きな影響を受けやすい。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州ほかに分布し、河口付近の潮間帯に生息する。県内では唐桑町、本吉町、北上町、河北町、名取市、名取川河口、阿武隈川河口に記録がある。本吉町と河北町の一部の産地は震災で水没した。
- **形態ならびに近似種との区別点** 上翅は黒色で緑青色の鈍い光沢があり、前半部に不明瞭なやや明色の斑紋がある。体長約4.2mm。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による環境の変化。河川堤防の改修工事や防潮堤建設など河口部の改変。
- **文献等番号** 91、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## マダラケシミズギワゴミムシ

*Bembidion articulatum*

コウチュウ目  
オサムシ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 分布は極めて局地的で個体数が少ない。水ぎわの環境は変化しやすく、自然条件や周辺域を含めた改変により大きな影響を受けやすい。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州に分布する。水ぎわの泥地に生息する。県内では本吉町、北上町、涌谷町、朴島、築館町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸、埋め立てなどによる湿地の破壊、周囲の改変による乾燥化、植生の遷移。
- **文献等番号** 91、114、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ギョウトクコミズギワゴミムシ

*Tachys gyotokuensis gyotokuensis*

コウチュウ目  
オサムシ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 VU
------------	-----------

- **選定理由** 生息環境がきわめて限定的。河口付近の環境は変化しやすく、自然条件や周辺域を含めた改変により大きな影響を受けやすい。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布する。汽水域のヨシ原に生息する。県内では名取川河口からのみ知られ、震災後の生息も確認された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による地形変化。河川堤防の改修や港湾工事などによる河口部の改変、防潮堤建設など。
- **文献等番号** 76、95、291

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## アオバネホソクビゴミムシ

*Brachinus aeneicostis*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 分布は局地的で個体数が少ない。低地湿地の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、九州に分布し、低地の湿地に生息する。県内では気仙沼市、河北町、牡鹿町、石巻市、鹿島台町、鳴瀬町、朴島で記録されている。低地の河川敷や湖沼周辺の湿地に生息するが、離島にも記録がある。
- **形態ならびに近似種との区別点** 近似種コホソクビゴミムシは上翅が青黒く光沢は鈍い。本種の上翅には緑色の光沢がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修、圃場整備や開発行為による破壊。周辺域の改変による湿地の乾燥化など。
- **文献等番号** 91、138

(執筆：齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## ツヤキベリアオゴミムシ

*Chlaenius spoliatus motschulskyi*

コウチュウ目  
オサムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
VU

- **選定理由** 不安定な水辺の環境を好むとされ、生息環境はきわめて限定的。比較的近年に発見された山元町の産地では、復旧・復興工事の影響が懸念される。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国に分布し、河川や湖沼周辺の湿地に生息する。県内では小牛田町、仙台市、角田市、山元町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修や湖沼の護岸、周辺の改変。湿地の埋め立て、植生の遷移による乾燥化。防潮堤建設、海岸林造成などによる破壊。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：齋藤 勝雄)

## チビアオゴミムシ

*Chlaenius suvorovi*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
EN

- **選定理由** 分布は局地的で全国的に減少傾向にある。低地湿地の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州にのみ分布し、湖沼周辺や河川敷などの湿地に生息する。県内では東和町、中田町、河北町、桃生町、石巻市、若柳町、金成町、志波姫町、古川市、鹿島台町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修や開発行為による破壊。治水による河川氾濫の減少、植生の遷移、湿地の乾燥化など。
- **文献等番号** 138

(執筆：齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## アオホソゴミムシ

*Drypta ussuriensis*

コウチュウ目  
オサムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
-

- **選定理由** 宮城県が生息南限にあたる。北上川水系のみに局地的に生息し、個体数が少ない。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州東北部に分布し、平地の河川敷に生息する。県内では河北町、桃生町、古川市で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修による破壊、植生の遷移など。
- **文献等番号** 71、138

(執筆：齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## アリスアトキリゴミムシ

*Lachnoderma asperum*

コウチュウ目  
オサムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
DD

- **選定理由** ケアリ類は普遍的に分布するが、本種の生息はきわめて限定的である。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州に分布する好雑性昆虫で、カワラケアリの巣内に住むことが知られる。県内では柴田町、大河原町、丸森町に記録があり、平地ないし低山で見ついている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修、開発などによる破壊。管理放棄などを一因とした植生の遷移で、寄主であるケアリ類が生息できなくなること。
- **文献等番号** 164

(執筆：齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭[撮影地：栃木県])

## エチゴトックリゴミムシ

*Oodes echignonus*

コウチュウ目  
オサムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
NT

- **選定理由** 大規模な湿性環境に生息し、分布は局地的で個体数が少ない。低湿地の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州に分布し、湿原や池沼周辺の水ぎわに生息する。県内では米山町、塩竈市(朴島)、若柳町、山元町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 池沼や湿地の護岸、埋め立て。排水工事や周辺域の改変による乾燥化。
- **文献等番号** 91、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明[所蔵：児玉 雅一])

## アブクマナガゴミムシ

*Pterostichus nishiyamai*

コウチュウ目  
オサムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** きわめて局地的に分布する。宮城県が生息北限にあたる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 阿武隈、八溝山地の特産種とされていたが、奥羽山系にもわずかに生息している。宮城県から茨城県にかけて分布する。県内では蔵王町の山地で記録されている。湿潤な広葉樹林に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 大規模土木工事などによる破壊、伐採などによる乾燥化。
- **文献等番号** 161

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：斎藤 勝雄)

## シラハタキバナガゴミムシ

*Stomis zaonus*

コウチュウ目  
オサムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 分布は局地的で個体数が少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北地方に分布し、自然度の高い広葉樹林に生息する。県内では鳴瀬町、利府町、鳴子町、花山村、泉区で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 138、139

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## クロサワツブミズムシ

*Satonius kurosawai*

コウチュウ目  
ツブミズムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 生息環境が特異で局地的に分布する。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国に分布する。河川沿いや道路脇などの、水のしたたる岩壁やコンクリート壁の表面に生息する。県内では小野田町、仙台市、川崎町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 道路や河川の改修などによる破壊。周囲の改変による水みちの変化、乾燥化。
- **特記事項** 小野田町産の標本を副模式標本として記載された。
- **文献等番号** 77、140、179

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ヤマトタマムシ

*Chrysochroa fulgidissima fulgidissima*

コウチュウ目  
タマムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 本来暖地性の種だが、最近の気候の傾向にかかわらず生息範囲が拡大しない。既知産地の仙台市では近年の記録がなく、確実な産地は県南部に限られる。個体数は少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は宮城・山形を北限とし、本州、四国、九州、屋久島、種子島に分布する。エノキ、ケヤキ、サクラなどの古木で発生する。県内では仙台市、大河原町、白石市、角田市に記録があるが、多くは角田市斗蔵山周辺に集中している。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 里山の荒廃や開発などによる破壊、社寺林等の伐採。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：阿部 剛)

## アオナガタマムシ

*Agrilus planipennis*

コウチュウ目  
タマムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 全国的に分布は局地的で個体数が少ない。宮城県の産地は一か所のみ。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。県内では白石市で記録されている。山間の湿地に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、湿地の埋め立てなどによる破壊。植生の遷移、周辺域の改変による乾燥化。
- **文献等番号** 104

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明)

## スギウラナガタマムシ

*Agrilus sugiurai*

コウチュウ目  
タマムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 現状宮城県特産で産地は一か所のみ。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 宮城県のみから知られ、県内では白石市で記録されている。山間の湿地に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、湿地の埋め立てなどによる破壊。植生の遷移、周辺域の改変による乾燥化。
- **特記事項** 白石市産の標本を元に記載された。
- **文献等番号** 90

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明)

## タテスジヒメヒゲナガハナノミ

*Drupeus vittipennis*

コウチュウ目  
ヒメヒゲナガハナノミ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 局地的に分布し、個体数が少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では青葉区、太白区、白石市に記録があり、山間の溪流沿いに生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。砂防ダム建設などによる改変。
- **文献等番号** 138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## シラホシダエンマルトゲムシ

*Pseudochelonarium japonicum*

コウチュウ目  
ダエンマルトゲムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 局地的に分布し、個体数が少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、対馬に分布し、自然度の高い森林に生息する。県内では牡鹿町(金華山)、宮崎町、小野田町、大和町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 138、279

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## アヤスジミゾドロムシ

*Graphelmis shirahatai*

コウチュウ目  
ヒメドロムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
EN

- **選定理由** 全国的に分布は局地的で個体数が少ない。近年の記録がない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州に分布し、比較的大規模な河川の主に中～下流に生息する。県内では蔵王町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川の改修や開発、ダム建設などによる破壊。水質の悪化。
- **文献等番号** 180、229

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## ケスジドロムシ

*Pseudamophilus japonicus*

コウチュウ目  
ヒメドロムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
DD 環境省  
VU

- **選定理由** 全国的に生息範囲は広いが産地は多くない。宮城県では主な河川で見つまっているが個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州に分布し、河川の上流から下流まで全域に生息する。県内では江合川、大和町、鳴瀬川、大郷町、名取川、碓石川、白石川、蔵王町、角田市で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川の改修や開発、ダム建設などによる破壊。水質の悪化。
- **文献等番号** 29、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## スナサビキコリ

*Meristhus niponensis*

コウチュウ目  
コメツキムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 震災後砂浜の規模は一時的に拡大したが、生息数の回復が遅れた。砂浜の衰退傾向に加え、震災復旧・復興工事の影響が懸念される。宮城県は太平洋側の生息北限にあたる。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布し、主に砂浜に生息する。県内では河北町、鳴瀬町、宮城野区、若林区、亶理町、山元町の砂浜で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設や海岸林造成などによる生息地の分断や大規模破壊。
- **文献等番号** 72、81、91、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ハヤチネベニコメツキ

*Denticollis yasumii*

コウチュウ目  
コメツキムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 分布はきわめて局地的で宮城県では1個体の記録のみ知られる。生息南限にあたる。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北地方の高標高地からのみ知られる。県内では七ヶ宿町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採、開発などによる破壊。
- **文献等番号** 192

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：佐藤 隆志[産地：青森県])

## ミヤマヒサゴメツキ

*Homotechnes motschulskyi*

コウチュウ目  
コメツキムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 分布は局地的で個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 種 *motschulskyi* は本州、四国の山地に分布する。飛翔できないため地域分化が著しく、多数の亜種が記載されている。県内では泉区、太白区で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採、開発などによる生息地の分断、破壊。
- **文献等番号** 138、225

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：尾崎 俊寛[産地：青森県])

## チビヒサゴメツキ

*Hypnoidus rivularius rivalis*

コウチュウ目  
コメツキムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 既知産地の環境が悪化し、個体数が減少している。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北地方の高標高地に、局地的に分布する。北海道産は別亜種とされる。県内では蔵王上部のガレ場に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 登山者の踏み荒らし。気候変化による植生の遷移、それともなう生息環境の縮小、孤立。
- **特記事項** 生息域は蔵王国立公園の特別保護地区に属する。
- **文献等番号** 138、151、225

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：尾崎 俊寛[産地：山形県])

## ミヤマコガネヒラタコメツキ

*Mosotalesus impressus sachalinensis*

コウチュウ目  
コメツキムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 高山性の稀種。全国的に分布は局地的で個体数が少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は、国内では北海道、本州の山岳地帯に分布する。県内では蔵王、栗駒山の高標高地で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 登山者の踏み荒らし。気候変化による植生の遷移、それともなう生息環境の縮小、孤立。
- **特記事項** 生息域は蔵王国立公園の特別保護地区に属する。
- **文献等番号** 138、225

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：尾崎 俊寛[産地：北海道])

## ツヤカタモンチビコメツキ

*Zorochros suzukii*

コウチュウ目  
コメツキムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 再三の調査にもかかわらず、原記載以来記録がない。既知産地は一か所のみ。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 現状宮城県のみから知られる。県内では涌谷町の河川敷で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、河川改修などによる改変。
- **特記事項** 涌谷町産の標本を元に記載された。
- **文献等番号** 152

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：尾崎 俊寛)

## カワイヒラアシコメツキ

*Ischiodontus kawaii*

コウチュウ目  
コメツキムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 全国的に分布は局地的で個体数が少ない。宮城県の記録が北限。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州から奄美大島にかけて分布する。県内では若林区、名取市で記録されている。海岸に漂着した流木に発生していると推定される。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体背面は栗色で淡黄褐色の細毛があり、腹面は赤褐色。脚の第2、3付節に膜状片をもつ。体長10~11.5mm。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退。海水浴場などでの過剰な清掃行為。
- **文献等番号** 229

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## スジグロボタル

*Pristolytus sagulatus sagulatus*

コウチュウ目  
ホタル科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** きわめて局地的に生息し、個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、奄美大島に分布する。湿地に生息し、幼虫は淡水性の貝類などを食餌とする。県内では鳴子町、大衡村、大和町、富谷町、泉区、太白区で記録されている。林内の沢筋や山間の休耕田などで見つかった。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採や開発による破壊、湿地の乾燥化。
- **文献等番号** 79、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## オオマドボタル

*Pyrocoelia discicollis*

コウチュウ目  
ホタル科

情報不足 (DD)	
2016 DD	環境省 -

- **選定理由** きわめて局地的に分布し、個体数が少ない。近年の記録がない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布する。県内では泉区で記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 黒色で、前胸背板には前縁近くに窓のような一對の透明部分と、中央に淡赤色の四角い斑紋をもつ。体長9~12mm。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 山林の伐採、開発。林床の乾燥化。
- **文献等番号** 58

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：川野 敬介[産地：山口県])

## ヒメボタル

*Luciola parvula*

コウチュウ目  
ホタル科

準絶滅危惧 (NT)	
2016 NT	環境省 -

- **選定理由** 宮城県内での分布は広いが生息地は少ない。近年減少傾向にある。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布する。山林に生息し、幼虫は陸生の貝類を食餌とする。県内では津山町、米山町、金成町、鳴子町、大郷町、泉区、青葉区、太白区、川崎町、白石市、角田市、亶理町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採、開発による破壊、林床の乾燥化。
- **文献等番号** 79、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ゲンジボタル

*Nipponoluciola cruciata*

コウチュウ目  
ホタル科

準絶滅危惧 (NT)	
2016 NT	環境省 -

- **選定理由** 蛹化に際して土に潜るため、コンクリート護岸やU字溝の敷設で生息できなくなる。河川改修や圃場整備などの影響を受けやすい。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布する。中小河川、水路などに生息し、幼虫はカワニナを食餌とする。県内では都市部や平野部を除く県内各地から記録されている。山麓部から山間部の清流に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川や水路のコンクリート護岸など改修、水質汚染。放虫による遺伝子の攪乱、外灯などによる繁殖行動の阻害。
- **特記事項** 金成町、東和町の一部は、国の天然記念物に指定されている。
- **文献等番号** 79、138、140、207、209、214

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## カツオマルドロムシ

*Georissus katsuoii*

コウチュウ目  
マルドロムシ科

絶滅危惧II類 (VU)	
2016 VU	環境省 -

- **選定理由** 生息地は模式産地の一か所のみ。干潟的環境は、自然条件や周辺域を含めた変化により大きな影響を受けやすい。タイプ産地は津波で破壊された後、復興工事で消失した。原記載以来記録がない。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 現状宮城県のみから知られる。泥質の海岸湿地に生息する。県内では亶理町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 港湾工事、防潮堤建設などによる破壊。周囲の改変による環境の変化。
- **特記事項** 亶理町産の標本を元に記載された。
- **文献等番号** 148

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：北海道大学博物館)

## エンマハバビロガムシ

*Sphaeridium scarabaeoides*

コウチュウ目  
ガムシ科

情報不足 (DD)	
2016 DD	環境省 -

- **選定理由** 局地的に分布する。宮城県が生息南限にあたる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州北部に分布する。牛馬の糞を食餌とする。県内では蔵王町、白石市の牧場で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 畜産の近代化、衰退。
- **文献等番号** 19

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明)

## コブナシコブスジコガネ

*Trox nohirai*

コウチュウ目  
コブスジコガネ科

準絶滅危惧 (NT)	
2016 NT	環境省 -

- **選定理由** 全国的に生息範囲は広いが生息地は多くない。宮城県での分布は極めて局地的で個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。平地から山地の森林に生息し、樹洞やフクロウの巣から見いだされるという。県内では金成町、青葉区、七ヶ宿町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採、開発などによる生息地の破壊。
- **文献等番号** 138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：青木 俊彦)

## アイヌコブスジコガネ

*Trox setifer setifer*

コウチュウ目  
コブスジコガネ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 全国的に生息範囲は広いが産地は多くない。宮城県での分布は極めて局地的で個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は北海道、本州、九州に分布する。平地から山地の森林に生息し、鳥獣の古い死体を食餌とする。県内では杜鹿町、青葉区、七ヶ宿町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採、開発などによる生息地の破壊。
- **文献等番号** 115、138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明)

## ネプトクワガタ

*Aegus laevicollis subnitidus*

コウチュウ目  
クワガタムシ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 分布はきわめて局地的。宮城県が生息北限にあたる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布する。針葉樹、広葉樹の褐色腐朽材を幼虫期の食餌とする。県内では大東岳で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 107

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭[撮影地：山形県])

## オオクワガタ

*Dorcus hopei binodulosus*

コウチュウ目  
クワガタムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 VU
------------	-----------

- **選定理由** 一般に宮城県では雑木林の更新の際に台木を作らず、里山の環境からは知られていない。産地は奥羽山系のブナ帯に限られ、個体数もごく少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。原生林に生息するほか、雑木林のクヌギの台木などに発生することが知られる。県内では鳴子町、花山村、蔵王町のブナ帯で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 山林の伐採、開発。古木の伐採。飼育個体の放虫による遺伝子の攪乱。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：吉田 馨)

## コルリクワガタ

*Platycerus acuticollis*

コウチュウ目  
クワガタムシ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 分布はきわめて局地的。宮城県が生息北限にあたる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 宮城県から山梨県にかけての本州東部に分布する。奥羽山系に生息しているユキグニコルリクワガタ *Platycerus albisomni albisomni* とは別種とされた。県内では丸森町のブナ林にのみ生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 217

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明[所蔵：児玉 雅一])

## クチキマグソコガネ

*Aphodius hibernalis hibernalis*

コウチュウ目  
コガネムシ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 全国的に個体数が少なく、宮城県では自然度の高い広葉樹林に生息する。特殊な環境(樹洞)で発生する。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、九州に分布し、森林に生息する。県内では大和町、丸森町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。発生木の伐採、周囲の改変による乾燥化。
- **文献等番号** 138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明[所蔵：児玉 雅一])

## ヤマトケシマグソコガネ

*Leiopsammodius japonicus*

コウチュウ目  
コガネムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 砂浜の衰退傾向に加え、震災復旧・復興工事の影響が懸念される。良好な砂浜海岸の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州ほかに分布する。海岸の砂浜で、流木など自然の漂着物下に住む。県内では本吉町、河北町、鳴瀬町、宮城野区、若林区、岩沼市、亶理町、山元町に記録があり、震災後は鳴瀬町および仙台湾沿岸で再確認された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設や海岸林造成などによる破壊。海水浴場などでの過剰な清掃行為。
- **文献等番号** 81、91、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ナガスネエンマコガネ

*Onthophagus ohbayashii*

コウチュウ目  
コガネムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 既知産地の環境が悪化している。近年の記録がない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布し、河川敷などのオープンランドに生息する。県内では石巻市、名取市で記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 黒色で、♂の前脛節が著しく細長い。体長5~8.5mm。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、河川改修などによる改変。植生の遷移。
- **文献等番号** 171、237

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里[所蔵：阿部 剛])

## シナノエンマコガネ

*Onthophagus bivertex*

コウチュウ目  
コガネムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 自然放牧の減少や飼料の転換による糞の質の変化によって、全国的に産地が激減している。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、隠岐、九州、対馬に分布し、開けた放牧地などに生息する。県内では青葉区、蔵王町で記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 黒色で、♂は頭部に牛の角のような一対の突起をもつ。体長7~10mm。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 畜産の近代化、衰退。
- **文献等番号** 182、281

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里[所蔵：阿部 剛])

## アラメエンマコガネ

*Onthophagus ocellatopunctatus*

コウチュウ目  
コガネムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
NT

- **選定理由** 全国的に分布は局地的で個体数が少ない。河北町の産地は震災で水没し、大規模な復旧工事が行われたため、生息が危ぶまれる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州の砂浜に生息する。県内では河北町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設や海岸林造成などによる生息地の分断や大規模破壊。
- **文献等番号** 168

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：斎藤 勝雄)

## ダイコクコガネ

*Copris ochus*

コウチュウ目  
コガネムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
VU

- **選定理由** 分布が局地的で個体数が減少している。全国的には自然放牧が減ったことや、飼料の転換による糞の質の変化により激減したとされる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、九州、佐渡島などに分布し、主に牛糞を食餌とする。県内では青葉区、川崎町、蔵王町、白石市で記録されている。牧場で多く得られていた。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 畜産の近代化、衰退による生息地の縮小、消失。
- **文献等番号** 138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明)

## アカマダラハナムグリ

*Anthrachophora rusticola*

コウチュウ目  
コガネムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
DD

- **選定理由** 猛禽類が生息、営巣できる里山の環境が衰退している。分布は局地的で個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州ほかに分布する。猛禽類の巣で成長することが明らかになった。県内では石巻市、鳴瀬町、色麻町、青葉区、太白区、岩沼市で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為による里山の破壊、管理放棄による荒廃。
- **文献等番号** 138、286、287

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## アカマダラセンチコガネ

*Notochodaeus maculatus maculatus*

コウチュウ目  
アカマダラセンチコガネ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 全国的に広く分布するが産地は多くない。宮城県での分布は極めて局地的で個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州に分布する。平地から山地の草地に生息する。県内では牡鹿町、蔵王町、丸森町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為による里山の破壊、管理放棄による荒廃。
- **文献等番号** 138、279

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## ツガルホソシテムシ

*Lyrosoma pallidum*

コウチュウ目  
オサシテムシ科

情報不足 (DD)	
2016 DD	環境省 -

- **選定理由** きわめて局地的に生息し、個体数が少ない。海岸に生息することから、震災後の復旧工事の影響が懸念される。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州北部のおもに海岸に生息し、宮城県が生息南限にあたる。更新前は岩手県宮古市が南限であった。県内では雄勝町の磯混じりの砂浜で確認されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 防潮堤建設などによる生息地の分断や破壊。
- **文献等番号** 69、146

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## Catops houyai

*Catops houyai*

コウチュウ目  
タマキノコムシ科

情報不足 (DD)	
2016 DD	環境省 -

- **選定理由** 現状宮城県特産で産地は一か所のみ。原記載以来記録がない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 宮城県のみから知られる。白石市の人工洞窟(水路跡)で記録された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 大規模土木工事などによる破壊、周囲の改変による乾燥化。
- **特記事項** 白石市産の標本を元に記載された。
- **文献等番号** 148

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(Nakane, T., 1995より引用)

## クロヒラタシテムシ

*Phosphuga atrata atrata*

コウチュウ目  
ハネカクシ科

絶滅危惧II類 (VU)	
2016 VU	環境省 -

- **選定理由** 宮城県が生息南限にあたる。分布はきわめて局地的で、近年の記録がない。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州北部の山地に分布する。県内では栗駒町、鳴子町で記録されている。高標高地の森林に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 気候変化による植生の遷移、それにとまう生息環境の縮小。
- **文献等番号** 138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## アミメナガシクイ

*Endecatomus lanatus*

コウチュウ目  
ナガシクイ科

情報不足 (DD)	
2016 DD	環境省 -

- **選定理由** きわめて局地的に分布し、個体数が少ない。全国的な稀種。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州に分布する。県内では大和町の自然林で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 60

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明[所蔵：平舘 学])

## オオメツツシクイ

*Melittomma oculare*

コウチュウ目  
ツツシクイ科

情報不足 (DD)	
2016 DD	環境省 -

- **選定理由** 暖地性の稀種で、分布はきわめて局地的。宮城県は生息北限にあたる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州に分布する。県内では蔵王町、丸森町の自然林で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 165、229

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：斎藤 勝雄)

## ミヤマツチハンミョウ

*Meloe brevicollis*

コウチュウ目  
ツチハンミョウ科

情報不足 (DD)	
2016 DD	環境省 -

- **選定理由** きわめて局地的に分布し、個体数が少ない。近年の記録がない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州中部以北に分布する。山地性。県内では大和町のブナ帯で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 229

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## ムラサキオオツチハンミョウ

*Meloe violaceus semenowi*

コウチュウ目  
ツチハンミョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 全国的に分布は局地的で個体数が少ない。宮城県では自然度の高い広葉樹林に生息する。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は、国内では北海道、本州に分布する。県内では大和町、太白区、川崎町、蔵王町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 61、138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明[所蔵：平舘 学])

## ムネモンコナガクチキ

*Mycetoma affine*

コウチュウ目  
キノコムシダマシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 分布が局地的で個体数が少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州に分布する。ヤニタケを食餌とすることが知られる。県内では大和町、七ヶ宿町のブナ林で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 59、60

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明)

## ヒメカツオガタナガクチキ

*Eustrophus niponicus*

コウチュウ目  
キノコムシダマシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** きわめて局地的に分布し、個体数が少ない。全国的な稀種。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州に分布する。県内では大和町のブナ帯で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 60

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明[所蔵：平舘 学])

## ミスジナガクチキ

*Stenoxylita trialbofasciata*

コウチュウ目  
ナガクチキムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 全国的に分布は局地的で個体数が少ない。宮城県では自然度の高い広葉樹林に生息する。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州に分布する。県内では大和町、七ヶ宿町で記録され、ブナ林などの自然林に生息している。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：栗野 宗博)

## ルリナガクチキ

*Melandrya shimoyamai*

コウチュウ目  
ナガクチキムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 全国的に分布は局地的で個体数が少ない。宮城県では自然度の高い広葉樹林に生息する。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州中部以北に分布する。県内では大和町、蔵王町、七ヶ宿町で記録されている。ブナ林などの自然林に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 138、140

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：栗野 宗博)

## ムネアカナガクチキ

*Phryganophilus ruficollis rosti*

コウチュウ目  
ナガクチキムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 全国的に分布は局地的。宮城県では深山の樹林に生息するほか都市近郊からも知られる。低地のアカマツ高木林の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では鳴子町、大和町、青葉区、名取市、蔵王、丸森町で記録されている。針葉樹を交えた樹林に生息し、都市近郊の森林公園でも確認された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 84、149、276

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：栗野 宗博)

## ホネゴミムシダマシ

*Emypsara riederii*

コウチュウ目  
ゴミムシダマシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省

- **選定理由** 宮城県が生息南限にあたる。分布はきわめて局地的で、震災および復旧・復興工事の影響が強く懸念される。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州北部の砂浜に生息する。県内では雄勝町のみから記録されている。震災後は未確認。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設などによる生息地の破壊。
- **文献等番号** 105

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里[所蔵：児玉 雅一])

## クロズハマベゴミムシダマシ

*Phaleria atriceps*

コウチュウ目  
ゴミムシダマシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省

- **選定理由** 亶理町以外では確認されておらず、生息はきわめて局地的。砂浜の衰退傾向に加え、震災復旧・復興工事の影響が懸念される。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州、南西諸島の砂浜海岸に生息。海藻など自然の漂着物の下に住む。県内では亶理町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設や海岸林造成などによる生息地の分断や大規模破壊。
- **文献等番号** 229

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## コホネゴミムシダマシ

*Phaleromela subhumeralis*

コウチュウ目  
ゴミムシダマシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省

- **選定理由** 宮城県が生息南限にあたる。分布はきわめて局地的で、震災復旧・復興工事の影響が強く懸念される。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州北部の砂浜に生息する。県内では現状雄勝町のみから知られ、震災後も確認された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設などによる生息地の破壊。
- **文献等番号** 73、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## ヒガシツヤヒサゴゴミムシダマシ

*Misolampidius imasaki*

コウチュウ目  
ゴミムシダマシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省

- **選定理由** 分布は局地的で個体数が少ない。近年の記録がない。宮城県は生息北限にあたる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州の兵庫県以東、佐渡に分布する。県内では蔵王山塊上部の広葉樹林帯で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 229、273

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里  
[所蔵：大河原町教育委員会])

## アイヌテントウ

*Coccinella ainu*

コウチュウ目  
テントウムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省

- **選定理由** 局地的に分布し、個体数が少ない。生息に適した環境は限定的で失われやすい。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州に分布する。県内では伊豆沼内沼、鳴子町、七ヶ宿町、角田市で記録されている。河川敷のまばらな草地などに生息する。
- **形態ならびに近似種との区別点** ナナホシテントウ、ココノホシテントウに似るが、11個の黒紋を持ち、3種の中で最も小さい。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修や開発行為による破壊。治水による河川氾濫の減少に起因する植生の遷移。
- **文献等番号** 138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里[撮影地：岩手県])

## クロスジチャイロテントウ

*Micraspis kiotoensis*

コウチュウ目  
テントウムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省

- **選定理由** 分布が局地的。一部の産地で管理放棄による遷移が進み、生息環境が悪化している。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州に分布し、ヨシ原などに生息する。県内では丸森町でのみ記録されている。山間の湿地、休耕田などに生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 湿地の埋め立て、植生の遷移、乾燥化。周囲の改変による乾燥化。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## クロホシチビオオキノコ

*Tritoma shimoyamai*

コウチュウ目  
オオキノコムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 食餌とするアミスギタケは特に珍しい菌ではないが、本種を見ることは稀。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州関東以北に分布する。県内では泉区、青葉区に記録があり、アミスギタケにつくことが知られている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## オオメナガヒゲナガゾウムシ

*Ulorhinus gokani*

コウチュウ目  
ヒゲナガゾウムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** きわめて局地的に分布し、個体数が少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州に分布する。県内では鳴子町、大和町のブナ帯、太白区で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、乾燥化、伐採。
- **文献等番号** 138、235

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：新井 孝明[所蔵：平舘 学])

## エゴヒゲナガゾウムシ

*Exechesops leucopis*

コウチュウ目  
ヒゲナガゾウムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 宮城県は生息北限に近く、エゴノキは普遍的に分布するが本種の生息はきわめて局地的。人里近くの生息地では、人の活動の影響を受けやすい。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州、対馬に分布し、エゴノキの果実を食餌とする。県内では蔵王町、白石市で記録されている。公園などの人工的環境に生息する場合もあるという。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為。道路、公園などの改修による発生木の伐採。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：栗野 宗博)

## ハマベゾウムシ

*Isonycholips gotoi*

コウチュウ目  
ゾウムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 震災による地盤沈下で汀線が大幅に後退していることに加え、復旧・復興工事による改変で生息環境が悪化している。また津波によって海底が大きく攪乱されたと考えられ、食餌のアマモの漂着が一時激減した。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。砂浜に生息し、海中から打ち上がったアマモを食餌とする。県内では唐桑町、本吉町、河北町、鳴瀬町、松島町、七ヶ浜町、山元町で記録されている。震災後は唐桑町、本吉町、鳴瀬町、松島町で確認されたが、既知産地の一部は震災で水没した。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、アマモ場の荒廃、防潮堤建設などによる生息環境の破壊。海水浴場などでの過剰な清掃行為。
- **文献等番号** 109、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## シラフヒョウタンゾウムシ

*Meotiorhynchus querendus*

コウチュウ目  
ゾウムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
-

- **選定理由** 三陸海岸の砂浜にのみ生息する。一部の産地は震災により消滅した。残存する産地でも砂浜の規模が大幅に縮小したところがあり、復旧・復興工事で壊滅的な影響を受けた恐れがある。三陸海岸ではニホンジカの食害により寄主植物が衰退している。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、東北に分布し、宮城県が南限にあたる。砂浜に生息し海浜性植物を寄主とする。県内では唐桑町、気仙沼市、本吉町、雄勝町で記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 海浜性ヒョウタンゾウムシ(スナムグリ、トビイロ)に似るが、本種は目の張り出しが強く、同じく目の張り出しが強いトビイロはより小型。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移・衰退、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設や海岸林造成などによる生息地の分断や大規模破壊。
- **文献等番号** 73、91、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## トビイロヒョウタンゾウムシ

*Septicus griseus*

コウチュウ目  
ゾウムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 砂浜の衰退傾向に加え、復旧・復興工事の影響が懸念される。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布し、宮城県が生息北限にあたる。砂浜に生息し、海浜性植物を寄主とする。県内では牡鹿町、岩沼市、亶理町、山元町に記録があり、震災後は岩沼市、亶理町、山元町で再確認された。
- **形態ならびに近似種との区別点** 海浜性ヒョウタンゾウムシ(シラフ、スナムグリ)に似るが、本種は目の張り出しが強く前脛節外縁が直線的。同じく目の張り出しが強いシラフはより大型。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜の衰退、植生の遷移、車両の乗り入れによる破壊。防潮堤建設や海岸林造成などによる生息地の分断や大規模破壊。
- **文献等番号** 81、138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## シラクモゴボウゾウムシ

*Larinus griseopilosus*

コウチュウ目  
ゾウムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 分布がきわめて局地的で個体数が少ない。宮城県は分布の北限にあたる。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州の山地に分布する。アザミ類を寄主とする。県内では丸森町でのみ記録されている。アザミ類の生える山地の草地に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発による破壊、管理放棄による草地の荒廃、植生の遷移。
- **文献等番号** 166

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 齋藤 勝雄)

## クロツヤハマベゾウムシ

*Thalasselaphas major*

コウチュウ目  
ゾウムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- **選定理由** 牡鹿半島では震災による地盤沈下で汀線が大幅に後退していることに加え、復旧・復興工事による改変で生息環境が悪化した。志津川町の生息地は津波により消失した。近年の記録がない。三陸海岸ではニホンジカの食害により植生が単調化している。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州北部に分布し、砂浜に生息する。県内では志津川町、牡鹿町で記録されている。海中から打ち上がったアマモを食餌とするとされるが、志津川町では砂礫の浜に生育する植物の根際から得られた。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 砂浜・植生の衰退、防潮堤建設や廃棄物の投棄などによる生息環境の破壊。
- **文献等番号** 138

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 齋藤 勝雄)

## ヤマトキモンハナカミキリ

*Judolia japonica*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- **選定理由** 主要産地の金華山ではマツ枯れやニホンジカの過剰な採餌圧によって森林が荒廃しつつあり、生息環境の悪化が懸念される。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、九州に分布し、クリ、ミズナラ、コナラなどを寄主とする。県内では牡鹿町(金華山)、石巻市、宮城野区で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **特記事項** 金華山は全島が神域として保護されているほか、一部は三陸復興国立公園の特別保護地区に属する。
- **文献等番号** 138

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 栗野 宗博)

## ヒゲブトハナカミキリ

*Pachypidonia bodemeyeri*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 特殊な環境(樹洞)に生息するため分布が限られる。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、四国、九州に分布し、広葉樹の洞に住む。県内では大和町のブナ帯に記録があり、樹洞で得られている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。発生木の伐採、周囲の改変による乾燥化。
- **文献等番号** 138

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 栗野 宗博)

## ジャコウホソハナカミキリ

*Pygostrangalia dulcis*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 宮城県が分布の北限にあたる。局地的に分布し、個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布する。県内では白石市の自然林で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 160

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 齋藤 勝雄)

## フタスジカタビロハナカミキリ

*Brachyta bifasciata japonica*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
-

- **選定理由** 寄主植物であるヤマシャクヤク類が激減している。主要産地の金華山ではニホンジカが食べないため大きな群落を形成するが、一方でニホンジカの過剰な採餌圧によって森林が荒廃しつつあり、食草群落への影響が懸念される。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は本州、四国に局所的に分布し、幼虫はヤマシャクヤク類の根を食餌とする。県内では牡鹿町(金華山)、川崎町、白石市、セヶ宿町に記録があるが、金華山以外ではきわめて稀。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃。盗掘などによるヤマシャクヤク類の減少。
- **特記事項** 金華山は全島が神域として保護されているほか、一部は三陸復興国立公園の特別保護地区に属する。
- **文献等番号** 108、138、141

(執筆: 五十嵐 由里)



(撮影: 栗野 宗博)

## アメイロカミキリ

*Stenodryas clavigera clavigera*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 主要産地の金華山ではマツ枯れやニホンジカの過剰な採餌圧によって森林が荒廃しつつあり、生息環境の悪化が懸念される。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州ほかに分布する。県内では雄勝町、牡鹿町(金華山)、石巻市、白石市で記録があり、広葉樹林に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 138、140、225、279

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 栗野 宗博)

## ヨツボシカミキリ

*Stenygrinum quadrinotatum*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 EN
---------------	-----------

- **選定理由** 原因不明のまま全国的に激減している。宮城県では、1992年の角田市斗蔵山以来25年ぶりに、太白区の家屋内で採集された。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道から奄美諸島に分布し、人里から山間の広葉樹林に生息する。県内では石巻市、利府町、色麻町、宮城野区、青葉区、太白区、名取市、蔵王町、七ヶ宿町、角田市に記録がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林の利用・管理法の変化や里山の荒廃が衰退の一因となる可能性はあるが詳細は不明。
- **文献等番号** 56、138

(執筆: 五十嵐 由里)



(撮影: 五十嵐 由里  
[所蔵: 太白山自然観察の森自然観察センター])

## サドチビアメイロカミキリ

*Obrium obscuripenne takakuwai*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 分布が局地的で個体数が少なく、近年さらに減少傾向にある。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は北海道、本州、四国、九州ほかに分布し、ヤチダモ、コバノトネリコなどを寄主とする。県内では白石市、丸森町の湿地で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 湿地の埋め立て、周辺の改変による乾燥化、植生の遷移。
- **文献等番号** 138

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 栗野 宗博)

## トラフホソバネカミキリ

*Thranium variegatus variegatus*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 全国的に広く分布するが東北地方では産地は多くない。宮城県での分布は極めて局地的で個体数が少ない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は北海道、本州、四国、九州ほかに分布する。奄美諸島には別亜種が生息する。県内では小野田町、大和町、蔵王町、七ヶ宿町で記録されている。山地の広葉樹林に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃、伐採。
- **文献等番号** 138、225

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 栗野 宗博)

## ヒメビロウドカミキリ

*Acalolepta degener degener*

コウチュウ目  
カミキリムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 分布が局地的で個体数が少ない。白石市では生息に適した草地環境が悪化し、確認できなくなったことが報告されている。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州、対馬に分布、山地の草原や河川敷などに生息する。オトコヨモギ、ヨモギなどを寄主とする。県内では泉区、大河原町、白石市で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発による破壊、表土のはぎ取りなど改変。管理放棄にともなう草地の遷移。
- **文献等番号** 23、138

(執筆: 五十嵐 由里)



(撮影: 栗野 宗博)

## コウホネネクイハムシ

*Donacia ozensis*

コウチュウ目  
ハムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 宮城県では寄主のコウホネが繁茂する池沼は少なく分布が局地的である。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州中部以北に分布し、コウホネを寄主とする。県内では涌谷町、内沼、岩出山町、宮崎町、小野田町で記録されている。コウホネの生える、比較的深い池沼に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ため池の埋め立てなど改変、管理放棄、水質の悪化。
- **文献等番号** 138、178

(執筆: 齋藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影: 紺野 広昭)

## クログネネクイハムシ

*Donacia flemora*

コウチュウ目  
ハムシ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 唯一の産地丸森町では山間の農耕地周辺に生息していたが、管理放棄により植生の遷移が急激に進行し、生息環境が悪化している。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では宮城県以南の本州に分布、山間の湿地や休耕地などに生息する。スゲ類を食餌とする。県内では丸森町でのみ記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 湿地の埋め立て、植生の遷移、乾燥化。周囲の改変による乾燥化。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## アカガネネクイハムシ

*Donacia hirtihumeralis*

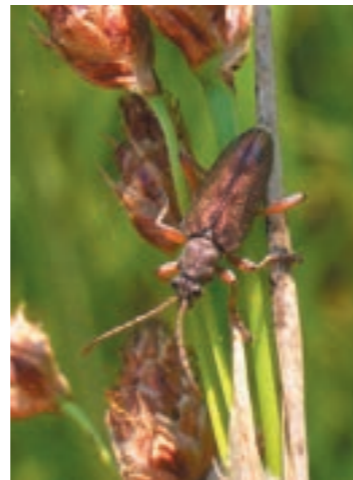
コウチュウ目  
ハムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 全国的な稀種で、宮城県でも生息する池沼に限られる。田尻町の産地では再確認されていない。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北、北関東に分布し、フトイを寄主とする。県内では金成町、南方町、田尻町で記録されている。フトイの生える池沼、ため池に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ため池の埋め立てなど改変、管理放棄、水質の悪化。
- **文献等番号** 138、274

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## キンイロネクイハムシ

*Donacia japana*

コウチュウ目  
ハムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 寄主のミクリ類は希少種で生育地は限られる。また宮城県では、低地の水路などにも生えるミクリで本種が確認されたことはなく、丘陵から山地のごく限られた池沼にのみ生息が知られる。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、九州に分布し、ミクリ類を寄主とする。県内では金成町、小野田町、大和町、松島町で記録されている。ミクリ類の生える池沼、ため池に生息するが、松島町の産地ではアメリカザリガニの侵入により寄主と共に消滅した。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ため池の埋め立てなど改変、管理放棄、水質の悪化。アメリカザリガニの侵入による食草の消滅。
- **文献等番号** 76、109、138、277

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## シラハタミズクサハムシ

*Plateumaris shirahatai*

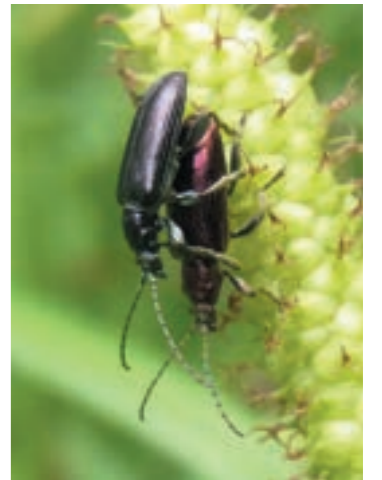
コウチュウ目  
ハムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 丸森町では山間の農耕地周辺に生息していたが、管理放棄により植生の遷移が急激に進行し、生息環境が悪化している。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州関東以北に分布し、スゲ類を寄主とする。県内では青葉区、丸森町で記録されている。青葉区の産地の現況は不明。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 湿地の埋め立て、植生の遷移、乾燥化。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## クロスジカメノコハムシ

*Cassida lineola*

コウチュウ目  
ハムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 全国的にきわめて局地的に生息し、個体数が少ない。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州に分布し、オトコモギを寄主とする。県内では白石市、七ヶ宿町の山地の草地で記録がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 草地の改変、植生の遷移、開発による破壊。
- **文献等番号** 138

(執筆：斎藤 勝雄・五十嵐 由里)



(撮影：斎藤 勝雄)

## ベニカメノコハムシ

*Cassida murraea*

コウチュウ目  
ハムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 分布は局地的で個体数が少ない。宮城県での寄主植物は林内の路傍などに見られ、草刈りによって群落が維持されている場合があり、管理方法の変化や放棄が衰退を招く懸念がある。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では東北、関東地方に分布する。県内では河北町、東和町、太白区で記録されている。ヤブタバコ、サジガンクビソウなどを寄主とする。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発などによる破壊。林道の管理放棄などによる食草の衰退。
- **文献等番号** 138

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：高橋 雄一)

## クロマダラカメノコハムシ

*Glyphocassis spilota*

コウチュウ目  
ハムシ科

情報不足 (DD)

2016  
DD

環境省  
-

- **選定理由** 局地的に分布し、個体数が減少傾向にある。人里近くの生息地では、人の活動の影響を受けやすい。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州に分布し、ヒルガオを寄主とする。県内では北上町、河北町、涌谷町、大衡村、村田町、柴田町、七ヶ宿町、亶理町に記録があり、河川敷や農耕地周辺で確認されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修、圃場整備などによる破壊。河川敷や休耕地での植生遷移、外来植物による食草群落の圧迫。
- **文献等番号** 91、108、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## タグチホソヒラタハムシ

*Leptispa taguchii*

コウチュウ目  
ハムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU

環境省  
-

- **選定理由** 丘陵から山間にかけての、ごく限られたススキ草原のみに生息する。全国的に個体数が少ない。仙台市の国見峠では1950年代に継続して得られていたが、宅地開発によって生息環境が失われた。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州に分布し、ススキ草原に生息する。ススキを寄主とする。県内では鳴子町、小野田町、泉区、青葉区、丸森町で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 草地の改変、植生の遷移、開発による破壊。
- **文献等番号** 111、138、140、150

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：紺野 広昭)

## オオルリハムシ

*Chrysolina virgata*

コウチュウ目  
ハムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
NT

- **選定理由** 低地ないし里山の環境にある湿地に生息するため、人為の影響を受けやすい。丸森町では農耕地周辺に生息していたが、管理放棄により植生の遷移が急激に進行している。比較的水位の低い湿性環境の指標種。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、九州に分布し、シロネ類を寄主とする。県内では北上町、河北町、鳴瀬町、涌谷町、松島町、七ヶ宿町、伊豆沼、田尻町、三本木町、名取市、丸森町で記録されている。シロネ類の生える湿地に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川改修、開発、埋め立てなどによる湿地の破壊。植生の遷移。
- **文献等番号** 91、112、138、140

(執筆：五十嵐 由里)



(撮影：五十嵐 由里)

## オオセイボウ

*Stilbum cyanurum*

ハチ目  
セイボウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
-

環境省  
DD

- **選定理由** 国内に広く分布するが、滅多に見かけない希種。(コ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、琉球。国外では朝鮮半島、台湾、東南アジアに分布。県内では山元町、亶理町、岩沼市、多賀城市、利府町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長7~20mm。雌雄ともに青緑色の綺麗で目立つハチだが、色彩は変化に富む。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 植生の遷移による寄主(スズバチ・トックリバチ類)の減少が考えられるが、不詳。
- **文献等番号** 39、46、48、81

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## ホソシロフクモバチ

*Episyron kurilense*

ハチ目  
クモバチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本全土、極東ロシアに分布する。海浜に生息する。県内では東松島市、七ヶ浜町、仙台市、名取市、岩沼市、山元町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長8~11mm。体は黒色で腹部第2・3節に1対の白斑がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成のための盛土による人為的かく乱。
- **特記事項** 旧称チシマシロフベッコウ
- **文献等番号** 32、35、38、39、43、44、45、46、48、81、289

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## ハイイロクモバチ

*Pompilus cinereus*

ハチ目  
クモバチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT

環境省  
-

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本、台湾、東南アジア、アフリカなどに広く分布する。海浜に生息する。県内では東松島市、七ヶ浜町、仙台市、名取市、岩沼市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長5~14mm。体全体に灰白色の微毛でおおわれる。個体間で大きさに幅がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成のための盛土による人為的かく乱。
- **特記事項** 旧称ナミコナフベッコウ
- **文献等番号** 32、35、38、40、42、43、44、45、46、81

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## アカゴシクモバチ

*Anopilus reflexus*

ハチ目  
クモバチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本のほか、台湾、フィリピン、インドに分布する。砂地を好み海浜に多い。県内では旧鳴瀬町、七ヶ浜町、仙台市、名取市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長5~10mm。全身黒色で、腹部第1・2節に赤橙色の斑紋がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成のための盛土による人為的かく乱。
- **特記事項** 旧称アカゴシベッコウ
- **文献等番号** 32、35、38、39、40、43、48、81、289

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## キスジクモバチ

*Batozonellus lacerticida*

ハチ目  
クモバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 県内では主に海岸域に局所的に生息し、個体数が少ない。(サ、ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、北海道、シベリア、欧州まで広く分布する。日本での分布は局所的で、東北では青森と宮城の2県に留まる。鳴瀬町、塩竈市(浦戸諸島)、七ヶ浜町、岩沼市、名取市(北釜)。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長16~28mmの大型種。黒色で体に黄色と橙褐色の斑紋があり、翅の先端が曇る。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成のための盛土による人為的かく乱。
- **特記事項** 旧称キスジベッコウ
- **文献等番号** 36、43、46

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## オオモンツチバチ

*Scolia histrionica japonica*

ハチ目  
ツチバチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本のほか、台湾、フィリピン、インドに分布する。砂地を好み海浜に多い。海浜に生息する。旧鳴瀬町、七ヶ浜町、仙台市、名取市、岩沼市の海浜。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長15~26mmの大型種。腹部第1~4節後縁に黄帯をもつ。同属のコモンツチバチとの識別はやや困難である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成のための盛土による人為的かく乱。
- **文献等番号** 34、35、38、39、40、41、43、44、46、48、81

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## クチビロハムシドロバチ

*Symmorphus decens*

ハチ目  
スズメバチ科

情報不足 (DD)

2016  
DD 環境省  
-

- **選定理由** 暖地系種で、北日本の太平洋側での北限。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。80年代では新潟県(佐渡)が北限、90年代に青森が北限(日本海側)となる。これまで浦戸諸島(塩竈市)の朴島が県内での唯一の生息地であったが、最近利府町でも記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長6~9mm。頭楯先端がきわめて広いことで、他種との識別は容易。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 里山およびその周辺の手入れ不足による生息環境の劣化が懸念される。
- **文献等番号** 36、49

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## ニッポンハナダカバチ

*Bembix niponica*

ハチ目  
ギングチバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
VU

- **選定理由** 海浜性種のため、近年は全国各地で急速に生息地が消失している。県内では、震災後の海浜環境の大規模復旧工事による環境破壊のため、生息が危ぶまれる。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州、屋久島まで分布する。県内では石巻市(中津山)、東松島市(野蒜)、大郷町、仙台市、多賀城市、名取市(関上・北釜)。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長20~23mmの大型種で、体全体に黄白色の模様が目立つ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 植生の遷移、震災と復興工事での破壊。
- **文献等番号** 32、35、40、43、46、48、79、81、283、289

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## ヤマトスナハキバチ

*Bembecinus hungaricus japonicus*

ハチ目  
ギングチバチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
DD

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 旧北区に分布し、日本では南琉球を除き全域に分布する。主に海浜に生息する。県内では東松島市(矢本・鳴瀬)、仙台市、名取市、岩沼市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長8~12mm。腹部第1から3および5節の黄斑が目立つ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成のための盛土による人為的かく乱。
- **文献等番号** 32、34、35、38、39、40、43、44、46、48、81

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## ニトベギングチ

*Ectemnius nitobei*

ハチ目  
ギングチバチ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 DD
------------	-----------

- **選定理由** 主に山岳地域に生息し、県内での個体群がきわめて少ない。(コ、セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 青森県、群馬県、新潟県、石川県、福井県、山形県および宮城県の7県に分布。いずれの地域でも生息は局所的。県内では唯一、大和町のブナ林内(標高約500m)で記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長20mm。ギングチバチ属としては異色の茶色の斑紋を持つのが特徴。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 森林伐採、開発などによる破壊。
- **文献等番号** 36

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## クロケラトリバチ

*Lara carbonaria*

ハチ目  
ギングチバチ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 畑地などの農耕地環境の変化による、寄主のケラの激減。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本各地、朝鮮半島、台湾、フィリピン、インドネシア。県内では志波姫町、登米町、松山町、大和町、富谷市、利府町、多賀城市、名取市。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長10~18mm。黒色で雌の大あごは赤褐色。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 農耕地の整備もしくは休耕地などの増加に伴う環境の変化による、寄主としてのケラの減少が第一の要因であろう。
- **文献等番号** 31、43、46、79

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## コウノスジガバチモドキ

*Trypoxylon konosuense*

ハチ目  
ギングチバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 宮城県内では、利府町だけで記録されていて、生息地は極めて限定される。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は埼玉、宮城、青森の3県から記録されているに過ぎない。個体数もきわめて少ない。県内では利府町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長9~10mm。頭楯の前縁が広く台形状に突出している顕著な特徴がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 近年、生息地周辺でのススキ群落の規模の減少が気掛かりである。
- **文献等番号** 33、36、38、50

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## アシジロヨコバイバチ

*Mimumesa littoralis*

ハチ目  
ギングチバチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、九州および中国、インドに分布する。主に海浜に生息する。県内では七ヶ浜町、仙台市、名取市、岩沼市、山元町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長7mm。脚の一部が黄白色および黄褐色であり、明色部が多い。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成のための盛土による人為的かく乱。
- **文献等番号** 43、81、289

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## ミヤギノヨコバイバチ

*Psen miyagino*

ハチ目  
ギングチバチ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 生息環境が悪化している。(セ①)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国のほか、ロシア沿海州に分布。県内では利府町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長6.5~9mm。黒色で細長い体型。近似種カオキンヨコバイバチとは、本種の雄は中脚の第1付節に突起を持たないことで区別できる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 開発行為、森林の荒廃による切土斜面の崩壊。
- **特記事項** 宮城県産の雄を完模式標本として新種記載された。
- **文献等番号** 33、36、51、138

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## キアシマエダテバチ

*Psenulus carinifrons iwatai*

ハチ目  
ギングチバチ科

情報不足 (DD)

2016 DD	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 本種の主な生息地である、河川敷、砂浜海岸の環境の劣化。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州、琉球列島に分布。国外では、タイ、マレーシアなどに広く分布。主に海浜や河川の流域に生息する。県内では仙台市(宮城野区)、利府町、岩沼市新浜。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長6.5~8mm。前・中脚が黄色で細身の体形。前・中脚の大部分は黄色で他種から区別は容易。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 里地や河川流域でのススキ群生地での激減による巣材料の減少。
- **文献等番号** 32、35、138

(執筆：郷右近 勝夫)



(撮影：郷右近 勝夫)

## キスジツチスガリ

*Cerceris arenaria yanoi*

ハチ目  
ギングチバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
VU 環境省  
-

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境の劣化で生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、対馬。国外では朝鮮半島、中国、ユーラシア、北アフリカに広く分布。県内では仙台市(蒲生干潟砂丘・南蒲生砂丘)、山元町(磯浜)、名取市(北釜)。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長10~15mm。体は黒色で、腹部第2背板~第6背板の縁に黄色帯がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 海浜の旧クロマツ林と新防潮堤の間の砂浜の急速な植生遷移の進行。
- **文献等番号** 32、35、36、38、45、46、48

(執筆: 郷右近 勝夫)



(撮影: 郷右近 勝夫)

## ホソメンハナバチ

*Hylaeus macilentus*

ハチ目  
ムカシハナバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道(稚内)、本州(福井県、鳥根県、宮城県)。分布はきわめて局所的である。県内では仙台市(蒲生干潟砂丘・七北田川河口右岸)。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長5mm内外、本属では例外的に細身体形であることから他種と識別できる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小と漂着物(ヨシ枯れ茎・朽材)の減少。
- **文献等番号** 34、35、42、46

(執筆: 郷右近 勝夫)



(撮影: 郷右近 勝夫)

## ノウメンハナバチ

*Hylaeus noomen*

ハチ目  
ムカシハナバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- **選定理由** 砂浜海岸だけに生息するため、震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本各地(沖縄を除く)、ロシア沿海州に分布する。県内では震災後に気仙沼市、石巻市、仙台市(蒲生干潟砂丘)、名取市(北釜・関上)で記録されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長5.5~7mm。雄の顔面を黄白色斑紋が広く占めているので他種から区別できる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災以前には、蒲生干潟砂浜(仙台市)だけから記録されていた。震災後に県南から北上傾向にある。
- **文献等番号** 35、36、40、44、46、48

(執筆: 郷右近 勝夫)



(撮影: 郷右近 勝夫)

## エチゼンヒメハナバチ

*Andrena echizenia*

ハチ目  
ヒメハナバチ科

準絶滅危惧 (NT)

2016  
NT 環境省  
-

- **選定理由** 中・小河川周辺での環境の悪化に伴う生息地の減少。(ソ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、青森県、宮城県および本州中部に局所的に分布。県内では中小河川の中流域周辺域の砂質地に生息する。旧栗駒町、大郷町、名取市、蔵王町、川崎町。旧富谷町、大和町の営巣集団は消失した。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長10mm前後。雄では顔面の下部に黄白色の斑紋があることで、ヒメハナバチ属の他種から容易に識別される。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 集団営巣地周辺の植生遷移が進むことによる、生息適地の消失が懸念される。
- **文献等番号** 36、46、79、138、284

(執筆: 郷右近 勝夫)



(撮影: 郷右近 勝夫)

## アオスジハナバチ

*Nomia incerta*

ハチ目  
コハナバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016  
CR+EN 環境省  
-

- **選定理由** 1980年代に入り、仙台市の青葉山丘陵を中心とした生息地から一時姿を消したが、最近になって少数個体の生息を確認。(ス)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本、中国、朝鮮半島、台湾、ネパール。県内では仙台市(青葉山丘陵)、利府町、大和町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長10mm。黒色で腹部背板に青緑色の横帯がある。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 主要な訪花植物である、ハギ類の里山周辺での急速な減少。
- **文献等番号** 46、47、138、212

(執筆: 郷右近 勝夫)



(撮影: 郷右近 勝夫)

## マイマイツツハナバチ

*Osmia orientalis*

ハチ目  
ハキリバチ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016  
VU 環境省  
DD

- **選定理由** 里山の荒廃および森林地帯の植生遷移による生息環境の劣化。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州。県内では色麻町(船形山山麓)、川崎町、大和町、仙台市(泉ヶ岳山麓)、利府町、塩竈市(朴島)。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長8~12mm。雌雄とも青藍色のハチ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 里山の植生の遷移による、花資源や巣材料とするカタツムリの殻の減少。
- **文献等番号** 46、79、138、285

(執筆: 郷右近 勝夫)



(撮影: 郷右近 勝夫)

## トモンハナバチ

*Anthidium septempinosum*

- **選定理由** 県内の主要な生息地である河川敷環境の植生劣化。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本、欧州、中国、極東、朝鮮半島などに広く分布。生息はきわめて局所的である。県内では旧津山町(北上川河川敷)、岩沼市早又(阿武隈川河川敷)。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長14~18mm。雌雄とも腹部背板に黄色の斑紋が目立つハチである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 河川敷およびその周辺域での、外来植物(アレチウリ・イタチハギ)の繁茂による花資源(ミソハギ・ツルフジバカマなど)の枯渇。
- **文献等番号** 36、37、46、81

(執筆: 郷右近 勝夫)

ハチ目  
ハキリバチ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------



(撮影: 郷右近 勝夫)

## キヌゲハキリバチ

*Megachile kobensis*

- **選定理由** 海浜性種のため、東日本大震災後の海浜環境での生息が危ぶまれる。(セ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、対馬、屋久島。県内では東松島町、仙台市、名取市、岩沼市、亶理町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長10~13mm。雄の触角先端が扇状。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 震災による砂浜の縮小。防潮堤および海岸林造成工事のための盛土による人為的かく乱。
- **文献等番号** 34、35、38、39、40、42、43、44、46、48、117

(執筆: 郷右近 勝夫)

ハチ目  
ハキリバチ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 -
------------	----------



(撮影: 郷右近 勝夫)

## クズハキリバチ

*Megachile pseudomonticola*

- **選定理由** 本種は、朽木営巣性のハチとして知られるが稀種のため生息が危ぶまれる。(コ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州、対馬。国外では中国、台湾に分布。県内では仙台市(青葉区)、七ヶ浜町、利府町。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長17~20mm。腹部第1背板に密な黄褐色の毛帯がある。本属のオオハキリバチやミスハキリバチと形態が似るので注意が必要。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 里山や街中での古木の減少による巣材料(樹洞)の枯渇。
- **文献等番号** 46、290

(執筆: 郷右近 勝夫)

ハチ目  
ハキリバチ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 -	環境省 DD
-----------	-----------



(撮影: 郷右近 勝夫)

## チャマダラセセリ

*Pyrgus maculatus maculatus*

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は93%、現存数は1であり、絶滅危惧I類(CR+EN)に相当する。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国に分布するが、全国的に減少傾向が著しい。県内で、近年記録があるのは、蔵王町のみである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 減少要因として、生息環境である半自然草原の減少、ダムの建設、棚田の整備による周辺草地の改変、草地の管理放棄による植生遷移があげられる。
- **文献等番号** 2、3、8、138、147、269

(執筆: 阿部 剛)

チョウ目  
セセリチョウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 EN
---------------	-----------



(撮影: 阿部 剛)

## ホシチャバネセセリ

*Aeromachus inachus inachus*

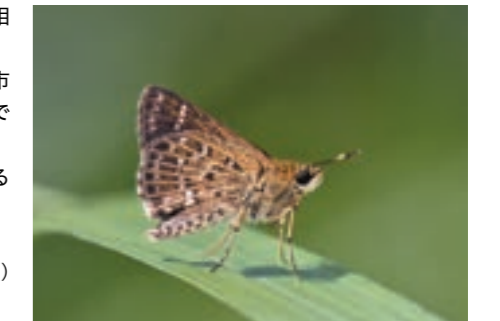
- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は43%、現存数は4であり、絶滅危惧II類(VU)に相当する。(力)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、対馬に分布する。県内では、旧市町村単位で生息が確認されているのは、気仙沼市、仙台市(青葉区・太白区)、白石市である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境である疎林、林縁、草地の管理放棄による環境の変化。
- **文献等番号** 6、8、22、138、225

(執筆: 阿部 剛)

チョウ目  
セセリチョウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 VU	環境省 EN
------------	-----------



(撮影: 阿部 剛)

## ヘリグロチャバネセセリ

*Thymelicus sylvaticus sylvaticus*

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は25%、現存数は3であり、絶滅危惧II類(VU)に相当する。(力)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。本県では北部で局地的に生息していたが、現在、旧市町村単位で記録があるのは、気仙沼市、本吉町、牡鹿町のみである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地が限定されるため、環境の変化が大きく影響する恐れがある。
- **文献等番号** 8、14、138、172

(執筆: 阿部 剛)

チョウ目  
セセリチョウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 DD	環境省 -
------------	----------



(撮影: 阿部 剛)

## ヒメギフチョウ本州亜種

*Luehdorfia puziloi inexpecta*

チョウ目  
アゲハチョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT	環境省 NT
------------	-----------

- **選定理由** 定量判定ではカテゴリーに該当しないが、環境破壊のされやすい生息地が多いため補正を行い、準絶滅危惧(NT)に選定した。(ク②)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本亜種は、本州(中部以北)に分布する。県内では、旧市町村単位で生息が確認されているのは、東和町、花山村、鳴子町、小野田町、色麻町、利府町、大衡村、大和町、仙台市(泉区・青葉区・太白区)、名取市、川崎町、村田町、蔵王町、白石市、七ヶ宿町である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 減少要因として、主な生息環境である雑木林の管理放棄、二次林の伐採、開発による生息地の消滅があげられる。
- **特記事項** 仙台市は、本州亜種の基産地である。
- **文献等番号** 7、8、9、11、12、13、20、53、97、138、144、176、193、218、233、263、268

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## ヒメシロチョウ

*Leptidea amurensis*

チョウ目  
シロチョウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 EN
---------------	-----------

- **選定理由** 定量判定の結果、旧市町村単位の絶滅率は86%、現存数は3であり、絶滅危惧I類(CR+EN)に相当する。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、九州に分布するが、全国的に減少傾向が著しい。県内では、旧市町村単位で生息が確認されているのは、気仙沼市、本吉町、歌津町のみである。河川の堤防などで見られる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 減少の要因として、河川の堤防改修、草原や堤防の採草・草刈りの停止による食草であるツルフジバカマの衰退、草原や堤防の一斉草刈りなどがあげられる。
- **文献等番号** 5、8、14、53、138、176

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## ムモンアカシジミ

*Shirozua jonasi*

チョウ目  
シジミチョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は47%、現存数は8であり、準絶滅危惧(NT)に相当する。(キ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州に分布する。県内では、旧市町村単位で生息が確認されているのは、気仙沼市、本吉町、石巻市、仙台市(泉区・青葉区)、蔵王町、白石市、角田市である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 幼虫が半肉食性でアリと共生する特殊な生態から、数本の発生木に依存している場合が多く、生息地が極めて局地的である。
- **文献等番号** 10、14、94、174、230

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## ウラジロミドリシジミ

*Favonius saphirinus*

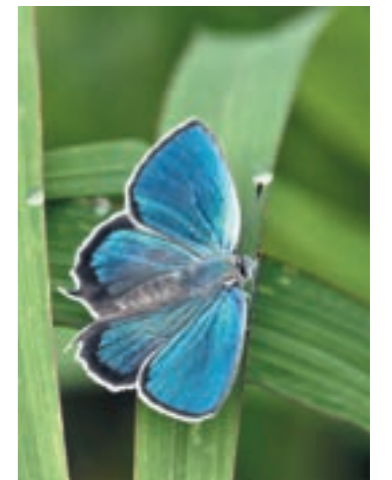
チョウ目  
シジミチョウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 CR+EN	環境省 -
---------------	----------

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は67%、現存数は1であり、絶滅危惧I類(CR+EN)に相当する。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内で現在、生息が確認されているのは、白石市のみである。カシワ林に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 減少要因として、一部の生息地がダム建設により消滅した。
- **文献等番号** 8、138、260

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## ハヤシミドリシジミ

*Favonius ultramarinus*

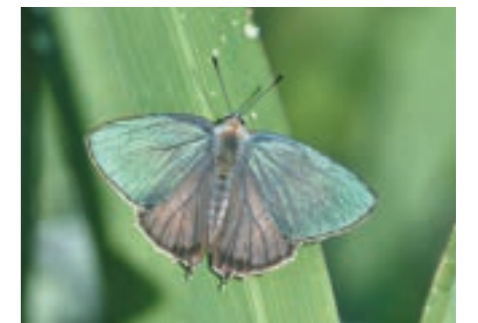
チョウ目  
シジミチョウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 NT	環境省 -
------------	----------

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は29%、現存数は5であり、準絶滅危惧II類(VU)に相当する。(カ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、九州に分布する。県内では、旧市町村単位で生息が確認されているのは、石巻市、小野田町、川崎町、蔵王町、白石市である。カシワ林に生息する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 減少要因として、農地やゴルフ場造成のためのカシワ林の伐採があげられる。
- **文献等番号** 8、52、138、225

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## クロミドリシジミ

*Favonius yuasai*

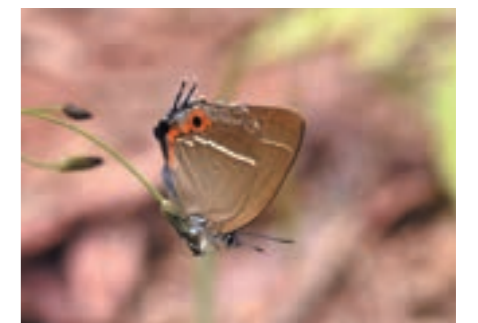
チョウ目  
シジミチョウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 -	環境省 -
-----------	----------

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は40%、現存数は3であり、絶滅危惧II類(VU)に相当する。(カ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、九州に分布する。県内で近年、記録があるのは、仙台市(泉区・青葉区)、蔵王町のみである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 丘陵地から低山地にかけて食樹のクヌギがある雑木林の減少。
- **文献等番号** 24、94、230

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## ミヤマカラスシジミ

*Fixsenia mera*

チョウ目  
シジミチョウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016	環境省
-	-

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は33%、現存数は6であり、準絶滅危惧(NT)に相当する。(キ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、旧市町村単位で生息が確認されているのは、東和町、仙台市(泉区・青葉区・太白区)、蔵王町、七ヶ宿町である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 食樹であるクロウメモドキが自生する環境の減少。
- **文献等番号** 10、94、230、260

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## クロシジミ

*Niphanda fusca*

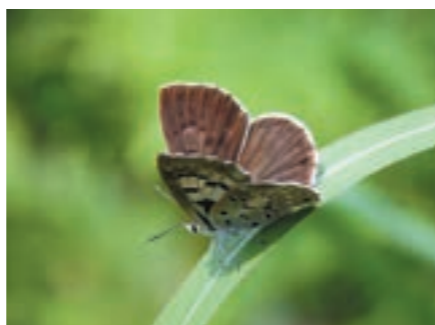
チョウ目  
シジミチョウ科

絶滅 (EX)

2016	環境省
CR+EN	EN

- **選定理由** 旧市町村単位で、鳴子町、田尻町、仙台市(泉区・青葉区)、村田町、七ヶ宿町で記録されていたが、1992年の仙台市泉区の記録を最後に記録が途絶えている。(ア)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州、四国、九州に分布するが、各地で著しく減少している。主な生息環境は、疎林、草地、採草地などである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 絶滅要因として、草原の管理方法の変化、開発による生息地の消滅があげられる。
- **文献等番号** 8、138

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛[撮影地：山形県])

## オオゴマシジミ

*Phengaris arionides takamukui*

チョウ目  
シジミチョウ科

情報不足 (DD)

2016	環境省
-	NT

- **選定理由** 仙台市太白区および川崎町で記録があったが、近年情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州(中部以北)に局地的に分布する。生息環境は、溪流沿いや谷沿いの斜面にある草地。
- **文献等番号** 8

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛[撮影地：岩手県])

## ミヤマシジミ

*Plebejus argyrognomon praeterinsularis*

チョウ目  
シジミチョウ科

絶滅 (EX)

2016	環境省
EX	EN

- **選定理由** 大河原町、蔵王町、白石市の白石川および白石川支流の松川と児捨川の流域で確認されていたが、1987年の採集記録を最後に本県における記録が途絶え、絶滅した。(ア)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州(中部以北)に分布する。生息環境は河川敷や堤防で、全国的に生息地が限られ減少傾向が著しい。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 絶滅の要因として、ダム建設による洪水の調整や、河川環境の変化に伴う食樹であるコマツナギの衰退があげられる。
- **文献等番号** 8、138

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛[撮影地：栃木県(左メス、右オス)])

## オオウラギンヒョウモン

*Fabriciana nerippe*

チョウ目  
タテハチョウ科

絶滅 (EX)

2016	環境省
EX	CR

- **選定理由** 旧市町村単位で、気仙沼市、桃生町、鳴子町、田尻町、仙台市(泉区・青葉区・太白区)、川崎町、柴田町、大河原町で記録があったが、1987年の鳴子町の記録を最後に、本県における記録が途絶え、絶滅した。(ア)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では本州(山口県)、九州に分布する。日本でもっとも減少したチョウの一つである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 絶滅要因として、草原の消失および牧草地における牧草管理の変化に伴う食草の減少があげられる。
- **文献等番号** 8、138

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

## ギンボシヒョウモン本州亜種

*Speyeria aglaja fortuna*

チョウ目  
タテハチョウ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016	環境省
CR+EN	-

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は80%、現存数は1であり、絶滅危惧I類(CR+EN)に相当する。(オ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州(中部以北)に分布し、標高1,000~2,000mに生息地が多い。県内では、近年、唯一の記録があるのは、蔵王町のみである。
- **文献等番号** 8、138

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)